東京大学大学院新領域創成科学研究科

社会文化環境学専攻

2020 年度

修　士　論　文

セクシュアル・マイノリティの「生きづらさ」に関する ライフストーリー研究 ――トランスジェンダーの「働きづらさ」から 社会的包摂を考える――

Life Stories of Difficulties in Sexual Minorities' Lives --A Consideration of Social Inclusion from Difficulties in Transgender People's Work Lives --

2020 年 7 月 10 日提出

指導教員　福永　真弓　准教授

川 股　　信 慈

Kawamata, Shinji

目次

第１章　先行研究の検討と問いの所在 1
第１節　社会的背景　―トランスジェンダーの抱える「氷山の一角」から社会全体の「生きづらい」構造を読み解くために― 1
第２節　先行研究　―トランスジェンダーの「生きづらさ」に関するこれまでの議論― 3
第１項　国際機関、欧米におけるこれまでの研究 3
第２項　日本におけるこれまでの研究 7
第３項　トランスジェンダー当事者による自伝、当事者研究 10
第４項　ユニークフェイスとアルビノの当事者に関する研究 12
第５項　本研究における問い 16
第３節　概念・用語の整理 18
第１項　セクシュアル・マイノリティ、LGBT、SOGI の違い 19
第２項　トランスヴェスタイトとトランスセクシュアルの違い 21
第３項　トランスジェンダーと性同一性障害の違い 22
第４項　パスと埋没の違い 25
第４節　性同一性障害の「脱病理化」へ向けた動き 26
第２章　研究目的と手法 28
第１節　研究目的と手法 28
第１項　研究目的　―属性にかかわらず「自分らしく生きやすい」社会を実現するために― 28
第２項　研究手法 28
第２節　研究の視点 31
第３節　本論の構成 31
第３章　13 人のセクシュアル・マイノリティ当事者のインタビュー調査 32
第１節　A さん 32
第１項　A さんの生い立ち 33
第２項　就職後　―無理解からくる発言に傷つけられる― 48
第３項　カミングアウト　―職場から追放される― 53
第４項　別室にされる疎外感　―「性別二元論」を前提とする仕組みの中で― 55
第２節　B さん 56
第１項　B さんの生い立ち 57
第２項　就職活動、職場での理解者との出会い　―20 回以上断られる― 69
第３項　ガン入院とジェンダーへの配慮に感謝　―病院にとって「性同一性障害者を受け入れる」初めての経験― 71

第４項　牧師を志す、神学校入試に不合格　―トランスジェンダー差別―.....74
第５項　神学校入試に合格、入学、性別適合手術.....76
第６項　健康保険証や診察券の性別欄を裏書きにしてもらうために交渉　―自治体、病院によって異なる対応―.....79
第３節　C さん.....81
第１項　C さんの生い立ち.....81
第２項　就職、ロールモデルとなる当事者との出会い.....84
第３項　トランスジェンダーコミュニティの中あるヒエラルキー.....89
第４項　トランスジェンダーが憧れる服装とシスジェンダーにとっての性差別表現 92
第４節　E さん.....94
第１項　E さんの生い立ち.....94
第２項　就職活動　―リーマンショック、性的消費のジャンルとしての「女性のリクルートスーツ」―.....108
第３項　パートタイムの仕事に就く　―性別が記載された身分証明書がなくても就ける仕事―.....114
第４項　女性の社会的な「生きづらさ」　―性別を移行して気がついたこと―..116
第５項　性別を確認される不快な状況　―自動車教習所、資格試験の受験会場、選挙の投票所―.....119
第６項　現在の職場　―社内の「LGBT ワーキンググループ」でも活躍の場を広げる― 122
第７項　当事者同士の軋轢　―当事者が当事者を「ポリコレ棒で叩く」―.....129
第５節　G さん.....134
第１項　G さんの生い立ち.....134
第２項　就職、性別の揺らぎ.....145
第３項　LGBT 団体での「居場所のなさ」　―メジャーマイノリティがマイナーマイノリティを差別する―.....146
第４項　家族へのカミングアウト、説得と理解、性別適合手術.....148
第５項　職場でのハラスメントと配慮.....149
第６節　H さん.....153
第１項　H さんの生い立ち.....154
第２項　就職、同性愛者の同僚牧師の差別事件をきっかけにカミングアウト.....155
第３項　カミングアウト後の「真綿で首を絞められる」苦しみ、職場を異動.....156
第４項　性別移行、当事者仲間との出会い、ジェンダーを知った上で新たな教会に招聘される.....157
第５項　社会の意識改革の必要性　―「ハードウェアはあとからついてくる」―

161
第７節　Ｉさん 162
第１項　Ｉさんの生い立ち 162
第２項　就職、選挙に立候補　―ジェンダーを勝手に決めつけられる不快感― .. 163
第３項　ジェンダー概念との出会い　―「あれ、私これじゃん」が入ってきた― 166
第８節　Ｊさん 167
第１項　Ｊさんの生い立ち 168
第２項　就職、戦略的カミングアウト、性別移行　―在職トランス― 173
第３項　当事者コミュニティ　―当事者によって異なる意見― 176
第４項　特例法「子なし要件」訴訟、戸籍上の性別変更、年金の受給開始年齢 .. 177
第９節　Ｋさん 178
第１項　Ｋさんの生い立ち 178
第２項　就職と軋轢　―「女のくせに」事件― 186
第３項　絵本の段階からの意識改革の必要性 192
第４項　学校の先生、企業経営者など非当事者から当事者への対応について尋ねられる　194
第１０節　Ｌさん 200
第１項　Ｌさんの生い立ち 200
第２項　就職、アイデンティティの獲得、性別移行　―在職トランス― 202
第３項　LGBT コミュニティとのかかわり　―主催する立場から、関西と関東の違い―　206
第４項　戸籍制度　―「戸籍制度を叩き潰すまで性別変更しない」― 209
第５項　大学院生として　―「当事者をしんどい目にさせているのは社会制度の問題」―　209
第６項　非当事者が抱いている恐れについて　―「何を恐れているのかさっぱり分からない」― 210
第１１節　Ｍさん 211
第１項　Ｍさんの生い立ち 211
第２項　就職　―「望まない性別」で出勤する苦しみ― 213
第３項　仏教との出会い　―男女の区別のない白装束にやすらぎを覚える― 215
第４項　大学院進学と退職　―自ら活路を見出す― 217
第５項　性別移行、「性的マイノリティのための駆け込み寺」建立 218
第１２節　Ｎさん 221
第１項　Ｎさんの生い立ち 221
第２項　就職　―「性同一性障害」のニュースに触れても「このままクローゼット

で生きていくか」―……222
第３項　カミングアウト、ホルモン治療　―LGBT 番組の制作に携わる―……224
第４項　職場で登録する性別の変更　―理解のある上司に恵まれる―……226
第５項　職場で LGBT 環境、ジェンダーギャップについて考える　―いろんな人を繋ぐ―　227
第６項　救急車での搬送時にも性別を説明しなければならないしんどさ……229
第１３節　0 さん……230
第１項　0 さんの生い立ち……231
第２項　性別移行のための情報収集、ホルモン治療、性別適合手術……234
第３項　「当事者を騙す当事者」たち　―「情報のなさ」につけこまれる―……238
第４項　当事者支援団体の設立へ……239
第５項　模索する非当事者　―「マニュアルは要りません」―……241
第６項　タイと日本の比較　―当事者の社会的包摂ために―……242
第４章　考察……244
第１節　就職活動と職場環境に関する世代間の語りの違い　―「性同一性障害」概念の有無―　244
第１項　就職活動に関する語り……246
第２項　職場環境に関する語り……249
第３項　「在職トランス」について　―訴訟事例との比較―……252
第２節　社会生活や社会制度に起因する「生きづらさ」……253
第１項　学校生活に関する語り……254
第２項　医療制度の利用に関する語り……257
第３項　公的な身分証明に関する語り　―公的制度の運用柔軟化と社会の意識改革の必要性―……259
第３節　ジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」　―社会にはびこるジェンダーの階層性―……264
第１項　ジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」に関する語り　―性別規範、性別役割分担、女性差別―……264
第２項　「性別二元論」か「多様性」か　―非当事者も感じている「迷い」―……266
第４節　マジョリティ問題　―マジョリティの認識不足がマイノリティに「生きづらさ」をもたらす―……268
第１項　マジョリティの認識不足や配慮のなさが「生きづらさ」だったという語り　268
第２項　事情のある人を「迷惑」として排除する職場こそ問題　―個人の事情を「一度きりはなす」―……271
第３項　マジョリティの「無関心」という問題　―最後の課題―……272

第５章　　結論 273
第１節　　結論 273
第１項　　一部のセクシュアル・マイノリティ非当事者は、当事者受け入れのために模索している 273
第２項　　必要な配慮は当事者によって異なる　―「マニュアル」よりも「決めつけ」をせずに柔軟な対応を― 274
第３項　　セクシュアル・マイノリティ当事者の「生きづらさ」を解決するために最も求められることは、社会の意識改革である 276
第２節　　「生きづらさ」の本質とは何か　―まなざされる苦しみ― 277
第３節　　本研究の限界 279
第４節　　今後の課題 281
引用文献 282
謝辞 286

第１章　　先行研究の検討と問いの所在

本章では、第 1 節で社会的背景から問題関心の方向性を示す。第 2 節で先行研究において議論されてきたことを概観し、本研究における問いの所在を明らかにする。第 3 節では本稿における議論に必要な概念や用語について整理する。そして、第 4 節では、性同一性障害の「脱病理化」へ向けた今後の動きについて、現時点（2020 年 6 月）までの国内外の動向を整理する。

第１節　　社会的背景　―トランスジェンダーの抱える「氷山の一角」から社会全体の「生きづらい」構造を読み解くために―

近年、日本社会において、働き方改革、多様な働き方、ダイバーシティ、インクルージョン、ワークライフバランス、子育て支援、障害者雇用対策、LGBT 就職、氷河期世代の就業支援など、ライフスタイルや労働に関わる言葉を頻繁に見聞きする。それらの言葉は世相を反映していると思われる。例えば、「インクルージョン（包摂）」が叫ばれるのは包摂されておらず孤独や孤立に苦しんでいる人々がいるということであり、「ワークライフバランス」という言葉の背景にはワーク（労働）とライフ（生活）のバランスが取れていないという現実があることを示唆している。そして、それらの言葉は、社会全体が抱えるさまざまな問題が「氷山の一角」として表出したものである。それらの言葉によって示される問題は、今や社会的属性に関わらず多くの人々にとって重要な関心事であり、政治的な課題にもなっている。

これらの課題を表す言葉のうち、筆者は LGBT[1]就職、その中でもとりわけトランスジェンダーが労働環境において抱える問題に関心を寄せた。理由は以下の通りである。LGBT と呼ばれる属性の人たちは、具体的には、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーである。このうち、トランスジェンダー以外の人々は、出生時に割り当てられた性別（アサインド・ジェンダー）のまま生活しており、公的書類に示される性別にもそれと同じ性別が表記される。ところが、トランスジェンダーの人々は、パスの度合いによっては周囲の人々にトランスジェンダーであることを気づかれてしまったり、外見上の性別と公的書類（住民票や健康保険証など）によって示される性別が異なったりしているため、生活上の困難を抱えている場合があるのではないか。そして、その自らのジェンダーについて就職活動の場面などで周囲の人々に説明（つまりカミングアウト）せざるを得ないということはハンディキャップなのではないかと考えたからである。

日本労働組合総連合会（連合）は、職場における性的マイノリティに対する意識を把握するため、「LGBT に関する職場の意識調査　～日本初となる非当事者を中心に実施した

[1] LGBT とは、Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender の頭文字をとったものである。用語説明については、本章第 3 節第 1 項で後述。

LGBT 関連の職場意識調査～」[2]を、インターネットリサーチにより有職男女 1,000 名に実施し、有効サンプルを集計した結果をウェブサイトで公表している［日本労働組合総連合会（連合）, 2016]。同調査には 17 の質問と回答がまとめられているが、筆者はその中からトランスジェンダーの就労に関する 4 つの質問と回答に着目した。

1 つめの質問は、「*職場の上司・同僚・部下等がいわゆる『トランスジェンダー』(心と身体の性別が一致しない人）であった場合、どのように感じるか*」である。回答は、役職別にみると、「*LGB では、役職別の傾向はみられませんでしたが、トランスジェンダーでは、一般社員等よりも管理職のほうが抵抗を感じる人の割合が高い*」結果が示された。LGB（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル）を「嫌だ」と回答した割合を役職別にみると、一般社員・一般職員では 35.1%、リーダーの役割（非管理職）では 34.0%、管理職では 35.1%とほぼ変化がない。しかし、T（トランスジェンダー）を「嫌だ」と回答した割合を役職別にみると、一般社員・一般職員では 25.6%、リーダーの役割（非管理職）では 27.7%%、管理職では 35.1%と、管理職になると割合が高くなっている。

2 つめの質問は、「*職場で、いわゆる『トランスジェンダー』(心と身体の性別が一致しない人）への配慮が課題となったことはあるか*」である。回答は、一般社員・一般職員、リーダーの役割（非管理職)、管理職と、役職の上昇に比例して「課題になったことがある」と回答した割合が高かった（管理職では 7.0%)。そして、「課題」の具体的な内容については、3 つめと 4 つめの質問と回答において調査されている。

3 つめの質問は、「*職場で、いわゆる『トランスジェンダー』(心と身体の性別が一致しない人）の髪型や服装について、どのような配慮が必要だと思うか*」である。最も否定的な「特に配慮は必要ない」という回答は、母集団全体で 29.0%であった。筆者は、その役職別の回答割合に驚きを感じた。一般社員・一般職員では 28.4%、リーダーの役割（非管理職）では 25.9%であるが、管理職では 43.9%と高い割合となった。

4 つめの質問は、「*職場で、いわゆる『トランスジェンダー』(心と身体の性別が一致しない人）の施設（お手洗いや更衣室等）の利用について、どのような配慮が必要だと思うか*」である。これについても、3 つめの質問とほぼ同様の結果であった。

残念なことに、3 つめと 4 つめの質問と回答からは、半数近くの管理職がトランスジェンダーへの配慮に対して否定的な考えをもっていることが明らかとなった。

このような状況では、トランスジェンダー当事者が就職活動の面接においていくら自らのジェンダーについて説明し配慮を求めたとしても、管理職の「トランスジェンダーに対

---

[2] 同調査は、「2016 年 6 月 30 日～7 月 4 日の 5 日間、『LGBT に関する職場の意識調査』を、インターネットリサーチにより実施し、全国の 20 歳～59 歳の有職男女 1,000 名＜民間企業等の職場における意識を把握することが目的のため、自営業者（家族従業者含む)、家内労働者は除いた。＞の有効サンプルを集計しました」（p1）と概要を説明している。属性ごとの内訳は、「性別女性【n=500】、男性【n=500】、世代 20 代【n=250】、30 代【n=250】、40 代【n=250】、50 代【n=250】、役職一般社員・一般職員【n=831】、リーダーの役割（非管理職）【n=112】、管理職【n=57】」（p3）となっている。

して抵抗を感じる」「特に配慮は必要ない」という認識がある限り当事者の困難は解消しないのではないか。つまり、そのような管理職の認識に対してどのように切り込んでいけるかということが重要な課題となる。

通常、就職活動での選抜は、書類審査、筆記試験、面接試験による。しかし、もし「抵抗感」によってトランスジェンダー当事者が不利な判定を受けることがあれば、それは差別的で不当な扱いとなる。

そして、トランスジェンダー当事者が労働環境において抱える問題は、当事者にとっては人生の一部分であり、社会にとっては様々な社会問題の「氷山の一角」である。なので、トランスジェンダーの労働環境問題について考えるためには、当事者に根本的に「生きづらさ」をもたらしている問題の根本的な原因や社会構造まで探る必要がある。それを調査した上で解決策を考えなければ、対症療法的なものになってしまうだろう。

「トランスジェンダーの抱える問題はトランスジェンダーだけで解決すればいい」とは決してならない。トランスジェンダー当事者の「人生の一部分」という形で表出する労働環境問題は、それをもたらしている「生きづらい社会構造」が形を変えてトランスジェンダー以外の人々の「生きづらさ」につながる可能性がある。そして、なによりも社会全体の「生きやすさ」を実現することにつながらないであろう。

第２節　先行研究　―トランスジェンダーの「生きづらさ」に関するこれまでの議論―

本節では、国内外でセクシュアル・マイノリティ、とりわけトランスジェンダーが抱える問題について、現在までに社会的、学問的にどのような調査、研究が行われてきたのかを概観する。また、セクシュアル・マイノリティ以外のマイノリティ属性をもつ人々、具体的にはユニークフェイスとアルビノの当事者についても調査し、セクシュアル・マイノリティの「生きづらさ」との異同点についても調査した。

第１項　国際機関、欧米におけるこれまでの研究

セクシュアル・マイノリティの当事者運動、権利獲得、社会的包摂に関しては、日本より欧米において歴史が長く、また、同時代的にみても先進的な事例や知見を発見できる場合がある。そこで、まず国際機関と欧米の調査を概観し、次に日本の研究における議論を整理したい。

経済協力開発機構（Organisation for Economic Cooperation and Development: OECD）は、加盟諸国の社会厚生の状況をまとめた Society at a Glance 2019: OECD Social Indicators という調査報告書を公表している [OECD, 2019]。その中には、LGBT に関する調査報告も含まれており、Chapter 1: The LGBT challenge: How to better include sexual and gender minorities?において、OECD 加盟国において LGBT の人々が社会的に置かれた状況について説明している。そして、LGBT の人々の労働環境について以下の記述があ

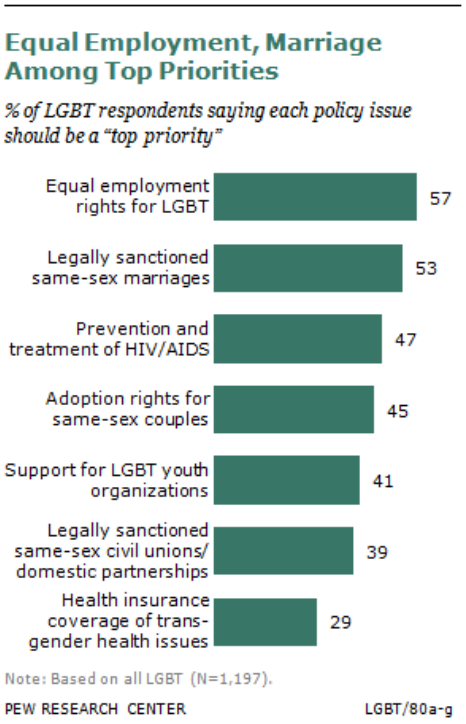
る［OECD, 2019, ページ: 28］。

> Representative survey data reveal that LGBT people experience gaps in employment status and/or labour earnings compared with non-LGBT people. LGBT people are 7% less likely to be employed than non-LGBT people and their labour earnings are 4% lower. They also seem to be exposed to a glass ceiling: they are 11% less likely to hold a high managerial position. Overall, the penalty that LGBT individuals endure at school extends into the labour market.
> 代表的な調査データが明らかにしたところによると、LGBT の人々は LGBT ではない人々と比較すると雇用状況と労働所得において差があることを経験している。LGBT の人々は LGBT ではない人々と比較すると 7%低い雇用率となっており、LGBT の人々の労働所得は 4%低いものと見込まれている。LGBT の人々はまた、ガラスの天井に直面しているものと思われる。つまり、LGBT の人々が高い管理職のポストに就いている割合は 11%低いと見込まれている。概して言えば、ひとりひとりの LGBT が学校で耐えている不利なことが労働市場にも持ち越されてしまっている。（筆者による和訳）

この資料からは、LGBT 当事者が非当事者と比較して労働環境において不利な状態に置かれていることが数字によって示され、それは学校時代から続いていることが理解できる。その他にも、同報告書に記述されている LGBT の「生きづらさ」に関連する箇所では、「（LGBT に対する差別は：筆者註）倫理的に受け入れられないだけではなく、多大な経済的・社会的なコストも伴う。したがって、性的少数者の包摂は、OECD 諸国の政策の最重要事項となるべきである。LGBT の人々は少数者といえども相当数に上り、LGBT を自認する人の割合は高まっている。例えば、米国では 1945 年より前に生まれた人で LGBT を自認している人の割合はわずか 1.4%であるのに対し、ミレニアム世代（1980 年～1999 年に出生）では、この割合は 8.2%である。トランスジェンダーの人々に対する不快感の方が、LGB の人々に対するそれよりも若干強い。トランスジェンダーの人々は、同性愛者や両性愛者以上に差別を感じている。この資料からは、トランスジェンダーの求職者が著しく差別されていることや、LGBT の人々が労働市場以外でも差別されていることなど、現状での問題点が指摘されている。その上で、「LGBT の存在と彼らが被る不利益を国の統計で可視化することは、LGBT の人々の社会的包摂の前提条件である。LGBT 差別を法律で禁止し、LGBT の人々の平等な権利を確保することは、彼らが置かれた状況を改善するために不可欠である」と、今後加盟国が取るべき方策にも踏み込んでいる［OECD, 2019, ページ: 2］。

独立行政法人　労働政策研究・研修機構から公開されている「諸外国の LGBT の就労をめぐる状況」という調査報告書がある［独立行政法人　労働政策研究・研修機構, 2016］。この報告書は、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの各国の状況についてまとめられたものである。この報告書によると、これら 4 か国のうち特にアメリカとイギリスでの取り組みが活発であることが分かり、この報告書に引用されている資料の中から本研究の課題に関連するもの、すなわちセクシュアル・マイノリティの「生きづらさ」、とりわけ労働に関連する記述を抽出し、その引用資料を調査した。

【図 1】Equal Employment, MarriageAmong Top Priorities



出典：
https://www.pewsocialtrends.org/2013/06/13/a-survey-of-lgbt-americans/
参照日：2020 年 6 月 4 日

アメリカに関する調査では、ピュー・リサーチ・センター（Pew Research Center）[3]による調査が紹介されている［独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2016, ページ: 4］。この調査の中で、LGBT の人々が認識する最も優先されるべき権利は「雇用における平等」との結果が出された（【図 1】参照）。LGBT と自己認識する回答者 1,197 名のうち 57%が「雇用にかかる権利が最優先事項である」と回答した。これは、「合法的な同性婚」（53%）、「HIV／AIDS の予防・措置」（45%）などを上回り、最も多くの人々から選択された優先事項である［Pew Research Center, 2013］。このデータから、アメリカにおいて LGBT 当事者が抱える様々な「生きづらさ」の中でも、雇用や労働に関する問題の重要性が理解できる。

ピュー・リサーチ・センターの調査は LGBT 当事者の認識に関するものだったのに対し、雇用する企業側はどのような認識を持ち、取り組みを行っているのだろうか。ヒューマン・ライツ・キャンペーン [4]が 2002 年より始動させた企業均等指標（Corporate Equality Index: CEI）が、主に大企業における LGBT 従業員の職場環境を知る上で重要な指標とされている。2015 年に公表された「企業均等指標 2015（CEI2015）」は、フォーチュン誌が選ぶト

[3] ピュー・リサーチ・センター　https://www.pewresearch.org/　参照日：2020 年 4 月 5 日

[4] ヒューマン・ライツ・キャンペーン（Human Rights Campaign）とは、アメリカ最大の LGBT 人権擁護団体であり、政治ロビー活動組織である。　https://www.hrc.org/　参照日：2020 年 4 月 4 日

ップ 1000 社（2012 年）および American Lawyer 誌が選ぶトップ 200 弁護士事務所（2012 年）を調査対象とした [The Human Rights Campaign Foundation, 2014, ページ: 22]。企業は送られた調査票に回答することによって正式な参加とされた。また、500 人以上の国内フルタイム従業員のいる民間企業の自発的な参加も可能とされた。「企業均等指標 2015（CEI2015）」において、「評価項目別、フォーチュン 500 企業の達成割合」がまとめられている。それによると、CEI 参加企業（積極的な取り組みを行う企業）では、

・「性的指向による差別を禁止するポリシーを有する」98%
・「ジェンダー・アイデンティティによる差別を禁止するポリシーを有する」89%
・「ドメスティック・パートナーに対する平等な健康保険を提供する」93%
・「トランスジェンダーを含んだ医療保険を提供する」53%
・「コンピテンシー研修、設備または管理手段を提供する」74%
・「パブリックコメントを公開する」79%

が達成されている。この 6 つの指標から読み取れることは、企業が社外へ向けてポリシーを公開することについてはほぼ全ての企業が達成している反面、企業が経済的な負担を強いられる指標や社員全体を巻き込む必要のある訓練や研修に関する指標は達成割合が低めとなっていることである。今後は、企業がトランスジェンダー社員に対する経済的な支援や人事研修の一環として啓発活動を行うことが望まれる。

イギリスに関する調査では、Metcalf and Rolfe による調査が紹介されている [独立行政法人　労働政策研究・研修機構, 2016, ページ: 45-46]。Metcalf らは、雇用主による LGBT 労働者に配慮した職場作りに取り組むにあたっての動機、障害、困難などについて、企業や LGBT 従業員、支援団体などへの聞き取り調査を行った。LGBT 労働者に関する取り組みの障害になりうるのは、雇用主自身がこの問題への対応に消極的または関心がない、あるいは現状で公正さが達成されているため新たな取り組みの必要を感じない、対応方法に関する知識不足、他の従業員からの反対が想定される、などの場合が挙げられている。特に、男性中心の職場では、従業員の反対を受けやすいという。また、トランスジェンダーについては、LGB とは異なる課題があり、分けて扱うべきであるとしている。トランスジェンダーが抱える問題（法的な義務や適切な対応策を含む）は、LGB と比較して雇用主にも従業員にも理解されにくく、敵意や恐れの対象とされやすいとしている。

Metcalf らの論文には、イギリスにおけるトランスジェンダーの労働環境における障壁（barriers）について、次のように記述されている [Metcalf Rolfe, 2011, ページ: 43]。

> The primary barriers to employers taking action to develop a more trans-friendly workplace seemed to be lack of thought given to gender identity issues, in general, and lack of recognition of it as an employment issue, in particular.
> Once trans issues have moved on to the radar, a range of other barriers can prevent it being taken up as an employment issue. These include:

- lack of perceived need, due to lack of recognition of any trans employees and due to the small size of the trans population;
- lack of knowledge of gender identity issues, legal requirements and appropriate actions; and
- hostility and fear towards transgender people generally, both from management and staff.

いっそうトランス・フレンドリーな職場へと進展させようと策を講じている雇用主にとって、主要な障壁は一般的なジェンダー・アイデンティティ問題に対する想像力の欠落と、とりわけそれに関する雇用問題としての認識不足であったと思われる。

いったんトランスに関する問題が取り上げられると、幅広いそのほかの障壁がその問題を雇用問題として取り上げられることを妨げる場合がある。これらには、

- ほんの些細なことでもトランスの従業員に関する認識が足りないこととトランスの人数が少ないことによって、必要とされる配慮が行き届かないこと
- ジェンダー・アイデンティティ問題、法的要件、適切な行動に関する知識が不足していること
- 経営者とスタッフの両方から、一般的にトランスジェンダーの人々に対して敵意と恐れがあること

が含まれる。（筆者による和訳）

ここに書かれていることは、日本の当事者が抱える「生きづらさ」となんらかの共通点を見い出せる可能性がある。

第２項　　日本におけるこれまでの研究

次に、日本において、トランスジェンダーの「生きづらさ」に関してこれまでにどのような議論がなされてきたのかを概観する。

トランスジェンダー・性同一性障害の研究者である鶴田幸恵は、日本の性同一性障害のコミュニティでのフィールドワークにもとづき、性同一性障害である人々が「女／男らしさ」を追求するために行っている実践についてまとめた。鶴田は、いかなる仕方で性別は見られているのか、外見のなかの「手がかり」を頼りに他者の性別を解釈し判断するという場面において、私たちが行っている実践にはカテゴリーの「一瞥による判断」と「手がかりによる判断」の二つがあること、その過程におけるパッシング[5]の実践、そして、二つの「見る」仕方の混同が招く終わりなき「女らしさ」の追求について調査を行った。また、性同一性障害者コミュニティの中に「正当な当事者」という基準があることを発見し、「性同一性障害とは誰か」を診断するのは医療者であることをまとめた。さらに、「金八先生」

[5] パッシングとは、「自己に関する、まだ明らかにされていないが、明らかにされれば信用を傷つける情報の管理」と定義されている［鶴田，2009，ページ：43］。

[6]放送以降の知識の広まりによって“なんちゃって”と呼ばれる新しいカテゴリーに入る人々が増えたことも調査した。「金八先生」放送以降に「増えた」とされる“なんちゃって”FtM とは、「FtM 的なモラルのない人」として、そうではない FtM からは下位カテゴリーとして批判の対象とされている［鶴田, 2009, ページ: 178-179］。

ジェンダー、セクシュアリティの研究者である石井由香理は、性別違和を持つ当事者同士（トランスジェンダー、X ジェンダー[7]）同士が相互に関わる場面（当事者の演劇団体）における自己受容のプロセスについて、詳細な観察を行った。そこでは、当事者同士であっても、他者の悩みや痛みに対して無知であること、知ろうとしないことが反省的に述べられている［石井, 2018, ページ: 177］。

性科学、ジェンダーの研究者である東優子の研究では、欧米企業で取り組みが始まった「D&I の推進」[8]や近年の国際社会で使用されるようになっている SOGI[9]という用語の紹介など、海外の先進的な取り組みを紹介している。そして、日本の LGBT に関する国・省庁、経済界、自治体などのこれまでの取り組み、職場の LGBT 対応、職場での性別移行支援、日本企業の具体的な取り組みなどについても紹介されている。その中には、当事者を雇用する企業にとって指針となる、カミングアウトの受け止め方、当事者のニーズをヒアリングすることの重要性などの対応策が豊富に紹介されている［東, 2018, ページ: 3, 15, 75-178］。

ジェンダー法学、ジェンダー史の研究者である三成美保らの研究では、LGBTI の「包括的な権利保障」を実現するために、とりわけ「生存保障」という意味において、「雇用・労働」に関する権利保障を喫緊の課題として掲げている［三成, 2019, ページ: 5］。

---

[6] 2001 年 10 月 11 日から 2002 年 3 月 28 日にかけて TBS で「3 年 B 組金八先生第 6 シリーズ」が放送され、性同一性障害の主人公が描かれた［TBS, 2020］。

[7] 精神科医の針間克己によると、「X ジェンダーとは、1990 年代後半頃より、関西で使われ始め、その後インターネットを中心にひろがり、日本で使われている言葉です。エックスジェンダー、と発音します。和製英語であり、医学的専門用語でもありません。そのため、医学的立場からの明確な定義は困難です。使われ方を見ていると、主に自分のジェンダー・アイデンティティが、男性、女性どちらにもなく、「無性である」という場合に用いるようです。広い意味では「ジェンダー・アイデンティティがわからない」場合や、「ジェンダー・アイデンティティが男女どちらでもある」場合に使うこともあるようです」と説明している［針間, 2019, ページ: 81］。

[8] もともとは欧米企業において「ダイバーシティの推進」として取り組みが始まったが、今日では、これを発展させて、「D&I の推進」が重要なキーワードとなっている。多様性を意味するダイバーシティ（Diversity）に、包摂を意味するインクルージョン（Inclusion）が追加されている［東, 2018, ページ: 3］。

[9] 近年の国際社会では、LGBT の人権について議論する際に、SOGI という用語も使用されるようになっている。SOGI とは、性的指向（Sexual Orientation）と性自認（Gender Identity）を組み合わせたもので、これにジェンダー表現（Gender Expression）を加えた SOGIE（ソジー）や、さらに性的特徴（Sexual Characteristics）を加えた SOGIESC（ソジエスク）といった用語が使用されることもある［東, 2018, ページ: 15］。

LGBTI 当事者は『男女別身体・異性愛・シスジェンダー』といったセットからなる『典型的』な男女の類型にあてはまりにくい存在です。社会の仕組みは一般に多数派モデルに即して設計され、仕組みを維持するために生じる「ひずみ」は少数者に集中しがちです。その「ひずみ」は「生きづらさ」や「困難」という形をとって少数者を悩ませます。すなわち、少数者が感じる「困難」の原因は、少数者自身にあるのではなく、社会の側にあるのです。

LGBT の問題に限らないが、マイノリティをめぐる人権の課題はマイノリティの側に問題があるわけではなく、むしろマジョリティの意識やそれを支える制度の方に問題がある場合がほとんどであるということが丁寧に説明されている。そして、マジョリティが問題だという議論が生まれたのは、マイノリティの抗議の声が広がって以後のごく最近のことである。例えば、女性差別問題をめぐる男性性問題などが、「マジョリティ問題」として浮上するようになった。三成らは、LGBTI 当事者によって提起された訴訟の事例などを解説しながら社会構造の変革を訴求していくと、「*LGBTI 当事者が働きやすい職場は、だれにとっても働きやすい職場であり、働き甲斐を見出しやすい職場です*」という帰結に至ることを述べている［三成, 2019, ページ: 6]。このように考えていくと、LGBT に限らずマイノリティ属性をもつ人々が抱える問題は当事者だけで考えればいいのではなく、「生きづらい社会構造」の中で生活しているマジョリティへ訴求し共に解決策を考えることが必要不可欠であると理解できる。つまり、「生きづらい社会構造」の問題を解決することは、マジョリティを含む社会全体が生きやすくなることを意味している。

ジェンダーの研究者である武内今日子は、日本独自のカテゴリーである「X ジェンダー」に着目し、当事者に対する医学的・法的・社会的な扱いが定まっていないことを問題とした。そして、女装者やニューハーフによるカテゴリーの運用、ガイドライン制定の当事者への影響、当事者の日常的場面における衣装や行動の制限などについて詳細な調査を行った。武内は、同性愛者に関しては現在では医学的な介入対象ではないことが社会的コンセンサスとなっており、結婚や相続をめぐる法的な問題についてはマジョリティとの差別を解消し、平等を目指すことが大きな流れとなっていることを説明した。しかし、性別違和をもつ人々には特有の困難が存在することを次のように指摘している［武内, 2018, ページ: 8]。

性別違和をもって社会のなかで生きることには、同性愛者と共通する問題もあるが、特有の困難も存在すると思われる。公的機関では男女の区別を記した身分証が用いられており、制服が男女で異なる指定をもつことも多い。トイレも性別によって空間が分離されており、職場でカミングアウトすることが解雇につながることもある。このように性別による社会的区別は、一般社会で自明のものとされている。加えて、性別違和という現象に関して、この社会は医学的・法的・社会的にどのように処遇するべきか、いまだ

に確固たる方針をもっていない。

筆者は、この「性別による社会的区別」という指摘に着目した。それはあたかも見えない壁のようなものであり、三成が指摘した「少数者に集中しがちな『ひずみ』」のひとつ、つまり「マジョリティ問題」として扱うべきものなのではないだろうか。性別違和をもつ人々を苦しめているのは、そのあたりにありそうである。武内は、性別違和をもつ人々の職場や女子大への受け入れなど社会的には「*反対の性別としての受け入れという比較的理解しやすい事例において*」は理解が進みつつあるとしながらも、「*日本における性別違和をもつ人の労働に関する研究はほとんどなされていないため、別途考察が必要*」と指摘している [武内, 2018, ページ: 13]。

第３項　トランスジェンダー当事者による自伝、当事者研究

トランスジェンダー当事者による自伝や、当事者が当事者について研究する当事者研究についてはどうだろうか。

性別適合手術 [10]を受けたトランスジェンダー当事者の虎井まさ衛は、公的書類に表記される性別がもたらす「生きづらさ」の事例として、当事者の友人について次のように述べている [虎井, 2003, ページ: 21-22]。

私の FTM の友人の一人が、癌でかなりひどい状態であると知らされた。ほとんど同世代、30 代だった。『保険証を窓口で見せたり、婦人病棟に入院するのが嫌で、発見が遅れてしまった。もっと早く医者に行っていれば‥‥‥』と語っていたという。そしてその人は、そのまま帰らぬ人となった。

そして、虎井自身も「書類上の性別」に起因する切実な「生きづらさ」について、次のように述べている [虎井, 2003, ページ: 34, 70-71, 99]。

しかも全て、ああ全て、性別が記してある何らかの書類にかかわる用事だったのだ！　どこの役所の、事務所の、銀行のコンピューター画面にも、虎井家の家族構成一覧が出る。子は「長女」一人。「あなたは亡くなられた方の何にあたるのですか？」
――ああ、親が死んだ時くらい、この手の質問をされないで済まないものか。

大学卒業後の男としての仕事（住民票を出さねばならなかったのでアルバイトしか出来ませんでした）先でも無論、心と身体の生活上の性別通りに、男子更衣室と男子トイレに入っていました。（中略）その会社では何度も正社員になるように誘われましたが、書

[10] 性別適合手術とは、Sex Reassignment Surgery(SRS) の訳語である。インタビュー調査協力者の語りでは、「性別移行（手術)」などの表現も出てくるが、同義である。

類上の性別の問題があるために断り続けていました。（中略）しかし過去においても明らかであったように、全ての不都合が書類上の性別から生じているのです。就職・結婚・転居・通院・海外渡航・投票・通帳や年金手帳や図書館カードやレンタルビデオ会員証作成に至るまで、一事が万事不都合だらけなのです。不都合で済めばまだマシですが、生命を危険にさらすことにもなるのです。

図書館で本を借りたくても女性の身分証を見せるのが嫌で借りられず、夜中にごみ捨て場を徘徊して、そこに捨てられてあった本を読んだりしていました。

このような「生きづらさ」を経験したため、後に虎井は全国にいる他の当事者仲間にも働きかけ、2001 年 5 月 24 日、戸籍の性別変更を認めるよう家庭裁判所へ「一斉申し立て」を行った。

虎井が苦しんだ「書類上の性別」に起因する「生きづらさ」というのは、前項で三成らの論考から引用した「*社会の仕組みは一般に多数派モデルに即して設計され*」ることによるものである。そして、その原因は苦しめられている少数派の側にあるのではなく、社会の側に帰せられるべきものである。

トランスジェンダー当事者であり市民活動家の米沢泉美らの研究では、研究者を含む複数のトランスジェンダー当事者たち、戸籍研究者、医師らによるトークバトル、インタビュー、当事者が抱える様々な問題に関して当事者の立場からの問題提起と解決策の提示を行っている。その中で、米沢はトランスジェンダーの「生きづらさ」について社会構造的に考察している。米沢によると、トランスジェンダーは間違いなく社会構造の中で差別されており、制度的性別の壁、就労・就学における壁などに直面していると述べている。そして、少なからぬトランスジェンダーが「見た目」から何らかの「シグナル」を発してしまっており、それが差別的感覚を誘発してしまうこともあるという。この「他者からどう見えるか」という点において、トランスジェンダーの「生きづらさ」は外国人や障がい者と共通する部分もあるが、同時に米沢は、トランスジェンダーがもつ「ある種の特異な傾向」について、次のように述べている［米沢, 2003, ページ: 202-203］。

外国人や「障がい者」は、自らが差別を受けるその姿を「隠す」ことができず、社会に、街頭に出る場合、その姿と「つきあって」一生を生きていくしかないのに対し、トランスジェンダーには「パートタイマーで我慢する」あるいは「転換後のジェンダーとして社会に極力埋没する」ことが可能だからである。

トランスジェンダーは、その容姿が、個別的具体的差別の大きな契機となっているにもかかわらず、その容姿を全面的に「引き受けずに」生きていくことができてしまうという、あいまいな立ち位置にあるのである。

つまり、トランスジェンダーは複数の選択肢の中から選ぶことができるという点において、「他者からどう見えるか」という「生きづらさ」を抱えていながらも、外国人や障がい者とは異なる立場にいるということである。この言説に続けて、米沢は、様々な「生きづらさ」やマイノリティ属性をもつ者同士が連帯できていない社会構造について、次のように述べている［米沢, 2003, ページ: 205］。

もともと、広義のトランスジェンダー[11]概念が発生するまでは、今で言うトランスジェンダーに関する多くの理論的概念は、典型的非当事者である、医学者などの専門家によってつくられてきたものである。そして、だからこそ、性別に対する当事者のさまざまな感覚の違いを無視した、非当事者・専門家の立場からの、外面的な分類・分析（言うまでもなく、専門家がそのような分析を行うこと自体はまったく正当ではある）を、当事者が、不十分なそれぞれの感覚・思想に基づいて勝手に解釈し、その解釈をめぐって「宗教戦争」となるような事態が絶えないのである。

米沢は、様々な問題を抱えたマイノリティの個別性や多様性に対する理解が不十分なまま、マジョリティの側からの「確かに自分たちはマイノリティに対し差別的である」という一面の事実のみをもって「差別はよくないです」という一般論が立てられてしまっていることを問題点として指摘している。しかし、そのような「双方の理解不足」がありながらも、差別をなくすためには、「良心的な人ですら当事者を差別側の論理でカテゴライズしてしまう」という構造上にある、マジョリティへの働きかけは必須であることを指摘している。ここでも、前項で三成らが指摘した「マジョリティ問題」が言葉を変えて説明されている。

第４項　ユニークフェイスとアルビノの当事者に関する研究

前項で概観した「他者からどう見えるか」という視点を手がかりに、筆者はユニークフェイスとアルビノの当事者が抱える「生きづらさ」を調査した。トランスジェンダーと同様に「見た目」から何らかの「生きづらさ」を抱えている可能性があり、それを基にトランスジェンダーが抱える問題との異同点を見い出すことができ、さらに「マイノリティにとって生きづらい社会構造」という問題の根幹へ迫るための一助となるのではないかと考えたからである。

まず、ユニークフェイスについて調査した。ユニークフェイス当事者であり研究者の松本学によると、ユニークフェイスの定義は次の通りである［松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 1］。

ユニークフェイスとは顔や体のアザやキズなど、「見た目」の問題をかかえている人自身

[11] 「広義のトランスジェンダー」の概念については、本章第 3 節第 3 項にて後述。

を表すとともに、そうした人たち自身とその家族が集まっているグループの名称である。

松本は、当事者研究の意義について、次のように当事者から発信される「生の声」の重要性を述べている [松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 1-2]。

この本では、あえて当事者からの視点ということを大切にして作りました。それは、今まで専門職の独壇場だった情報発信を私たち当事者の側から選択して伝えようとする試みであるということです。なぜでしょうか。それは、当事者が最も知りたい情報は、当事者が一番知っているからです。当事者の経験は、当事者が語って初めてその思いにふれることができます。（中略）『記述が客観的ではない』と思われる方がいるかもしれません。しかし、そもそも『客観的』とは何でしょうか。きちんと統計的にデータを集めることが、『客観的』なのでしょうか。専門的なアプローチだけが『客観的』に私たちの事実を伝えるのでしょうか。そうではありません。当事者からの発信もひとつの確固たる事実を伝えています。

また、ユニークフェイス当事者が一般的に抱える問題としては、以下のようなことがあるという [松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 12-13]。

自分に自信がもてない、他者とのコミュニケーションが苦手、いじめを受ける、恋愛や結婚で悩む、就職差別を受ける、無責任な興味の対象とされる。

そして、問題を乗り越えるための努力のむなしさについて言及している [松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 13-14]。

ユニークフェイスの当事者のなかには努力して能力や人格をみがくことをめざし、それによって自信を得ようとする場合がよくあります。また、周囲の人間もそれを期待するようです。『賢く、やさしくありなさい。そうすれば〇〇があっても人から認められることができるから』。（中略）しかしそのことで他者と自分を比較することは、ひどくむなしいものです。能力や人格の問題とはまったく別の、努力では乗り越えられない何かが自分と他者の間に立ちふさがり、ある意味でけっして他者に追いつけない存在として自分自身を意識させるのです。

一部のユニークフェイスの当事者たちは、自らの外見を「マイナス要素」として認識してしまう。そして、その当事者たちは、それを埋め合わせるために「人よりもすぐれた能力や人格」という「プラス要素」を欲してしまうし、周囲からも求められる。そのような「プラス要素」が獲得できれば、自己を「プラマイゼロ／ゼロ以上」にもっていくことが

できる。そうすれば、他者から認められ居場所を確保できるという仕組みである。それは、トランスジェンダーの置かれた状況にも共通している部分があるのではないか。「外見や性的指向・性自認が典型的」であるマジョリティの人々は、他者から認められるために特別な努力をするのだろうか。だれもが通常受けるような躾や教育以外に、「自分の居場所を確保するための特別な努力」に励むマジョリティはいないだろう。しかし、「典型的ではない」マイノリティは、自己のマイノリティ属性に向き合う苦労に加え、周囲に溶け込むためにさらなる努力が求められてしまうことになる。それは、たいへんな不条理ではないだろうか。

マジョリティかマイノリティに関わらず、前向きなモチベーションがあって「人よりもすぐれた能力や人格」を獲得するために努力できる人々はいるだろう。しかし、「マイナス要素を埋め合わせるため」の努力にはしんどさが伴うのではないだろうか。

また、ユニークフェイス当事者の社会的な「生きづらさ」について、以下のように述べられている [松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 15-16]。

> 一歩家を出ると、いつ、通りすがりの人々からぶしつけな目でながめられ、嫌がらせを受けるかわからない。（中略）不快そうに眉をひそめて振り返られたり、「汚い」「気持ち悪い」などの言葉をすれちがいざまに浴びせられることがある。

これらの「生きづらさ」は、社会制度によっては解消されないのではないだろうか。人々の意識がもたらす事象については、トランスジェンダーが直面する「生きづらさ」と共通するところもあると思われる。多様なマイノリティを社会的に包摂するための方策を考える必要があるだろう。

さらに、ユニークフェイス当事者の就職については、以下のように述べられている [松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 31-32]。

> 就職はできます。しかし、そのハードルはとても高いものになるかもしれません。（中略）一般的に私たちが就職試験で何がネックになるかといえば、やはり面接試験でしょう。

そして、ユニークフェイス当事者の「生きづらさ」を解決するために必要なことについては、以下の記述がある [松本, 石井, 藤井, 2001, ページ: 22]。

> 当事者と関係者が力を合わせることで、ユニークフェイスの当事者たちが遭遇する問題を解決・解消することができると思われます。

このように、ユニークフェイス当事者が抱える「生きづらさ」や問題解決方法は、多くの部分がトランスジェンダー当事者にも共通しているものと考えられる。これらを手がか

りに、マイノリティ属性をもつ人々の「生きづらい社会構造」を解決するための方策について、社会全体で考えるべきなのではないだろうか。

次に、アルビノについて調査した。アルビノ当事者であり研究者の矢吹康夫によると、アルビノの定義は次の通りである [矢吹, 2017, ページ: 50]。

> アルビノの呼び方は、遺伝学では古くからの俗称と他領域の診断名が長らく混用・併存していたが、近年は皮膚科でキャリアをスタートした研究者が遺伝子解析をリードしていることもあり、どちらかといえば白皮症が多数派である。白皮症は、先天的にメラニン色素の生成が低下、または完全に消失する遺伝性疾患と定義されている。

矢吹は、アルビノ当事者が抱える「生きづらさ」を分かりやすく研究、考察している。まず、矢吹は戦後日本の視覚障害教育について、次のように批判的、反省的に述べている [矢吹, 2017, ページ: 91]。

> 健常者に便利なように機能している社会をそのままにしておいて、障害者に大変な努力をしてもらい、能力を高めてもらって、何とか健常者に準じた生活が送れるようにすることを中心に考えてきた。

アルビノは、社会という大きな相手に対しては視覚障害者のほうが適応を試みるしか術がなかったとしながらも、他の感覚器官の訓練や盲人器具の利用などの代償アプローチ、移動・交通バリアフリーなどの福祉事業の展開によって、視覚障害者の「*同化戦略が有効に機能した*」 [矢吹, 2017, ページ: 92]としている。つまり、視覚障害そのものが解消したわけではないが、視機能を回復させる以外のアプローチによるリハビリテーションや社会インフラの整備によってアルビノ当事者の「生きづらさ」は従前と比較するとある程度の改善が図られてきたことが述べられている。

しかし、社会の無理解や対応の劣悪さなど、アルビノ当事者を取り巻く課題は依然として残されている。それについて、矢吹は次のように述べている [矢吹, 2017, ページ: 94]。

> 弱視に対する無理解を批判するのは当然のことであり、「関係者が機会あるごとに PR していく必要」があるのだが、それよりも「一番大切なのは、弱視者自身が自分を理解してもらうために、積極的に相手に働きかけていく努力」のほうだという。社会の無理解という障壁の解消には対社会的なアプローチ以外はありえず、弱視教育もここでは個人の適応を否定するが、問題の可視化と理解の促進を担わされているのは弱視児者自身である。つまり、直接社会を変えるのではなく、「明るく」「上手に」「積極的に」社会に働きかける「根性」や「たくましさ」や「精神力」をもった弱視児者を養成するという間接的な方法が、戦後弱視教育のアプローチなのである。

これは、本項で述べたユニークフェイス当事者が置かれた状況に通じるものがあり、「戦後」から現在でもさほど変わっていないのではないだろうか。つまり、自らの弱視へのケアをする必要があるのと同時に、社会に対して問題の可視化と理解の促進のための役割をも担わされているのだ。

矢吹は当事者の多様性とジレンマについて、次のように描写している［矢吹, 2017, ページ: 405-406］。

> アルビノの場合、とりわけ髪を染める、染めない、または染めるのをやめる場合の語りにおいて、肯定／否定の政治が先鋭化する。パッシングせずに生活すれば様々な困難に直面し、かといってパッシングすれば隠していることへの罪悪感や後ろめたさを感じてしまう。

ここにも、当事者間に多様な考え方があり揺らいでいる様子が垣間見える。そして、矢吹は「*問題があるのは個人ではなく社会*」と述べ、論考を締めくくっている［矢吹, 2017, ページ: 403］。

筆者は、トランスジェンダー、ユニークフェイス、アルビノの人々に限らずマイノリティ属性をもつ人々全般に共通することとして「マジョリティに合わせるのはあなたたちマイノリティの（自己）責任です」と社会が無言のうちに押しつけている構造が当てはまるのではないかと考えた。そして、これこそがマイノリティ属性をもつ人々を生きづらくしてきた根本的な原因なのではないだろうか。現在の社会はマジョリティにとっては便利なものになっているので、「今の社会の仕組みで不便を感じている人々がいるかもしれない」ということに気を留めないし、気づくこともないのではないだろうか。そして、これも本節第 2 項で取り上げた「マジョリティ問題」へと収斂されるものと考えられる。

第５項　　本研究における問い

前項まででセクシュアル・マイノリティ、とりわけトランスジェンダーや、他のマイノリティ属性をもつ人々の「生きづらさ」に関する先行研究を概観した。本項では、それらを踏まえて、本研究で取り組むべき問いを整理する。

鶴田の研究では、日本の性同一性障害をもつ人々のコミュニティの歴史と動向、当事者同士の関わり合いや軋轢について詳細に調査を行った。しかし、トランスジェンダーの人々が当事者コミュニティ以外の場、すなわち学校、職場、近隣などの社会生活の場において、どのように他者との関係性を構築し、どのような「生きづらさ」を抱えているのかについては詳しく述べていない。そこで、筆者は、鶴田の研究を土台としつつ、トランスジェンダーが非当事者との関わり合いをもつ社会生活においてどのような「生きづらさ」を抱えているのかに焦点を当てて調査を行いたい。

東の研究では、まず国際社会におけるトランスジェンダーの労働環境に関する先進的な取り組み、知見、概念が紹介された。そして、それを基に「カミングアウトの受け止め方」「人事担当者・面接担当者向けチェックリスト」など、日本の非当事者（主にトランスジェンダーを雇用する企業の管理職を想定していると思われる）にとって参考となる手引がまとめられた。しかし、海外で成功した方法が、必ずしも日本でも成功するとは限らない。そこで、筆者は東とは逆の立場から、つまり日本の当事者が労働環境においてどのような困難に直面しているのか、そして労働と隣接している日常的な社会生活においてどのような「生きづらさ」を抱えているのかについて、ボトムアップ的に「個々の当事者の生の声」を聞き取るインタビュー調査に取り組みたい。

三成らの研究では、当事者が権利獲得のために戦った裁判事例と LGBTI 当事者を処遇する企業の取り組み、LGBTI 当事者をサポートする弁護士の取り組み、認定特定非営利活動法人 ReBit（りびっと）[12]による LGBT の就職と就労に関する取り組みなどが詳細に紹介されている。LGBTI 当事者が提訴した裁判としては、「府中青年の家」事件が紹介されている［三成, 2019, ページ: 14］。この裁判では、原告であるアカー（動くゲイとレズビアンの会）が施設管理者である東京都を相手取って訴訟を起こし、勝訴した（1997 年東京高裁）。その結果、アカーが施設を使用する権利が認められ、その後原告以外の当事者の社会生活にも広く影響を与えている。東京高裁による判示は次の通りである［LGBT 法連合会, 2019, ページ: 83］。

> 「平成二年当時は一般国民も行政当局も、同性愛ないし同性愛者については無関心であって、正確な知識もなかったものと考えられる。しかし、一般国民はともかくとして、都教育委員会を含む行政当局としては、その職務を行うについて、少数者である同性愛者をも視野に入れた、きめの細やかな配慮が必要であり、同性愛者の権利、利益を十分に養護することが要請されているものというべきであって、無関心であったり知識がないということは公権力の行使に当たる者として許されないことである」。

筆者は、ここで着目すべきは、社会制度の構築、運用にあたっては、マイノリティの存在を無視してはならないという考えが示された点にあると考える。また、2016 年 5 月、LGBT 法連合会（性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会）によって、「LGBT 差別禁止法」の試案が発表され、早期の立法化が望まれているところである（2020 年 4 月現在）［三成, 2019, ページ: 170］。

このように、法律などの社会制度は当事者の社会生活にとって極めて重要なものである。しかし、筆者は社会制度を整備する重要性については認識するものの、法律家とは違う立場から、つまり「社会制度によっては解消されない生きづらさもあるのではないか」とい

---

[12] 「認定 NPO 法人 ReBit | LGBT 問題の今を考える、10 年後を作る」 https://rebitlgbt.org/ 参照日：2020 年 3 月 8 日

う視座を重視しながら、トランスジェンダーの「生きづらさ」を捉え直すことに取り組みたい。三成らの方法は、法律家として社会全体を射程に入れるものである。それに対して、筆者は個別の当事者が抱える「潜在的に埋もれた日常的な生きづらさ」を探る方法に取り組みたい。市井の人として生きる当事者ひとりひとりのライフストーリーから、「生きづらさ」に関する語りを聞く方法によって当事者の抱える問題を捉え直すことに取り組みたい。社会学の研究者である白波瀬佐和子は、マクロな事象に着目するためには、ミクロな視点をもつことの重要性について、次のように述べている［白波瀬, 2010, ページ: 18]。

> 不平等というマクロなレベルの現象の中身を明らかにするには、社会を構成する人々がどのような制度や規範の中で生きているのか、そしてそれらが不平等とどう関連しているのかに着目することが重要になります。そこにはマクロとミクロの接合が試みられます。不平等というマクロな事象に着目することは、マクロを構成するミクロなレベルと無関係ではありません。

社会全体を射程に入れる方法と、個別の人々が抱える「生きづらさ」を探る方法は、どちらも重要である。

以上より、本研究における問いを以下の 4 つにまとめる。

①セクシュアル・マイノリティ当事者が就職活動や職場環境において直面する「生きづらさ」（すなわち「働きづらさ」）にはどのようなものがあるのか。
②セクシュアル・マイノリティ当事者が職場以外の社会生活や社会制度にうまく適合できずに軋轢を感じてしまうような「生きづらさ」にはどのようなものがあるのか。
③男女の性別二元論に基づく「性別役割分担」などの社会で一般的に共有されている認識は、セクシュアル・マイノリティ当事者にどのような影響を与えているのか。
④男女という身体的性別の括りではなく、ジェンダー、セクシュアリティの面で「典型的」とされるマジョリティの人々とセクシュアル・マイノリティ当事者の間にはどのような認識の齟齬があり、それはセクシュアル・マイノリティ当事者にどのような「生きづらさ」をたらしているのか。

第３節　　概念・用語の整理

ジェンダーやセクシュアリティに関する用語は歴史の浅いものが多く、同じ用語が異なる意味で使われていたり、ひとつの事象を表現するのに複数の用語が用いられたりする場合がある。そこで、本節では、本稿での議論に必要なジェンダーやセクシュアリティに関する用語の定義についてまとめておく。なお、定義にあたり、日本のジェンダー研究において広く使用されている鶴田［鶴田, 2009]と東［東, 2018]の文献を中心に引用、編纂した。

第１項　　セクシュアル・マイノリティ、LGBT、SOGI の違い

セクシュアル・マイノリティと LGBT は、どのように違うのだろうか。

セクシュアル・マイノリティ（sexual minority）という用語は、1960 年代にスウェーデンの精神科医がエスニック・マイノリティ（ethnic minority）をヒントに造語したものと言われている［東, 2018, ページ: 12］。これは、「マジョリティ」に対比するための他称であり、当事者の自称ではないとされる。しかし、日本ではセクシュアル・マイノリティの略称である「セクマイ」という用語が当事者の会話において用いられている[13]。

近年、LGBT という用語もよく見聞きするようになってきた。LGBT は、レズビアン Lesbian(L)・ゲイ Gay(G)・バイセクシュアル Bisexual(B)・トランスジェンダー Transgender(T)の頭文字を取った呼称であり、もともとは当事者運動から生まれた自称であるが、現在では臨床家や研究者など専門家も使用している。日本では 2010 年頃よりマスコミに登場するようになったが、国連などの国際会議ではもっと早くから使用されていた。そして、ジェンダーとセクシュアリティ史の研究者である三橋順子は、LGBT の概念について次のように述べている。

> 「LGBT」って、そもそも性的マイノリティの「置き換え語」ではないわけで、L／G／B／T の人が政治的課題の解決に向けて手を結ぶ連帯概念。 だから、そんな政治的課題には関心がない、連帯する必要は感じないという人は「LGBT」である必要はなく、L なり G なり B なり T なりで活動すれば、それでいいわけ。[14]

> 「LGBT」でないからといって、L や G や B や T でなくなるわけではない。 私は 2003 年くらいから「性別変更法と同性婚法は、本来、同時にやるべき」と主張してきたので、婚姻平等の早期達成という課題には連帯する。 だけど、自分の本分はあくまで T であり、「LGBT」ではないと思っている。[15]

> 正直言えば、「LGBT」という枠組みでは、もう仕事はしたくない。 カテゴリー間の軋轢があまりにも強く、とりわけその皺寄せが「LGBT」の中のマイノリティである T に集中する構造になっている。 それはもう勘弁してほしい。[16]

---

[13] Rainbow Life LGBT 基礎知識　セクマイとは？　～セクマイの意味・LGBT との違い～（2017 年 10 月 14 日）　https://lgbt-life.com/topics/sexualminority2/　参照日：2020 年 5 月 27 日

[14] 三橋順子（2020 年 1 月 16 日）
https://twitter.com/MJunko0523/status/1217815481140203521　参照日: 2020 年 3 月 9 日

[15] 三橋順子（2020 年 1 月 16 日）
https://twitter.com/MJunko0523/status/1217816961683316738　参照日: 2020 年 3 月 9 日

[16] 三橋順子（2020 年 1 月 16 日）

LGBT という用語はもともと当事者運動から生まれた自称であることを踏まえると、筆者は三橋の概念を適切であると考える。しかし、近年では、「LGBT フレンドリー企業」「LGBT 法連合会」などのように、非当事者をも含めた関わり合いを意味する場合にも LGBT という用語は使用されている。

LGBT にインターセックス Intersex(I)を加えた LGBTI という用語もある。しかし、これについては批判的な意見も存在する [三成, 2019, ページ: 10]。

> インターセックス当事者の中には、LGBTI と一括されたり、性的マイノリティに含まれることに強い違和感を覚える人もいることには注意が必要です。

そのような状況を鑑み、本稿においては基本的には LGBTI ではなく LGBT という用語を用いる。

また、最近では、SOGI という用語も聞かれるようになった。SOGI とは、「性的指向」[17]を意味する（Sexual Orientation）と「性自認」[18]を意味する（Gender Identity）の最初のアルファベットを組み合わせたものである。しかし、この用語については、肯定的な意見と否定的な意見が存在する。東は次のように肯定的な意見を述べている [東, 2018, ページ: 15]。

> 近年の国際社会では、LGBT の人権について議論する際に、SOGI という用語も使用されるようになっています。（中略）LGBT が「人」に注目した用語であるのに対して、SOGI は「議論の主題が何であるか」を明らかにした用語です。L、G、B、T といった「見える化」した特定のマイノリティではなく、「性的指向や性自認を理由とした差別・偏見」を問題として、その解決に向けた取組みの推進を議論する国際会議で使用されるようになりました。。

これに対して、針間は次のように否定的な意見を述べている [針間, 2019, ページ: 62-63]。

> 「SOGI」は国際的には一般的に普及している用語ではなく、現時点（2019 年 7 月 13 日）では英語版の Wikipedia に記載はなく（日本語版ではあり）、インターネット検索でも英語では用語の説明はほぼ見当たりません。もっぱら日本でのみ、2017 年頃より急速に使

---

https://twitter.com/MJunko0523/status/1217820335220748288　参照日: 2020 年 3 月 9 日

17 「性的指向」とは、好きになる相手、性的対象が誰（同性・異性・両性）であるかを示す。

18 「性自認」とは「私は女（男）である」「私は〇〇である」といったジェンダーに係る自己の感覚・認識（ジェンダー‥アイデンティティ）を示す。

われ始めた印象です。
LGBT が限定的用語であり、「誰が LGBT なのか」という定義の問題や、「LGBT でない人の人権は？」という議論を呼びやすい一方で、SOGI は「性的指向・性自認」という意味なので、「SOGI の尊重」の意味するところは「すべての人々の性的指向・性自認の尊重」という普遍的な人権となります。
このように、人権の観点から優れた用語ではあるのですが、日本では LGBT に代わる新しい言い方、という間違った理解で、世間の耳目を集めたいがゆえに安易に「SOGI」という言葉が使われているのではという危惧を筆者は持っています。
実際にこの原稿を書いていて気が付いたのですが、最近は「SOGI」という言葉をあまり聞かなくなりました。もっぱら流行語狙いとして使われたとしたら、それはそれで残念なことです。

筆者は、あまり一般的に普及していない用語を使用するとかえって議論が分かりづらくなってしまうと考える。よって、本稿では SOGI という用語は使用しない。
以上より、本稿において、当事者同士がコミュニティにおいて関わり合ったり連帯したりすることを描写する場合には LGBT という用語を用い、それ以外はセクシュアル・マイノリティという用語を用いる。ただし、引用において LGBT ないし LGBTI という用語が用いられている場合は、引用元の文言を変更せずに使用するため、必ずしも当事者同士がコミュニティにおいて関わり合ったり連帯したりする意味を示すとは限らない。そのため、本稿において必ずしも文意が統一されていない箇所がある。

第２項　トランスヴェスタイトとトランスセクシュアルの違い

トランスヴェスタイト（transvestite: TV）とは、服装・化粧などによって一時的に性別を変える／変えようとする人々を指す。この語は、1910 年にドイツの性の研究者であり改革運動家でもあったマグヌス・ヒルシュフェルト（Magnus Hirshfeld）が同性愛との違いを論じるために用いたものであるが、それ以降は医学用語として用いられるようになった。transvestism（服装倒錯症）あるいは transvestite（服装倒錯者）という精神医学の用語が語源であるが、三橋によると、「*1990 年代の日本では、TV という言葉が商業女装クラブ系のアマチュア女装者の自称として一般化*」したという［米沢, 2003, ページ: 114, 130］。
それに対して、トランスセクシュアル（transsexual: TS）とは、性別を変更する際に、服装・外見だけではなく、性別適合手術によって性器までを変更しようとする人を指す。この語は、1953 年にアメリカのハリー・ベンジャミン（Harry Benjamin）が、トランスヴェスタイトと異なり身体違和感の強い者がいることを論じたことが、普及するきっかけとなった。三橋によると、1980 年代の日本では、商業的なトランスジェンダー世界の中で性転換者はすっかり埋没していたが、1988 年、FtM の性転換希望者である虎井が女性週刊誌の取材に次々に応じて話題になった。虎井は翌 89 年、アメリカで正規の医療プログラム

に従って性別適合手術を完了し、帰国した。そして、虎井は 91 年に女装雑誌『くいーん』誌上に TS として登場した。同年 12 月に同誌に掲載された座談会「TS／TV　相互理解で明るい未来を」に TS として虎井、TV として三橋が出演し、ここにトランスセクシュアル（transsexual: TS）はフルタイムの異性愛者であり身体的転換（性別適合手術）を希望する人という形で概念化され、トランスヴェスタイト（transvestite: TV）はパートタイムの異性装者であり身体的転換を望まない人という形で概念化されることにより、ふたつの概念は対置された。また、TS は「人生」であり、TV は「趣味・遊び」であるとの価値づけがなされたという［米沢, 2003, ページ: 115, 131］。

また、鶴田によると、トランスセクシュアル（transsexual: TS）という概念は、「性別を変更する」という行為を行うことが医療化され、性別適合手術が合法的に可能になるのに伴って、医学がその医療対象者を名指すために用いられたカテゴリーであったという［鶴田, 2009, ページ: 129］。

第３項　　トランスジェンダーと性同一性障害の違い

トランスジェンダーと性同一性障害は、どのように違うのだろうか。

MtF クロスドレッサーの筒井真樹子によると、トランスジェンダーという今日では多義的に用いられている用語は、もとはアメリカの当事者ヴァージニア・プリンスによる造語だという。プリンスが自ら「トランスジェンダー」と名乗り始めたのは、1970 年代末から 80 年代にかけてのことであった。プリンス自身は 1968 年頃から、性別適合手術を受けることなく、フルタイムで女性として生活していたが、身体的性別であるセックスではなく、社会的性別であるジェンダーに違和感を抱く自身を表すために、「トランスジェンダー」という語を用いた［米沢, 2003, ページ: 130］。

前項で述べた通り、1970 年代当時、トランスヴェスタイト（transvestite: TV）とトランスセクシュアル（transsexual: TS）という医学用語は既に存在していた。これら 2 つの用語はいずれも今日まで医学上の用語として用いられてきた点は変わりない。

これに対し、プリンスは身体違和感よりも社会的性別への違和感の強い者の存在を見出し、これを従来の医学上の分類と異なる次元の属性と捉えた。そして、自らのアイデンティティを表す言葉として「トランスジェンダー（transgender: TG）」という語を定義した。

三橋によると、日本では、トランスジェンダーという用語は、1989 年頃から異性装者や性転換者など性別越境者全体を包括する概念として用いられていたという。しかし、これとは別にフルタイムの異性装者でありながら、身体的転換（性別適合手術）を望まない人という意味でのトランスジェンダー（狭義のトランスジェンダー）という概念が 1994 年 2 月に『くいーん』誌で紹介された。これ以降、狭義の TG を TV と TS の中間に位置づける「TV・ TG・TS」という三分法が行われるようになり、後に一部の当事者や関係者の間で、TS を上位とし、TG を中位、TV を下位とする階層意識を生み出すことになった（【表 1】参照） [米沢, 2003, ページ: 116]。

【表 1】TV（トランスヴェスタイト）、TG（狭義のトランスジェンダー）、TS（トランスセクシュアル）三分法

	フルタイム／パートタイム	性別適合手術
TS	フルタイム	する
TG	フルタイム	しない
TV	パートタイム	しない

（出典：筆者作成）

三橋の論考をまとめると、「トランスジェンダー」という用語には 2 つの定義がある。まず、「狭義のトランスジェンダー」とは、性器はそのままに日常的な生活上の性別だけを変えた・変えようとする人々を指す。これに対して、「広義のトランスジェンダー」とは、性別を「越境」したり「移行」したり「変更」したりする人々のことを指すとされている。つまり、男として生まれたが女へ、あるいは女として生まれたが男へと（最近ではそのどちらでもないものへと）、性別を変えた／変えようとする人々のことである。

トランスジェンダーには性別を変更する向きによって 2 つの類型がある。MtF（Male to Female）とは、男性から女性へと性別を変えた／変えようとする人々を指す。FtM（Female to Male）とは、女性から男性へと性別を変えた／変えようとする人々を指す。また、明確に反対の性別への移行を希望するわけではない X ジェンダーと呼ばれる人々もいる。MtX（Male to X）とは、男性から男性ではない何者かになろうとする人々を指す。FtX（Female to X）とは、女性から女性ではない何者かになろうとする人々を指す。

本稿では、性別適合手術や戸籍の性別変更の有無などに関わらず「生まれつきの性別(身体的性)とは逆のジェンダー(社会的な性別)を生きようする『性別越境者』」 [三橋, 日付不明]を指すために、原則として「広義のトランスジェンダー」の意味で「トランスジェンダー」という用語を用いる。

Gender Identity Disorder (GID)という用語は、1980 年精神医学界で世界的基準として用いられている Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders（DSM、『精神障害の診断と統計の手引き』）において精神障害の疾患名として用いられた [Wikipedia, 日付不明]。Gender Identity Disorder (GID)の和訳である「性同一性障害」という医学概念が日本において知られるようになったのは、1990 年代半ばとされる。きっかけは、性別適合手術を望む男性（戸籍上は「女性」）が埼玉医科大学医療センターを受診したことであった。1997 年には日本精神神経学会が「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」を策

定し、その後、専門外来を開設する医療機関は全国に広まった。しかし、2013 年に発行された DSM 第 5 版において、GID の用語は消え、代わって「性別違和症候群」という語が用いられるようになっている［三成, 2019, ページ: 9]。

GID は国際的な診断基準に記載された診断名であるのに対し、トランスジェンダーという用語はもともと西洋において「病理化」されることに抗議してきた当事者運動において使用された。一方、日本においては、トランスジェンダーという用語が「LGBT」という用語とセットで知られるようになったため、「T は（性同一性障害者を含む）トランスジェンダー」と紹介されることも多いが、これは日本のみで通用する説明だとされる。歴史的な経緯を踏まえれば、性同一性障害とトランスジェンダーは「水と油」の関係にある。日本の医療機関は日本精神神経学会が策定する「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」に基づいて行われており、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」の存在もあることから、性同一性障害に関する理解が必要とされている。日本では当事者が「性同一性障害者」と自称してカミングアウトすることは珍しくないが、国際的にみれば日本は特異な状況であると言える。鶴田の研究でも、日本の「正当な当事者とは誰か」をめぐる当事者間の相互行為に関して、次のように指摘している［鶴田, 2009, ページ: 130]。

> 性同一性障害（Gender Identity Disorder: GID）という概念の登場によって、トランスジェンダーとは、単に「SRS までは望まない」人々を名指す、性同一性障害の下位カテゴリーだと、医療者によって定義されるようになったのである。

鶴田の指摘から言えることは、トランスジェンダーから性同一性障害へ「ヒエラルキーの上に上がる」ためには、医師の診断が必要だということである。そして、鶴田は、医師の診断の有無によって、当事者間でカテゴリーの分裂が発生する状況を次のように説明している［鶴田, 2009, ページ: 130-131]。

> ＜正当な性同一性障害である者／正当ではない性同一性障害である者＞というカテゴリー集合のもと、当事者自身の間で、カテゴリー化がなされるようになった。

東も医師の診断が当事者の社会生活に与える影響を、次のように説明している［東, 2018, ページ: 22]。

> 現在でも、「性同一性障害」の診断書がなければ「合理的配慮」の対象にならないという学校や職場は多いのではないでしょうか。

これらの説明から、日本においては、性同一性障害者を含むトランスジェンダー当事者の社会生活には医師の診断の有無が深く関わっていることが理解できる。

また、これに関連して、臨床心理学、性科学の研究者である佐々木掌子は次のように指摘している［佐々木, 2017, ページ: 110］。

ジェンダー・クリニックに来院する人たちのうち、SRS まで実施する当事者は 2 割程度ではないかと言われている。

全てのトランスジェンダー当事者が性別適合手術を望んでいるわけではなく、医師の診察を受診するわけでもない。そして、医師の診察を受診しても、必ずしも性同一性障害と診断されるとは限らない。

また、2018 年 4 月より、日本では性同一性障害の性別適合手術に公的医療保険の適用が開始された［日本経済新聞, 2019］。当事者が医師の診断を求める背景には、保険制度適用の有無も関係があるものと考えられる。

つまり、日本では、医師による性同一性障害との診断は「お墨付き」の役割を果たしていると考えられ、それが一部の当事者を「生きやすく」できるかどうかを左右していると言える。逆に、医師による診察を受診しない当事者や医師の「お墨付き」を得ることができなかった当事者は、社会的な「合理的配慮」の対象に含まれずに「生きづらい」まま取り残される懸念も考えられるだろう。

本稿ではそのような状況を踏まえた上で、「トランスジェンダー」と「性同一性障害者」という用語を分けて使用する。また、「障害」の表記方法については、「障がい」や「障碍」といった表記も頻繁に見られる。しかし、本稿においては、「性同一性障害特例法」という法律名や、「性同一性障害」という表記が文献や新聞記事でも数多く見られることから、「性同一性障害」という表記を用いる。

なお、本研究はトランスジェンダーを中心とする研究であるが、インタビュー調査はインターセクシュアルやア・セクシュアルの当事者にもご協力頂いた。そのため、本稿では、トランスジェンダーのみに該当する事柄を論じる際には「トランスジェンダー」という用語を用い、医学的なカテゴリーである性同一性障害のみに該当する事項を論じる際には「性同一性障害（者）」という用語を用い、トランスジェンダーや性同一性障害（者）以外のセクシュアル・マイノリティの人々も含む場合は、「セクシュアル・マイノリティ」という用語を用いる。

第４項　パスと埋没の違い

パスと埋没は、どのように違うのだろうか。

パス（pass）とは、「トランスジェンダーが、日常的な生活や行動の中で、他人から『自分の望む性別である』と認識されること。MtF で言えば、他人から女性であると思われること」である［米沢, 2003, ページ: 267］。当事者間では、「パス度が高い（低い）」のように用いられている。

さらに、トランスジェンダーや異性装者の人たちが、周囲からまったく気づかれないことを、「完パス（完全にパスすること）」といい、自分の望む性別で完全に社会に溶け込むことを「埋没」と呼ぶ[19]。

ちなみに、パスの反意語は、リード（read）である。リードとは、「他人から『あの人は性別を変えている』と思われ、それによって意図せぬリアクションを招いてしまうこと。MtF で言えば、他人から『女装をしている男性』だと思われてしまうこと」である。

第４節　　性同一性障害の「脱病理化」へ向けた動き

日本の当事者を「生きやすく」している「性同一性障害」という概念であるが、「性同一性障害特例法」は国際的な批判を浴びており、その概念は消滅しつつある。

2013 年、「障害」という語を含む病名と多様な性のあり方が精神疾患として扱われることに対する批判に配慮がなされ、アメリカ精神医学会は『精神障害／疾患の診断・統計マニュアル第 5 版（DSM-5）[20]』の中で、Gender Identity Disorder: GID（性同一性障害）を Gender Dysphoria に変更し、疾患としての語義を薄めた。2014 年、日本精神神経学会も、Gender Dysphoria を「性別違和」と邦訳した。 [GID（性同一性障害）学会, 2018, ページ: 227]

WHO による統計分類である ICD-11[21]は、その予備的草稿である ICD-11 Beta Draft を Web 上に公開した。ICD-11 Beta Draft は DSM-5（2013）との調和が図られる一方で、分類上の位置づけに変更がなされている。ICD-11 Beta Draft において DSM-5 の Gender Dysphoria に相当するのが gender incongruence であるが、精神疾患の大分類から除外され、「性の健康に関する状態」の大分類の中に移動した。つまり、分類上、gender incongruence は精神疾患ではなくなった [WHO, 2018] [厚生労働省, 2018]。

また日本政府は、トランスジェンダーの健康に関する有力な国際組織である「世界トランスジェンダー・ヘルス専門家協会（World Professional Association for Transgender Health: WPATH）から、性同一性障害特例法の改正を求められている。HUMAN RIGHTS WATCH のウェブサイトには、以下のように記述されている [HUMAN RIGHTS WATCH, 2019]。

---

[19] 神庭亮介（2017 年 10 月 14 日）BuzzFeed News 「オネエ売り」はしたくない　元男子・西原さつきの目指す道　「一生バラエティー番組に出られなくてもいい」 https://www.buzzfeed.com/jp/ryosukekamba/satsuki　参照日：2020 年 5 月 27 日

[20] DSM とは、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders の略語です。日本語では、「精神障害の診断・統計マニュアル」と訳されています。米国精神医学会という、アメリカの精神科医の学会が発行しているものです。この学会は、アメリカの精神科医の大きな学会ですが、あくまで民間団体であり、政府機関や公的な団体ではありません［針間, 2019, ページ: 12］。

[21] ICD とは、International Classification of Diseases の略語である［WHO, 2018］。日本語訳は「国際疾病分類」である［OUT JAPAN Co., Ltd., 2018］。

WPATH の書簡は「性別適合の一環として、ホルモン療法、外科的処置、またはその他の医学的介入を希望するトランスジェンダーの人々はいます。それらを望まない人もいます」と指摘した上で、「法的な性別認定プロセスの一環として、医療サービスの利用を強制することは、科学や人権に基づき推奨されません」と述べています。

これらを受けて、日本でも gender incongruence の邦訳が検討されることになったが、2020 年 3 月時点においては正式な和訳は定まっておらず、3 年ほどかけて検討されることになっている [OUT JAPAN Co., Ltd., 2018]。現時点では、「性別不合」との仮訳が厚生労働省によって示されているが、「障害」という語句を排した邦訳が検討されるものと考えられる。日本でもようやく、「脱病理化」「脱医療化」に舵を取ることができるようになった。このことについて、生殖医学の研究者である中塚幹也は「*もちろん、今後も、疾患としての側面を認識して頂くための啓発を継続する必要はあり、医療は重要な活動分野として位置づけられることは変わらない*」[GID（性同一性障害）学会, 2018, ページ: 227]と述べている。

本稿においては、「性別不合」は仮訳であるため使用せず、性別越境者全体を包括する概念、つまり「広義のトランスジェンダー」の意味で「トランスジェンダー」という用語を用いる。

第２章　　研究目的と手法

第１節　　研究目的と手法

第１項　　研究目的　―属性にかかわらず「自分らしく生きやすい」社会を実現するために―

前章をもとに以下の 2 つの研究目的を設定した。

①前章第 1 節において、企業の管理職はトランスジェンダー当事者が抱える課題を認識していながら「抵抗感」を感じているため対処できておらず、当事者の困難は見過ごされたままとなっている現状について述べた。マイノリティ属性を持つかどうかに関わらず、社会に生きる全ての人々が包摂されるための方策を考えることを目的とする。そのために、セクシュアル・マイノリティ当事者が経験した「生きづらさ」に関するインタビュー調査を行う。そして、それを基に当事者にとって「生きづらい社会構造」がどのような仕組みになっているのか、それを打破するためには何をするべきなのかについて考察する。

②前章第 2 節では、海外の先進的な知見を日本に紹介する取り組みや、裁判の事例や新たな法律の立法化といった社会制度に関する研究などを概観した。それに対して、本研究ではセクシュアル・マイノリティ当事者の人生経験や日常生活に関する語りを基に、社会制度によっては解決することが難しい「生きづらさ」に迫り、解決策を考えることに取り組む。

第２項　　研究手法

一口にセクシュアル・マイノリティ当事者と言っても、経験してきた「生きづらさ」は千差万別である。同じ出来事に遭遇しても、その中でどこに苦痛を感じたかも人によって異なる。同じ経験に対して当事者によって異なる反応を示す事例があれば、それは重要な着目点となるだろう。そして、ひとりひとりの当事者について単に履歴書的な人生史を聞ければ足りるのではなく、「この出来事に遭遇した時、このように感じた」という経験に対する意味づけを聞き取ることが重要である。そのため、研究手法は桜井厚 [22]によるライフストーリー[23]研究 [24] [桜井, 2016, ページ: 11]を選択した。

---

[22] 桜井厚は社会学の研究者。専門は、ライフヒストリー／ライフストーリー／オーラルヒストリー研究、差別問題の社会学。

[23] ライフストーリーとは、個人が聞き手とのコミュニケーション過程をとおして過去の自分の人生や自己経験の意味を伝える語りのことである。一方、ライフヒストリーとは、生まれたときから現在の自己に至るまでの人生を、時間の経過にしたがって年代記的に記す（述べる）ものであり、「事実」を伝えるという考え方がともなっている。そのため、ライ

インタビュー調査協力者へのアプローチについては、機縁法（スノーボール・サンプリング法）を選択した。理由は、筆者にはセクシュアル・マイノリティ当事者の知人が数少ないためである。

インタビュー調査は、半構造化インタビュー[25]を選択した。選択した理由は、面接では調査の骨格となるような大まかな質問項目を提示するほうが話しやすくなるが、人によって人生経験や個人的に感じた「生きづらさ」に関しては詳しく語れる部分と語りづらい部分が異なると考えたためである。また、画一的な質問紙調査では筆者（聞き手）とインタビュー調査協力者（話し手）とのラポールを築くことは難しく、対面インタビューで可能となる「生き生きとした語り」を聞くことも難しい。そのため、両者の「柔軟な会話」を通じて、インタビュー調査協力者に負担やストレスをかけることを極力回避しながら、本研究に必要なデータを獲得することを企図した。

インタビュー調査の場所はプライバシーが確保される個室が望ましいため、原則として大学の研究用個室、カラオケボックス、インタビュー調査協力者の職場の会議室などで行った。「周囲に人がいても構わない」という場合のみ、ファミリーレストランや喫茶店などで行った。

また、インタビュー調査では、話しやすくするために筆者が調査したい質問項目をまとめた「インタビューガイド」という書面を、インタビュー調査協力者に提示した。

インタビュー調査の実施に先立ち、2018 年 6 月 18 日に本研究の実施計画、インタビューガイドなどを「研究倫理審査申請書」としてまとめ、東京大学ライフサイエンス研究倫理支援室へ提出した。そして、同月 27 日に東京大学ライフサイエンス委員会倫理審査専門委員会委員長より承認を受けた。

インタビューガイドには、以下 6 つの質問項目を掲載した。

①あなたの誕生から就職活動に至るまでのライフヒストリー（人生史・生活史）について教えて下さい。差し支えない範囲で、お生まれになった年、出身地、ジェンダー、セクシュアリティ、いままでにいくつの職業・職場をご経験なさってきたかについて教えて下さい。

フストーリーがそのままライフヒストリーになるわけではない［桜井，2016，ページ: 9-11］。

[24] ライフストーリー研究とは、インタビューという語り手と聞き手の相互行為をもとに協同で算出される自己と個人的経験についてのオーラルな語りである。一方、ライフヒストリー研究は、まず個人に焦点を合わせた語り（ナラティヴ）を重要な資料のひとつとみなしている点で、ライフストーリー研究と同じに見えるが、その描かれる人生が主に時系列的に編成されている点が異なる［桜井，2016，ページ: 9-11］。

[25] 半構造化インタビューの特長について、心理学と社会学の研究者であるウヴェ・フリックは「*標準化されたインタビューや質問表を用いたときよりも、比較的オープンに組み立てられた（＝回答の自由度の高い）インタビュー状況の中で、インタビュイーのものの見方がより明らかになるとの期待である*」と述べている［フリック，2018，ページ: 180］。

②就職活動の際に直面した困難について教えて下さい。
③就労した労働環境において直面した困難について教えて下さい。
④職場を辞めた経験がございましたら、辞めるに至った経緯や直面した困難について教えて下さい。
⑤あなたの就労に関して、ご家族、医師、学校の教師などから意見や助言を受けた経験があれば教えて下さい。
⑥現在の「労働環境」全般について「この部分がこのように変化したら、労働環境はもっと良くなるだろう」と考えることを教えて下さい（必ずしも、ご自身の経験に基づくことでなくても構いません）。
　また、上記の質問項目以外で「ご自身のジェンダー、セクシュアリティのありかたと労働環境」について経験や考えを教えて下さい。

また、インタビューガイドには載せなかったが、7 つめの質問項目として以下を追加した。

⑦トランスジェンダーコミュニティの現状はどうなっていますか。

数人のインタビュー調査協力者からは「インタビュー調査での質問項目があれば事前に送って欲しい」という依頼があり、筆者からインタビューガイドをメールで送信した。
インタビュー調査の実施時に、倫理的配慮として筆者からインタビュー調査協力者に対して、以下の 3 点について説明を行い、同意を得た。

①インタビュー調査に協力することは任意であり、撤回の自由がある
②個人情報を保護する
③インタビューデータを匿名化した上で研究や分析を行う

インタビュー調査の際には、研究概要、インタビューガイドの内容、倫理遵守について書面を提示して説明を行った。その上で、インタビュー調査協力者となることに同意された方には、「同意書」の記入をお願いした。そして、「研究目的以外には一切使用しない」ことを明言した上で、ボイスレコーダーによる録音をお願いした。録音することについては、インタビュー調査協力者全員の同意を得た。
なお、「インタビュー調査への参加にあたり、書面の記載事項について説明を受け同意したが、同意の是非について再度検討した結果、同意を撤回したい」と考える方のために「同意撤回書」もインタビュー調査協力者全員に手渡した。しかし、事後にこれを提出した方はひとりもいなかった。
インタビュー調査の後、ボイスレコーダーで録音した会話について文字起こし作業を行い、ひとりずつ原稿の形にまとめた。成果物還元（フィードバック）と内容確認のために、

原稿をそれぞれのインタビュー調査協力者へ送付した。その際、筆者から「インタビュー調査では語ったが、研究データとして使用されることを希望しない箇所があればご指摘願いたい」旨を伝え、数人のインタビュー調査協力者から部分的な削除の要請を受けた。その箇所については、データから削除し、本稿では一切記述していない。

第２節　　研究の視点

セクシュアル・マイノリティ当事者はどのような状況で「生きづらさ」を感じているのかについて、インタビュー調査によって明らかにしたい。インタビュー調査協力者の生い立ち、家族関係、学校生活、労働環境など様々な場面ごとに、周囲の非当事者の人々との関わり中で、当事者にとっては「声を上げづらい」ことや非当事者にとっては「当たり前のこと」として見過ごされがちなことは何なのかを調査し、それを解決するためにはどうするべきなのかについて考察したい。

第３節　　本論の構成

本論は、以下の章立てによって構成される。

第 1 章では、国内外においてセクシュアル・マイノリティ当事者の「生きづらさ」に関して今までどのような研究がなされてきたかについて概観した。それらの研究を基に、本研究における問いを整理した。

第 2 章では、本研究の目的、その目的を達成するための手法、「特にどのような状況に着目するのか」という視点、本論文の構成について整理した。

第 3 章では、13 人のインタビュー調査協力者がどのような「生きづらさ」を経験したのかについて、第 2 章で整理した目的と視点に沿って、ひとりずつインタビュー調査での語りをライフストーリーとしてまとめる。

第 4 章では、セクシュアル・マイノリティ当事者を「生きづらく」している原因に迫るべく、第 1 章で立てた「本研究における問い」に対して、第 3 章で記述する 13 人のインタビュー調査協力者の語りを横断的に捉えることによって考察できることを整理する。

第 5 章では、インタビュー調査によって新たに発見できたことを知見としてまとめ、本稿の結論としたい。

第３章　　13 人のセクシュアル・マイノリティ当事者のインタビュー調査

筆者は 2018 年 8 月から 12 月までの間にスノーボール・サンプリング法（機縁法）により、13 名のセクシュアル・マイノリティ当事者にインタビュー調査を行った。

インタビュー後に録音データを文字起こしし、その原稿を 13 名のインタビュー調査協力者へそれぞれフィードバックした。それを全てここに掲載することは、個人情報保護の観点から、また紙面の都合により差し控える。

本章では、13 人のインタビュー調査での語りから、とりわけ、

・ジェンダー、セクシュアリティに起因する「生きづらさ」
・周囲の人々との関わり
・職業との関わり

に焦点を当てながら、13 人の語り手と筆者の相互行為が分かる形でライフストーリーを記述した。

「周囲の人々との関わり」に焦点を当てたのは、第 1 章で記述した「マイノリティをめぐる人権の課題はマイノリティの側に問題があるわけではなく、むしろマジョリティの意識やそれを支える制度の方に問題がある場合がほとんどである」[26]という指摘を受けて、実際に当事者と関わった人々がどのような言葉を発し、どのような態度を取ったのかについて、インタビュー調査協力者の語りを抽出することは本研究にとって有意義だからである。

また、「職業との関わり」に焦点を当てたのは、第 1 章で記述した「*日本における性別違和をもつ人の労働に関する研究はほとんどなされていないため、別途考察が必要*」［武内, 2018, ページ: 13][27]という課題に対して、本研究が応答を試みるためである。

なお、インタビュー調査協力者のライフストーリーの記述にあたっては、実際の語りを損ねないようにするため、「話し言葉」のままとした。そのため、文法的には不自然な箇所があるが、修正していない。ただし、本章では時系列的に記述するため、語りの順序を入れ替えた箇所がある。また、インタビュー時間の長さの違いなどから、各節の長さにも違いがある。

第１節　　A さん

インタビュー日：2018 年 8 月 23 日
インタビュー時間：5 時間 33 分
年齢：50 代

[26] 第 1 章 9 ページ
[27] 第 1 章 10 ページ

A さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業はキリスト教牧師である。インタビューは、A さんが牧会されている教会にて行った。

第１項　A さんの生い立ち

まず、A さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「小さい頃は、どちらかというとおとなしい性格でした。幼稚園の頃は、お人形さんを背負って髪を結っていたりするんですけれども、それは私がそういうふうにしたいと言ったからなんだというふうに言われていて。まあ、親も別にちっちゃいからから、男も女もなく、髪を結ってくれたりもするんですけれども。

小学校に入ってからは、おとなしい子で、みんなの後にくっついて遊ぶような、そんなタイプでした。私は、仮面ライダー1 号、2 号世代なので、みんなで仮面ライダーごっこをして遊ぶんですね。で、仮面ライダーごっこをする時に、まあ、仮面ライダーが一番人気で、その次はショッカーよりは怪人だろうという。仮面ライダーをみんなで決めて、あふれたら今度は怪人決めになってですね、残っちゃうと後はショッカーの皆さんになってしまうんですけれども。お友達がみんな配役を決めているのを、私は待っていまして。もう、私の役は、仮面ライダーが立ち寄るバイク屋に併設されている喫茶店のお姉さん役をやるというふうに自分で決めていましたので、みんなの配役が決まるのを待っていてですね。で、私はいつもエプロンを持っていたので（笑）、配役が決まったところで私はエプロンを締めて、戦いが終わるとみんながお茶を飲みに来るのを待っているという、そういう遊びをしていました。それが、小学校の低学年ですね、1、2 年生くらい。

3 年生になっちゃうと、みんなが『それ（＝喫茶店のお姉さん役：筆者註）、面白いのか？』みたいな話になってきて。だんだん、男と女というのがはっきりし始めますよね。まあ、低学年のうちは、（男か女かということに：筆者註）そんなにこだわらなくてもいいのかみたいにみんな思ってくれていますけれども、だんだん成長するに従って『男か女』っていう、どんどんはっきりしてきますよね。なので、中学年、3、4 年生くらいになると、みんなから変に思われ始めますので。そのあたりからは、ショッカー役で遊ぶということもありました。

で、小学校くらいだと持ち物も女の子の持つようなものを（持とうとしていた：筆者註）。母親は、やはり（私が：筆者註）男の子なので、そういう仮面ライダーの筆入れだとか、そういうものを買ってきてくれるんですけれども、まあ、それも別に嫌いではなかったのですが、自分としては女の子が持つようなかわいいのを持ちたいなというのが（気持ちが：筆者註）ありました。だから、自分でお小遣いを貯めて、下敷きとか、かわいいのを買ってみるというようなことはありましたね。

中学生くらいになると、自分の好きな文房具などはお小遣いで買えるのですが、そうな

ると女の子っぽいものを持つと周りから何か言われるので、なるべくシンプルな飾りのないような物を意識して使っていました。なるべく男物でも女物でもどっちでもないような、誰でも使えるような物を持つように心がけていました。

*　というのは、やっぱり、小学校高学年の頃に、あの頃は赤というのはまだ女の子の色だったんですね。その後、5 レンジャーで赤レンジャーが主役になって、だんだん『赤が男の子でもいい』みたいになってきますけれども、私の頃は『赤は女の子の色』でした。ウチの小学校は、男の子は青い体操服でした。でも、たまたま近所のお姉さんの体操服が小さくなって、もう中学校にも行ったということで、赤い体操服を下さったんです。まだ妹には大きくて、ちょうど私の体操服が破れてしまって、『新しい体操服を買わなきゃ』という時に、近所のお姉さんのお下がりを、母が『それでいいから履いていったら？』みたいに言ってくれた。それは、とても嬉しくて。そのお姉さんのお下がりを自分が着てもいいという状況がとても嬉しかった。（その体操服は：筆者註）赤い色だったんです。で、ウチの小学校は、男の子は青い色だったんです。青いのは着たくなかったので、たまたまお下がりでもらった赤い服を自分が着るチャンスが回ってきて、それが嬉しくて、その後のことを考えずに、『じゃ、着ていこう』と思って、体操の時間に着替えたら、みんなから『何だそれ？　女のじゃねーか』と言われたんです。普通に考えればそこまで思い当たっても良いはずなんですけれども、ちょっと『履いてもいいんだ』というのが嬉しかったので、履いたんですが、お友達からは『女のじゃねーか』って言われて。で、先生も『何だ、それは！　それは女の子のじゃないか』って言われてしまった。男の先生でした（笑）。その時にみんなから言われて、さらに先生からも言われた段階で、『あ、これはしてはいけないことだったんだ』ということにやっと思い至ったんですが、それがすごくショックで」*

――青い体操服、赤い体操服というのは、小学校で指定されたものだったんですか？

「*指定だったんです。公立だったんですけれども、（男の子用、女の子用と：筆者註）分かれていたんですね。＊＊というところは、割と男女ではっきりと分ける地域でして。その後も、高校になると男子校と女子校にはっきり分かれるんですね。共学の高校というのもあるんですけれども、男女で分かれることのほうが多かったですね。そういう小学校での出来事があったので、自分が女の子のものとか、身につけるものでもかわいいものを持ってはいけないのだという思いがあった。中学の頃にはそうと思っていたので、なるべく自分のジェンダーが表れないようなものを選ぶようになっていましたね*」

――ということは、小学校くらいからトランス願望はあった？

「*そうですね。妹がいたので、小学校の時は時々妹の服を借りて着ていたりしていました*」

――それについては、ご両親から何か言われたことはありましたか？

「えーとね、*小さい時はよかったんですけれども、高学年になってくると母親からはよく『変なことやめなさい』と言われるようになりました。最初はそんなに悪いことをしているとか否定的なイメージはなくて、『着たいから借りて着た』みたいなところだったんですけれども、女の子のものだということはもちろん分かっていましたし。でも、母親から『変なことやめなさい』と言われるようになったので、隠しますよね。なので、お小遣いで女の子のスカートなどを買いに行くのですが、今考えると相当怪しい子供ですけれども、当時は『着たい』という思いで、買いに行って身につけるということをコソコソとしていましたね。で、それも見つかるので、『変なことやめなさい』ということは母からは言われましたね。*

でも、不思議なんですけど、母親に聞いても『そんなことあったかしら？』と言うんですね。覚えていないんです」

――いいお母様ですね（笑）。

「*あまり意識して怒っていたわけじゃないのかな（笑）。私の中では『強く怒られた』という感じが強く残っているのですけれども、母の中ではそんなに否定的に言った覚えはないって言うんですよね*」

――「やっぱり私の育て方が悪かったのかしら？」みたいな自責の念は持っていらっしゃらない？

「*自責の念は持っていらっしゃいません（笑）。『そんなこと言ったかしら』と言うので。でも、私の中では『変なことやめなさい』と言われた記憶が強く残っていて。そんなに強い口調ではなかったのかなと今になってみると思いますが、当時の私にとっては『すごく変なこと』というのが頭に残っています。*

中学の頃は、ワンピースとか女の子の服を着ていました。中学校の頃に初恋をしました。女の子、彼女ができた。そのへんでは、自分ってどういう状況なのか分からなかったのですが、まあ、自分は男だし女の子を好きになるのは、そうなんだろうなと。ただ、自分としては女の子っぽい立ち振る舞いをするのが好きではありましたけれども、中学校で女の子が好きになって、自分のことは男性だと分かっていたので、そういう状況なんだろうなと。

ただ、中学 2 年の時に好きになったからお付き合いを始めるのですが、その女の子といつも一緒にいたかというとそういう訳ではなくて。むしろ、仲のいい男の子のお友達といつもいた感じですね。ちょっと体格が良くて頼り甲斐のあるお友達だったんです。彼女と

いても楽しかったんですけれども、そのお友達といる時の方が楽しかった。で、後から考えると、私はその男の子のことが好きだったんじゃないかと思うのですが、その時は好きな女の子、彼女がいましたので、自分が男の子を好きになるとは思っていなかったので、それを恋愛とは認識しなかったんですけれども。

その初恋の彼女も、相性が良かったり話のウマが合ったり。デートも、映画を見て、ファーストフードで食べて、みたいな感じのことでしたね」

――地元で女物の服を買おうとすると、知り合いにばったり遭ってしまったり、買うところを見られてしまったりという心配はなかったですか？

「知り合いのことまでは考えなかったですが、女性ものの服を買うということについては、すごく抵抗があって。小学校の頃とかは、あまりそういうことは考えなかったんですけれども、流石に中、高となってくると、人の目が気になるようになってきましたけれども、そうですね、郊外の大き目の衣料品店に行って、そういう意味ではそうか、なるべく知らない、ちょっと離れたところで買うということはありましたね。で、やっぱり男の子が女の子の服を買うと、店員さんが『ヒソヒソヒソ』というのはあるので、やっぱりそうだよねとは思いながら、でもやっぱり買いたいという思いが強いものですから。今みたいにインターネットとかがあれば良かったんですけれども、まだそんな時代じゃありませんでしたので。なので、なるべく知らない、ちょっと遠めのところに行って買うということはありましたね」

――お父様は A さんが女性ものの服を着ることについては、何か口出しされたりすることはありましたか？

「知っていたのか知らなかったのか、母親がそれを言っていたのかも分からないのですけれども、とても怖い父親でした。父親はたぶん私が女の子の服を着ていたりすることは知らなかったのかもしれないですね。ただ、私はよく泣いたので、『男のくせに泣くな！』とガツンが殴られて、そうすると更に泣きますね。そういうことはありました。

たぶん、そういうのもあって、私は小さい頃から柔道と合気道を習わされていました。柔道のほうはすぐに止めちゃったんですけれども、合気道のほうは由美かおるさんが師範としていらしたんですね。水戸黄門に出てくる忍者役の人で、なぜか水戸黄門に必要もないのに由美かおるさんの入浴シーンが出てきたりして、よく放映される方だったんですけれども、その方も合気道の師範で大会があると、由美かおるさんが模範演舞をされる。それがとっても綺麗で。私は、柔道のほうはすぐに止めてしまいましたけれども、合気道のほうは由美師範のすごい綺麗な演舞を見たせいで、『あ～、ステキ！』と思って、それで憧れが強くなって、大学まで続けるんですけれども（笑）。

たぶん武道をさせられていたのは、父の中では『男らしく育てたい』みたいなのはあったのかもしれないですね。私の中では、由美かおる先生への憧れ、『キレイ』というのがあって、『いつかあんなふうになれるといいな』と思っていました。父から身体を鍛えることについてはすごく一生懸命言われていた。私は割と体格がいいですが、それはちょっと後悔があります。まあ、逆らえませんでしたので。

それに、中学か高校くらいの頃に、一時期『男らしくしたほうがいいのかな』と思った時がありました。父親から『スポーツはするように』と言われていたこともあったので、なんとなく鍛えてしまった。合気道に加えて、基本的なトレーニングもやっていた。ウチの父は、ボディビルをやっていた人でムキムキな体なんです。だから、腕立て伏せ、懸垂などの基本的なトレーニングもちゃんとやるように言われていた。そんなことをやってしまったので、肩幅が広がってしまった。今思うと、あの時何もしなければよかったと思う。なんとなく『男らしく鍛えたら男らしくなるのかな』みたいなことを思ってみた。そんなことはなかったんですけれども（笑）。

私は、女の子が好きという認識があって、高校、大学の頃も、女性とお付き合いをすることがあった。私は感情を素直に表現してしまうので、そのあたりが『男らしくない』と言われて、フラれることがありましたね」

――今のご職業は牧師さんですが、キリスト教との出会いは？

「キリスト教との出会いは、高校の夏休みの宿題でした。夏休みの宿題で「夏休みに教会に行きなさい」というのがありました。ミッション系の学校ならではの宿題でした。それで、近くの知っている教会というのは、自分が卒園した幼稚園を運営している教会だった。そこに、近所の同じ高校に通っていた友達と一緒に『じゃ、宿題だから行こうか』というふうになって行き始めた。それで、教会に行ってみたところ、教会には若者がいませんでしたので、大歓迎された」

――あるあるですね！（笑）

「あるあるですね（笑）。たまたま礼拝の後には食事を一緒にする教会でした。そこで、たくさんお腹いっぱいになるほど食べることができて、みんなで『ここはいいところだ！　美味しいものがお腹いっぱい食べられて！』ということになって（笑）、なんとなくポツポツその後も時々教会に遊びに行くようになったんです。毎週というほどではなく、半年とか3か月に一度とか、教会に顔を出しに行くようになった。それが、高校 1 年の時でした。最初は 3 人で行っていたんですけれども、＊＊君という子と 2 人で時々遊びに行くようになった。それで、高校 2 年の途中で、父が転勤になった。＊＊に引っ越すことになった。それに一緒にくっついて行こうと思って、高校の転学試験を受けたのですが、合格できなか

った。仕方ないから『オマエは＊＊に居ろ』ということになった。それで、学校の近くに下宿をするという選択になるんですね。下宿屋さんがたくさんありました。一人暮らしとは違って、下宿の家族がいて、各部屋があって、ご飯を一緒に食べるんです。

で、それまでは、コソコソと隠れてお化粧をしていましたけれども、下宿になりましたので自分の道具を揃えることができるようになりまして。まあ、それでも下宿の男の子ばかりなので大っぴらには置いておけませんが、お部屋に置いておくことができるようになった。で、割とまだ当時はお化粧をちゃんとしなくても若かったのでなんとかなったんですね（笑）。夜は、こっそりと女装してお出かけするような機会が増えて、私的にはちょっと良かったんです」

――繁華街にあるようなお店に女装して出かける？

「割と郊外だったので、そばにあるのはジャスコだけだったんです。ジャスコのマクドナルドに女装して行ってみたり。まあ、それはそれで楽しかったんですけれども。

下宿しているので、それなりに『悪いこと』も覚えまして（笑）、皆さんタバコを吸ったりお酒を飲んだりすると」

――まだ未成年ですよね？

「はい（笑）。そういうのがあって、私もその一員になってしまった。それで、ある時、学校からガサ入れがありまして（笑）。どっかから情報が漏れちゃったんですね。学校のほうは本気で取り締まりをして、半分くらいの学生が停学になったという事件が起こった。それで、みんなそれぞれ下宿を離れて家に帰ったりしたのですが、私は＊＊まで遠かったということもあったので、家に帰るということにはならずに、私は停学の間＊＊先生の家に行くということになった」

――それは居心地悪くなかったですか？

「居心地悪かったですけれども、どうしようもないですね。保護者の代わりに＊＊先生が私の身元を引き受けて下さった。そして、この方がクリスチャンだった。ミッションスクールなので、クリスチャン率は高かったんですけれども。なんと、停学期間中、毎朝毎晩聖書を一緒に読んで、『これについてはどう思うか？』みたいなタイムが設けられた。一週間だったのですが、毎朝毎晩それをやっていた。その時に、たぶん＊＊先生も『物事を考えさせよう』と考えて下さったのだと思いますが、いろんな問いかけをして下さる中で、キリスト教信仰について、イエス・キリストについてお話を聞いた。それが、いつだったのかについては記憶にないのですが、＊＊先生のお話がストンと心に落ちる感覚があった。

たまに冷やかしで教会には行っていましたが、そこで信仰を持つという状況になるんですね。

たぶん高校 3 年の夏頃に洗礼を受けようと思った。それから、停学が終わって、教会に行って、＊＊牧師に『先生、私、洗礼を受けます』と言った。そこから半年くらい勉強して、その年の 12 月 25 日に洗礼を受けた」

――ということは、酒とタバコのおかげでキリスト教に辿り着いた（笑）？

「*はい（笑)。酒とタバコについては、それほど罪悪感なくやっていた。それで、停学になって、＊＊先生からいろいろと問いかけをされていく中で、未成年でそういうことをしてはいけないと言われている中で、周りの雰囲気で流されてしまう私っていうのはこれからどうやって生きていけばいいのかということについて考えた。それに、ひとつやっぱり、自分は女装することについてはやっぱり罪悪感みたいなものをどこかに持っていたものですから。中高生の時は、女装したいけれども、女装した後メイクダウンするとすごい罪悪感に見舞われるんですね。なんか、『またやっちゃった』みたいな感じがあった。今なら『そんなこと思わなくていいよ』と自分に言ってあげますけれども、当時はそういう罪悪感があって、女装道具は買いますが、やっぱり『変なことしちゃいけない』という頭があったものですから、捨てるんですね。でも、しばらくすると『やっぱりお化粧してみたい』みたいな気持ちになってまた購入する。そういう繰り返しがあったものですから、なんかすごく『私は意志が弱い』と思っていて。やめなきゃいけないと思っているのにやめられない。やめられないから困った。その時は、『なんて意志が弱いんだろう』と思っていましたね*」

――大学以降のお話をお願いします。

「*私は子供の頃から合気道をずっとやっていて、高校でも合気道部だった。で、大学に入っても、最初は合気道部に顔を出したんです。ところが、大学の合気道部に入ったところ、『髪は、坊主にしろ』と言われた。で、『それはちょっと無理です』という話をして。『このままでもそんなに問題ないじゃないですか』といろいろやって、とりあえず通っていたんですけれども、やはり『切らなきゃダメだ！』みたいなことになった。それで、私は『髪は切れません。じゃあ、部活を辞めます』と言って、合気道部を辞めた。由美かおる先生に対する憧れはあったんですけれども。で、高校の時に、合気道の初段を持っていまして、小学校からずっとやっていますのでね。ところが、大学の合気道部では、『黒帯は締めさせない。1 年生だから白帯を締めろ』みたいなこともあって、『なんだ、それは？』みたいな出来事も相まって、一番イヤだったのは『髪の毛を切れ！』と言われたことですが、『髪の毛は絶対切れないので、辞めます』と言った。その後、暫く講義が終わった後に、合気道*

部の先輩たちが待ち伏せしていて嫌がらせをされた。『退部を認めない。来い』と言うんです。でも、私は『ちゃんと退部届を出したし、髪なんか絶対切れませんから、もう行きませんよ』と言った。暫く、そんなことがあったけれど、退部しまして。

その後、どうしようかなと思っていた時に、教会の＊＊地区青年会という集まりがあって、その集まりの中で知っていた先輩に『学校の聖歌隊というのがあるよ。学校の礼拝の中で歌うのだけれど、来ない？　とんかつおごってあげるから』と言われ、『じゃあ、とんかつおごってもらえるなら行きますよ』みたいな軽いノリで、聖歌隊に所属するようになるんですね。何しようかなと思っていた時に、声をかけてもらった。地区の青年会で親しくして下さった方だったし、歌も興味がなかったわけではないので、聖歌隊に入ることにしました」

――聖歌隊に入ったのは、大学何年くらい？

「*合気道部のすったもんだがあったのは、1 年に入って本当に間もなくの頃だったので、聖歌隊に入ったのもまだ 1 学期中だったと思います。そして、大学の聖歌隊の後輩に＊＊さんという方がいまして、その方は以前から私を好いていて下さったようでして、お付き合いをするようになった。この方が、現在の私のパートナーです。それで、私は＊＊さんに『私は女装するんだけど』と言いましたら、『気持ち悪い』とかそんなことは言わずに、デートの時にも私が女装して一緒に歩くというのが大丈夫だったんです。私は『あ、大丈夫な人もいるのか』と思いました。それまでにお付き合いをした人は、女装だとか女っぽいとか、そういう状態だと『ごめんなさい』と言われてきたので、『ああ良かった、女装しても大丈夫なのか』と思った。大学 4 年生の頃に、＊＊さんと出会った。*

当時、指紋押捺拒否という出来事があった。カトリックの神父や在日大韓教会の方が指紋押捺拒否をして、ハンガーストライキをやっていた。それで、ハンガーストライキの時に＊＊さんという在日で指紋押捺拒否をされている方のお話を聞いた経験も、自分の歩みを大きく変えるきっかけになった。そのお話というのは、『自分たちのように、社会の中で少数者、マイノリティというのは、声を上げないと『いないもの』にされてしまう』というお話を聞いていく中で、『他の人と違うからといって、他の人と同じようにしなければならないというのはおかしいのではないか？』というお話もあった。『他の人と違うから、それを他の人と同様に合わせなければならないというのは違う』というのが、すごく自分の心に響いたんです。ですから、『少数である』ということと『我慢しなければならない』ということは、つながってこない。自分が生きているということを、こうやって主張しなければならないということに、心が動かされた。

ちなみに、（インタビューでは：筆者註）聞かれていないことですが、私の家系は、白系ロシアの家系です。私の曽祖父がロシア人だった。昔、ロシア革命があった時に、ロシアから逃れてきた。私の祖母がハーフ、私の父がクォーターだった。祖母は目が青かったせ

いで、いじめられたらしい。だから、『そのような家系だということを言わない』というのが、家族の中で暗黙の了解だったみたいです。

在日の人たちが、『自分たちの民族は少数かもしれないけれど、だからといって我慢しなければならないということではない』というところに、『あ！　そうなんだ！』と共感できた。『少数の人たちを大切にする』という教会の姿勢は、私もやはり大切だと思った。その中で、大学2年くらいから牧師になるということについて考え始めていた。

それで、大学 3 年の時から、キリスト教学科の先生にお願いして、正規の聴講生ではなく、モグリで授業に出させてもらった。法学部を 4 年で卒業し、キリスト教学科には 3 年生として編入し、その後 2 年で卒業しようというつもりでいた。割と興味深い勉強もたくさんあって面白くなってきて、牧師になることについてだんだんと気持ちが固まっていった。

そして、＊＊年4月に、大学卒業と同時に＊＊にある神学校に入学しました。しかし、3年間いたのですが、卒業間際に退学しました」

――どうしてですか？

「事件がありまして。＊＊神学校では 2 年次に臨床牧会訓練というのがあります。神学校での学びのうち、ひとつの大きなシンボル的な機会です。私が1年生の時に、2年生の先輩たちが臨床牧会訓練に行っていた。その中で、また在日大韓基督教会の方なのですが、その訓練の中の振り返りで、牧師さんが指導教授でいらしていたのですが、その方が在日大韓基督教会の神学生の方への振り返りの中で、これがね、ちょっと、どうも前後の文脈がよく分からなくて難しいのですが、『あなたも日本人じゃないのか？』と言ったらしいんです。その神学生は在日として自分たちが生きていることの苦しさとか意味について発表していたのですが、それへの応答で、指導教授が『あなたも日本人じゃないのか？』という、ちょっとよく理解できない言葉をかけた。それに対して、在日の神学生は『私は日本人じゃない、在日として生きている苦しさについて話しているのに、なぜそれに対して『日本人じゃないか？』という応答があるのか？』という状況が起きた。その後、それに対するきちんとした応答が教授陣からなされなかったために、訓練に来ていた学生たちの中から『これは大変問題じゃないのか？　やはり、どこかで教授たちの中に民族差別であるとか、何らかの問題があるのではないか？』という意見が出て、学生たちから教授陣へ『それについて考えてほしい』というような、今度は反対にお願いを出したが、そこにもうまく応答がなかった。そこで、学生たちは『この状況の中で訓練をすることは難しい』ということで、訓練から引き上げてきてしまった」

――学生たちが偉いですね。

「ええ。『もうこのような状況では続けらません』という形で帰ってきた。ところが、『何かが起こった』ということは私たち在学生にも分かったのですが、聞いてはいけないようなピリピリした雰囲気があった。それで、聞けずに『何か起きたんだよね？』みたいなことだけで済ませてしまっていたんですね。で、暫く経って、その訓練に参加していた先輩から『実はこういうことが起きた』という報告を受けるのですが、じゃあ、私たちは何かすることになったかというと、ならなかったんですね。『ふ～ん、そんなことがあったんですね』みたいに済ませてしまったんですね。

それで、私が2年生になる直前くらいに、その訓練に参加されていた在日の神学生から、『主催者である＊＊神学校に対して再度どういうことだったのか説明して欲しいし、起きた出来事を検証して、それについての応答が欲しい』という要望が来た。それと同時に、学生たちに対しても、『あなたたちは報告を受けたのでしょう。にもかかわらず、なぜそれに対する応答がなかったのか？』という問いかけをされた。

私たちは、自分たちにも関係のあることだという自覚が全くなかった。ところが、問いかけとしては『主にファカルティーが起こした問題ではあるが、学生もそのファカルティーから学ぶ立場にあるのに、なぜ起きた出来事に対して怒るということがないのか。言い方としては、『私は足を踏まれて『痛い』と言っている。それなのに、あなたたちはその足をどけようともせずに、その上で聖書を読んでいるのですよ』と言われた。これには、私はすごく堪え、『ハッ』と思わされた。

そもそも私が神学校に入学しようと思ったきっかけが、さっき言ったハンガーストライキをされていた在日の＊＊さんのお話を聞いて、その時に『牧師に』と考え始めたのですけれども、神学校に入学してからの私にとっては勉強のほうが面白かったんですね。私は当時、机の上の勉強が面白くて、学生寮からほとんど出なかったんです。その時になって初めて『人の足を踏みながら『痛い』と言っているのにどけもせずに聖書を読んでいるあなたたちは一体何なんですか？』と言われたことに、大きなショックを受けた。私がやってきたことは何だったのだろう？　かつて、在日の＊＊さんの話に心を動かされたのに、机上の勉強が楽しくなって、満足というか、そこにだけ気を取られてしまっていた。そればかりだった。人との出会いなどには目を向けずに、勉強ばかりしていた。

その問いかけを受けて、学生会で話し合って、『遅きに失したけれども、今から人に出会いに行きましょう』ということになった。神学校は3学期制なのですが、3学期はテーマを決めて、通常のカリキュラムではないことに取り組める時期だった。3学期になるより少し前だったのですが、学生たちから教授陣に対して『授業を中断させて欲しい』とお願いをしたところ、教授会も『ああ、そういう問いかけがあったのか。それについては本当にその通りだ』ということで、授業は中断となった。『とにかく何らかの課題のある現場に行き、いろんなことを学ぶ機会にしましょう』となり、ちょっと、特別学期（＝3 学期：筆者註）になる前だったので、『授業中断』ということが、どういうことなのかという説明を各地のいろんな教会に行って、教授陣と一緒に学生が行ってしなければならなくなった。その時、

私はたまたま＊＊に来ることになった。その時に、今でも親しくさせて頂いている方々と出会うことになりました。

授業を中断した中で、在日、アイヌ、被部落差別の問題など、とにかくいろんな、なんでしょうね、当時の言い方では『小さくされている人たち』という課題を分かち合うなかで、セクシュアル・マイノリティのこともひとつの課題として挙げられた。その情報収集をしている中で、ILGA（International Lesbian, Gay, Bisexual, Trans and Intersex Association）の国際大会というものがあった。で、そこの分科会の中に、『キリスト者ゲイの集まりを持とう』みたいな呼びかけをされている方がいた。フェミニズムをしている人から紹介されて、セクシュアル・マイノリティの『あの人はゲイで』みたいな話があって、その人から『こんなのがあるんだよ』みたいなことがあってチラシをもらった。とにかく課題にはどんなことがあるのかという情報収集をしていたんですけれども、その時にフェミニズム、女性差別問題という中で情報収集をしている中で、ゲイの方と出会っていくんです。で、その頃までアドンとかああいう雑誌は読んでいたのですけれども、あまりそれが人権問題とか、そういう認識は私の中ではなくて。で、初めて、なんだろうな、プライドを持って同性愛ということの課題について活動している人たちと出会うんですね。私はそれまで、自分の中の女性性みたいなものが、なんかこう『間違っているもの』、身体は男なのに自分の中に女っぽい部分があることが良くないことなんだ。恥ずかしいことで、むしろ、なんていうか男らしくしなきゃいけないみたいな思いがあったのに対して、ゲイの人たち、自分とはセクシュアリティの違う人たちですけれども、同性愛の方たちがそのことを誇りにして、そういう同性愛のことについて発信をしているということを、その時初めて私は知ったんですね。もっとちゃんとアドンとか読んでいれば、そういうことを書いてあったのを後から気がつくんですが。割とちゃんとプライドのことも書いてあったんだという。その後にも読み返してみて、気づいていって。で、まだやっぱりね、当時は同性愛の人たちのプライドという感じが強くて、その頃まだ、トランスジェンダーとかっていう言葉がまだあまり出てきていなかったんですね。出てきていたんでしょうけれども、まだ。その後、94 年くらいから『性同一性障害』っていうことが話題になってくるんですけれども、まだインターネットもまだそんなになかったし、パソコン通信みたいなのが始まったくらいの頃だったので、まだ全然私の手元にはトランスジェンダーに関する情報というのがなかったんですよ。

で、やっとそのゲイの方たちとの出会いを通して、自分の状況も全く変だとか否定されるのではなくて、もしかしたら、自分の状況を肯定できる可能性があるのかなっていうのを、ゲイの人たちとの出会いの中で、ちょっと考え始めるんですね。で、ちょうどその事件の後にですね、当時は全然知らなかったんですが、ゲイの神学生が入学してきまして、後輩に。私が 3 年の時ですのでその事件の後なんですけれども。その当時は知らなかったんです、彼がゲイだということをね。ただ、私が同性愛とかセクシュアル・マイノリティの人権ということを言い始めていたことに対して、その人が保護してくれまして。ちょう

ど世界的には同性婚や同性愛の司祭の按手などを始めた頃で、問題になり始めていた時期なんですね。なので、ちょうど、ふたりでいろんな情報収集をして。で、寮のその人の部屋の上に、『同性愛問題を考えるキリスト者の集まりを目指して』みたいなことを書いていたら、教授から『なんだこれは』みたいな、ちょっとこう、なんて言うんですか、揶揄するじゃないですけれども」

――なんか珍しい、「目をつけられた」みたいな感じはありました？

「*そうですね、『なんでこんなことするんだよ？』みたいなことがちょっとあったりして。『いやいや、これは課題じゃないですか』みたいなことを言ったけれども、ちょっと真面目には取り合ってもらえないような、そんな状況でしたね。ただ、まあ、可能性としては同性愛の人たちがプライドを持って自分たちのことを語っていけるように、もしかしたら、私のような、当時トランスジェンダーという言葉を知らなかったものですから*」

――A さんがトランスジェンダーという言葉を知らなかった？

「*知らなかったんです*」

――「性同一性障害」という言葉が生まれたのは、1994 年でしたっけ？　埼玉医科大学のニュースがあってから。

「*そうなんです。それまで、そういう女装バーには行ってましたので、女装する人がいるということは知っていたんですけれども、あの、なんていうんですかね、トランスジェンダーという人たちは、ちょっと世界が違っていたんですね。*

当時、エリザベス会館というのが＊＊にありまして、今は引っ越したらしいんですけど。バーではなくて、お化粧してもらって、みんなでお茶を飲みながらお話をして、あとはセルフ写真を撮ってもらってそれを飾ってもらうという、とっても不思議な空間なんですけれども（笑）」

――聞いている限り、とっても平和な感じがします。

「*そうですね。絶対外出などはできなくて、そのお部屋の中だけで完結するクラブみたいなものなんですね。で、それこそ、＊＊にいる頃に、女装雑誌が一時期出たことがあって、それをたまたま本屋さんで目にして、行ったり来たりしながら、『あ！　どうしようどうしよう！』と思って、やっと何時間か目に、とても怪しい雰囲気で他の本と合わせてやっと買って。それで、読んだ中の広告にエリザベス会館というのが載っていて。そこに載って*

いるコマーシャルを見て、『こんなところあるんだ！』と思って。で、夜行列車に乗ってですね、青春 18 きっぷで（笑）。それで、メイクしてもらおうと思ってですね、行くんですけれども、入る勇気がなくて、ずっとその前でブラブラして。で、何時間かして、大きなボストンバッグを持ったオジサンがいて、ちょっと動作がゆっくりな人だったので『あ～！』と思って、『スミマセン、初めてなんですけれども』って言って、『じゃあ一緒に入ろう』って言って、入ってもらって行って、お化粧してもらったのが、大学のたぶん 4 年生の時かな」

――その時が、女装クラブに行ったのは初めて？

「*初めてですね。そこで出会った人たちに新宿二丁目にある、あの、スワンの、何だっけな？　女装の人たちが集まってくるお店なんです。もう今はないですけれども。*

なので、女装する人がいるということは知っていたのですけれど、なんかその、トランスジェンダーというか、ニューハーフの人たちがいるというのは知っていましたけれども、ちょっと世界がまた別だったんですね。女装する人は圧倒的に趣味でやる人が多くて、ニューハーフっていうともう体もいじって職業にされている方たちみたいなイメージで、見かけることはあっても親しく交わるということはなかったんですね。なもんですから、トランスジェンダーみたいなそういう生き方とかも全然知らなくて。

ゲイの方もいらっしゃいますけれども。ニューハーフバーで働いている人たちは、またちょっと女装の世界とは違うコミュニティだったんですね。で、接点があまりなくて。なので、その、トランスジェンダーというふうな概念なんか全然なかったものですから。そこでプライドみたいなことは、当時既にアメリカとかでは、トランスジェンダーの人たちによって語られていたんでしょうけれども、私には全然当時は認識がなくて。

なので、ゲイの人たちと出会った中で、自分のような状況でも、それを『間違った変なこと』ではなくて、こういう私でも認めていける可能性があるんじゃないのかということを考えることになっていくのは、そのへんからなんですね」

――なるほど。自己肯定の始まりですね。

「*始まりですね。ですから、フェミニズムをやっている人たちから紹介された人からたまたまチラシをもらって、あっ、そう、だから、ゲイの人たちがプライドの運動をされているというのもそうでしたし、その中にもキリスト教の人たちがいるっていうふうなのはもっと衝撃的でしたよ。一般的に『同性愛は罪』みたいなのが普通に言われていたものですから、その中で『クリスチャン・ゲイの集まりを！』という呼びかけをされていたことには、『えっ？！』とびっくりはしたんですけれども、じゃ、連絡を取ったかと言うと、そこまではちょっと。その時なぜかしないでしまったんですね。*

で、そんなことがあってですね、授業を中断したのもあったものですから、私たちは進級できなかったんです（笑）。ただ、まあ授業はするので、仮進級、準2年生みたいな状況で、授業をするようになりますね。で、まあ、どうしてもそれからは、それまで1年生の時は本当に勉強が楽しくて仕方なかったんですけれども、そこからはちょっとつまずき始めまして、『これって本当にそうなのかなぁ？』っていうようなつまずきがずいぶん出てきてですね。で、私、牧師になりたいと思って、最初の気持ちでは『少数の人と』という視点を持って入学したはずなのに、あっという間にそんなことは忘れてしまっていたということで。そんな私だと牧師になったとしても、やっぱりこう、人に心を寄せて、困っている人に心を寄せていくなんてできないんじゃないかなと思い始めたのもあって、暫く休学をして、働きながら考えてみたいなと思い始めるんですね。私は＊＊教区の神学生でしたので、『休学願』というものを出すんですけれども、受理されなくてですね」

――なぜですか？

「*『みんな、あなたが早く帰ってきて、早く立派な聖職者になってくれることを待っているんだよ！　だから、とにかく今は勉強しなさい！　そういう考えることは、帰ってきてからたくさんできるから』と言うので、『はい、分かりました』となって。なんとなく『そうか、みんな待っていてくれているんだな』と思って、私もそこでは『早く帰らなきゃ』みたいなことを思って、『分かりました』みたいなことを言って勉強し始めるんですけれども、やっぱり基本的に納得していないので」*

――なんか、心がモヤモヤしている感じ？

「*モヤモヤしてですね。ちょうど3年になる時に、一緒に勉強していた学生がひとり、退学しちゃうんです。『ボクはもう牧師はできない』という、そのへんもあって。ですから、3年になる前に一回休学のお願いをして、真ん中でもう一回お願いをするけど、やっぱりちょっと勉強しているというのは違うなと思って、その後にもう一回（休学届を：筆者註）出すんですね。合計3回出すんです。その時に、『とにかく教区としてはあなたが勉強するために送り出しているのだから、それを全うして帰ってこれないと言うならば、もう教区をやめて自分で勝手にやるか、それともちゃんと勉強して戻ってくるか、どっちかにせい！』って言われてですね。で、『申し訳ないですけれども、今の状況でこのまま勉強を続けて、自分で納得して働き始めるというのは無理です。じゃあ、もうやめます』という形で、それが、それこそ卒業試験のちょっと前のことだったんです。ですので、私は卒業試験を受けなかったんですね。*

で、どうしようかなと思っている中で、身の振り方を考えている時に、ちょうど＊＊という、もともとは売買春の問題で始まったキリスト教の団体ですけれども、そこがやって

いる『＊＊』という外国人女性労働者の避難シェルターをやっているんですね。

で、2年生の実習の時に、私はそこでの実習を希望して、実習させてもらった後にもボランティアとして出入りをさせてもらうようになっていたんですね。で、基本的に女性の施設なので、『男のすることは力仕事だ』みたいな(笑)、『それは変じゃないですか！（笑)』みたいな、そういうやりとりができるところだったので、割と居やすくて。で、入管に行く時は私が一緒について行ったりして、すごく＊＊での活動は自分の中ではしっくりきていたものですから。『神学校をやめて＊＊で働けないか？』という相談を＊＊のディレクターとしたところ、『最初はパートタイムみたいな形だったら雇えるよ。そうしたら、＊＊初めての男性スタッフだねぇ』みたいな話もあって(笑)。で、じゃあ、週の半分くらいはそこでお願いしますということでお願いをして、もう半分なにかしないといけないし、住むところも探さないといけないという時に、＊＊というひきこもりや不登校の学生、子供たちに農業をする中でもう一度元気になってもらおうみたいな場所があったんですね。で、そこの事務所が清掃業を日常的には営んでいて、そこの事務所で住み込みのスタッフを探していたんです。で、『週の半分だけ掃除の仕事をして住み込むというのはどうですか？』と聞いたら、『それでもいいよ』と言われて、そこで住み込みをさせてもらって、週3回お掃除、週3回は＊＊に行くみたいな、その後の状況が見えてくるんですね。

で、『それでいきます！』ということに決めたところで、＊＊から電話が入るんですね」

――せっかく2つの仕事を掛け持ちでやろうと定まろうとしていた時に？

「*もう、両方に『お願いします』と言って、『4月から引っ越します』と＊＊には言って。その矢先に＊＊から電話が入りまして、そこの総主事で、後に私の上司になります＊＊司祭という人が電話をかけてきまして、『お前、行くところないんだって？』って言われて」*

――あ～！　親心ですね～！

「*で(笑)、『いや、なんとか、行くところは見つけたんです』って話をしたら、『ウチに来ないか？』って言われたんですね。で、『いろんな小さくされている人たちと一緒に生きていくということを課題としているんだ』ということを聞いて、『＊＊の中でもう一回働くということを考えてみない？』と言われて。それでちょっと考えて。＊＊のことも＊＊の働きにも心が動いていたんですけれども、＊＊の中で働くということのほうにその時は心が動いてですね、＊＊と＊＊のほうに『ごめんなさい』と言った。『え～っ！』と言われました。*

それで＊＊に来るということになるんですね。それが、卒業の時ですので＊＊年の3月に退学をして、4月の途中からですね、＊＊センターにスタッフとして」

第２項　就職後　―無理解からくる発言に傷つけられる―

Ａさんは、キリスト教団体のスタッフとして就職した。就職の際は、ジェンダー違和による軋轢が生じたわけではなく、逆に団体のほうから誘いを受け、雇用された。

Ａさんは社会人となり、自活しながら交友関係を広げていった。また、当時は埼玉医科大学による性別適合手術が行われた時期でもあり、情報を得ながら女性ホルモンの投与を開始した。しかし、社会生活の中で、ジェンダーについての無理解から生じる発言に傷つけられる経験をしてしまった。その部分の語りは、以下の通りである。

「*それで、社会人になってから＊＊に来まして。私は、この頃はまだトランスしていなかったので、そんなに就職活動で直面した困難とかっていうことはなかったですけどね。まあ、呼んでもらってましたし*」

――そのころは、まだ外見上は男性だったんですか？

「*そうですね。服装は、私は女性もののパンツなどを履いていたりしましたけれども、まあ、男ですね。よく『なんで女物を着るの？』みたいなことは言われていましたけれども、『ピッタリくるからです』みたいな言い方をしていました。で、それまでは、お金もなかったので女装バーとかは行っていませんでしたけれども、＊＊に来てからは女装のお店に、お金たんまりはなかったですけれども(笑)、それなりには給料をもらい始めたのでちょくちょく行くようになりますね。*

で、＊＊に来て間もなく『性同一性障害』というニュースが賑わいまして。で、『え～っ！』ということで。94 年に埼玉医大の最初のニュースが、私の中では駆け巡った。で、女装バーなんかでも話題に出て、『女性だったけれど男になる手術だ』みたいな話を聞いて、『え～っ？！』と思ってですね」

――じゃあ、20 歳過ぎるくらいまで女性の身体に変えたいというふうにはあまり考えていなかったんですか？

「*そんなにね、私は嫌悪感強くないんですよ。（男性的な身体が：筆者註）なければいいなあとか、そんな感じはあるんですけど、イヤだみたいな感じはなくて。だから、なければそりゃあないほうがいいかなと思うんですけれども、鏡を見て『う～ん』とは思いますけど、どうしてもイヤだみたいな感じではないので。ですから、そもそも手術をするみたいなことって、最初の頃はあまり考えてなかったですね。*

そこらへんは（トランスジェンダーによっても：筆者註）個人差は大きいです。だから、『本当にイヤだ』と言っている人とその後出会うようになりますけれども、私はそんなに嫌悪感はなかったので。『なければいいけどね』くらいの感じで、『もうどうしても』とい

うことは全然なかったですね。

だから、それまでも女装していますけれども、割と＊＊に来て女装バーに行くようになってから、外出し始めるんですね。それまでも、女装のまま外に出たこともありますけれども、やっぱりドキドキ感が全然ね。大学の時も、ウチのパートナーとデートしてもらった時とか女装してますけど、もうなんか、怖くて。『バレたらどうしよう』みたいな(笑)。そんなのがすごかったですけど。＊＊に来た頃一緒に遊んでた人たちは、女装したまんまいろんなところに行くんですよね(笑)、集団で。端から見ると女装集団って分かるんです。そんなケバい化粧？　ミニスカート短すぎるでしょ？　みたいな(笑)人たちと一緒にお出かけをする。やってる時は楽しいですね。見ている人たちは『え～っ？！』っていう状況ですよね。みんなで海水浴にも行くんですよ（笑)。私はワンピースでしたけど、みんなビキニで（笑)。もうビックリでした」

――じゃあ、割と＊＊に来て、女装クラブで知り合った仲間とセクシュアリティに直結する部分の活動が始まった？

「*そうですね。で、ちょうど、そういう人たちと遊び始めてそれまで罪悪感みたいなものがあったのが、少しずつなくなってきていた感じですね*」

――罪悪感がなくなってきたのはキリスト教のおかげもあったのかな？ それとも･･･。

「*キリスト教のことは、『こんな私でもイエス様は愛して下さる』と思って、洗礼受けますよね。ところが、その後聖書を勉強していく中で、レビ記の『男は女の服を着てはいけない』というのを見つけてしまって、暫く教会に行かなくなるんです。それは、大学生の時なんですけれども。『はっ、やっぱりこれはダメなんだ』と思って、ちょっとそこでも落ち込むんですよね。ただ、基本的に能天気なところがあるので、まあそうは言っても『教会に行っていればなんとかなるかな』みたいな感じで、その後また教会に行き始めるんですけどね。レビ記のところが頭の中でグルグルしていましたね。そのへんはあるんですけれども、割といい加減な適当な性格なので、そこはもう嘘をつくことにしてですね、こっちでは女装するけれども、教会にも行きますみたいな*」

――スカートを履いたりはしなかった？

「*しない。靴は女性もののローファーが多かったですね。ローファーって、革靴ですけれども紐がなくてスポッと入るものですね。あれだと女性ものでも、パッと見そんなに違和感ない。よく見ると『なんで？　女性もの？』って言われるんですけれども、そんなに気にならないですね。男性のローファーもあるので。大きさが全然違いますけれども。私は、*

普通に女性もののサイズで大丈夫なので、(靴のサイズは：筆者註）24 なので。だから、むしろ男性ものの靴のほうがサイズがないんですね（笑)。まあ、『それで女性ものを履いているんですよ』みたいな言い訳はしてました（笑)。そんなことは全然ないんですけど。好きだから、女性ものを履きたいから履いているんですけれども。言い訳としては『サイズないんですよ～』って言うと、『あ～そう～』とか言われて（笑)」

――メイクは、「会社に行く」みたいな社会的な行動をする時にはしていなかった？

「*基本的に、私、普段メイクしないものですから、そういうのはなかったですね。メイクするのは女装バーで遊ぶ時とかですね。ただ、『髪が長い』とかですね。あと、スニーカーも女性ものを履くので、ちょっと色合いとかが女性っぽいとは言われることはありましたけれども。ちょっと怪訝には思われることはあるかもしれませんけれども*」

――自分を押し殺して、普段の生活をすっぴんで我慢していたということはない？

「*それはないです。『髪の毛を短くしろ』と言われることについてはちょっと･･･。今でも髪の毛は伸ばしていたいというのはありますけれども。で、また、職場がぴっちりしたところじゃなかったので、メンズスーツを着たりすることはなかった。だから、割と女性もののパンツを履いていても何も支障はない感じです。割と、シャツもどうでもいい感じで（笑)。メイクもそんなに派手でなければ。それこそ T シャツでも良かったりする時がありますので。反対に、夏のキャンプなどは『なぜ T シャツじゃないの？』っていう、そんな感じでしたので。*

で、その後、スーツも女性ものを着ますけれども、司祭になってからですけどね。『なんで女性もの？』って言われますけれども、『ピッタリくるんです』みたいな言い訳で、なんとなくみんな『ふ～ん』みたいな。ごまかせていたので。男性もののスーツも着なきゃいけない縛りはなかったものですから。まあ、スカートは履けませんでしたけどね、カミングアウトする前は」

――就労した職場環境において直面した困難について教えて下さい。

「*これね、お風呂ですよね。トランジットを始める前も自分の裸を見られたくないという気持ちが強かったというのもありますし。*

＊＊に来てからは実は女性ホルモンの投与を始めるんですね。性同一性障害のニュースを聞いてからですので、＊＊年か＊＊年ですね。そこで初めて、身体を変えられるということを聞いて『変えられるなら、変えよう』と。でも、知識がなければ、特にそういうふうに思わなかった。そんなに嫌悪感強くないものですから。

その前も裸を見られることについては抵抗があったのですけれども、ホルモンを始めてからは胸が出てきましたので困りましたね。だから、共同浴場には行かない。共同浴場しかなければ遅くに行く、みたいな感じですよね。でも、やっぱりみんな飲んでいて遅くなったりとか、どうしても遭っちゃうようなことがあって、その時はもう困っちゃうということはありましたけどね」

（中略）

「*公衆浴場に行くと、まず『どっちなんですか？』って聞かれる*」

――聞かれちゃうんですね。

「*時期にもよりますが、トランジット途中だと聞かれる。だから、その頃から男湯に入らなければいけない状況が、とても怪しい状況で、できれば避けたいんですけれども、『じゃあ、入らなければいいじゃん』って言われますけれども、やっぱり汗を流したいので。その時は、男性のお風呂に入っていましたね。*

ただ、もうどっちか分からない状況になった時には、家族で行く時には女性のお風呂に入っていました」

――お風呂の問題以外に、労働環境で直面した困難はありますか？

「*着替えたりする時でしょうかね。あとは、健康診断ですね。一回、『健康診断、申し込んでおいて』と言って、何も考えずに行きましたら、男性用だった。まあそうですよね (笑)。体育館みたいなところで、着替える場所もちゃんとなくて、『え～っ！　こんなところで脱ぐの？』みたいな。衝立などもなくて、みんなからよく見えちゃうようなところの検査で、『これは無理だわ』と思って、『申し込んだんですけど、ごめんなさい』と言って帰ってきた。まだカミングアウトする前の時期なんですけど、身体はもう女性に随分近い状態だったものですから。まさかそんなところだと思わなくてですね。帰ってきて、改めて申請をしたんですけど、もう病院に直接『健康診断をしたい』ということと、『性同一性障害なので、他の人と一緒にやりたくないんです』と話をしたら、『じゃ、大丈夫ですよ』って言われて、行ったんですね*」

――そういうことは病院もちゃんと聞いてくれるんですね。

「*そうですね。そこで。で、＊＊に＊＊クリニックというのがあるんですけれども、そこには男として行っていたんですね。で、データがあって、『実は』という話をして、『性別*

は男のままですけれども、女性として暮らしているので、なんとか対応してもらえませんか？』という電話をかけたところ、『別にいいですよ』って言ってくれて、女性の更衣室で着替えて、女性のところをずっと回れるようには今はしてもらっているんですけれども。面白かったのは、最初の頃、＊＊っていう名前ですけれども、性別は『男』って書いてあるんですね。そうすると、検査している途中に書き直してくれる人がいて（笑）、『男』に斜線を引いて『女』って書いてくれる」

――それは本人に聞いてから？

「*聞かずに。『えっ？！　書き直されているんだ～』っていう」*

――勝手にやっちゃっていいのかな。

「*ねぇ。たぶんそういう人（トランスジェンダー：筆者註）がいるということを知らない人だったのかもしれません。最初、ホントに最初の頃です。今はそんなことないです。あれは笑えましたけれども。今は健康診断で困ることはなくなってきました。昔はそんなことで困ったこともありました」*

――個別の対応などで割となんとかなってきたんですね。

「*そうですね。最初、あれは何の時かなぁ～、＊＊にいる時に、ホルモン治療を始めた後、＊＊年くらいなのかな、健康診断証明書を取ってこなくてはいけなくなったんですね。その時はもう胸が膨らんできていてどうしようかなと思ったんですけど、まあ、健康診断証明書が必要だということで、病院に行って、診てもらって、検査の前に、『すいません、女性ホルモンの投与をしているので、胸とか出ているんですけど、そのことはちょっと書かないでもらえるようなことはできますか？』っていうお願いをしたら、『なにバカなことを言ってるんだ！　なにバカなことをしてんだ！』みたいな対応をされて、ホル注をしていることを否定されてしまった。『うわぁ～、きついなぁ～』と思って。*

*　で、別の病院に行って、『結果は変えることはできないから、注射しているとかそんなことは書かないけれども、健康診断の値についてはそのままで』『それは全然いいんです』って話をして、健康診断証明書を出してもらった。*

*　私たちは（トランスジェンダー当事者は：筆者註）新しい病院に行くのは勇気がいるので、ホルモン注射しているということが『バカなこと』だという認識が割と年配の男のお医者さんには多くて。露骨にバカにされるような態度というのはよくありますね」*

――それは、変えていかないといけないですね。

「そうですね。だから、＊＊にいる頃、風邪で、それまで、あんまり内科には行かないようにしているんですけれども、どうしようもなくて行ったら、昔は『胸出して』みたいなことを言われましたが、『なんでボクは、おっぱいが出ているのかな？』みたいなことを言われて。『何、その言い方』と思って。そういうのは病院では割とたくさんあるので、病院はちょっと行きたくないなというのはあります」

――病院に行って、余計に具合が悪くなる。

「う～ん、意気消沈して帰ってこなきゃいけなくなっちゃいますからね。たぶんレセプトを出したりすると、性別が違うと却ってくるんですかね、事務的な手続きで。私はちゃんと保険証を出しているのにたぶん見かけで『女』とされて、そのまま申請されて戻ってきちゃうみたいで。後から電話で『男ですか？　女ですか？』みたいな問い合わせの電話が来たりとかですね。『保険証出したでしょう！』と思って」

第３項　カミングアウト　―職場から追放される―

Ａさんは、スカート姿で外出しているところを関係者に見つかってしまい、それをきっかけにカミングアウトした。ところが、「相応しくない」と判断され、職場を追放された。そして、職場からは「性同一性障害の診断書」の提出を求められたが、主治医の意見は「悪い方向に持っていく根拠にされかねない」という否定的なものであった。それに関する語りは、以下の通りである。

――カミングアウトはいつされましたか？

「＊＊年から＊＊に行くんですけれども、＊＊月に牧師の中でカミングアウトします。もう＊＊にいる時は普段から女性もののスーツを着て働いていましたので、カミングアウトする前から。パンツスーツですけどね」

――じゃ、そういう外見的な変化があって、もうこれ以上隠しておけないからカミングアウトしようと決めた？

「じゃなくて。＊＊で辞めさせられる事件になるのが、私も不注意だったんですけれども、家族の間ではもうずっと女性として暮らしていましたので、家族旅行の時はスカートを履いて出かけるんですね。で、家族旅行をしている時に、保育園の保護者の人と遭っちゃったんです。で、髪が長くて、変わった園長先生だと言われていましたけれども、スカートを履いているのはさすがに･･･。一応『黙っててて下さいね』と言ったんですけど、人の口に

は戸は立てられませんので、なんとなく広まっちゃったので。で、それが教会というか保育園の理事会の方で問題になって、『とりあえずはそのことは受け止めますけれども、内緒にしましょう』と。で、牧師の中では知っておいてもらって、都合の悪いことにはならないように、ですね。でも、カミングアウトだったんですね。

それがあって、その後、＊＊年ですね、みんなにこういうことは知らせておいたほうがいいだろうみたいなことで、教会全体へのカミングアウトをします。

それで、結局、『そういう状態の人は子供たちの教育には良い影響を与えないでしょう』『相応しくない』『良くない』という判断で、退職勧奨されるんですね。

まあ、でもね、保護者の人たちは『辞めさせないで下さい』という署名を集めて下さって、皆さんから本当にいろいろ支援をしてもらったんですけれども。やっぱり、あれが一番大変でしたね。

で、結局、その後ですね、＊＊ハウスっていうところがあって『そこで黙想してろ』とか、いろんな勝手なことを言われたんですけれども、とにかく『イヤです。働き続けます』と言っていた結果、＊＊の＊＊教会で『主教座聖堂付』っていう形にされるんです。だから、牧師はさせられないという状況ですね。

で、『主教座制度付』になって＊＊で働き始めるんですけれども、やっぱり最初反発がすごかったですね。そもそも『性同一性障害』っていう言葉を知らない人も多くてですね。伝わり方としては『男だったのにスカートを履いて働き始めた』みたいな伝え方をされているんですね。ですから、『そんな人を受け入れられませんよ』っていう声がやっぱりすごくたくさんあってですね。だから、＊＊に行く前にそういう不満というのが随分寄せられたみたいですね。

で、行ってからも、まあ、最初一応気を遣っていなかったので（笑）、気を遣う必要はないんですけど、スカート履いてたんですけども、それについて『女性用の素敵なパンツだってたくさんあるのに、なんでスカートを履くんですか？』っていうような。『いや、女性、スカート履きますよね』みたいに言いたくなるようなところで愚痴愚痴といじられるという。で、『男のくせにブラを着けている』『いや、おっぱいありますから』みたいな（笑）。そういう、なんかこう、服装のことで愚痴愚痴言われたことは随分ありますね。

私が女性のいで立ちをするということについて、やっぱり、いろんな『イヤだ』という反発があったんですね。直接もそうですし、こう、上に『なんでそんなことさせてるんだ？』みたいなのはあったみたいですね。それが＊＊教会に来た時ですね」

――ご家族、医師、学校の教師などから、意見や助言を言われた経験があれば教えて下さい。

「就労に関してというか、保育園を辞めさせられるあたりのことで、『本当に性同一性障害なのか？』という問いかけがあって、『診断書を出せ。アナタが口で言っているだけで、証

拠がないから。そうすると、みんなに説明できないから、持ってきてくれ』と言われたんですね。で、私の主治医にお願いをして『こういう事情で診断書を出せと言われているんですけれども』と言ったら、主治医は『それは、診断書を出さないほうがいいでしょう。反対にそれを使われて、悪い方向に持っていく根拠にされかねない。その診断書の有無に関わらず、あなたの人生そのもの、生き方なんだから、そのことを主張していくことのほうが大切ですよ。診断書をどうしても書けと言うなら、そりゃいつでも書くけれども、それで解決するということにはしないほうがいいよ』と言って頂いて。私は診断書を出したら何とかなるかなと思っていたけど、『今までもそういう診断書提出というのがあったけれども、必ずしも良い方向にはいかない』いう助言を頂いて。だから、診断書を出すということは一切していないですね」

第４項　別室にされる疎外感　―「性別二元論」を前提とする仕組みの中で―

Ａさんはカミングアウト後、現在でも宿泊行事など男女別に空間が隔てられるような状況で「生きづらさ」を抱えている。そして、周囲の人に「より多くの人に大丈夫な状況を前提としてもらえる」仕組みを作るためのお願いを続けている。それに関する語りは、以下の通りである。

「*＊月に人権セミナーというものがあるんですね。＊＊であるんです。で、沖縄と障害者差別の問題とか、そういったことを考える機会なんですけれども、私の宿泊に関して『誰と相部屋にするのかで困った』と。で、女性の参加者で『私はイヤだ、A 司祭は（相部屋になるのは：筆者註）イヤだ』という声があったので、女性とは一緒にできない。で、男性では『いいよ』っていう人がいたけれども、『じゃあ、そっちにしようか』って言ったら、そっちの女性が『そんなバカな話ありますか』って言われたから止めた、みたいなことを聞いたんですね、後から。で、宿泊を伴う行事って、やっぱり私たちすごく考えるんですよね。相部屋になるっていうことがあると、相手の人が『私がトランスジェンダーだ』ということが分かっていた場合には、『イヤだ』と言われる可能性がまずありますね。で、いつもそうなんですけれども、性別の問い合わせで部屋割に使いますよって書いてあって、女に〇して出しているのに、電話がかかってきて、『男性と一緒でもいいですか？』って問い合わせが･･･*」

――それじゃ、〇した意味ないじゃないですか！

「*だから、『なんで？　私は女性に〇しましたよね？！』って。『いや。でも、先生、元男でしたよね？』とか言われるのがすごくあってですね。その、何て言うんですかね、宿泊の時にどうするのか、私たちのようなトランスジェンダーをどうするのかというのがとっても適当（笑）。私がトランスジェンダーって知っていても『大丈夫だよ』っていう人はい*

るので、そういう人によく相部屋お願いするんですけれども。『相部屋が前提だった場合は、それをまず本当に前提にして下さい。相部屋がダメな場合はそのことを記述するような形で申込書を作ってもらえませんか』ってお願いをずっとしているんですけれども、『いや、それはちょっと特異なことだからね』と言われて、なかなかそのへんは取り合ってもらえないんですけれども。私、＊＊で一人のトランスジェンダーじゃありませんので、トランスジェンダーの他の人たちも、なにか行事に参加しようと思った時に、やっぱりそういうのに躊躇して参加しないとかですね。で、参加するとなっても別料金を自分は取られなきゃいけないみたいな、そのへんをなんとかできませんかというお願いはずっとしているんですけれども、なかなかそこがうまくいかないなということは、労働環境とはちょっと違うのかもしれませんけれども、企業でもありますよね、そんなことが。『より多くの人に大丈夫な状況を前提としてもらえる』ようなことができないのかなぁと」

（中略）

「*あと、更衣室ですね。礼拝の前に牧師の着替え用の部屋っていうのが、だいたい大きな礼拝ですとたくさん牧師が集まる時に用意されるんですけれども、基本、羽織るだけですから着替える訳じゃないので、男と女と分けなくても私はいいなと思っているんですよ。分けたいという声があるのかもしれませんけれども。で、その場合に、私、必ず別室にされるんです、ひとりだけ*」

――自分から希望を出している訳でもないのに、別室にされる？

「*してないのに。『はい、A 先生、こっちです』って言われて、『エッ』っていうふうにされたりするので。そのへんはちょっとねぇ、『私だけなんでいつも別？』みたいなのはすごく思いますね。わざわざ分けないで欲しいなぁとは思うんですけれども。ひとりだけ別っていうのは（笑）、ねぇ、差別的な感じはするんですけどね。*

今回も、『特別ひとりにしてあげました』みたいなことを言われたのね、『何ですか？』みたいな感じになっちゃったんですけど」

第２節　　Ｂさん

インタビュー日：2018 年 10 月 7 日、10 月 14 日、11 月 3 日
インタビュー時間：9 時間 32 分
生年：不回答

B さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は、学習参考書の出版社勤務、外国語講師、通訳、翻訳、障がい者雇用事業所にて手話通訳、

藍染めの自営業などを経て、現在、神学校の学生である。インタビューは、キリスト教会の個室をお借りして行った。

第１項　B さんの生い立ち

まず、B さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*出身地は＊＊です。今でも＊＊と聞くと胸騒ぎがするというか、感傷的になるっていうか、＊＊っていうイメージが私の中にあるので、＊＊という街が好きなので、今はめったに行くことはないんですけど、＊＊という名前を聞いただけで感傷的になる雰囲気はあるんですね。*

ジェンダーは、MtF です。私、子供の頃から父親に『男らしくしろ』って。女の子っぽかったらしいんですよ。私の座り方とかね。あと、泣き虫で。女の子とままごとをしていたのは覚えているんですね。それで、『男なんだから男らしくしろ』って言われて、ジェンダー的なプレッシャーを父親から受けてきたことは覚えているんですね。

私が『女の子になりたい』とか『女の子だ』という自分の違和感に最初に気づいたというか、疑問に思ったというか。たぶん最初の頃はその程度だったと思うんですよね。強く『女性である』という意識を持っていたというよりも、『なんかちょっと違うなあ』という程度だったと思うんですけど。それは、小学校の高学年くらいの時ですね。すごく泣き虫で、クラスの男の子たちからいじめに遭った。

実は、両親が非常に仲が悪くて、母親は父親の DV を受けていたんですね。で、私は子供心に『大人になったら、絶対に父をやっつけてやる！』と思っていたんだけれども。母が別れる決心をしたんですよね。それで、私はその時に施設に預けられちゃって。いつ、どういう状況で離婚が成立したのかについては、よく分からないんです。まあ、大人になって戸籍を見た時に、離婚が成立した状況とかっていうのは分かったんだけれども、離婚の成立自体は、私が小学校の･･･、その違和感を初めて覚えたくらいの時だったんですよね。私は、だから、中学を卒業するまで、ずっと施設で育ったんですね。

それで、私を施設に預けてすぐに、母は『またすぐ迎えに来る』『遊びに来る』『顔を見に来る』みたいなことを言いながら、一回も私のところに来なかったんですよ。だから、私はもうすごく寂しくて、悲しくて。それで、今度は、父親を恨むだけじゃなくて、母親ももう大嫌いになって。

私は、中学卒業後に施設を出てから、高校、大学、その後、＊＊に留学していたんですけど、それも全部自分で働きながらやったんです」

――えっ？！　高校も自分で働きながら？

「そうです。高校の成績が良かったので、僅かですけど奨学金をもらえて。大学でも成績が良くて奨学金をもらえたので。アルバイトも必死になってやって、なんとか卒業までこぎつけた。留学の費用も全部自分で工面して、＊＊でも働けるようにしてもらって。福祉の勉強をしたいということで＊＊に行ったんですよね。そういう、障がい者施設で働きながら、給料をもらいながら勉強していた。

＊＊でも、ずっと勉強とアルバイトをいつも行き来して。1 コマ空けば 90 分あるから、その間 1 時間だけアルバイトに行くとか。それと、図書館と、アルバイト先を行ったり来たりしながら勉強してた。

それで、やっぱり、小学校の時にひどいいじめに遭ったので、私は『ハートは女性である』っていうことを言ってはいけないんだ。女の子っぽさ、女性であることを、それからずっと封印していたんですよね。やっぱり辛かったし。高校生の頃になると、私は明らかに、『女の子になって女の子と恋愛したい』って思ってたんですよ、その頃はね。でも、なかなかそういうことをカミングアウトできないし、しなかった。

やっぱり一番辛かったのは、大学の時に、なんていうか、自分が分裂しているような、股裂きに遭っているような感じで、心と身体のバランスが取れなくなって。それで、『日本にいちゃダメだ』と思って、＊＊に逃げたんです。

それで、私が子供の頃にいた施設がキリスト教主義の施設だったんですね。だから、毎週日曜日に教会学校があって、それでキリスト教と接するようになって。で、その施設は＊＊にあったんです。それで、卒業して＊＊に出てきてからはキリスト教会そのものに関わるようなことはなかったんだけれども、やっぱり、子供の頃の『みつごの魂百まで』じゃないけど、心のどこかにそういう思いがあったんでしょうね。で、大学の時に『一体自分は何やってるんだろう』という思いがあって、『そういえば私は教会に行ってたよなぁ』と思って。それで、大学のそばにある教会に意を決して行くようになって、それで半年くらい経って、大学 2 年の終わりの時に、洗礼を受けたんですよね。

自分の心の拠り所というか、自分の心が安定する場所として教会をやっぱり思い出したっていうか、選んだっていうか。でも、教会が、やっぱり、キリスト教ってとっても『あなたは悪人だ、罪人だ』みたいなことを平気で言うでしょ？」

――ええ。

「それで、私は『キリスト教の戦争責任』っていう本にぶつかったんですよ。洗礼を受けてまだ 3、4 か月くらいの時だったんですけど、それを読んだ時に、『うわあ、キリスト教よ、お前もか！』みたいな感じで。ゼロ戦を送っちゃったりとか、韓国・朝鮮の人たちに上から目線で押さえつけるようなことを国家がやっていたということを知って、すごい失望して。それで、それもあって、両方の問題があって、私は＊＊に『暫く日本から逃げよう』と。だから、ジェンダー、セクシュアリティの問題もあったけれども、そういうキリ

スト教の問題もあって、日本から暫く離れて、＊＊でキリスト教についてもう一度自由に、クリスチャンだなんて言わずに、イエスって一体何者なのかということを自分でも勉強してみようと思って。そうしたら、いろんなことが分かってきて。キリスト教にはいろいろ問題はあるけど、イエスっていうのは大した奴だなと（笑）。そう思って、だから、イエスからは離れられなかったんです。

日本に帰ってきてからも、教会には行かなかったんだけど、大学の時にとってもお世話になった、ドイツに留学してドクターを取った牧師がいて、その牧師のもとで月に 1 回聖書研究会をやっていたんですけど、その会に出たりするようになって。毎週日曜日なんか教会には行かずに、専ら『私的イエスの問題』『人間イエス』みたいなことについての学びをどんどん自分でも深めていったというか。そちらのほうが面白くなって、教会にはそれから長い間行っていなかったんです」

（中略）

「*日曜日の朝、日曜学校に行ってたんですけど、子供心に、楽しみにしていたというか。それが何なのかということについては全然分からないんですけど。行くと、小さなお菓子が食べられたりとか、それから、聖句カードみたいなのあるじゃないですか、こんな小さなものですよ？*」

――カルタみたいな。

「*そうそう！　くれたりとか、嬉しくて。それで、両親は実は一応カトリックの信者らしき人たちだった。私はよく分からないんですけれども、日曜日に教会に行くわけでもないし、ぐうたらぐうたら寝てて。私たちは早く起きても親が相手にしてくれなくて、もう寝ているわけですから。だから、私たちは必然的に日曜日の朝になると教会に行くという、そこが遊び場っていう感じで。で、そういう訳で私は教会学校に行くのが楽しみで、日曜日の朝になると、別に信じてるとか信じてないとかではなくて、そこがなにか自分にとって、利益っていうのか、なんとなくそこに行くのが楽しみだったことは覚えていて*」

（中略）

――高校からは、もう自分でアパートを借りて、っていうこと？

「*そうです。最初は確か、三畳一間だった。で、アルバイトもしながら。当時は牛乳配達をしたり、夏休みとかある程度長い期間のある時は、集中的に、普段の牛乳配達、新聞配達をしながら、その他にいろんなアルバイトをしたんですよね。寿司屋の出前のアルバイ*

トとかね。身体弱かったのに。あと、球場の売り子」

――野球場？

「*そう、野球場。『ポップコーンいかがですか？』とかね。ビールは重くて運べない。私、体力がなかったから。あと、ビルの掃除のアルバイト。高校終わってすぐ、ビルの掃除のバイトに行って。だから、クラブ活動なんてやってなかったですよね。クラブ活動できるようになったのは、もうちょっと後になって、『人がいないから、ちょっと手伝って』って、大会に出られないから、助っ人みたいな感じで（笑）。バレーボールに。球技がけっこう得意だったんですよ。バスケットとか、バレーとか、卓球とか。球技関係が良くて。で、中学の時には剣道をやってたんですけど。剣道も初段まで取ったのかな。*

高校は、普通科の高校に行って。私はもう、本当は中学出たらすぐ働くつもりでいたんですけど、自立して食べていくにはそれしかないと思っていたので。中学を終わる時･･･、中学の国語の先生がとってもいい先生で、すごく私のことを気にかけてくれて、もちろん私は『心は女の子』だということは言っていないけれども、私のことをとっても気にかけて可愛がってくれて、私が施設にいたっていうこともあったのかもしれないけど。私がある時、国語の発表があった時に、みんなが言わないような奇抜な発言をしたんですよ。そしたら、先生はそれを拾ってくれてね、『面白い。その考え方は面白いから、それについてみんなで考えてみよう』って。最初のうちは、私の意見はみんなからブーイングされたんだけど、だんだん旗色が変わってきて、その先生が言ってくれたがためにね、『B は面白い意見を言う』っていうことになって。それで、私は初めて自分が認知されたような気がしたの、勉強においてね。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』をやったんですよ。主人公が蜘蛛の糸を伝って逃げる時の心理描写について授業でやるわけですよ。で、その時に私は、ちょっとみんなが言わないようなことを言ったら、『それは面白い』と、先生から言われてね」

――その意見というのをお聞きしてもいいですか？

「*蜘蛛の糸を伝って上に上がっていくわけですよね。下から同じように、地獄から抜け出すために、同じように糸を伝って上に逃げようとする大勢の人が、地獄にいた大勢の人が一本のあの糸にぶら下がって。その時に、主人公は、『お前ら来るな！　お前らが来たら、糸が切れちゃうじゃないか！　ダメだ！』と言って、足で蹴っ飛ばして落とそうとするわけですよね。最後は糸を切られちゃって、真っ逆さまに転落して落っこちていくわけですよね。で、その前に、蜘蛛の糸を上っていく主人公の心理描写について意見を述べる場面があって、私が『上っていった時に、『これで助かる』と主人公はホッとしたはずだ』と言ったんです。そしたら、みんなからブーイングを喰らって（笑）*」

――そんなにおかしなことを言ってないと思いますけど。

「*ですよね！　だから、それで、下から上っていく他の地獄の仲間を蹴落とそうとするわけでしょ。自分だけ助かりたいがために。で、それが仏の怒りにふれて、蜘蛛の糸そのものを断ち切られて、みんな真っ逆さまに落っこちていくわけなんだけれども。その時に、私は『ホッと一息ついたはずだ』っていう言い方をしたんですよ。で、みんなからブーイングを喰らって。そして、その意見を先生が拾ってくれたんですよ。『面白い。そういう発想は面白い』と。それで、『これは、普段勉強もしない、運動しか一生懸命やらないBが発表した意見としては面白い。これは、ちゃんと拾わなきゃ！』みたいに思ってくれたんだと思うんですよ。それで、その日、その時間を丸々かけて、いろんな生徒の意見を聞いたり、私の意見を聞いたりして。で、結論がその時間に出なかったんですよ。いや、出さなかったんですよ、たぶん、あの先生はね。で、翌時間にまで持ち越して、『Bの意見をみんなでちゃんと考えよう』みたいなことをやったわけですよ。私、初めて、そんな形で自分の意見を取り上げてくれたので、いたく感動して、それから国語が好きになって。単純ですよね（笑）。それで、その先生のことが大好きになって、私はやがてそこを出ていって就職しようかどうしようかと悩んでいる時に、『勉強したほうがいいんじゃないか？』って、その先生が意見を言ってくれたんですよ。『Bは環境的にいろんなことがあって勉強できなかったかもしれないけど、感性はいいものを持っている。勉強すれば、きっと花開くはずだ、その感性は！』みたいなね（笑）。*

あの時のクラス、40人くらいいたかな。私を入れて40人だから、あと39人は『私（＝Bさん：筆者註）の言うことは馬鹿げてる』っていう感じだったのに、翌時間になった時には、だいぶ多くの生徒が、私の意見と同じようなことを言い始めた（笑）」

――変わり身早いですね！（笑）

「*そうそう（笑）。教師がそういうふうに言ったからでしょ。そして、私はすごく『国語って面白いな』って思うようになって。だから、『オマエは力がないわけじゃなくて、いろんな家庭の事情もあって、いろんなことがあって、こういう状況に、勉強嫌いになっているのかもしれないけど、勉強って面白いぞ！』みたいなね。その後もずっと、なにかと私のことを気にかけてくれてね。それから、私はますますその先生が好きになって、『私、将来国語の教師になるっていうのもいいな』と思い始めて。その時は＊＊にいたんですよ。で、その時には、私は中学校を出たらすぐに就職しようと思っていたんだけれど、その事件があってから、『私は国語の先生になりたいなあ。あの先生のようになりたい』って思ったのね。だから、私にとっては、とっても大切な経験だったし、初めて信じられる大人が目の前に現れたっていうかね*」

――それもちょっと衝撃ですけどね。中学になって初めて信用できる大人っていうのが。

「*それから、勉強を真面目にやるようになって、学力がどんどん伸びていって。*

だから、施設を出て、公立の高校に入ったんですよ。普通科の。まあ、それ以上勉強して大学まで行こうということは、その時は本気になって考えていなかった。高校でも、わずかだけれども奨学金をもらいながら、返さなくていいタイプのやつだったんですよ。それを学費に充てて。それから、新聞配達や牛乳配達をやり、夏休みには集中的にアルバイトをしながら。それで、もう疲れてたからね、大学行こうかな、どうしようかなと思ったけど、一応受験だけして、2つの大学を受験したんだけれども、両方とも受かったんだけども、学費の安いほうを選んで。

だから、＊＊に出てきてからは、あんまりセクシュアリティのことについて深刻に悩んでいる暇がなかったというか。忙しくて、とにかく。

で、高校はね、相当成績が良かったの、私。『どこの大学でも行けるんじゃない？』って言われてたの。でも、大学行くとお金かかるし、どうしようと思っていたら、『この成績で奨学金もらえるから、もったいないから行ったら？　勉強したくないっていうなら別だけど、勉強したいなら』って。私、高校卒業間際になったら、中学の時のその先生を思い出して、『教師になれたらいいなぁ』と思うところもあったので、やっぱり魅力的な誘いだったんですよね、『大学へ行ったら？』っていうのが。

それで、学費の安いところを探して。奨学金は『ちゃんと最初に申請すればもらえるはずだから』って。それで、奨学金をもらうことになって大学に行ったんですよね。

それでも、授業の合間を縫ってアルバイトに行ったり、家庭教師をやったり。もうとにかくいろんな仕事をやって。大学だと1コマが90分じゃないですか。だから、90分の空きがあると、1時間のバイトに行ったりとか。行き来して、また次の授業って。そんなことの連続で、自分でも今、不思議でしょうがないんですよ。それで、本は本でちゃんと読んでたんですよ。読んだ本を全部、何年間か書き記していって、読書ノートって程じゃないけど、何冊くらいどんな本を読んだかというのが分かるようにノートに書いてみたら、1年に360冊くらい本を読んでたんですよ」

――うわ～！　大学生の時ですか？

「*大学生の時、いっつも眠い思いしてた。身体が疲れてたっていうのだけは覚えてる。*

まあ、そんなことを繰り返しながら、一番最初にセクシュアリティのことで、本当に悶々と悩んだのは、大学の3年生くらいになってからかな。洗礼を受けてからかもしれないね。大学2年くらいまではとにかく無茶苦茶忙しくて、大学2年までは一般教養があるでしょ？だから、もうコマ数が多いんですよね」

――そうですね。割とちゃんと出席取られる。

「*そうそう。だから、けっこう厳しくて 2 年生終わるくらいまでは、他のことを考えてる余裕がないわけね。授業には出るわ、バイトには行くわ。*

それでなおかつ 1 年生の時、大学に入った時に自治会にも誘われたりして。大学の自治会に誘われて『ああそうですか』みたいなことをやっていたんだけど、1 年生で破綻しました。身体がいくつあっても足りないや、みたいな。

それで、自治会の仲間から離れるようにして、『私は何をしているのだろう』と思った時に、キリスト教主義の施設にいた時のことを思い出して、ああそうだ、私、日曜学校に毎週のようにちゃんと行ってたし、施設にいた同じ学年の中学生はみんな嫌がって出なかったんですよね、何か理由つけてサボってね、日曜学校に出ないようにしてたんだけど。私は割と好きで、そういうところが女の子っぽいのかもしれないけど、割とそういうのは嫌いじゃなくて。でも、そのくせ、牧師が言っている内容を聞くと、『そんなことあり得ないわよね』とか思いながら、『それちょっとおかしいんじゃないの？』『そんな簡単に信じちゃっていいの？』とか。ちょうど思春期の曲がり角だったから、そういうのもあったと思うのね」

――なるほどね～。

「*それで、大学 2 年生の夏休み明けくらいから、自治会活動は、そういうことを考えることが無駄だということではなくて。でも、私は二者択一せざるを得ない。仕事は辞めるわけにはいかない、食べていかれなくなるから。自治会活動を取るのか、大学の勉強を取るのか。で、自治会活動を切る中で、『私は一体何をやっているんだろう』ということを考えて、『あ～、私は教会に行ってたな』ということを思い出して、大学近くの教会に、けっこう大きな教会で、敷居が高かったんだけれども、『今度行ってみよう』と思って。夜そこを通って、『今度の日曜日、来てみよう』と思って。で、翌週、教会の門の前を行ったり来たりしながら、悩みながら（笑）、最終的には敷居の高さをくぐり抜けて、やっと、日曜日、礼拝に行って。そういえば、中学校の時にこんなふうに歌ったり話を聞いたりしてたよなって思い出して。少しずついろんな形で『自分はどう生きるべきか』みたいな。大切な時期に、もう一度キリスト教と出会ったというか。で、洗礼を受けるつもりになって。たぶん秋に行き始めたので、翌年の 2 月に洗礼を受けた。*

私は、こういうふうに聖書を読んだり牧師の話を聞いたりしてきたんだなあということを思い出してきて、すごく嬉しかった。自分が洗礼を受けたということがすごく嬉しかった。いわば、地に足がつかないような、心がフワフワと浮き上がっているような状態で、何があっても嬉しくてしょうがないみたいな感じで、暫くね。で、その後、キリスト教の戦争責任っていうものに出遭っちゃって、洗礼受けてから 2、3 か月してからかな。それで、

すごく衝撃を受けちゃって。『キリスト教もこんなことやってたの？』『ゼロ戦送っちゃったの？』『韓国の人たちにこんなことしちゃったの？』『キリスト教って一体何者よ？』みたいな、改めてキリスト教の問題をすごく考えるようになって。それから、教会の青年会の有志、何人か信頼できる友達と『＊＊会』という会を作って。そこでキリスト教の戦争責任について考えるということを、私が主宰して勉強会を始めたんです。

それで、私が勉強した内容をみんなに伝えていくということをやるようになったのね。で、そこから派生して、靖国問題とか、キリスト教が発言してこなかったような社会的な問題、山谷の問題、三大寄せ場の問題も含めて、それから万博問題もそうだし。

私が洗礼を受けた教会はそういう保守的なところだったんですね。で、私がそういう勉強会をやっていく中で、私と仲の良かった学生、＊＊大学の大学院で天文物理学をやっていて、彼は物理学について私にレクチャーしてくれて、私は文学についてレクチャーするという、そういう仲だったんです（笑）。それで、その彼と一緒に『教会がやっていること、おかしいよね。保守的だよね』って。例えば、女性の役員には司式をさせない。それから、献金する時に、週報に名前と金額まで載せていた。誰がいくらかというのが見えちゃう。週報って誰でも見れるでしょ？　名前と『こういう形で献金しました』というのを載せるのはいいけれど、額を載せるのはどうなのか。問題として意識を感じないのか。それから、ここは大きな教会でいろんな人が来る。目の不自由な人が来るかもしれないから、一揃えでいいから点字の聖書を置いておくべきだとか。それから、できれば手話の通訳もできるように、独自に教会で手話勉強会をやってもいいし、そういうことも考えるべきだとか。それから、教会堂に入っていくのに階段になっているんだけど、車椅子の人だって来るんだからスロープにするべきだとか。車椅子の人が入れるトイレもちゃんと完備するべきだとか」

――そうですよね。

「そう。いくつかの要求項目をその友達とふたりで考えて、今度の総会の時に、総会議長、つまり、教会の牧師宛てに要望書、質問書を出そうと。で、そういう要望書を私とその友達ふたりが中心になって、要望書をぶつけたわけですよね。

ところが、今までの既存の権力を持っている、男性の昔からの教会の人たちっていうのは頭が固いから、『ああ、若造が何か言ってる』くらいにしか思っていないんでしょうね、きっとね。『そのことは検討しましょう』みたいな、うやむやにされちゃった感じなんだけど。でも、『要望書はちゃんと検討して欲しい』『いついつまでにちゃんと回答をして欲しい』ということも含めて、突っ込んでいったんですよ。で、彼も私も戦略をいろいろ立てて。

それで、私は大学卒業になっちゃって、＊＊（海外の留学先：筆者註）に行っちゃったんですよ。実現する形を見ることもなく。もう教会もイヤだし、日本の教会もイヤだし、

戦争責任もイヤだし、キリスト教もイヤだし、みたいなね。でも、『イエスはとっても魅力的だよね』という考えが自分の中にあって、そういう勉強は自分でしてたわけね。でも、日本にいるのはイヤだと思って、＊＊に行っちゃったわけですよ。そうしたら、ひとり残った、その教会の＊＊大学の友達が、私に手紙を送って来てくれて、『今、こんな動きになってるよ』って逐一報告してくれるわけね。それで、私は『これはこんなふうな要望、こんなふうなアプローチをしたらいいんじゃないかと思うんだけど、どうだろうか？』みたいなやりとりをしていたわけね。そうしたら、私が＊＊にいるうちにいろんなことが少しずつ実現していったの。例えば、献金は名前だけ書いて金額は載せないようにするとかね。

それで、私が何年かぶりに帰って来て教会へ行ったら、ちゃんと車椅子が入れるトイレがついていたり、階段を削ってスロープにして車椅子でも入れるようにって、なってたの！『うわぁ～、すごいわねぇ。最初、こんなの無理だって、みんな言ってたのに。すごいじゃない』みたいになって、嬉しくなってね。

でも、私はそういうふうな状況になっても、（日本に帰国後：筆者註）＊＊に越しちゃったから、＊＊の教会にはほとんど行かなくなっちゃって。＊＊大学の先生が伝道所を引き継いで、自主的に月に一回聖書研究会をやっていたのね。そこに、私、行くようになったの。だから、私、聖書の学びについて教わったベースというのはそこのものがすごく大きいんですよ。そして、そこでいろんな考え方を鍛えられた、聖書の見方も含めてね。かなり、民主的な形で自分たちが主体的に神というものを捉え直していく。そして、戦争責任の問題も、障がい者の問題もそうだし。だから、人権とか、私たちが人と人の関わりの中でどのように生きるかみたいな、基本的なことをその集まりの中で聖書を通して私は教えられ、勉強した。あの勉強は私にとってはすごく大きかった。それで、少しずついろんな教会があるということに気がついて。私が最初、要望書を提出した教会の保守性といったらものすごい感覚があったんだけど『アナタ、『アカ』にだけはなるな！』とか平気で言ったりね。、そういう人たちがいっぱいいるところだったんです。いわゆるエリートがゴロゴロいる教会だった。だから、私みたいに国文なんかやっているよく分からない学生は『目の上のタンコブ』っていうか、面倒臭かったんでしょうね」

――大学の時の専攻は国文だったんですか？

「国文です。国語の教師になりたいという思いがあったから。そこで繋がっているんです。でも、3 年生の時に福祉作業所でボランティアをやって障がい者の人たちと出会った時に、すごい衝撃を受けて。この人たちと一緒にいるっていうのもすごい魅力的だなと思っちゃったの。こういう人たちと一緒に仕事をしたり勉強したりすることができたら、もしかしたら私は何らかの形で役に立つことができるかもしれないみたいに思っちゃって。それから、国語教師の資格は取ったんだけど、どちらかというと障がい者の福祉のほうにどんどんのめり込んでいって。大学に 1 年残って、障がい児、障がい者教育の勉強をして、そし

て、(海外留学の時には：筆者註）＊＊の施設で働きながら、給料をもらいながら勉強できる道を作って、宣教師に助けてもらったりしながらね。大学卒業して 1 年間勉強して、その 1 年の勉強が終わった年の 5 月に＊＊に行ったんですよね、（日本から：筆者註）逃げるようにして（笑)」

――その間に＊＊語の勉強もされて？

「少しやりながらね。でも、普段会話できる相手は宣教師くらいしかいないから、そんなに勉強進まないわけ。だから、ほとんど向こうに行ってからやったの」

――すごいですね～！　日本で＊＊語を学べる学校とか講座とかって、あんまり聞かないですよね。

「当時は全然なかった。今は、関西のほうで 1 校あるかな、たしか。だから、私、帰国してきた時は、＊＊のサークルがあったんだけど、そこで呼ばれて＊＊語を教えていたことがあるの」

――いやぁ～！　すごい話だ！　じゃ、その 1 年間は何らかの本を取り寄せて、それでとりあえず勉強した？

「そうそう。その宣教師から絵本を借りたり。それで、宣教師と会った時だけ発音矯正してもらって」

――なるほど。今だったら、英語の参考書に CD がついたりしますけどね。

「そうそう、今だったらね。当時、『4 週間で＊＊語を学ぶ』っていう本が大学書林から出てて、それくらいしかなかった（笑)」

――＊＊人の宣教師さんとは、どこで知り合われたんですか？

「私が大学生の頃、手話を勉強していた時に、毎週土曜日に＊＊教会で、手話を教えているサークルがあったわけ。そこに行って、私が手話を勉強している時に、＊＊から日本に宣教師が送られてくるわけ。で、日本に送られてきて赴任先もまだ決まらない、日本語もまだ勉強している段階の＊＊の人たちが時々来るわけよね、＊＊教会に。そこで知り合ったわけですよ、宣教師の人と。それで、最初は、彼もまだ日本語もよくできないし、日本語教室を毎日集中的にやるわけでしょ。その時に、私に『説教の文章を日本語で書いたか

ら、見てくれないか？』って言われて、私がチェックしながら、それで仲良くなって。『Bさんは、何やってるの？』って言われて、『私は福祉の勉強をしてるんだ。将来はそういう仕事をしたいと思っているんだ』って話したら、『それだったら、＊＊に来ないか？　＊＊で勉強しないか？』って誘ってくれたの。『だったら、＊＊を紹介するよ』ってなって。で、＊＊の施設長が私の身元引受人になってくれて。そこの施設でも私は働かないと食べていけないから向こうでも仕事をしたいという要望を出したら、身元引受人にはなってくれるわ、その施設で働けるように手配はしておいてくれるわ、向こうで必要な書類、ワーキングビザの手配も全部してくれて。で、私が『あ～良かった。働きながら勉強できる』と思って。それで、向こうで『日本のクリスチャンでこういう人がいて、勉強しに来ているから、みんなで少しずつでもいいから応援しましょう』と言ってくれて、献金を募ってくれたのね。それと、（日本から：筆者註）持っていったお金を合わせて、なんとか食いつないでいたのね。もちろん、仕事もしたんだけどね。向こうでは、2か所くらい、勉強も兼ねてアルバイト代をもらいながら、住まわせてもらいながら、勉強していたという」

――さっきの話で、国文学科で「昔は国語の先生になろうと思っていた」っておっしゃっていたじゃないですか。で、「だんだん福祉のほうに（気持ちが）行くようになった」っておっしゃっていたんですけど、それは大学にいる 4 年のうちに、だんだん自分の将来に対する希望が変わっていった？

「そうですね。一番大きかったのは、3年生の夏休みの時にボランティアで知的障がいの人たちの授産施設でボランティアをやったのね。そういう人たちが仕事をするための場所。で、朝9時から夕方5時まで、1時間の昼休みと3時の休みがあったり、10時にお茶を飲む休みがあったりして、その他は、単純作業ですよね。ボールペンを組み立てたりとか、割り箸を袋に入れるとか。知的障がいの人たちは、そういうことについてはすごく集中力があるというか、『単純作業だからイヤだ』と言って投げ出すことはないわけですよ。むしろ、知的にはノーマルな人たちのほうがそういう単純作業には耐えられないっていうかね。そういう実態があるわけ（笑）」

――なんか聞いたことありますけど。

「ね。そういうところでボランティアをやって、夏休みに集中的に。例えば、ボールペンの組立だったらその作業だけを集中的にやるんですよ。『夏期集中作業』って言ってて。で、その工賃も働いた人に応じて賃金も分配するわけですけどね。で、その後に、8月のお盆の時期くらいに、みんなで1泊の海水浴旅行をするのが、彼らにとっての楽しみなんですよ。で、そこまで私たちボランティアの学生たちで手伝うんですよ。一緒に行ってバスで歌を歌ったり、泳いだり、スイカ割りをやったり、夜になったら花火をやったり。そういうも

のを通して見ていく中で、『ああ、知的障がいの人たちと関わるのも面白いな』と思ったんですよね。思っちゃった（笑）。なんだか知らないけど。こういう人たちも、こういうところで生きているっていうかね。こういう人たちの大切な人生があるんだっていうことを改めて、頭では知っているつもりだったんだけど、実際にね。それで、大学 4 年の時に、＊＊で障がい者施設が立ち上がるっていう時に、私に声がかかったんですよ。『施設の立ち上げから勉強できるから、よかったら手伝いに来ないか？』みたいな話になって。そういうことを通して、少しずつ、知的障がいの人たち、脳性麻痺の人たちの苦労とか、今まで背負ってきたものを目の当たりにした時に、『ああ、こういう仕事も面白いな』と思って。『国語の教師になることももちろん素敵なことだけれども、こういう人たちと関わっていくっていう生き方もあってもいいな』と思って。で、だんだん気持ちがそっちにシフトしていったんですよ。だから、教師の資格を持っているということは、いろんなところに出ていく時に便利なんだけれども、障がい者の人たちと一緒に生活していく、生きていくっていう生き方のほうが、なんとなく自分に求められているんじゃないかなという思いがあったんですよね。

でも、洗礼を受けた当初、キリスト教の戦争責任の問題にぶつかった直後くらいから、『キリスト教の勉強もしたいな』と思ったのね。だから、牧師になりたいというよりも、聖書の勉強をしたいという思いがあったんですよ。当時ね、もう早い時期から。『なんでこういうことになっちゃったんだろう。なんでキリスト教は戦争に加担してしまったんだろう』っていう疑問が私の中にあって。キリスト教についてもっと純粋に勉強したい。牧師の資格を取るっていうことよりも。

まあ、そんなことを考えながら、セクシュアル・マイノリティについても、やっぱり、気がついた。そこに苦しんで本当に苦悩してきた私たちが、今後、私たちと同じような人たちが同じような悩みで苦しむことがないようにするためには、私たちには何ができるのか。どうするべきなのか。課題を見つけた人が一緒に考えればいいのであって、そういうふうな解決の方法しかないと私は思っている」

（来客、中断）

「私と同じように、私は本当に誰にも話せなかった、つい最近まで、この 7、8 年くらい前までは、私はずっとこれを死ぬまで背負っていくしかない、自分の分裂した状況をね、身体と心が一致しない問題を墓場まで持っていくしかないかと。『墓場』ってイヤね、古い言葉（笑）」

――いや、普通に使いますよ（笑）。

「そういう悩みを持っている、今も抱えている。まあ、私の 7、8 年くらい前までほどでは

ない、ここのところいろんな形でLGBTっていう言葉が、中身は知らなくても聞いたことがあるっていう人たちが増えてきたし。それから、セクシュアル・マイノリティの人たちが実際にカミングアウトするようになってきているしね。NHKのEテレでも放送するようになったり、NHKのニュースでLGBTの問題が堂々と取り上げられていたりね。7、8年の様相からしてももう全然違う状況になっているんだけれども、まだまだ人前では言えないとか、なかにはセクシュアル・マイノリティの人たちに対して非常に暴力的であったりとかっていう人たちだってまだいるわけだし。

まだまだ、オープンになってきたりいろんなことが語られるようになってきたとしても、まだ不自由なく生きられるような状況にはないので、私の後にそういう思いを持っているトランスも含めて、セクシュアル・マイノリティについて、苦しんでいる人たちのために、役に立てればいいなとは思っているんですよね」

第２項　就職活動、職場での理解者との出会い　―20回以上断られる―

Bさんは帰国後、日本で就職活動をしたが20回以上断られた。その際に経験した困難と職場で経験した困難などについて、前項での語りに続けて次のように語られた。

「就職の時に20何回断られたことがあります。まだ私が手術を受ける前、要するに戸籍上女性になる前に、介護施設で働きたくて面接を受けた時に、まだ＊＊に来る前で＊＊にいた時に、面接に行くとことごとく断られたのね。それで、私、もうその時は手術の準備をちゃんとしていたし、戸籍を女性に変えるということについては決めていたので、『私はトランスジェンダーです。性同一性障害で女性として生きていますから』っていう話は、面接の時には必ずしたのね。だから、『トイレはちゃんと配慮して欲しい。トイレは個室じゃないと入れないし、そういうふうに生きているので、少なくとも施設長はそのことについて知っていて欲しい。それ以外に勤めている人たちについては、私との関わりの中で、私が判断して『この人は話してもいい』と思う人だったら、私は話をするし、『話してもこの人からは傷つけられるだけだ』と思ったら話さないかもしれない。でも、施設長だけは、私が何かあって倒れちゃった時に、『なんだこいつ、ブラジャーしてる、女性の下着を着てる』とかっていうことになった時に、誰もそれを知らないでいたらただの変態扱いされる。それは、私は困るから、施設長だけは知っていて欲しい。私は女性ですから』って言うと、後から履歴書が返信されてきて『今回は、誠に残念ですけれども、希望に添えません』みたいなことが書いてある。それが、20何回もあったの。さすがに最後の方には、『これは、黙って就職しちゃったほうがいいのかな』みたいに思ったこともあったのね。でも、結局、それじゃあ、私は何のためにこういうふうに生きようと決めたのか分からない。だから、やっぱり、私は正直に言う。『断られたら、また次探せばいいんだ』みたいにね、自分を励ましながら。

で、20何箇所目かで、2、3日したら電話かかってきて、『一度とりあえず働いてみます

か？』みたいに言うわけ。で、そこでも施設長は知っていたけど、他の人たちは私のことは知らなかったから、私が入っていった時に『B さんはコレなの？』とか言われて。で、『そうじゃない。そんな単純な話じゃない』って言って。少しずつ理解してもらう中で、やっぱり中にはね、『だいたい、そんなこと、分かってたわよ。私は B さんが、だからってどうなの？　だれかに何か言われたら、私に言いな！　私が助けてあげるから！』って言う人もいるのよね（笑）。アライだったんです。なかにはそういう人もいるし。そうじゃなくて、最初からもうずっと、それを知った途端に距離を置いちゃう人もいるし。で、私はいつも『他の人には言わないでね。言う時は、私が直接言うから言わないでね』っていうことを言ってきたんですけど、なかには言っちゃう人いるんですよね。余計なことを。『言わないで』って言ってるのに。それを、どっかから聞きつけてきて、もうデリカシーのない質問をする人もいるわけよね。すごい理解してくれる人もいるけれども、そうじゃない人もやっぱりいるね。まあ、それが露骨ないじめの形で出てくることは、とりあえず今のところは施設の中ではないけれどもね。

総じて、20 代くらいの若い人のほうが『いいんじゃない別に』っていう感じの人は多いですよね。私の経験の中ではそうですね。40 代、50 代くらいになると、ちょっと難しい。いい人だなと思っても『どういう言い方をしようかしら』と構えちゃうところがあるので。なかなか話ができないっていうか、言えないっていうか。で、特に『なにあの人、オカマじゃないの。イヤね』みたいな露骨な言い方をするような人とは、私のほうから距離を置いちゃうので」

――それは正解だと思います。

「うん。無理して話す必要ない。でも、少なからず、若い人たちは、『B ちゃんは私よりよっぽど女らしいよ。女子力高いよね』みたいなね、いわゆる考え方の古い連中よりは、柔軟性はあるっていうかね」

――そのへんのことは、長年の啓発活動も関係あるかもしれないですね。

「うん。特に、今の 20 代の人たちはもう既に性別適合手術によって性別変更が可能になった、2006、7 年頃からの歴史から見れば、その頃まだ小学生とか幼稚園くらいの年でしょ？だから、それからいろんな形で、あちこちで LGBT という言葉を聞くようになり、性同一性障害という言葉も知っているでしょうね。GID だとか、ヨコモジになると分からなくなる人たちもいるかもしれないけど（笑）。で、いまだに『性転換手術』って言う人がいるから、私はその度に、その人は理解があるのにそういう言い方をする人がいるから、『性転換手術っていう言葉は、今は差別的に扱われているから、その言葉は使わないほうがいいよ』って言うと、『え？　何て言うの？』『性別適合手術って言うんだよ』って言うと、『あ、そ

っか！　分かった！』って。だから、理解はあるんだけど、知らない」

――そういう人は簡単で、教えてあげればいいだけ。受け入れる素地はある。

「そうそう、そうなの。そういう人だったら、こちらも話しやすいじゃない。『今は、そういう言葉は差別的と考えられているんだよ』と言えば、『あ！　そうなんだ！』と。そういう人たちは、すぐ覚えてくれるね。頭が柔軟っていうか、凝り固まっていないっていうか。

やっぱり難しいのは、50 代、60 代、70 代の男性！　超難しい！　もう頭にこびり付いちゃっているのね。取れない。その姿、格好や声だけを聞いて、『男』って決めつけたり、『女』って決めつけたり。同じ年齢でも女性のほうが比較的柔軟に受け止めようとする」

第３項　ガン入院とジェンダーへの配慮に感謝　―病院にとって「性同一性障害者を受け入れる」初めての経験―

B さんは、体調不良のため病院で検査したところ、ガンが見つかり「末期ガンです」という告知を受けた。それをきっかけに「最後くらい、女性として自分らしく生きよう」と決意した。その後、入院の際に医師へカミングアウトし、個室に入院させてもらうという配慮を経験した。それに関する語りは、以下の通りである。

「私は＊＊年にガンの手術を受けました。その年の 6 月末に食道ガンであることが分かって、外科医から『あと 6 ヶ月の命で、今年のクリスマスまで持つかどうか分からない』って言われたんです。『ステージ 4 の末期ガン、進行ガン』だって。だから、『私たち外科医はこの状態は手術できません。腫瘍内科のほうで何らかの手立てをするしかないでしょう。放射線か抗ガン剤投与かで治療をすることしかできないでしょう。生存率は 5%くらいだろう』と言われて。だから、『私はもう死ぬんだ』と。最初宣告された時は、もう頭が真っ白でどうやって家に帰ってきたのか覚えてなかったんです。

私は女性として生きると決めたのは、ガンがきっかけなんですよね。その前から少しずつスカートを履いて歩いたりしたこともあるんだけど、明確に女性として生きるっていう決断まではしていなかったんです。私は小学生の時にいじめを受けていたので、私自身はカミングアウトすることは無理だ、男として生きるしかないと思っていたので、ずっと内緒にしてきた、隠し通して生きてきたんですよね。でも、『ガンだ。あと半年しか生きられない』って告知をされる前に、問診票みたいなのを書かされるんですよ。それで、『もしあなたが宗教を持っているなら、あなたの宗教は何ですか？』っていう欄もあって、仏教、キリスト教、イスラム教、その他、無宗教っていう欄があって、〇をするようになっているんですけれども。その時に、改めて、私はクリスチャンだったなぁって思って、キリスト教に〇をしたんですよ。だから、ドクターが『あなたはあと半年しか生きられません。クリスマスまでしか生きられません』って言ったんですよね。で、『あと半年か』って頭が

真っ白で帰っていろんなことを考えた時に、『あと半年しか生きられないんだったら、あと半年くらい、最後くらい、自分らしく生きよう』って。これを言うと涙が出てくるの。ごめんなさいね。だから、『私は女性として生きよう』って決めて。

そして、抗がん剤投与のため入院することになった時には全部カミングアウトして、『私は性同一性障害だから、男性の病室に入ることもできないし、女性の病室に入るとしてもカーテンはちゃんと締切にしておいて欲しい。そういうことに配慮して欲しい』って。腫瘍内科のドクターがすごく理解のある方で、その方と精神腫瘍科のドクター、要するにガンとか難病に罹った人たちの精神的なケアをしてくれる主治医、その 2 人の主治医が私にはいたんですよ。で、あとから分かったことなんですけど、その精神科の主治医がクリスチャンだったんです。で、＊＊神学校（のちに B さんが進学した神学校：筆者註）で教えてたんです」

――ははは（笑）。それは、今、＊＊に行かれていることと関係あるんですか？

「いや、全然関係ないんですよ。＊＊神学校に行って、知ったの。その先生は『＊＊神学校』ってその時は言わなかったんだけど、『僕は神学校でも年に 1 回だけ教えに行っているんだよ』って言ってたのね。で、その先生が、ガンのほうの主治医の先生と話し合ってくれて、『性同一性障害の人をこの病院で受け入れるのは、あなたが初めてだ。ケアをするのも初めてだし、入院してくるのも初めてだし、私たちにとっては全く初めての経験だから、あなたが何を望んでいるのかっていう要望を聞かせて欲しい。いろんな可能性があるだろうから、それは私たちも相談してまた考えるから。どうして欲しいか。部屋は男性の相部屋じゃイヤだよね？』『それは絶対あり得ないことです。女性部屋だとしても、今度は向こうの女性側から私のような人間を受け入れるのはあり得ないと言われるかもしれないから、必ずカーテンを閉めたような形で対応して欲しい。それは、きちっと守ってもらわないと困る』。そういういくつかの要望を出したんですよね。そうしたら、その 2 人のドクターが相談して、私を個室に入れてくれたんですよ」

――そうすると、個室料金は？

「個室差額代は、全部大学持ちだったんです。つまり、一般的な保険適用内の請求しかしないっていう決断をしてくれたんですよ。2 回入院して、つごう 1 ヶ月くらい入院していたにも関わらず、2 回とも私を個室に入れてくれて差額ベッド代は取らなかったんです。ご配慮頂いた。個室もけっこう広くて、中にちゃんとトイレもあって。抗がん剤を投与するからおしっこの量を毎日ちゃんと計測器に入れて測らなきゃいけないんですよね。つまり、むくみが出てくる場合は、尿の排泄がうまくできていない可能性があって。体重測定を毎日やらなきゃいけないとか、尿の量をきちっと測定して正常な範囲内で排泄されているか

っていうのをやるわけですよ。毎日ちゃんと手帳に書いて、それを看護師さんがチェックしに来て、毎日ドクターに報告が行って、その度に必要な処方をする。副作用が出ていたら利尿剤を飲むとか、必要な処置を施さないといけない。だから、私のような性同一性障害の場合は、女性の大部屋に入れるのではなくて、そういうことも配慮しなきゃいけないから、やっぱり個室にしようっていうことになって、トイレつきの個室にしてくれたんですよね。その代わり、それ以外のものについては私自身が全部、『パジャマも用意しますか？』って言われたんだけれども断って、『自分でできるものは自分で用意しますから』って言って」

――でも、洗濯はどうしてたんですか？

「*洗濯は、そこでしましたよ。コインランドリーみたいなシステム、洗濯機と乾燥機が一体型になってるので、そこで洗濯していました。*

で、2 回抗がん剤投与のために入院した後、『手術ができる可能性がある』って言われて。一縷の望みを持って、『＊＊センターに良い外科医がいるから、とにかく退院したらすぐそこに行って手術してもらいなさい』って。＊＊センターにも、そのドクターが手紙を書いてくれて。『B さんは性同一性障害です。私どもの病院では個室に入っていました。だから、できる限り配慮した治療なり、病室を準備して頂けないか』っていう手紙を書いてくれたんですよ。だから、＊＊センターでも個室に入れてくれたんですよ」

――それは、そのドクターに「ありがとうございます」っていうことですよね。

「*そのために私はひとつのサンプル、事例になったとすれば、それはそれで役に立ったなあと思うんですね。そういう対応をしてくれた人たちに本当に感謝しています。ごめんなさい。この話を思い出すと、つい涙が出ちゃう。*

それで、10 月末に手術をして、もう 1 ヶ月くらいで退院しちゃったんですよ。手術後 3 週間くらいは、ずっと点滴だけだったんですよ。最初 1 週間は集中治療室にいて、毎日のように少しずつ装着していた器具が取れて、身体が少しずつ解放されていく気分になっていたんだけど、食道の切除手術したところがなかなかくっつかなくて。結局、3 週間くらい水は飲めない、喉が乾いても口を濡らすだけで、『飲まないで、ちゃんと吐き出しなさい』って言われて。で、3 週間くらい点滴だけ。やがて、固形物を『大丈夫ですよ』って食べられるようになって。それで、点滴を外して、それから 1 週間くらいで退院させてもらっちゃったんですよ」

――本当はまだいなきゃいけなかったのに、帰ってきちゃった。

「『先生、私、退院したい』って（笑）。『そうか。でもなあ、固形物食べられるようになったからね。でも、必ず1週間後、病院に見せに来なきゃダメだ』『分かりました』って言って。それで、＊＊から＊＊までタクシーで帰ってきたんですよ。

その時は、もうホントにね、表現できないほど嬉しかった。『ああ、やっとこれで生きられる』と思った。12月中頃に手術して、その月のクリスマス、25日に退院してきたから」

第４項　牧師を志す、神学校入試に不合格　―トランスジェンダー差別―

Bさんは、医師の配慮により個室に入院でき、無事に手術を乗り切り、一命を取りとめることができた。この経験から、「神様に恩返しをしたい」と考えるようになり、牧師を志すことを決意した。しかし、ある神学校を受験したところ、あいにく不合格とされてしまった。それに関する語りは、以下の通りである。

「私、その前から思ってたのね。『もし、この命が生きることを許されたら、私は神学校に行って、神様のために働こう』って。それが、神様から与えられた最後の仕事だと思っていたので、『生きられるかもしれない』と思った時に、気力は少しずつ出てきたのね。神学校に行けるかどうかなんていうことは、その時は全然考えていなかったけどね。体力的にもとにかく衰えて、骨皮筋右衛門みたいになっているから、骨皮筋子か（笑）。座っていてもお尻が痛いし、見るからに不健康そうな痩せ方なの。

翌年の2月末くらいになって、私は以前行っていた＊＊教会に行って、2つのことを牧師に宣言した。1つ目の宣言は、ガンになったけど、もう一度教会に来たいと思った。とにかく、神様に恩返ししたいと思っている。それは、具体的に牧師になることだっていうふうにはその時は言ってないんだけどね。2つ目の宣言は、私は『あと半年だ』って言われた時に、『女性として生きる』ということを決断した。私は、以前この教会に来ていた時には話はしなかったけど、実は性同一性障害だ。だから、私は、これからは教会にスカートを履いてくる。それでも受け入れてくれると言うならば、私はこの教会の礼拝に参加したい。それでもいいか？　ダメならダメで受け入れてくれる教会を探すから、はっきり言って欲しい、という2つの宣言をして。それで、その時の牧師はあんまり心から喜んでという感じではなかったけれど、『まあいいんじゃない』みたいな感じだった。『いいんですね？』と。それで、私はそのように宣言してから、教会に行くようになった」

（中略）

「私は元気になって神学校に行く思いが湧いてきて、＊＊神学校を最初、受験したの。で、その教会から2人受験したのね。私ともうひとり男性がね。けれども、彼は合格して、私は不合格だった。私は、これは明らかに差別、要するにセクシュアル・マイノリティに対する差別だと思っているんだけれど、私はもう既に、当然女の子の格好をしているし、女

性として生きている。そして、トイレもお風呂も女性用を使わせてもらうし、女子寮にちゃんと入れてもらわなきゃ困るという要求を出して。そうしたら、＊＊神学校の面接試験をした教師のひとりが、私に『あなた、＊＊神学校のほうが向いているんじゃないですか？』って言ったの」

――面接の場でそんなこと言うんですか？

「*失礼ですよ（怒）！*」

――失礼ですね。「他の学校行けよ」って言っているってことだから。

「*私に対しても失礼だけど、＊＊神学校に対しても失礼ですよね。この言い方、あり得ないでしょ！　私が面接試験に来ているのはこの場所なんです。私、その時にピンときたの。これは差別だ。もうこんな学校入りたくない。こっちから断る。そうしたら、案の定不合格の通知が来て。私がセクシュアル・マイノリティとして、女子寮に入りたいとか、お風呂にしてもトイレにしても女性として扱ってもらわなきゃ困るとか、そういう要求を出したことに対してね、『面倒臭いな』と思ったんだと思う。それで、さっき言ったように『＊＊神学校のほうがいいんじゃないの？』って言われたのは、私にとっては全く失礼な言い方だと。*

*　実はおまけつきのことがあって、私が受験したより前に、＊＊神学校（B さんが不合格とされた神学校：筆者註）に入学して、途中で『実は性同一性障害だ』って言って、カミングアウトして、『女性として扱え』っていう要求を出した時に、すったもんだした学生がいたの。その人は、在学中にカミングアウトした。入学する時のカミングアウトじゃなくて、入って 2、3 年してからカミングアウトした。そして、学生全体の修養会の時、1 泊する時に、『女性として部屋を当てがってもらわないと困る。男性の相部屋みたいなことをされちゃ困る』って、彼女は言ったらしい。そうしたら、学校側は拒否した。『だったら来なくていい』みたいな。そしたら、今度は周りの学生のほうが応援してくれて、学校側に抗議してやっと渋々学校側は 1 部屋を彼女のために提供したっていうことがあったようなのね。だから、学校側は、そのことについて相当いらついた経験があるのよね。私が入る前、2、3 年前に。そういう残渣が彼ら（B さんが不合格とされた神学校のファカルティ：筆者註）の頭の中にあったんだと思う*」

――「またか」みたいな。

「*そうそう。『またこんなややこしい奴が来た』って。だから、『アナタは＊＊神学校のほうが向いているんじゃないの？』なんて言ったんじゃないかと思うんですよね。*

で、一緒に受験したメンバーは、ペーパーテストもあって、(受験の帰り道で：筆者註)内容を私に聞きに来たんです、『あの英語は何て言うんだっけ？』って。で、私が答えたら、『あっ、そうか、そうだった！　書けなかったよ』みたいなことを言っていたの。同じ教会から一緒に受験した帰りだから、帰りもずっと一緒で、そんな話しながら帰ってくるわけですよ」

――一緒に電車に乗って、みたいな。

「*そうそう。で、この問題はああだったこうだった、みたいなね。もう内容は忘れちゃったけど。だから、その中でだいたい推測はつくじゃないですか*」

――そうですね。

「*(同じ教会から一緒に受験した彼は：筆者註）自分に自信のある点数は取れてない、みたいな感じ。でも、合格するだろうなとは思っていたけど。それでも、私は落ちたんですよ。私は腑に落ちないところはあるんですけどね。結局、落とす理由は何でも良くて、そういうことで人を扱うんだということが分かった時に、＊＊神学校がイヤになっちゃってね*」

第５項　神学校入試に合格、入学、性別適合手術

B さんは、神学校に不合格となった後、知人の助言を得て、一念発起して別の神学校を受験、合格した。また、神学校在学中に性別適合手術を受けた。それに関する語りは、以下の通りである。

「*その後（B さんが＊＊神学校を不合格になった後：筆者註)、知人の＊＊さんと会って、この話をしたら、『その面接官の話じゃないけど、私は、B さんは＊＊神学校（面接官から勧められた神学校）に向いていると思うよ。＊＊神学校なんかに入ったら、あなた、先生たちとぶつかっちゃうわよ。それは得策ではない。＊＊神学校のほうがいいんじゃない？』って言われたの。だけど、『私は働かないと食べていかれないから、昼間の＊＊神学校に行くのは、働けないんじゃないかっていう不安もある』って言ったら、『そっか、そういうふうに思うんだったらしょうがないよね』って。それで、＊＊さんからそう言われてから、＊＊神学校のホームページを見たりいろんなことを調べたりしてから、後で電話でも聞いたのね。そうしたら、『土、日、月と休みだ』って言うわけ。勉強自体は火曜日から金曜日までなの。私はそれを聞いた時に、『なんだ！　そうか！』と。私はその時は既に夜勤の介護の仕事をしていたから、『それなら金曜日の夜と日曜日の夜、夜勤の仕事できるじゃない。それで、日曜日に教会に行けばいいんだから。2 回できればなんとかなるかもしれない』と思って。それから必死に必要経費いくらかかるのか、寮費から何から全部計算して箇条書*

きに出して細かい計算をして。そうしたら、夜勤で 2 回くらい働けば、なんとかなりそうだってことが分かったのね」

――夜勤で週 2 回？

「*週 2 回やれば、月に 8 回から 10 回くらいは仕事ができるじゃない。それで計算して、『なんとかいけそうじゃない！　昼間の＊＊神学校でも行けそうだ！』と思って。それで、＊＊年の秋に＊＊神学校を受験して、合格をもらって、＊＊年の春から晴れて通い始めた*」

――おめでとうございます！

「*ありがとう*」

――そして、今、4 年生。

「*そうですね。最後の 1 年。あとまだ頑張らなきゃいけないことがいくつかあるんだけど、まあ、それは生きている限りはありうることだから。長い道のりだったけど、やっと、なんとかね。＊＊神学校では入る時から、『ちゃんと女性として女子寮に入れてもらわないと困る。授業でも全部女性として扱って欲しい。戸籍上はまだそうではないけれど』と。*

で、その間もずっとドクターには性別適合手術のアプローチはしていたのね。＊＊大学のドクターにしてて。それで、やっと、1 年生の 12 月の時に『もしクリスマス頃で良ければ、ベッドが空いてるよ。手術を受けられるよ。どうする？』って話をくれて、もう 3 年越し、4 年越しくらいに待っていたから、最初のうち、ガンで身体が弱っていた時は、性別適合手術ができるかどうか分からなかったんだけどね。でも、ホルモン注射だけは最低やりたいなと思っていて、打ち始めたら少し元気が出てきたから、『ああ、性別適合手術も受けたい』と思って。それから、＊＊年の 12 月に手術をした。やろうと思ってから、もう丸 4 年くらい経っているわけね」

――1 年生の時ですよね？

「*1 年生の最後ですね。1 月まで授業はあるんですけど、12 月はクリスマス休暇で丸々休みですけど、『1 月の授業は手術後のため出られない』と言って。役所にもいろいろ戸籍を取り寄せたりとかしなきゃいけない作業があったから。単位は全部取れたんだけれども。そういうことを事前に言っていたのね、＊＊神学校に入る時からね。*

それで、寮に入る時に、全部今までの持ち物を処分、断捨離して。一番大変だったのは、それまで＊＊に住んでいて泌尿器科で女性ホルモンの注射を打ってもらっていたのね。そ

して、＊＊に引っ越して来た時にホルモン注射を打ってくれるところがあるかしら、理解のある病院があるかしらっていうのが、すごい不安だった。いわゆる『トランスジェンダーの人もホルモン注射を打ちに来ていますよ』っていうことをコマーシャルしているところってそんなに多くないんですよね。トランスジェンダーが読むような本にはそういう病院が載っているんだけど、ほとんどが歌舞伎町の病院（笑)。で、いろいろ探しているうちに、レディスクリニックで1軒打ってくれるところが＊＊にあったんですよ」

――あ！　近いですね！

「うん。良かったなぁと思って。それで、それまでの＊＊のドクターに『実は引っ越すので』と言って、紹介状を書いてもらって。それで、3月末に寮に入って、すぐにそのレディスクリニックに行って、『注射を打ちに定期的に来たい』と言って。で、順調に注射を打てるようになった。1回で＊＊円だったかな？　保険が効かないで。それで、手術を受けてから、保険証も女性になった、要するに、戸籍上も女性なので、『女性の病気に必要な注射』ということで保険適用が始まったんですよ」

――それ、意外でした。性別変更後は保険適用される？

「そうなんですよ」

――理由がこじつけっぽい感じしますけどね（笑)。

「そうね（笑)。
*　私の場合、診断書、裁判所に審理をお願いした費用、戸籍を全部集めた時の費用、そんなものを全部入れたら＊＊万くらいかかっているんですよ。それで貯金が全部なくなった。せっかくガンの手術を乗り越えて貯金したのに、一気になくなったんですよ。今度また、寮を出なきゃいけないから、寮を出る時の費用でまたなくなっちゃう（笑)」*

――そうすると、今は火曜から金曜は学生として、

「いや、今は4年生だから授業がほぼない。週に1回だけ、金曜日の2限だけ授業なんですよ。あとは卒論と教師検定試験の準備がある。卒論が終わるまでは、仕事の回数はすごく減らしちゃっているんです。それが終わったら、頑張ってまた週 3 回くらい仕事しようと思っているんです」

――今のところは、夜勤の介護の仕事？

「*そうですね*」

第６項　健康保険証や診察券の性別欄を裏書きにしてもらうために交渉　―自治体、病院によって異なる対応―

性別適合手術後、B さんは市役所で交渉して健康保険証の性別欄を裏書きにしてもらうことができた。しかし、大学病院で同じことを要求したところ、それは叶わなかった。自治体や病院によって対応が分かれている現状について、前項に続く語りとして以下のように語られた。

「*私はいろんなところで、先輩であるトランスの人たちの苦労や経験を聞いたり、本を読んだりしてきた中で励まされたことっていっぱいあるんですよ。例えば、市役所で保険証の表書きに『男って書くな』っていう要求を地道に活動してきたトランスの仲間たちがいてね。今までは保険証の表に『男』『女』っていう性別が入れられていたわけですよ。ところが、トランスの人たちは『これは苦痛でしかない』と。で、先輩たちが役所に掛け合って『性別を書くなとは言わないけど、表から堂々と見えるような状態じゃなくて、裏に書いてくれないか』ということを、何年もかかって戦って、勝ち取ってきた権利なんですよね。で、そういう経験を知っていたから、私は＊＊市役所で最初に性別の裏書きを要求した人なんですよ*」

――そうなんですか。

「*第 1 号で、国民健康保険を発行する窓口の人に『こんな経験は初めてです』って言われたの。でも、『そういうことがあるんですね』って。それで、その窓口の人と、担当の人と、係長か課長か、最後は部長も集まってきて 4 人くらいで話し合いをして、30 分くらいかかって結論を出して、『分かりました。今回、裏書きするようにします』って、裏書きしてくれたんです。それで、私が第 1 号だった。*

その後、その不快感というものが他のところでもあることが分かって。診察券の性別はだいたい M か F でしょ。ところが、私が行ってた＊＊大学付属病院は『男』『女』って漢字で表記する、珍しいタイプの診察券 (笑)。私は事務の人に『私はトランスジェンダーだ』と言って。その時すでに、ドクターに書いてもらった診断書の写しをいつも折りたたんで持っていたんですね。例えば、女子トイレに入った時に、『あの人、男なのに女子トイレに入ってる』って言われて、警察でも来たら困るから、私のお守りみたいな形で持ち歩いていたんです。『この者は性同一性障害で女性として生活している』ということが書かれてある診断書なの。だから、それを事務の人に見せて、『この診察券に書かれている『男』とか『女』とかっていうのをなんとかして欲しい。そもそも、なんで診察券に『男』とか『女』

が必要なんだ。必要ないでしょ。だって、磁気ネットに情報が入っているんだから。だからね、特段、名前だけでいいでしょ』と。それで、『拾った人が分からないから』みたいな言い訳を言うから、『そんなの、拾った人があなたのところに届ければ、すぐに分かる情報でしょう。そんな言い訳じみたことをして私をごまかすようなことをしないで』って言って。それで、抗議して、1回目は『検討して欲しい』と。私、その時は3ヶ月に1度しか病院に行っていなかったから、3ヶ月後にまた行って『あの話はどうなりましたか？』って。今度は係長と事務の人が2人で出てきて『いや、実はそんなことはしていないんだ。お金がかかるし、どうのこうの』って、いろんな言い訳をしてるわけ。私はひとつひとつ論破して、『おかしいでしょ、あなたの言っていることは。そんなことは磁気ネットでピッとやればすぐ出てくることなのに。『名前を入れるな』っていうのは困るかもしれないけど、生年月日とか性別は、なんでここに必要があるんだ。あなたたちの説明は、なんの説明にもなっていない』『他の人まで全部それをやるようになったら、膨大な変更費用が発生する』とか。それで、私は『納得できる説明がないと、私は引き下がることはできない。私の思いは私と同じような不快感を感じる人がこれから現れてきた時に、私は先例にならなければいけないんだ。だから、私はこういう要求をしているんだから、そんな訳の分からない中途半端な答えで済まさないでくれ。だから、もう一度検討して欲しい』と。で、また3ヶ月後に行ったら、今度は、課長が出てきて、それでまたすったもんだして。それで、『また3ヶ月後に来るから、その時にはちゃんと答えを用意しておいて下さい』と。そしたら、3ヶ月後に今度は部長が出てきたの。だいぶ進歩したな、みたいな（笑）。それで、その後、私が＊＊に引っ越して、話が途絶えちゃった。その病院に行かなくなっちゃったから。向こうは『やれやれ。もうこんなうるさい奴に関わらなくて済む』と思ったんだろうけど。でも、そういう蓄積、実績があると、『こんな話、過去に聞いたことあるぞ』ということになるんじゃないかと思う。今や、私が抗議した当時とは違って、LGBT という言葉が広がって、セクシュアル・マイノリティの人たちがいるんだということはだいぶ認知が広がってきたでしょ。そういう人たちにどういう対応をするのかを考えている人たちがいるんだということについては、だいぶ認知が広がってきたので、もし私の後に抗議する人がいなかったとしても、その病院自体が考え直して、『もうちょっとLGBTの人たちが生きやすいような環境を、病院も考えなきゃいけないんだ』っていうことに気がつくんじゃないかと。そういう抗議があったがためにね。

それで、私は＊＊に引っ越してきた時、住民票を登録して、『実は、私は性同一性障害だ。保険証の性別欄はなんとか裏書きしてくれないか』ということを＊＊市役所でも言ったんですよ。そしたら、なんと、＊＊には既にそういうシステムが存在しています。『いや、大丈夫です。ウチではそういうふうにしています。でも、もしよかったら、あなたが性同一性障害だということを証明するものがあったら、例えば病院の診察券とか、そういうものがあったらありがたい』と。そうしたら、私はその診断書を持ってたでしょ。で、『古いんだけれどもいいか？』『なんでもいいです』と。『ちょっと古い診断書なんだけれども、実

は困った時に警察とかに見せることができるようにいつも持ち歩いているものがあるから、これでいいですか？』『これでいいです。大丈夫です』って。すぐその場で裏書きしてくれた。『そういうシステムは既にあります』って。やっぱり＊＊万も人口のある市は違うなと思ってね。

だから、そういうふうにどんどん市そのものが情報を仕入れて、私たちがどこか関係のないようなところで発信していると思ったとしても、それはやっぱりどんどん社会の中に浸透していく可能性があるんだということですよね。だから、ここで言っている意見はここで言っているだけじゃなくて、やっぱり人づてに浸透し、聞いた人がなにかにちらっと書いたとか、SNS でちらっと広がったっていうだけでも拡散していく。そういう広がりっていうのはとっても大事なことだと思う。そういう役割が私たちにはある。発言や思いを口にするだけでも、社会に対する影響力はゼロではないということですよね。それはとっても大切な積み重ねになっていくと思う。そういうつもりで、私は『無駄なことはない』と思って、話をしたいというスタンスなんですよね。私の場合は、直接命に関わること、余命 6 ヶ月の命に関わることから出発して、やっと今まで抱えていた葛藤を振り切ることができて、女として生きるという決断をして。今はこういうふうになって卒業した後も、今度はひとりのキリスト者、伝道者として、非常に偏った中で安住してしまっている側面のある教会の中で、教会って別に固有の建物の中だけではなくて、教会という世界の中で、少しずつそういう発言を全然関係ないようなところでしているつもりでもちゃんと浸透していく。時間はかかってもね。そういう仕事を私は神様から託されていると思っているので。イエスの愛を伝えるっていうのは、特定の人に伝えるのではないからね」

第３節　　Ｃさん

インタビュー日：2018 年 10 月 7 日
インタビュー時間：2 時間 25 分
年齢：30 代

C さんは、出生時の性別は女性であったが、男性として過ごした期間を経て、現在は X ジェンダーとして生活している。職業は、古着屋店員、工事現場の作業員、製造業、料理人、牛丼店店員などを経て、現在、介護職である。

なお、このインタビューでは、C さんの紹介者であり、ゲイ男性であることをカミングアウトしたキリスト教牧師の D さんも同席した。C さん、D さん、筆者の 3 人で、ファミリーレストランにてインタビューを行った。

第１項　Ｃさんの生い立ち

まず、C さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次

のように述べている。

C さん「*セクシュアリティは、FtX ですが、最近はレズビアン寄りです。生まれた時は女の子だったので、普通に可愛い恰好をしていました。自分としては、男女どっちとも思っていませんでした。子供の頃からずっと中性的というか、どちらかといえば男の子と遊ぶことのほうが多かったですが、かと言ってすごく男の子っぽくなりたいという訳でもなく、『戦争ごっこ』みたいな男の子っぽい遊びというよりは、『イモムシごっこ』みたいな、なんとも言えない、男らしいとも女らしいともどっちともつかないような、意味のわからない系の遊びが多かった。女の子のコミュニティで女の子に適合して遊ぶことはなかった。見た目が女の子なので、一応女の子の遊びに振り分けられてしまうのですが、っていうか、『(オマエは：筆者註）そっち（女の子のほう：筆者註）で遊べ！』みたいになるじゃないですか、これくらいの年代になると。振り分けられえても、確実に浮いているじゃないですか。近所で男の子がたくさんいたので、そのへんと遊んでいました*」

――違和感なく溶け込んでいた？

C さん「*何も考えていませんでした。別に男の子になりたいとも思わないし、ただそこに人がいるから一緒に遊ぶような感じでした。普通の人は『男の子／女の子』という振り分けがちゃんとあるじゃないですか。自分だけはそれがなかった。なんとなく、『噛み合わないな』とは感じつつ。*

小学校くらいになると、男の子は男の子でかたまるので『オマエはあっち行け！』みたいになるじゃないですか。で、なんとなくぼっちになった。女の子ともあんまり話が合わず、なんとなくぼっちになって。

高校くらいの時に、とりあえず『自分は女性らしい』と気づいた。中学でも制服はあったはずなんですけど、なぜか高校の時に『(自分は：筆者註）女子だったらしい』と気づいた。なぜ中学ではなく高校の時に気づいたのか、難しいんですけれども。中学の時は、普通に、どうなんですかね、う～ん、難しいですけれども･･･。中学の時の先生が、26 くらいの若いお兄ちゃん先生で、普通に空手の技とか教えてもらったりして、なんとなくあんまり女子じゃない感じだった。中学でも女子の制服を着ているはずなんですけれども、なんでそこで女子と気づかなかったのか。

もう全然分からないんですけれども、でも、なぜか高校の時です、とりあえず（自分が女子だと：筆者註）気づいたのは。中学までは、途中で変わるんじゃないかな？　という感じがあったのかもしれないです。中学の時は、ウチの母が『18 を超えたら家から出ていく』みたいな話をしていたので、『じゃあ、大人になったら妻子を養わないといけないのかな、めんどくさいな』みたいな感じでした。なぜか。なぜか。ちっちゃい時に『大人になったらお父さんになる』みたいな感じで思っていたんで」

――ん？　「妻子」って言った？

C さん「*『妻子』って言った*」

――そしたら、自分は男のつもりだった？

C さん「*いや、男の子だと思っていたわけではないんですけど。すいません、たくさん謎なところがあるんですけど（笑）。なぜか『妻子を養わないといけない』と思っていた。旦那っていうか、男とか女とかっていうのが全然。『男性はお父さんをやる』みたいな感覚ではなく、『私はお父さんをやる』のかなと。中性っていうのも最近気づいたくらいなんで、もともと（男女：筆者註）どっちでもないんですけど、とりあえず（自分は：筆者註）お父さん枠なのかなと。普通に男の子が同性だという感覚もなくて。男の子は男の子。で、私は私、みたいな感じで。*

で、高校くらいになると、いよいよ。中学までは、『途中で学ランに変わるんじゃないのかな？』みたいな思いがあったんですけど、高校くらいになると、流石にこれは男の子にならないだろう。そのままこっち側の路線で行くんだなということが流石に分かってきた。そのへんからちょっと憂鬱になって。で、その頃に金八先生とかやって。だから、どっちでも、女性じゃないんだったら、男性なのかなみたいな感じになって。で、とりあえず FtM をやってみた」

D さん「*いつ頃まで、FtM だと思っていたの？*」

C さん「*いつだっけかなぁ～？　ホルモン注射をするかしないかも、けっこうしばらく悩んだんですよね。なんとなく（自分の身体感覚が：筆者註）なんか違うような感じはあったので。とりあえず、チェンジし始めたのは、高校の後くらいからか。チェンジ、FtM を始めてみたのはそのへんからです。う～ん、で、ホルモン注射を実際に始めたのは 23 からです。*

なので、けっこう後からです。普通、『もう即！』みたいな感じで（ホルモン注射を：筆者註）入れるんですけど、（私の場合は：筆者註）しばらく悩んでから入れて。いつから X だったのか、ちょっと思い出せないんですけど。

もはや分からない。いつだったっけ、D さんに会ったの。D さんに会った時は、FtM でした。でも、FtX というものが存在することを途中で知って、それが一番（自分にとっては：筆者註）しっくりくるなあと思いました」

第２項　就職、ロールモデルとなる当事者との出会い

C さんは、高校卒業後、就職した。いくつかの仕事を経験した後、現在の職場の上司が理解のある人だという語りから、かつてロールモデルとなるセクシュアル・マイノリティ当事者との出会いにより自己理解を深めたことと、現在の職場でも X ジェンダーのまま働けるようになったという語りへと展開した。それに関する語りは、以下の通りである。

C さん「*今の職場の上司がものすごい理解があるというか、たぶん私よりは LGBT に詳しい方なので、今、普通に X ジェンダーとして働けています。*

そうしたら、逆に、ものすごい勢いで自分の中で（自分のジェンダー、セクシュアリティの：筆者註）受け入れが進んでしまって、むしろ、今はレズビアンでいようかなという感じです。30 を超えて、結局レズビアンの女性が好きだなと。基本、（男女の：筆者註）どっちでもイケるんですけど、どっちでもイケるというか、あんまり相手の性別にこだわらないんですけど、どちらかというと、よりレズビアンの女性のほうが好きかなみたいなのがあって。好きな相手と付き合うにあたって、自分の性別はあんまりどっちでもいいなというふうに変わってきました。以前は、『自分は男として女性の相手を』ということじゃないと無理だったんですけど、今は自分の性別はどっちでもいいから、とりあえず好みの人と付き合いたいなという感じになってきたので、じゃあ、レズビアンでいた方がより有益なのではなかろうかと。

でも、う～ん、これまで男性としてずっと過ごしてきたので、いきなり女性をやるのも難しいので、今はとりあえず『男の娘』みたいなナゾのポジションにいます（笑）。女装子的なポジションにいます。

あと、たぶん出会いもあると思います。＊＊ちゃんとか。＊＊ちゃんかっこいいなと思った。そんな感じで、人に影響されたりして。D さんに会えたから、みたいな」

――D さんに会った時は FtM になろうとして、＊＊ちゃんに会った時は FtX になろうとした？

C さん「*そこはあまりないんですけど（笑）。自分の場合は、やっぱ、自分の中で『こういう人のほうがいいな』みたいな対象がビアンもしくはゲイばっかりだったんで、自然とそちらに引き寄せられていったんじゃないかなと思います。あ、そうそう、ロールモデルになる人には、めっちゃ相談してました*」

D さん「*それ、大事だよね*」

C さん「*それこそ、＊＊さんとか。＊＊さんを質問攻めにしてた（笑）*」

D さん「＊＊さんに相談する人、多いの」

――へぇ～。

C さん「っていうか、本人が（今、この場に：筆者註）いないんで勝手に言いますけど、私の中で『お父さん』は＊＊さんなんです」

――あ、そうなんだ！　なにか具体的なエピソードで、印象深かったことってありますか？

C さん「え～っ、なんか、あらゆることで相談してるから（笑）。自分の中で、結局＊＊さんがお父さんでもあるし、ロールモデルなので、『＊＊さんはどういう選択をするんだろう？』みたいなのもありますし、とりあえず＊＊さんに聞いてた。たぶん、＊＊ちゃんにも聞いてるんですけど、＊＊さんのほうが家が近いんで（笑）」

――そういう理由かよ。

D さん「そういう理由かよ」

C さん「そういう理由ですね～（笑）」

D さん「LGBT で、ロールモデルになる人で、かつ、家が近い人（笑）に、いつも相談してました」

（中略）

D さん「いろんな話を聞いたけど、ロールモデルがあるといいんだろうなというのは感じたね」

C さん「そうなんですよ。職場に X ジェンダーのロールモデルがいたっていうのがすごい」

D さん「すっごくそれが居場所を作っているような気がする」

C さん「その人、今は配属が違うんですけど、自分が（その部署に：筆者註）行ったばっかりの頃は。確かそれで『えっ？！上司で、X ジェンダー？！』って（笑）」

D さん「めっちゃ嬉しいよね！」

C さん「*すげー！　みたいな*」

――けっこう歳の方？

C さん「*いや、意外と若いんですよ。で、頭もすごいキレるし。仕事も『周りに誰にも文句を言わせない』みたいな感じで*」

D さん「*それは、威圧的という意味ではなくて、みんなを説得できる人っていう意味？*」

C さん「*そうです、そうです。なんか、男の仕事の仕方みたいなものじゃないです。すごい X という感じの仕事の、できる上司だったんで*」

D さん「*あ～*」

C さん「*えっ？！　すげ～！　って思って。それはだいぶ大きかったですね*」

――なるほどね。

C さん「*説明する時も『それは、こうじゃないよね』みたいな時に、なんかその、男の威圧的な感じでもなく、女性の感情的な感じでもなく、ちょうどいい感じ！　男の理路整然とした感じで、女性の柔らかさも加わった感じ*」

――素晴らしい！

D さん「*素晴らしい！*」

C さん「*すごいですよ！　ホントに！　もう、非の打ち所がないですよ。で、すごい勉強しててて、詳しいんですよ。で、何かを聞いたら全部答えられる、みたいな。訪問介護の介護保険制度はこうなっていて、この施設はこういう法律に基づいて、こういう決まりになっているから、こういうふうに考えればいい、みたいな感じで。更に、無駄を省くんで。男の人だと、割とひけらかしちゃうじゃないですか*」

――います！　います！

C さん「*（男の人は：筆者註）無駄なところまで話しちゃう。（職場の X ジェンダーの先輩*

は：筆者註）そこがなくて。ちゃんと省いた状態で、ちゃんと分かるように、受け取りやすい状態でくるので。で、研修なんかやると、オネエをちょっと盛るんですね」

――リップサービスみたいな感じ？

C さん「*まあまあ。で、おばちゃんたちのウケが最高なんです（笑）*」

（中略）

C さん「*あ～。でも、介護の仕事をしてみて思ったのが、意外と性別を問われる*」

D さん「*そこ、聞きたい*」

――そこ、聞きたい。

C さん「*介護ですか？*」

D さん「*なぜ性別が問われるのか*」

C さん「*問われるっていうか、まあ。女性だったら正直、羞恥心もあるじゃないですか。『男の人に風呂に入れて欲しい』って言う人もいるけど、『男の人に風呂に入れられるなんて冗談じゃないわ！』っていうお姐さんもいるんで。コミュニケーションを取る時に、やっぱり、男性だったら男同士のほうが話しやすいとか、『男同士のコミュニケーションを取りたい』って言うおじいちゃんもいっぱいいますし、有老の割と元気な人がけっこういるところなので*」

――有老って？

C さん「*有料老人ホーム。どっちかっていうと、割と、車いすの人しかいないところというよりは、けっこう自分で歩けるんだけどまあいろいろ身体に故障も出てきたりして、一人暮らしは厳しいけど、訪問介護のヘルパーさんも必要な時呼んで、というところなんで。なので、コミュニケーションがだいぶ問われるんですよ、職場的に。なので、性別はどう考えても問われる*」

D さん「*まあ、男性か女性かっていう線引きがどうしても出てきちゃうんだね*」

C さん「*でも、なぜか、私このままの状態で働いていても、なぜか（性別の：筆者註）垣根がなくなっていったんですよ*」

D さん「*なくなっていった？！*」

C さん「*なんか、なくなっていって。最初、おばあちゃんとかが『ヘルパーさんは女性限定でお願いします』みたいな感じで入ってくるんですけど、なぜか私はラインに入ってくる*」

――へぇ～。嬉しい？　それ？

C さん「*嬉しい*」

――あ、嬉しいんだ。

D さん「*中性扱い*」

C さん「*なんか中性扱いになって。逆に、私がいるところで『中性』という枠が生まれてしまった（笑）*」

D さん「*ははは（笑）。それ、すごい面白い話じゃん！*」

（中略）

D さん「*『C さんって、男？　女？』って聞かれることはないの？*」

C さん「*さすがに今までないです。どっちかっていうと『女性って思ってもらえないかな？』と思って（介護者のところに：筆者註）行くんですけど、『あら、お兄さんね！』みたいな感じになる。そこは変わんねーんだなと思って*」

D さん「*利用者さんから？*」

C さん「*そうですね。『あら、女の子だと思った』って、最初女の子だと思われていたことはあるらしいです*」

D さん「*喉仏のせいっていうのもあるかもね。声と*」

――やっぱ、そこは大きいんですね。

D さん「*声とか喉仏とかで、一応男性として認識されつつも、女性の利用者さんで…*」

C さん「*でも、なんか、この人、自分のこと『私』だし、喋り方オネエなんだよな、みたいな（笑）*」

D さん「*ゲイだと思われたのかね*」

C さん「*でも、なんか、その、パートさんの一部にはカミングアウトしてるんで、だからその、一回ホルモンバランスが崩れて、だいぶ女のほうに傾いたことがあったんですけど、生理が戻ってきたり。で、その時にどっちに思われてるのかなと思って聞いたら、『みんなアナタのことはホモだと思っているから、大丈夫だよ！』って、すごい勢いで慰められたことがあって。まあ、ホモっていう言い方はしないけど、職場のゲイの先輩がいるんで、『アナタのことはみんな、誰々さんの系統だと思っているから！』って言われて*」

D さん「*ははは（笑）。違うけどまあいいや、みたいな感じ？*」

C さん「*あんま間違ってないからそれでいいです、みたいな感じで*」

――あ、そう。そこは特に気にしてないんだね。

C さん「*なんか、ジャンルが新たに生まれるっていう！（笑）*」

D さん「*中性として、職場で働ける雰囲気っていうのはいいねぇ！*」

C さん「*そうですね。初めてですね*」

――それは、あんまり聞かないなぁ。

D さん「*聞かないね*」

C さん「*そうなんです…。あぁ、そうなのかなぁ…*」

第３項　トランスジェンダーコミュニティの中あるヒエラルキー

インタビューの中で、トランスジェンダーコミュニティのヒエラルキーに関する話題に

なった。当事者コミュニティの中で、マイノリティの中のマイノリティの人々の「生きづらさ」や、「中間的な人々」の居場所のなさが端的に示されている。C さんはご自身の経験を熱く語って下さり、D さんも知見を語って下さった。その部分の語りは、以下の通りである。

D さん「*実は問題になってきているのが、トランスジェンダーの中のヒエラルキーの問題*」

C さん「*ふふふ（笑）、いつものやつ！*」

――ああ、いつものなの？

D さん「*すごい問題になっているけど、一番上に君臨しているのが性別も変えて（法的にも：筆者註）結婚した人たち。その下に法的な性別が変わった人たち、その下に法的な性別が変わっていない人たちがまだいるんだけど。完成度が高いほど上*」

C さん「*完成度が高いほうが上。で、変わってないほうが下。で、私みたいな中間、X ジェンダーは『邪道』と言われます*」

D さん「*『えせトランスジェンダー』って言われるよ*」

C さん「*そうそう。だから、バレるとヤバいレベルなんですよ。職場の FtM の人からも散々『邪道！　邪道！』って言われてた*」

――じゃあ、当事者コミュニティの中で居心地悪くなっちゃいますね。

C さん「*当事者っていうか、だから、もう、逆に会わないですよね*」

D さん「*（当事者コミュニティには：筆者註）行かないでしょう*」

C さん「*たまにトランスの集まりみたいなのがあると、自然とテーブル分けされる*」

――あ、そうなの。

C さん「*自然と分かれていく*」

――MtF のテーブル、FtM のテーブル、その他、みたいな感じ？

C さん「*まあ、そんな感じです。テーブルで、もう明らかに『そこはゲイの集まりなのか』みたいなところと、『そこは女子、レズビアンの集まりなのか』みたいなところにきれいに分かれます*」

――仲良くならないの？　FtM と MtF って？

C さん「*ならない･･･、のかなぁ･･･*」

D さん「*どうでしょう*」

C さん「*もちろん人によると思うんですけど*」

D さん「*そのヒエラルキーをおかしいと思っている人もいるのよ。で、もっとひどいことに、SRS を受けた人に『どこで受けたの？』みたいな話から、『ナントカ医大』で受けたら、ヒエラルキーが上なの。で、『クリニック』って言うと、『あ～、あそこ』みたいな感じで低くて、その下に海外なのよ*」

C さん「*え～、そうなの*」

――あ～、海外は下なんだ？

D さん「*下って聞いたよ。クリニックと海外がどっちが下か、今、ちょっと分からないけど、美容形成外科でも（SRS が：筆者註）できるところがあって*」

C さん「*ナグモと埼玉医大でどっちが偉いみたいなの（＝論争：筆者註）もあるみたい*」

D さん「*知らない。医大のほうが上かも*」

C さん「*なるほど。知らない話がいっぱい出てくる。面白い。埼玉医大のほうは重鎮の先生が引退されて（SRS が：筆者註）できなくなったんじゃなかったでしたっけ？　あんまりそのへん詳しくないんですけど。FtM（＝C さんが FtM を目指すこと：筆者註）は途中で足を洗ってしまったんで（笑）、最近のそっちの情報が全然分からないんですけど*」

第４項　トランスジェンダーが憧れる服装とシスジェンダーにとっての性差別表現

トランスジェンダーにとっては憧れの服装が、シスジェンダーにとっては性差別的であるという興味深い語りがあった。その語りは、以下の通りである。

C さん「*MtF の人の気持ちは、FtX を通り越してちょっとビアンかもって思い始めた時に、ちょっと気持ちが分かりましたけど。結局、その、『本当はこういう恰好をしたいんだけどできない』っていうのが長いじゃないですか。で、憧れを具現化しようとすると、とりあえず今までで一番着たかったものを着ちゃうんですよね、どうしても*」

D さん「*反動だね*」

C さん「*でも、明らかに自分の年代と合ってない服をつい着ちゃうんですよ、最初*」

D さん「*すごい若作りになっちゃったり*」

C さん「*そんな 40 代くらいで、10 代が着るような服は着ないから！ っていうの、あると思うんですよ。でも、なんかこう、着ちゃう。『だって着たかったんだもん』みたいな*」

D さん「*ホントにそう言う。『だって着たかったんだもん』って*」

C さん「*もう、だから『ピンクを着たい』って思いながら 40 年ずっと生きてきて、着れるようになったら、そりゃピンク着るわな、って*」

――まあ、そうかもしれないけど。

D さん「*でも、その時に、特にシスジェンダーの女性たちが腹を立てるのは、『お前は男として生きていた時に、女をそうふうに見ていたんだな』っていうのが表れる*」

――ああそうか。それが（シスジェンダー女性にとっては）イヤなんだ。

D さん「*『女はスカートを履くものだ』という、スカートを押し付けられてイヤだったという女性たちがいっぱいいるようなところに『見て見てぇ～！』ってドレスで来るような。『その服ね、女性としてはとてもイヤなんだけど』『だって着たかったんだも～ん』って。どっちも言っていることは正しいんだけど*」

C さん「*それは、FtM が成人式で袴を履いちゃうのと同じかな（笑）。（イマドキ、多くの人は：筆者註）『袴、履かね～よ！』ってなるじゃないですか*」

――あ～、そうだよね。

C さん「*あと、『学ランを着たい』のも意味が分からないと思うんですよ*」

D さん「*FtM の人、学ラン着たがるね～！*」

――イマドキ、ブレザーじゃね？

C さん「*普通の男性からすると、『なぜその歳で学ランを着たがるのか、意味が分からない？！』となる（笑）。なんか、そういうのに近いかもしれない*」

――そっか、「そんな 40 代くらいで学ラン着てる人、いないでしょ！」って（笑）。

C さん「*抑圧されていたものがパンってはじけると、やっぱ、そうなっちゃうんじゃないですか(笑)*」

D さん「*MtF の人はね、ウェディングドレスを着たがる人がとても多い*」

――え～！ え、それ、バージンロードも歩きたいの？

D さん「*そうじゃなく、とにかくウェディングドレスを着たいの*」

C さん「*それ、完全にディズニーとかを見て（笑）*」

D さん「*それは、フェミニズムで考えると、『ウェディングドレスほど女性差別を表しているものはない！』っていうくらい、批判の対象だったりするのに、『だって着たいんだも～ん』って*」

C さん「*バトル～！*」

D さん「*『ウェディングドレスを着たい』と言ってる MtF と、『それが女性たちをどんなに苦しめているか分かっているのか！』と怒っているシスジェンダーの女性たち*」

C さん「*タイトスカートとか、めっちゃ嫌いそうですね*」

――誰が？

C さん「*女性たち*」

――シスジェンダーの女性たち？

C さん「*みんなってわけじゃないと思うんですけど、だいぶあれは差別的だと思う*」

――でも、MtF の人はタイトスカートを履きたがる？

C さん「*タイトスカートっていうか、普通に女性をやっていた人たちからすると、『これは絶対に差別的だ』と思うんだけど、今まで女性として生きていなかった人からすると、そういうのを見て憧れてきたから*」

D さん「*いるね～！　すんごいミニスカートだったりするね*」

C さん「*あ～、気持ちは分かるけど*」

第４節　　E さん

インタビュー日：2018 年 10 月 15 日、11 月 5 日
インタビュー時間：12 時間 49 分
年齢：30 代

E さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は、ゲームセンター店員などを経て、現在、介護士である。

なお、このインタビューは、E さんのパートナーである F さんも同席した。E さん、F さん、筆者の 3 人で、喫茶店と居酒屋にて行った。

第１項　E さんの生い立ち

まず、E さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

E さん「*生まれたのは＊＊です。生まれた年は＊＊年です。しょっぱなから、ややこしい話になるんですけど、＊＊っていう芸能人が私の父方のおじいちゃんです。私が生まれた時*

には、かなりしっかりと芸能界で活躍をしていて。母は比較的普通な人、知名度みたいな特殊性は持っていない家の人で。母は方針として、子供を『すごいお金持ちの子』として育てたくなかったみたいで、住む場所を＊＊に移して、そこで小さなアパートを借りて住み始めて、父と私と一緒に」

――ご両親が結婚された頃？

E さん「*はい。それで、年末とか誕生日とか、お祝いごとがある時にはおじいちゃんちに遊びに行って。大豪邸で。いわゆる普通の生活とすごい大金持ちの生活を行ったり来たりしている感じの生活をしていました。で、2 つの世界の境界にいるような認識が、昔からすごく強かった感じです*」

F さん「*お父さんは『普通の子とは違うんだ』って言ってたみたいだし*」

E さん「*うん。最終的に私がセクシュアリティのことについて目覚め始めたのが、まあ意識自体は幼稚園ぐらいからあったみたいなんですけど、はっきりとこっち（女性：筆者註）に移行したいと思い始めたのが中学生とか高校生ぐらいの頃だったんですけど。今、F さんが言ったみたいに、父母から『アナタは普通の子とは違うのだからね』というようなことは言われていて。例えば、私が仮に何かひどいことをしたら、おじいちゃんの名前に傷がつくというような。比較的そういうことには気をつけないといけない感じがあって、『アナタが暮らしている環境は普通の環境ではない』ということは、よく言い含められていたんですね。たぶん、それは私にとっては非常に重圧だったんですよ。母は、やっぱり、普通の子として育てたかったっていうのがあったみたいなんですけど、まあ環境が環境なので、やっぱり学校に入ると、みんな私のことを知っているんですよね。私、＊＊の（私立の系列の：筆者註）小学校、中学校、高校、1 年浪人して、大学に入ったっていう*」

――付属なのにどうして浪人したんですか？

E さん「*私の精神症状が一番出てたのが高校生のラストだったんですよね*」

――セクシュアリティのことで？

E さん「*も、そうですね。出席日数が足りないぐらい学校を休んでいたので、どうやっても上がれないということで、仕方がなかったんです。で、1 年間浪人して、大学に入った*」

――じゃあ、大学入ったら、割と昔から知っている顔がうじゃうじゃいる？

E さん「*いや、確かに顔自体はうじゃうじゃいるんですけど、私が 1 学年をずらせたことがすごくよくはたらいて。私、最初、＊＊学部に入ったんですよ。だけど、なんかやっぱり違うなと思って、2 年生になる時に＊＊学部に籍を移したんです。小中高と、私には常に祖父の名前が付き添ってくるんですよね。名前も顔も知らないような人が、誰も彼もが私のことを知っていて。私はそれがイヤだったので、もう人の顔と名前を全然覚えない子になった。人の興味がなくなっていって。たぶん、根底で信用できないと思っちゃったんでしょうね。だけど、1 年間浪人をして予備校に入ったら、予備校ではそれはまずなくなっんですよね。当然、私が何も言わなければ何も知らないから。で、どうにかこうにか大学に入り直して、最初＊＊学部に入った時には、名前は追っかけてきたんですよ。誰かが嗅ぎつけて、偶然。私が、なんて言ったらいいんだろうね、あれ、修学旅行じゃないけど*」

F さん「*オリエンテーション旅行*」

E さん「*そう。オリエンテーション旅行。行った時に、誰かが嗅ぎつけて。赤の他人っていうのが自分に近寄ってきて友達になろうとするっていうことが信用できないんですよ。で、『まだちょっとついてくるのか』とすごいイヤな気持ちはしたんですけど。その後、＊＊学部に籍を移したんですね*」

――「コイツと友達になっておいたらトクだぞ」みたいな。

E さん「*そういうのが普通にあった。その後、転学試験みたいな簡単な試験受けて、移って。そしたら、比較的ちっちゃな学科で、みんなだいたい内向きな人だったので、あんまり、おじいちゃんの名前はついてこなくなったんですね*」

F さん「*だいたいクラスに何人かいる、何考えてるか分かんない子が集まってる学科です（笑）*」

――あ～、なんとなくイメージが浮かぶ。

E さん「*その時ようやく祖父の名前が私についてこなくなって。ようやく自由を得た感じだった*」

――今、聞いた限りの話でいうと、ジェンダー、セクシュアリティでご苦労なさったというよりも、むしろ、おじいさまの知名度がついて回る苦労のほうが大きかった？

E さん「*ええとですね、これ両方関わってくることですよね。私が性別を変えることは同級生に知られることでもあるから、それを露わにする、カミングアウトしていくことは、おじいちゃんのところに響くっていうことを、すごく私は気にしていたんですよね*」

――なるほど。

E さん「*今、ネットもあるし、どんな話が広がるか分かったもんじゃないっていうのが、すごい怖いところがあるんですよね。今、（スマホ検索で：筆者註）検索すると、基本、一切情報発信はしていないので、私の顔や名前は一切出ないんですけど、＊＊に興味を持った人は、『子供は何人いて、何の仕事をしているのか』みたいなのはちらほらネットに上がるんですよ。*

私の存在は、家族関係の公式的なところからは削除されているような感じです。ただ、一応、おじいちゃん、おばあちゃんは、『芸能界にはね、アンタみたいな人はいっぱいいるのよ』みたいな感じのことを言ってくれて」

――アンタみたいな人？

E さん「*ええと･･･。ほら、あの『さそり座の女』歌ってる*」

――美川憲一。

E さん「*美川さんとか、美輪さんとか。『だからね、おじいちゃん、おばあちゃんには偏見はないからね』みたいなことは言ってくれる*」

F さん「*まあ、ジャンルは違うんだけどね*」

E さん「*ちょっと違う気はする（笑）*」

――なるほど。

F さん「*最初の大前提のハードルが高い*」

E さん「*なかなかそういう意味では。トランスをするまでに、自分の情報をできるだけ秘匿していくような工夫が要りました。*

同級生も、本当に以前から友人だった、ずっと友人だった以外には一切もうコンタクトを取らないみたいな。小中高と続いてきた友達で、今私が連絡取れるのは 5、6 人。で、そ

れ以外は、一切接触しないっていうような感じにしてます。でも、どうやら話は少し漏れているみたいで、私が住んでいる場所がそんなに変わってないので、どっかでやっぱり目撃されてるみたいで。私が信頼している友人が、『昔の同窓会に行く。まだつながりがあったらオマエのこと誘ってくれないかって言われたんだけど』『私は当然だけど、行かない。分かっていると思うけど、私のことは一切話さないでくれ。ただし、もしも私の話が噂になっていたら、それは教えて』って言って。『分かった』っていうことで行ってもらったら、『噂になってたよ』って。『性別変えたんじゃないか』みたいな話がちょっと広がってて、『それが俺まで流れてきた』みたいなことを教えてくれて。私からしたら、『マジで～』みたいな感じ。だから、すごい枷にはなってますね。

今でも、公に出るのがとても怖い気持ちはあります。会社でやっていることにしても、『もっと注目してもらいたい。発信していきたい。LGBT に働きやすい環境、こんなに整えたよ』っていうことで、ある程度発信していきたいと思っても、情報が隠されていない状態で自分の名前が出るっていうのが怖くてしょうがない。これは正直、私の中では、私がトランスしたこと以上の秘密になってしまっているので。結局、パートナーが女性なので、レズビアンであることが自分の中で隠すことのひとつ。で、それ以上なのがトランスした人間であるということ。最終的な、これだけは絶対に誰にも言うもんかみたいに思っている秘密が、自分の身内のこと。それに比べたら、もう MtF レズビアンであることは別にたいしたことねぇなみたいな（笑）、私の中には」

F さん「*それを最初、私に打ち明ける時も、すごいかしこまってたから、『なに？　身内が殺人してるの？』とか思って。最初、びっくりした」*

E さん「*そう。＊＊学部に移った時に F さんと出会って。*

で、もう中学生、高校生の頃から私はすごく自分の性別違和自体は抱えていて、高校生の時に女の子とお付き合いをする機会があったんですけど、その子とお付き合いしていくのがつらくてつらくて。その子のことが大好きだったんですけど、その子が私のことを男性として見てくるっていうのがすごいつらい。でも、その子のことは大好きっていうのが、すごいジレンマだったんですよね。その子は、当時の期待でいえば当然なんですけど、心を支えてくれるような、対等な立場の男性のパートナーが欲しかったんですよね。でも、私はどうしてもそうなれない。極端な話、なんかもう、自分の身体がニオイから何からイヤだったんですよ。もう何もかも、体臭から。『うぎゃあ～』って思って走り回ってもついてくるみたいな。髭とか生えてくるのも、もう全然許せないみたいな。全部ブチブチブチブチと引き抜いたら、ニキビだらけになった（笑）」

F さん「*女性の服に憧れはするけれども、それを着てしまうと自分の男性的な身体が余計に目立つから絶望するっていう。トランスジェンダーの人がそういう経験をするって話は聞*

いてて」

E さん「自分を見られるのも、自分の声を聞かれるのもイヤになって。小学校の頃、音楽の時間に歌が歌えなくなって。合唱とかでみんなの中に埋もれているのはできるんですけど。誰かに声を聞かれていると思うことがすごい恐怖になって。音楽の時間にお歌をみんなの前で、3 人ぐらいで歌って、先生がチェックするんですけど、これをどうしてもできなくて。もう泣きながら何度も何度も。歌ったほうが絶対ラクなのに、誰も変だと思ってないから。もうひとりでテストの時に、クラスの面々の前で泣きだしちゃって。自分の姿を見られるのもすごいイヤになってきて、自分も人の姿、人の目を一切見たいようになって。で、家に帰って部屋に入ったら、私、漫画やゲームが好きだったんですけど、あれって背表紙があるじゃないですか」

――背表紙？

E さん「はい。ほら、あの、ドラゴンボールとかの背表紙って、背表紙にちっちゃくキャラが描いてあるじゃないですか」

――あ～、そうですね。

E さん「その巻で活躍するキャラがだいたいピースみたいなことやってるじゃないですか。そういうので、目線がこっちに向いているのがもうダメで、背表紙を全部裏返して本棚にしまってたんですよ」

――生身の人間ではなく、背表紙の漫画の絵の目が自分のほうに向いているのもダメ？

E さん「生身の人間でなくても、もうダメになってて。見られてるような。自分を見ないで欲しいっていう。醜くてたまらないっていうような気になっていって。で、背表紙全部裏返して、私しか本棚に何が入っているか分からないっていう、ものすごい病的だった。今から考えると」

F さん「てか、病院行ってたね」

E さん「そうね。高校 2 年生ぐらいの頃に、スクールカウンセラーの先生のところにかかったら、その先生が『アンタは私の手に負えるレベルじゃないので、病院に行きなさい』と言って。で、病院に行ったっていうのが初めてですね。心療内科に通うようになりました。で、心療内科にかかった時も、最初、自分に対する嫌悪、自己嫌悪があまりにも激し

いのが何なのかどうしても分からなくて。でも、自分の中にはっきりと女性になりたいっていう気持ちはあったんですよ。『もうこの身体でいられない』みたいな。それを先生に打ち明けはしたんですけど、まだその段階では具体的な話には入らなくて、『慎重に見極めていきましょう。アナタが性同一性障害かどうかは、まだ分かりません。長いこと診ていかないと』って。で、長いこと診ていったけど、最終的にその先生は当然答えを出してくれなかったんですよ。そもそも私は、当時、女性に対してやっぱり恋愛感情強かったし、性的な欲求も女性に対して強かったので、たぶんそういうところで先生も悩んだんだと思うんですけど。

で、紆余曲折あって、大学でFさんと出会い、Fさんに、『アナタは女性になりたんだよね？』ってお話をしていくうちに、ある程度、『じゃあ、こういう服とか着てみたら？　私のスカート貸してあげるよ』っていうような感じで、多少手ほどきをしてもらったんですよ。その時、私の精神はもう荒れに荒れていて、前の彼女と破局してしまったので、自分が元の性別の存在として生きていけるのか、最後にもう一度挑戦してみようと思って。自分が一体どうしたいのかを分かるためには、もう一回女性とお付き合いをしてみるべきだって。で、Fさんと出会って、『私とお付き合いして頂けませんか』と話して、お付き合いをすることになり。で、Fさんのことは感情的にはどんどん好きになっていったんですけど、同時にやっぱり苦しみは全く解消されない。Fさんが私の性質を受け入れてくれても、全然解消されない。

その時に『トランスしよう』とはっきり決心して。情報自体はある程度仕入れていたので、女性ホルモン剤をタイとかから代理輸入で仕入れて、自分で勝手に初めて。

心療内科の先生は、『あなたがそうだとしても、今、正式に手伝うことはできません』っていうことだったんで、自分ひとりで決心して、始めて。で、Fさんにもそのことは伝えて、『イヤだったら別れてもらって構わない』って話して。Fさんは『ふざけんな！　そんな自分勝手が通るか！』と滅茶苦茶怒られたんですけど。もうその時、私の精神状態だと、とても耐えられないという感じになった」

Fさん「前から、『女の子の服が着たい』みたいなことは言ってて、『あれ？　女装子になりたいバイの子かな？』とか思ってて。で、『女装じゃなくて、性同一性障害だと思う』『性同一性障害なのか。じゃあ、しょうがないよね。じゃあ、女の子になるんだ。頑張って』みたいな。ただ、ホルモンの時はモメました。しかも産婦人科とか正しいルートを通さないで、タイからの個人輸入で薬理もよく分かっていない、成分も日本で認可されていないホルモン剤とかだったりすると、すごい危険性も高いので、それはすごいイヤだったし。Eさんは『Fさんがどんなにホルモン剤を飲むのがイヤだって言っても、私はもう止められない。そっちに進むしかないから。もし本当にFさんがイヤだったら、私を捨ててくれ』って、彼女は自分を人質に取ったんですよ。まあでも、性同一性障害で悩んでいる人がそういうことをする傾向にあるっていうことは後から分かったんですけど。『それはどうしても

やらなきゃいけないから』って、半ば押し切られる形もあったのかな、ホルモンに関しては。ただ、後々考えると、ホルモンやってからのほうが格段に性格変わったというか、明るくなった」

――明るくなった？

F さん「*全然違います。ただ、付き合ってて、一応彼氏だと思っていた人が『女の人になりたい』『なれるんだったらなっていいんじゃないですか』みたいなのしかなくて。むしろ、なんだろう、もし女の子になったら、買い物とかめっちゃ楽しいんじゃね？　女子の服を一緒に買いに行けていいんじゃない？　とか、そんなことしか考えてなかった。『彼氏でいてくれ』みたいなのは別に。『アナタの性格が明るくなって、アナタが幸せになれるんだったら、女のほうがいいならそれがいいわ』みたいな感じでしたかね。*

E さんがホルモン始めたのが＊＊年の＊＊月ぐらいですかね。最初は産婦人科に行かなかったけど、ちょうどタイでテロとかがあって」

E さん「*クーデターがあったんですよ」*

F さん「*あ、クーデターか」*

E さん「*で、薬の供給が滞った。で、その機会に、F さんが『ちゃんとした医療の手助けのあるところでやって欲しい』と言われて。で、私も、それは本当その通りだなと。もう国際情勢に振り回されて値段が上がったり下がったり、医療のケアが受けられないっていうのも問題だし。けど、心療内科では出してくれないって言ってる、っていうことで、ある産婦人科さんに『こういう事情なんですけど、ホルモン剤を出して頂けないか』っていうことを相談に行ったんですよね。その頃は移行の過渡期だったんですけど、その先生が診た時に、ホルモン飲まないとダメな人なんだろうなということは分かってくれたのか、『じゃあ、ウチの病院で出しましょう』と。全く普通の産婦人科だったんですけど、そこを選んだ理由が、産婦人科と内科もやっていたところだったんですね。男性も来るし、妊婦さんも来るというところだった」*

――男性が患者として来る？

E さん「*そう。内科の患者として来る。風邪とかも診てくれる。だから、私が昔の姿でも普通に入れる。で、行って相談して、『どうかお願いします』と言ったら、先生は『一応分かりました。でも、保険で出すことはできないので、自費診療になります。自分でお金を出してもらうことになる。あと、数か月に 1 回、血液検査を受けて下さい』って」*

F さん「*あの先生すごく親身な方で、他の埼玉医大の方だっけ、他の先生方にもいろいろ相談して聞いて下さって、薬の量の調整とかもなさってくれるんですよ*」

E さん「*『トランスのこと分からなかったので、知り合いに聞いて調べました』と言ってて。で、薬の量について、『このぐらいから始めてみましょう』みたいな感じで、相談して一緒にやってくれるようになって。そこから、1 か月に 1 回くらいの頻度でそこに行ってお薬をもらうようにして、3 か月から半年に 1 回くらい血液検査して、ちょっと健康診断もしてもらうようになって。*

で、その頃に私、実家から離れてひとり暮らしというか、友達とルームシェアして住むようになったんですね」

――大学在学中にルームシェアをする。引っ越した。

E さん「*その頃、私が移行を始めて。もう家族の意向なんかどうでもいいと思って、やることをやらないと私は死ぬと思ったので、自分で勝手に始めたんですね。で、父母にも無理矢理打ち明けて。父母はすごい嫌悪感を示していたんですけど、『もう知らん』という感じで突っぱねて。服とか F さんにいろいろ聞いて自分で買って、比較的中性的なものから入っていくんですね。で、もうそれが父母には耐えられないみたいで*」

F さん「*ホルモンやって、1、2 か月したらもう脂肪がつき始めるんですよ。半年ぐらい、もうお尻もかなり大きくなるから、それでバレたみたい*」

E さん「*で、もう母が耐えられなくなって、『もうアンタに出て行って欲しい。出て行ってくれ。ある程度の援助はするし、親としての縁も切らないけど、もうこのまま一緒にいたらもう縁を切りたくなる』『分かった』ということで。『引っ越しの代金出すから出て行け』と言われて、『カネがないんだから出て行けないんだから、カネ払ってもらえるならまあいいか』みたいな話で『分かった』ということで。ただ、引っ越す先も自分ひとりで暮らすのはやっぱりいろいろ不安だったので、ちょうどその時に、さっきちらっと話に出た、同窓会に行って私の情報とかを聞いてきてくれた友人が、『ひとり暮らしを始めるからルームシェアしないか』と声をかけてくれたんですよ。それだったら渡りに船だから『一緒に』って。その子は男の子なんですけど、当時の私もまだ男の子にも見える状態で。小学生からの同級生だったので、その子と*」

F さん「*親友だよね、幼馴染って*」

E さん「*その子と一緒に＊＊に移り住んで、ルームシェアを開始して。で、そこには＊＊年ぐらい住んでました。なので、ようやく、お薬とかも自分のおうちで受け取れるようになったし、医者に行くのもコソコソ隠れて行かずに済むようになり、自分で行けるようになり、F さんも私のウチに遊びに来れるようになり*」

――あ～。じゃあ、大学にいた頃は、割と自由な環境がやっと手に入った？

E さん「*ちょっとだけ自由になりました。ただ、私の精神状態が相当もう荒れに荒れていたので、たくさんこの人（F さん：筆者註）にもご迷惑をおかけしたんですけど*」

F さん「*それを言われたら、私も E さんしかいないと思ってたんでしょうし。別にねぇ、一回離れてからまたくっつけば良かったんだろうけどね、そんな知恵は回らなかったしね。私、LGBT に関して相談できる人が誰もいなかったので、そういう人がもしいれば、『私の恋人がこんなこと言ってるんですけど、どうしたらいいですか？』って言えたと思う*」

E さん「*で、私が大学 4 年と、更に 1 年留年しているので。一応言い訳をするんだったら、学部を移したことが影響した。必須科目が足りないみたいな。*

で、F さんもさっき言ったように、F さんはもともとご家族との関係性があまり良くなくてダメージを受けていて、病院にも通うことになり、半年休学することになって、F さんも留年をしたんですよね。

だから、みんなと比べると 1 年多く大学にいたんですけど、その過程で、私は大学の中でどんどんトランスしていった。で、当然もう周りの大学の先生とかは、事情を知っているので、私がゼミを受け持ってもらった＊＊先生が『E さん、＊＊さんっていう人（ゲイ男性のキリスト教牧師：筆者註）を知っているから、もし良かったら会いに行きなさい』と言って下さったんですね。で、私は＊＊先生と会って。で、私が F さんも＊＊さんに紹介して会って。

今、私、精神的に比較的落ち着いていて、F さんと一緒に病院に定期的に行っているし、ホルモン剤もさっき言ったように先生から処方してもらわねばならないけれど、自分がイヤでイヤでたまらなくて病的になって、部屋の中にこもってみたいな状態からは脱したので、全然昔と比べると健康的になったんですよね。それはさっき F さんが言った通りで、そこに至るまでの段階でものすごいこの人に迷惑をかけた。自分の性っていうのを確立する過程でこの人の心に多大なダメージを与えてしまったっていうのは事実なので」

――で、先程伺った、＊＊先生から＊＊さんを紹介してもらった？

E さん「*紹介してもらって会いに行って、『こんな状況なんです』というふうに話して、『そ*

う、それは大変ね～』っていうようなことを言われて。まあ、＊＊さんのことですからそんな感じなんですけど（笑）。で、『今度はパートナーも連れてきていいですか？』ということで、F さんも一緒に行って。で、だんだん、そこらへんから私の心は上向いてきた感じだったわね」

F さん「*そうね。格段に良くなってきたね。今はもうだいぶいいもんね*」

（中略）

E さん「*私、高校に入る頃くらいに『小説書いてると話が進んで面白いぞ～』ということに気づき、一番ひとりでできるのが小説書くことだったので、小説書くことが好きになったんですよ。自分ひとりでできる仕事っていうのもあったし。その頃、セクシュアリティのことで全く未来の展望を描けないっていうのもあって、それにのめり込んでいた*」

（中略）

E さん「*高校の頃に性別違和感が大きくなっていって、完全に滅入っていたんですけど、そのへんから私の就業歴があって。一番最初に働いたのがファミレスです。高校の後半と予備校時代ぐらい*」

――高校 3 年生頃から？

E さん「*そう。高校 3 年生と予備校に入る頃かな。大学入ってもちょっとだけ続けていて。ファミレスのお皿洗いをしていました。ファミレスの中は、ホールの人、コックの人、あとお皿洗いをする人っていう、3 つの職種に分かれてたんですね。それで、初めて働きに出るにあたって、自分の性同一性が非常に心を邪魔していて、まず人と接することができないし、人から見られることもすごくイヤだった、自分の容姿、身体を見られることがとてもイヤで。で、初めて働きに出る時にとても困ったんですけど、ファミレスさんでお皿洗いを募集していたので、『あ～、奥に引っ込んでお皿とだけ話してればいいのか』という理由で。ホールほうがメジャーで若い子は基本的にそっちに回されるみたいなんですけど。面接で店長さんから『何がやりたいですか？』って聞かれて、『お皿洗いがしたいです』と言ったら、『珍しいね』と。ファミレスの各店舗でも、だいたいお皿洗いは 2、3 人ぐらいしかいないことが多いと。『自分から行くと言い出す子も珍しい』と言われて*」

――汚れ仕事だし、やりたがらない人のほうが多いっていうか。

E さん「そうなんですよね。でも、『それで良ければ』ということで、私は仲間も作らず黙々とお皿を食洗機にかける仕事をしてたんですよね。それで、ようやく『単純作業だったら少しできる』という感じだったんですけど、やっぱり、細かいイヤなことっていうのは、その中でも感じるんですよね。当たり前だけど更衣室は男女別だったり。特に、ホールに行けなかった理由が、女の子と男の子の制服が違うっていうのがすごく大きくて。女の子たちに混ざって男の子の制服を着るっていうのがすごくイヤだったんですよね。

今にしてみれば、女の子の制服がスカートであるという点について差別的なものを感じて、『全部ズボンにしろよ』と思うんですけど（笑）、フェミニスト的な観点から。『性的客体として捉えるんじゃないよ』って思いはするんですけど、今になってみれば。昔はやっぱりそういう価値観は植え付けられたものがすごい強くあるから、女の子『だけ』が履けるスカートとかそういうのにすごく憧れていて。

スカートへの憧れはちっちゃい頃からあって。最初に女の子の格好したのは幼稚園の頃で、その頃喜んで着てたんだけど、やっぱりみんなにバカにされて、それで嫌がってしまって。でも、小学校に上がっても、たまに妹とかお母さんのお洋服を隠れて着てみたり。ウチは洗濯機と脱衣所が同じところにあったから、お風呂に入る時に、洗濯物に放り投げられているものをそこで着てみて、鏡に映して見て。で、鏡に映すとあんまりにも似合ってないので、しょんぼりして、ポイッって元に戻して、みたいな感じでした。

当時、自分の男性性への嫌悪のほうが強かったのか、女性性への憧れが強かったのか、どっちが強かったのかっていうのが分からなかったんですけどね。今、冷静になって考えると、自分が男性であることへの嫌悪のほうが強かったのかなとも思うんです。そこから脱したいほうが強かったんじゃないか。結果的に、女性になって、女性の格好ができるようになって、普通に女として生きられるようになった後、これを女の人が強制されている現状があるのは思いっきり差別ではないのかと思い至って。『もう万人ジャージでいいんじゃない？』と思うようになったので。

それで、ファミレスのバイトの話は、制服が男女で分けられていることにすごい性別違和を強く感じて。お皿洗いはコックコートみたいなコートに三角帽みたいなのをかぶって、ただひたすら食洗機とお付き合いなんですよ。それも、男女で変わらない扱いだし、お皿洗いを食洗機にやらせるから、男女でそんなに能力差が出る仕事でもないし。そもそも女性のお皿洗いさんはいなかったんですけど。そこにいたのは、おじいちゃんに差し掛かった人と私だけでした。

結局、そこは 1 年ちょっとぐらいで、もう心が持たないと思って辞めてしまって。心が持たないというのは、そこでイヤな思いとかハラスメントがあったとかではなく、私がどんどん鬱で落ち込んでいっていたので。性別違和がやっぱりすごい強かったので。

で、その後、先日話した、ひとり暮らしをすることが決まったんですよね。父母に私が性同一性障害を抱えているんだっていうことを言って、少しずつ異性装を始めたら、お母さん的にはそれがもう耐えられなくて『出ていってくれ。金は出すから出ていってくれ。

見ていられないから』とまで言われたんですけど。そういう意味合いでは、母は確かに自分の気持ちをごまかさずに正直に向き合ってはくれたのかな」

――なるほど。それも確かに正直な向き合い方ですね。

E さん「*そうですね。完全に嫌悪は示してはいたけど、『あなたがしていることは悪いことじゃないのは分かるけど、私はそれが気色悪くて気持ち悪くて見ていられない。だから、やるんならひとりでやってくれ。もう二十歳も超えたんだし、あなたを養う義務は私にはないでしょ。学費は出すし、引越し費用も必要だったら出すから、あとはひとりでやってくれ』というふうに言われたんですよね。『その表現はないだろう』とは思うんですけど。*

それにしても、その後に働く（就職する：筆者註）ことも考えて、お金もある程度貯めなきゃと思って、ハンバーガー屋のアルバイトを始めたんですね。半年ぐらいだったんですけど。これがまた似たような感じなんですけど、ハンバーガー屋が閉店をした後、夜間清掃のお仕事だったんですよ」

――やっぱり、人目につかない仕事ですね。

E さん「*そう。人目につかない仕事を選んでたんですね。『絶対に前に出るもんか』っていうような感じで。大学の 2 年生の頃。で、その時は既に、ホルモンを始めて、髪を伸ばし始めていて、トランスの一番見た目が微妙な時期、変化している頃だったので、そういう意味合いもあって、更に見られたくなかったんですよ。男の子として埋没して逃げ隠れしているような状態なら、自分がどんなに自分のことを気色悪いと思っていても、他人はそうは思っていないっていうのは、理屈では知っていたんですね。でも、トランスの過渡期に入ると、『あれはどっち？』っていう感じにやっぱり見られるので、それが怖かったんですよね。もうその頃、すごくどよ～んとうつむいて、逃げ隠れして歩くような生き方をしていて。*

大学ではもう、おじいさんの呪縛から少し逃れることができて、基本的に友達を作らなければ話しかけてくる人もいないので、大学のほうではまだ心落ち着く生活ができてたんですよ。で、その時に F さんと出会って、お付き合いを始めて、サポートしてくれるようになっていったんですね。

で、そんな状況だから、とりあえず引っ越し資金（を貯める必要：筆者註）もあって、ハンバーガー屋の夜間清掃を始めて。ツナギを着て、髪も結んで、ドロドロに汚れながら仕事をして」

――ツナギ着るんですね。

E さん「*もう全身ツナギでしたね。ズボンのほうから履きこんでいって、そのまま上のほうに服を伸ばして、全部袖まで通したら、お股のあたりから首のあたりまで一気にチャックを締める*」

――自動車修理工場とかでよく着ている人がいる。

E さん「*そうそう。あんな感じの着てたんですよ*」

――あれって男女差ないんですか？

E さん「*あれはもう男女差もへったくれもありませんね。着ぐるみみたいなものなので。ただ、ちょっとだけ男女差別を感じるっていうか、機能面でやっぱり男性に合わせてるなって思うのは、股のチャックは開けるんですよね。でも、女の子がトイレに行くと、上半身全部脱がなきゃいけないので、女の子のほうが圧倒的に不便な仕組みにはなってますね。*

たまに、ポップなアニメとかゲームとかで、機械技師みたいな職業に就いている女の子が描写される時に、上がタンクトップになってて下がズボンっぽくなっていて、腰にツナギの余った部分を巻いているっていう表現をたまに見ます。

それで、汗だくになりながら、夜の 10 時か 11 時ぐらいから、深夜の 3 時、4 時ぐらいまでかけて掃除する」

――でも、大学行きながらその時間帯のバイトは辛かったですよね？

E さん「*ただ、その時間帯でしかないので。シフトで次の日が授業遅い日とか合わせれば、そんなに苦だったわけではなく。当時、そもそもすごく夜型だったんですよ、今でもそうなんですけど。で、夜型だったので、むしろラクかなと思って始めた感じでした。人と付き合うこともほとんどないし。やっぱ、人付き合いしなくていいのが、すごくデカかったですね。*

そのハンバーガー屋でのアルバイトは、大学 3 年生に入る頃くらいに辞めた。引っ越し資金を稼ぐというのが目標のひとつだったので、最寄り駅が移っちゃうと仕事にならないんですよね。終電には乗れないから。引っ越しと同時にそこを辞めて、＊＊から＊＊に生活の拠点が移った。

で、もうその頃は、精神科通院もすごくするようになっていて、かなりブレていた」

――ブレていた？

E さん「*そうですね。やっぱり過渡期だから、もうホントに『学校に何着て行けばいいんだ*

ろう』みたいなのとか。学校の中に入っちゃうとまだちょっと安全な気はしたんですよ。同輩たちも、先生たちも『大学だしそういう人もいるよね』って感じで、分かった上で付き合ってくれて、スーッと流してくれる部分もあった。そういう意味で同輩たちは優しかったし、先生たちにも恵まれていたので、大学は比較的安全な空間ではあったんですけど、それ以外の社会はやっぱりすごく怖くて」

第２項　就職活動　―リーマンショック、性的消費のジャンルとしての「女性のリクルートスーツ」―

E さんは、大学で F さんというパートナーと出会った後、性別移行を開始した。しかし、その後、就職活動ではトランスジェンダーであるが故の困難と、「女性が性的な消費対象として扱われる」という不快な出来事に遭遇してしまった。それに関する語りは、以下の通りである。

E さん「*就活に入る頃はまだまだすごく荒れてて*」

――就活って大学 3 年生ぐらい？

E さん「*私は大学の 4 年生でやりました。4 年に入った段階で私は卒業できなくて、もう 1 回 4 年をやるっていうような段階に入ったんです*」

F さん「*私は一時期休学をしていたので*」

E さん「*私もいろいろ荒れていたことと、もうひとつは学部を移したことの足枷もあって、1 年留年することになり。で、ふたりとも 1 年留年したわね。だから、4 年生になった段階でもう分かってたから、1 回目の 4 年生になってから就活始まったような感じ。私は女性的になりつつあって、心が落ち着いてくる傾向はあったんですけど、まだとても荒れてはいて。人生の展望が全く開けなかった。合計すると 80 社か 90 社ぐらい受けました*」

――うわ～、すごいですね。

E さん「*なぜそんなに受けられたかっていうと、ほとんどがまず書類ではじかれるからなんですよね*」

――それは、トランスということを書いた？

E さん「*最初の 40 社ぐらいは、トランスっていうことを書いて、履歴書に男性って書いて*

応募したんですよ。そうしたら、全部にべもなくダメだったんです。そもそも面接まで行かないし、面接をしてくれたところは、履歴書の受け取りと面接試験が同時だっただけ。その時も、男性の履歴書出して事情を聞いてもらうと、当然にべもなく全部切られて、2 次面接以降に進んだことが一回もなかった。それで、まず露骨にこの情報が足を引っ張っているということに気がついたので、残りの半分ぐらいを女性で出したんですよ。そうしたら、けっこう通るんですよね。履歴書を出したところでも、『一次面接に行って下さい』と言われるし、一次面接に行ったところでは『二次面接に行って下さい』と言われるし、露骨に通るようになって。それで、はっきりと私の目には、『ああ、これは就職上の差別というものが存在するのだ』ということが、もう露骨に分かりましたね。就活を始めたの、何年だっけ？」

F さん「*ええとね、＊＊年の秋から*」

E さん「*秋になるくらいから。で、その秋の後半にリーマンショックがあったんですよね*」

F さん「*違う。あったのは、翌年*」

E さん「*翌年か。私が履歴書に性別を男性と書いて、GID であるということをカミングアウトした上で応募したのはリーマンショックの前だったんですよ。リーマンショック前で 1 社も通らない、一次も通らないっていう状況だった。で、途中から、私が性別を隠して（就活を：筆者註）始めたのは、リーマンショック後だったんですよ。つまり、その時に企業はどんどん門を閉めていってた。企業も採用人数をどんどん絞っていった。なんだけど、その後に始めたことなのに、就活をすると通るんですね、もう本当に露骨に*」

――へぇ～。世の中の景気はリーマンショック後のほうが悪くなったはずなのに。

E さん「*当時、リーマンショック前は『あなたたちは就職できる。大丈夫だからね』っていう雰囲気だったんですよ。で、リーマンショックがあって企業は一気に門を閉めたんですよね。当時のネット掲示板とかでも、リーマンショック前に内定決まった人たちは、『滑り込みだ。大喜び』みたいな感じになってて。でも、リーマンショック後に内定取り消しがいっぱい出て、悲鳴が上がったような感じの世界観の中で、ちょうど私は就活をやったんですよ。まず、男性としてやったら、リーマンショック前だったのに 1 個も通らない。で、リーマンショック後に『もうこれはリーマンショックも起きたし、そんなこと受け入れてくれるところとか言ってる場合じゃないんじゃないか』っていうのもあって、とりあえず女性として応募したら、まだ門を開けていたところはまあまあ通るようになったんですね。一次から二次に行ける。場合によっては二次から三次に行ける。内定はなかなか出なかっ*

たけど、とりあえず通るようになった。今まではにべもなく完全に断られて、全部ぶった切られていたのに。それで、露骨な就職差別を感じつつもとりあえず、最終的には 2、3 件内定を取った。それで、そのうちの 1 社に後から打ち明けたんですよね。で、打ち明けたら『内定取り消し』ということで、結局、就職できなかったんですよ。

頑張って内定取って、良かったということで。で、そのうちの『ここにしよう』と思った 1 社へ『こういう事情があるので、お手紙を受け取って頂きたいのです』という形で、『自分がトランスジェンダーであること』を明記して、診断書も入れて。その時、心療内科の先生に『診断書を書いてもらいたい』と言ったら、『特定不能の性同一性障害という病名でなら書ける』と言われて、診断書を書いてもらったんですね。で、その診断書を持って、私のホルモン剤を処方してくれている産婦人科の先生のところに行き、『診断はもちろんできないと思うんですけど、どんな治療をしているのかっていう診断書を書いてくれ』って話して。で、『これは私の精神科の主治医からの診断書です』と渡して見せたら、そこの先生も『分かった』と筆を取ってくれて、その病名に従うように『このような治療を何年から行っております』みたいな診断書を書いてくれたんですね。で、それを全部コピーして、診断書を入れ、自分史も入れ、『このような状態ですが、御社で働いていきたいと思っているんです。お願いします』っていう手紙も入れて、郵送したんですけど、『ダメです。内定取り消しです』という話になった」

――その時の理由は、会社はどういうふうに説明したんですか？

E さん「*まあ、要約すると、私文書偽造ですよね。『私文書である履歴書にウソの情報を記載したということが根拠になる』と。で、『ウチの会社だととても雇えない』と。で、『労基署に相談してもいいですか？』ということも聞いたんですけど、『相談して、揉めた後にウチが雇い入れなきゃいけないとなったとしても、あなたはたぶん苦労するよ』っていうことを言われて、最終的に私のほうが諦めるしかなくなった。それで、前にもう 1 個内定もらっていたほうも蹴ってしまっていたので、そこにも行けないと。で、F さんに『こういうことになってしまった』と報告して、F さんも『なんてこった。それは確かにあなたのせいでそうなったわけではないから、それはしょうがない』と。でも、私も『パートかなにかで働くよ。自分の性別で働けるところを探して働く』というふうに言って」*

（中略）

E さん「*就職活動の面接って、だいたい複数人でやるわけですよね。3、4 人とかで。それで、最初、履歴書を相手に出して、自分が何を抱えているのかということを自分で話さなくてはならない。それって、周りの人も聞くわけで、アウティングも強要されちゃっている感じですよね、形としては。それが、もうつらくてつらくて。ただ、その頃には女に見*

えるようになってました。ホルモンもかなり身体に馴染んで、F さんの勧めもあってお医者さんに処方してもらうようになり、血液検査もして健康に気をつけていたので、身体の健康面においては問題がそんなになくなっていった時期でした。ただ、面接ではアウティングの強要になってしまう。要するに、履歴書に毎度毎度『男』と書いて、自分の状態とか病状を説明するわけですよね。それって、『自分はこういう人間です』って自己アピールする場を、既にそこで削られているんですよね。『自分にはこのようなハンディがあります』ということをまず書かねばならない。そもそも自然に『GID はいっぱいいるよ、当然だよね』っていう話になっていたら、そんなこと書かないじゃないですか」

――確かに。

E さん「*それに、『自分は男の子だ、女の子だ』っていうマジョリティの無意識の自覚を持っていた場合は、『自分は男でありまして、女でありまして、このようにして頂けると問題なく働くことが可能になると思われます』って書く人はいないんですよね。*

仮に、ハンディがあってもしっかりその人の能力で見ようって（企業側が：筆者註）思っても、ハンディがあるということを書かねばならないということは、その分文字数が削られてしまうわけなんですよね。それって、既にそこですごい格差がある。『じゃあ、何も書かずに行ったらどうなの？』とか『じゃあ、こういうふうにしたらいいんだよ』というモデルを提示できる人はどこにも存在しない。少なくとも、今でもまだ存在しないはずですね。性同一性障害の人、性別違和の人が就活の履歴書を書く時にどうしたらいいのかの作法なんて、どこにも載っていないですから。ある時、履歴書にはただ『男』とだけ書いて他のところは全部自己アピールで埋めて、性同一性障害の説明抜きで行ったこともあったんですけど、面接で普通に『これはどういう意味なんですか？　間違いじゃないんですか？』って聞かれて。『いえ、実は』というふうにその場で自分の言葉で話すという戦略を採ったこともあったんですよ。今にして考えてみれば、どっちが正解かといったらどっちも正解でもなんでもなく、相手はたぶん性同一性障害というのはハンディと捉えて、しかもそれに対してなにかの保護（策：筆者註）を打ったところで、なんの得もないハンディとしか捉えていなくて、普通に私は切られたんだと思うんですけど。

面接で、自己アピールを一番できる場で、自分のハンディについて話さなくてはならない。何十人も面接官のいる場で、自分の貴重な 3、4 分ぐらいをそこに取られるわけです。仮にきちんとした採点の基準が企業側にあったとして、『こういうことができたら 1 点』みたいに加点式に採点したとしても、自分のハンディをまず相手に説明するということが入るので、明らかに点数的には低いところからのスタートになっていますよね」

――他の人がゼロから始められるのに、自分はマイナスから。

E さん「*自分はマイナス 1 か 2 から始まるという。で、自分にマイナス 1 か 2 の減点がかかるのは決まっているみたいな感じ。この間の東京医科大学じゃないですけれども、そんな感じですよね*」

――あれもね。

E さん「*そう。あっちも『女』という要素に対して既にマイナスが入るような仕組みになっていたじゃないですか。全く無意識に同じ仕組みになっちゃっている。相手が分かっていないと、それを説明しなくてはならない。分かってもらった上でその次に進むという話だから、スタートラインが既に後退している。今になって、あれはものすごくハンディだよなと思いますね。LGBT が就労していくにあたって、すごく大きな不利になる。もう採用の時点で不利になるような話であると思いました*」

――そうですよね、なるほど。

E さん「*それは LGBT の就労をすごい妨げる要素なんじゃないのかなと、今は思いますね。加えて言えば、カミングアウトのしにくさにも直結しているんじゃないかと。なぜなら、カミングアウトから始めるということは、もうマイナスとして捉えられているから。面接でそれを話していたら、スタートラインが後退してしまうということだから、カミングアウトできない。ということは、入社後もカミングアウトできないという空気を明らかに増長してしまうはずなので。『なんだ、面接の時に言ってくれれば良かったのに』って無邪気に言う人はいると思うんですけど、『別に、自分たちに差別心なんてないからもっと早く言ってくれれば良かったのに』っていうふうに相手が受け入れてくれたとしても、システム自体が受け入れられるシステムになっていないから、当事者側は絶対気後れするよねっていう。それにマジョリティの人たちは全然気づいていない。たぶん、当事者も気づいていない。自分がカミングアウトして働こうって思ったら、面接の段階でカミングアウトすると自分にこっそり減点がかかっているっていう構図に、おそらくほとんどの人は当事者でも気づいていないと思うんですよね。どっちにしろ、採用の段階でカミングアウトして就職しようとすると、全ての属性にマイナス補正がかかることになるだろうなというのは予測できますね*」

――トランスだけではなく、LGB も全て。

E さん「*LGB も全部。たぶん、すごく生真面目に考えると、『私、レズビアンなんです』と言って面接を受けに来た人に、すごく生真面目な面接官と公平な面接システムは『そうですか。では、それに対してどのような配慮が必要でしょうか』というような話になると思*

われるので。そうなると、自己アピールする、就業能力をアピールする部分にこっそり減点はかかりますよね。（面接、選考にかけるひとりあたりの：筆者註）時間は同じなので。なので、後半に私が『女』と履歴書を書いて面接を受けたところは、比較的スイスイ 2 次面接、3 次面接に私を通していったんだと感じるんですよね。それは、スタートラインが（他の女性志願者と：筆者註）同じだったからという話だと思うんですけど」

――リーマンショックにも関わらず。

E さん「*そうなんですよ。あれは、リーマンショック後なんですよ。『リーマンショックがあったから、景気ヤバいんだって。企業は新卒たちをほとんど採らないようにしていくんだって』っていう話を聞いたから、これはもうなりふり構っていられないと思って。*

で、就職活動の時に、これは少し就業とは違うけど関係ある話ですけど、当然、私は男の子としてのスーツは絶対着たくなかったんですよ。もうおぞましい。こんなふうに見られるなんで絶対無理だったので、リクルートスーツは女の子のタイトスカートを履いて面接に行けるという、そのこと自体はその頃無邪気に喜んでいたんですよね。なんですけど、これは日本特有の問題のひとつだと思うんですけど、あれは性の対象なんですよね。多くの男性たちにとっては。つまり、客体化して消費する対象なわけですよね。『制服を着ている女子高生』が性的消費の対象になるのと同じように。セーラー服やブレザーを着ている女子高生っていうのは、男の人たちが性的消費をするブランドなんですよね」

――女子高生、JK モノみたいな。

E さん「*JK っていう隠語は、オッサンたちが援助交際をする際に使っていた隠語がたしか元になっているはずなので、完全に相手を客体化して、消費するモノとして捉えた時のジャンルなんですよね。で、私はもともと男の子で、私の性的な欲望っていうのは基本、女の子に向いていたんですよ。それが、自分が GID なのかというアイデンティティを揺るがしていた部分でもあるんですけど、『自分は本当に女の子になっていいんだろうか？　だって、女の子に対してドキドキするのよ』っていう気持ちがあったんです。当時はやっぱり『女の子は男の子を好きになるもの』っていう常識にも染まっていたし、性同一性障害はレズビアンやゲイではないという安直な受け取り方をしていた。『トランスの同性愛者がいる』ことって、今でも説明してもなかなか分かってもらえないんですけど。*

なので、リクルートスーツに身を包んだ女の子っていうのは、1 ジャンルなんですよね。あれは性的客体として女性を扱ってジャンル化している。

で、もう 1 件。これは性暴力だったのかどうか、今でも私は扱いに悩んでいるんですけど。私、＊＊でリクルートスーツを着て歩いていた時に、私よりひとまわり上ぐらいの比較的若い男の人から、『すいません』と声をかけられて。で、普通に声をかけてきた人だっ

たから、『どうしました？』と聞いたら、私、目を丸くしちゃったんですけど、『申し訳ございません。あなたのパンストを売って頂けませんか？』と言われたんですよ。その時、パンティーストッキングを履いていたから。で、私は『えっ？！』という感じで言葉に詰まって、『お願いします』という感じですごい真面目に言われたんですよね。夜、帰りがけにそう言われて。で、この人は私に対して身体的接触は一切しなかったし、身体的に害をなすことは一切しなかったんですよね。で、ちゃんと自分の目的と、何をして欲しいかということを提示した上で報酬を提示したんですよね」

――いくらって言ったんですか？

E さん「*いくらとまでは言わなかったんですけど、私、聞けばよかったとすごい後悔したんですけど。『そもそも相場では一体いくらなのか。アナタたちの中で値段は決まっているのか』みたいな話も含めて聞いてみたほうが良かったんじゃないのかということは、今でも後悔してるんですけど。私、そこで慌てて『すいません。そういうのはやってないんで』って言っちゃったんですよね。そうしたら、『そうですか。申し訳ございません』と言って丁寧に去っていったんです*」

――へぇ～。

E さん「*その人は終始、丁寧だったんですよ（笑）。交渉を持ちかけてきて交渉が決裂したら、謝って去っていったという話だったので。その時、すごい扱いに悩んだんですよね。その人をいったいどういうふうに思うべきか。すごい失礼なことを言ってきたイヤなヤツ、ゲスな野郎と自分の中で認識すべきなのか。自分の欲望に対して真摯で、相手のことも真摯に取り扱ったヤツとして見るべきなのか（笑）っていうのを、すごく悩んだんですけど。今にして思えば、やっぱり相手のことを性的客体として消費しているわけだから、真摯な態度じゃないよね、って思うんですけど*」

第３項　パートタイムの仕事に就く　―性別が記載された身分証明書がなくても就ける仕事―

E さんは、就職活動に失敗してしまい、パートタイマーとしてゲームセンターで働くことになった。それは、性別を公的に証明する必要のない仕事という選び方だった。それに関する語りは、以下の通りである。

E さん「*その後、私は＊＊にあるゲームセンターにパートに行ったんです。私、もともとゲーム好きで、マンガもアニメも好きだったので。で、そこに行こうと思って。ちょっとアレな話ですけど、ゲーセンは身辺のことに関してそんなにちゃんとしていないというのは*

知っていたので。身分証明も口座があれば良かったんですよね」

F さん「*まだ免許持ってなかったからね*」

E さん「*そう。これも厄介なことなんですけど、性別欄が入ってない身分証明書は当時、免許証しかなかったんですよ。*

で、とりあえずそこにどうにか身分を偽って女として入れたんですよね。で、そこでちょっと頑張って働きはしたんですけど。で、私がルームシェアしていた友達がちょうど『そろそろ自分は別のところに引っ越そうかな。今は自分の名義になってここ借りているけど、キミらふたりで住みなよ』と言ってくれて。3 人で不動産屋さんに話しに行ったら『かなり特殊なケースだけど、とりあえず E さんが継続して住むのが条件なら、契約はし直すけど、更新みたいな形でいいよ』って言ってくれた。で、しばらくそこに暮らせるようになった。その後、私はゲーセンのパートに勤め、F さんは＊＊っていう会社に行くことになった。そしたら、今度は、これは F さんの問題なんですけど、＊＊っていう会社は、アルハラとセクハラがものすごく酷かった」

F さん「*『その場で死にたい』みたいな*」

E さん「*F さんはダメージを受けてしまった。入社して 3 ヶ月で『もう無理だ。あの会社の中で働いていくことはもうできない』と。入社して 3 ヶ月くらいで、最終的に F さんは病状が悪化して働けなくなって辞めて。で、その時、本当にどうすればいいのかっていう状況で、私のお金じゃ引っ越すこともできない、もうどこにも行けないっていうような感じだったんですけど、私は、おじいちゃんの実家は大金持ちなんですよね。それで、なにかあると、実家って、私を呼びつけて、家族の誕生日とか、家族ぶりたいというのはずっとあったんですよ。で、その時に、おじいちゃんとウチの両親から『これでも使って美味いものでも食べなさい』って言って、あの人たちにとってははした金なんですけど、お金をもらった。で、これは最後のチャンスだと思って、それを元手に頑張って引っ越しをしたんです*」

F さん「*家賃半分以下のところへ引っ越しました*」

E さん「*駅は変わらず、半分以下の家賃のところへ。それでギリギリ『よし！　暫くまだ生きていける！』みたいな*」

F さん「*その時、私がほぼ引きこもりで、E さんがパートに行ってる時に、具合が悪くなると、私が職場に電話しちゃうんですよ、。で、『不安でしんどい。ひとりでいるのが苦しく*

てしょうがないから、お願い今すぐ帰ってきて』みたいな感じで」

E さん「*F さん、もともと家族関係のことで、自傷が出てて。そうやって電話かかってくると、家でどうなってるか分からないから私も早引きして帰るんです。で、とりあえずいったんどうしようもなくなり、私はゲーセンを辞めたんです。とりあえず、引っ越すのを機会に、ふたりとも新しい仕事にして生活を立て直そうと。*

それでとりあえず家賃が払える。で、私はなんとか生活費を稼がなきゃと思って。でも、F さんが心配だから近場で仕事ができないと危ないと思って、また性別を偽ってホステスになりました。ちょっとの間、やってました」

F さん「*夜の短い時間だったら、私が寝ちゃってる時間にお仕事行けばいいと思ってくれたみたいで*」

第４項　女性の社会的な「生きづらさ」　―性別を移行して気がついたこと―

E さんは、男性から女性へ移行して、E さん個人としては「生きやすさ」を獲得した。しかし、社会の中で女性として生きるようになると「女性のほうが生きづらい」と気づくようになった。それに関する語りは、以下の通りである。

E さん「*私が性別を転換してはっきり分かったことは、社会から私への扱いっていうのはすごく悪くなりました。女性と見られるようになってから、見下されているというのははっきり分かるようになってきました。究極の話をすれば、『E さんは綺麗だよ』と言われた時とか。私が女として魅力的な容姿をしているかどうかって、だいたい関係ない場面でそういうこと言われるとシャクにさわる。仕事の同僚と話している時に、『まあ、私なんか、仕事もできないし、容姿もブスだし』みたいな、ちょっとした自虐を言った時に、『いやいや、E さんは綺麗で美人ですよ』って仮に言われたとする。で、それって相手は誉めているつもりで言っているけど、よくよく考えたら仕事の能力と容姿は関係ない。男の人が『あなたは綺麗です』って言ってくると、『女としての価値はあなたにはあります』って言っているのよね。そこで、『ちょっと待った！』というか。『女としての価値というのは、私は私に対して求めればいいことで、アナタ（世間一般のシスヘテロ男性：筆者註）が決めることじゃないぜ』って。*

世間一般の認識がすごい歪んでるなって、私は感じていて。例えば、『私は何歳ですし』って話をすると、多くの人は『そんな、アナタはまだまだ若いわよ』って言う。考えてみると、『歳をくったら価値が下がるのか？』っていうのがあるじゃないですか。そんなことはねぇだろって。30 から 40 とか、40 から 50 って、たいして違わないじゃんって。たいして違わないどころか、場合によっては経験を積んだり能力が上がったりする。なんだけど、世間は『女は若いほうがいい』っていう共通概念を持っている。で、それを当然のことと

して共通の常識として押しつけてくる。『私、太ってるから』って言うと、『そんなことない。痩せてるよ』ってみんな言ってくる。『別に太ってたって、健康が害されていなかったらどうでもいいじゃん』って、誰も思っていない。私はそういうことに気づき始めて、『なるほど。女のほうが生きづらいっていうのは絶対的に確かだな』ってすごく感じますね、やっぱり。

ただ、私個人の話をすると、女が一等低く見られて、差別を受けて、実際にはすごいバカにされている世界の中で生きていても、私個人は性同一性障害の問題を抱えていたので、女のほうが生きやすいんですよね。でも、それは世間を渡って生きやすいのとは全然別の話なんです。私が、問題なく男の仮面をガシャッとかぶれるのであったら、それで男社会の中を渡っていくほうが絶対ラク。

私が女になって感じたことは、もうとにかくどんどん不自由さが迫ってくる。『化粧はしろ』『若くいろ』『夜道は歩くな』『露出するな』って言ってくる。私が昔の姿だったら、都心の繁華街を酔っ払った状態でフラフラ歩いていても、誰も文句を言わない。今は、それはしてはならないことという圧力がかかってくる。無防備である、自分に自覚がない、よろしくない、みたいな。夜道が歩けなくなった。でも、実際にはそれはおかしいんですよね。誰も彼もが夜道は歩けるべきだし。で、女性が夜道を歩いて被害に遭った時に、男性が夜道を歩くことに制限をかけるという方向には絶対に行かないんですよね。

私が就活をしていた時に、通行人の男性から『アナタのパンストを売って下さい』という交渉を持ちかけられた。私はお断りしたんですけど、私はその扱いをすごく考えてしまった。その人は、商取引を持ちかけてきた。その点に関しては、紳士と言えるだろうと思うんですよね」

――黙ってケツ触っていくよりはマシ。

E さん「*そう。相手を一応取引相手と見て交渉を持ちかけてきたのは事実である。それをどう捉えるべきなのか。なんだけれども、見ず知らずの人間に『アナタに性欲が向いています』と表明して、それにお金を払うから満足させてくれという交渉をしてくるっていうことは、こっちは性の対象、見られる側であって主体性のある存在ではないということ*」

F さん「*見ず知らずの相手に話しかけるところから、もう彼の欲求の消費は始まっている*」

E さん「*そう。だから、消費されているものなんですよね*」

――実際の取引はしなかったけれど、そこから始まる。

F さん「*そこから始まってる。たぶん、それを多くのシスヘテロの男性に問いかけた時に、*

特にツイッターなんかで言うと『それのどこが消費してるんだ』って言い出す男性ってけっこう多い」

E さん「*そう。なんですけど、消費は始まっているんですよね。社会的に女は消費されるものだから、『消費する取引を持ちかけても構わない』が前提にあるんです。*

そういう意味合いにおいて、どれだけ理解が進んだ会社であっても、そういうマッチョイズムみたいな男性優位の思想っていうのが、シスヘテロ男性たちの人権として、ある種考えられているところまであります。今、NHK で『バリバラ』っていう番組やってるじゃないですか」

――ウチ、テレビがないので、知らない。

E さん「*あ、そうなんですか。NHK でやってる障害者とか LGBT とか、そういうマイノリティの人たちが主体的に作っている番組で。で、すごいいいところもいっぱいあるんですよ。『24 時間テレビ』がいわゆるお涙頂戴なドキュメンタリーとして障害者を扱っているのに対して、『それは障害者に対する障害の消費だよね』みたいなことを突っ込んで、感動ポルノを作り上げて、みんなでポルノにして楽しんでるだけでしょ。健常者が気持ちよくなれればいいだけで、『(障害者を：筆者註）普通の人間として見てねぇだろ』っていうようなことを突っ込んでいるような番組なんですよ。そういう意味合いではすごくいいところもあるんですね。でも同時に、やっぱり男性優位なマッチョイズムみたいなのもすごく引きずってて。例えば、寝たきりで身体は動かないけどお笑い芸人をやってる人がいて、その人が舞妓さんのところに遊びに行って、舞妓さんに『一気！　一気！　一気！』みたいなことを言われて。で、お酒をグィ～ッと浴びて飲んで、『すご～い！　かっこいい！』みたいなことを言われるのを、その人がすごく喜んで、『こんなに人に男として扱ってもらったの初めてです。ワクワクしちゃう』っていうような感じの映像を流すんですよ。で、それって良い面と悪い面があって、良い面としてはたしかにその人が憧れたマッチョイズムっていうのを普通に享受できる普通の人であるっていうことを証明している一事でもあるんですよね。その人が目指したマッチョイズムっていうのは、シスヘテロの男性が作り上げた男性優位社会における男らしさを充実させることで、その人の人間性を認めたような構図になっているんですよ。でも、それって、逆から言うと、そこにいる舞妓さんたちは本当にそれしたいの？　そういう扱いでいいの？　っていうような問題を同時に孕んでいるわけですよ。男の人を立てて、喜ばせて、お酒を注いで飲んでもらって『かっこいい！』って言う女性像を再生産していいわけ？　っていうのが同時にあるじゃないですか。その本人たちがどう思っているかもまた別な話として。そういうのを見た時に、私はやっぱり、今の社会の歪みをすごく強く感じて。例えば、男性優位社会は、舞妓さん、芸者さんたちを、社会を構成する歯車としてはあんまり見てないんですよね。自分たちの外にいるとこ*

ろみたいな感じの認識で、一等低いものとして見ている。もしくは、参加させてあげているものみたいな感じで見ている、っていうのをすごく強く感じて。で、そこから女性とかセクシュアル・マイノリティを優先して疎外しているから、そこに女性はあんまり参加できない。入っていくと『もっと働かないとアナタに価値はないです』『社会の優位者である男性に認められないと価値はないです』みたいなことを言ってくるのに、認められるためには同じような働き方とかやり方に迎合することを求めてくる。それは、男たちのために作られたシステムなのに。ゲイ男性に対しても似たような感じですよね。『その輪の中に入らないと認めてもらえない』みたいな壁を作っちゃう。で、そうやって壁を作って疎外して、自分たちがしたくない子育てとか、介護とかはぶん投げて、自分たちはそのお陰で仕事ができているのに、外に出ていった相手、女性とか水商売の人に対しては『オマエたちは社会的にこの中に組み込まれてないから価値がない』っていうような視点で見てくるんだなっていうのは、私はすごく最近になってとても意識するようになりましたね。なまじ、自分が女性になってみたら、意外に女性的なこととは肌が合わなかったんですよ」

第５項　性別を確認される不快な状況　―自動車教習所、資格試験の受験会場、選挙の投票所―

E さんと F さんは、昼間一緒に過ごせるようになり、ともに自動車教習所へ通うことになった。しかし、そこで E さんは、性別を確認される状況に遭遇してしまった。そして、同様のことは、資格試験の受験会場や選挙の投票所など、本人確認を必要とする状況ではかなりの頻度で発生しているという。それに関する語りは、以下の通りである。

E さん「*それで、昼間は一緒に散歩したり。で、F さんは『就職のために必要だから』ということで、免許学校に通い始めていた。その教習所に、一緒に行くことにしました*」

――同じ教習所に行った？

E さん「*同じ教習所でした。一緒に通えるように。F さんも精神的に滅入っていたので、付き添いがあったほうが良かったので、F さんだけの日も一緒に行きました。で、教習所はどうやったって戸籍情報のオンパレードになるので、私はそれを提出せざるを得なかった感じですね。ただ、教習所の教官たちは、あんまりそこは気にせずに比較的平等に扱ってはくれました。ただ、面白かったのが、いろいろと生徒に質問してくる『これはどう思いますか？』っていうような感じの、座学の教官がいたんです。その人が、『後ろから 2 番列目の女性の方』とかそういうふうに表現をした。で、私の姿を見て『ん？』っていう感じの顔をして。で、話をしてデータを見比べて、授業が終わる頃に、『キミ、これは男性と打たれている。データが間違っているから、キミこのままだと免許が取れなくなっちゃうから、急いで事務局に行って訂正してもらって下さい』って言われたことがあったんですね。で、*

私は、『すいません。それ、一応データ上は正しいんです』って言ったら、『あ、そうなんだ。これは失礼いたしました』というふうに丁寧に対応はしてくれたんだけど、個人がいくら丁寧に対応してくれても、それを吹き込まれるのは辛いんですよね。時間も手間も取られるし、相手とそういうやり取りをしなくてはならないから。それはなかなか大変で、トランスでしか起きないことでした。毎回ってほどではないけど、何度かに 1 回はそういうやり取りをしなくちゃならないんですよね」

F さん「*教習所って名簿みたいなのあるじゃないですか。あれ、何ていうの？*」

――教習簿。私が行ってたところは自己管理させてました。

F さん「*あれを授業の最初に出させて、その教官は席順を把握して並べ替えて、名簿の通りに当てていく人だった。だから、名簿を見て、『そこの男性の方』って言った時に、『どこにもいないよ、男性が』ってなって、『あ、女性の方。すいません』っていうところから始まったらしいんですよ*」

E さん「*なので、公衆の面前で結局、違和感を発露してしまうことになっちゃうんですよね*」

F さん「*下手するとアウティングになる*」

――確かに。

E さん「*その教官はアウティングをしたとも思っていないし、周りもアウティングをされたとも思っていないんですよ。私の中だけの話なんですけど*」

――聞いている人は、「間違えたのかな」ぐらい。

E さん「*うん、そう思っているんですよね。私はその危険を背負うことにもなりました。だから、あそこを抜けられるのかどうか（無事に教習所を修了できるのかどうか：筆者註）もすごい怖かったですね。姿とかを（男性の容姿に：筆者註）戻していかないと行けないんじゃないかと。*

厄介なのが、これ以外の資格試験でもあったんですけど、試験の時に本人証明するのが大変だったんです。簿記の試験を受けに行った時に、『（本人かどうかを：筆者註）確認するから』と止められ、待たされて、試験開始時間に微妙に遅れたんです。まあ、数十秒ぐらいだったので、実質的な差にはならなかったんですけど。でも、それって可能性としてはとても大きな齟齬を起こす可能性があった、足を引っ張る現象ですよね。自分が現場に

行って日商簿記受けに来ました。『本人証明して下さい』って言われて、保険証とか出すと『えっ？！』っていうふうにぎょっとされて。『確認するので少々お待ち下さい』って言って、時間を取られるという。免許証の試験とかでも起こり得ることで、偶然私の時は免許証試験では起こらなかったんですけど。でも、写真撮る時とか、ポツポツ『ん？！』っていう感じ、『これは？』って聞かれて、『大丈夫です。合っています』って何度も言わなければならなかったのは確かなんですよね。

これは、選挙の時にも起きます。投票しに行くと、投票所の人が『本人確認お願いします』『＊＊に住んでいる E です』って言って、ピピピッとデータを出すと、『えっ？！』とぎょっとして、『すいません。ちょっと確認してきます』と言って、待たされる。別に選挙は、待てば済む話ではあるんですけど。でも、止められて疑われて談義されるみたいなのは、かなりの頻度であります。しかも、私、＊＊小学校っていう小学校に投票所があったんです。受付の子が、小学生か中学生になったばっかりぐらいの女の子だったんですよね。たぶん、ボランティアでやってたんだと思う。で、『E です』ってお話したら、その子がぎょっとして対応に困っちゃって、『ちょっと待って下さい』と言って、大急ぎで後ろの大人たちに聞きに行って、ベラベラ話していたことがあったんですよね。それは別にその子が悪いわけでもなくて、他の子でも同じようなことをしたことがあったので、その子が特別対応に劣っていたわけではないんですけど。まあ、すごい勢いでアウティングしていくなぁ！　みたいな（笑）。制度的な、仕組み的な話で」

――小学生と言えども。

E さん「*それは大人でもやっているから、すごい勢いでアウティングされるんですけど。目の前で受付した人が当然のものとして分かっていれば、まだその人だけの情報漏洩で済むんですけど、そうじゃないんですよね。後ろに行って、聞きに行かなきゃいけない。4、5 人にその話が回っていく。選挙の度にイヤな感じになります。しかも、その人たちはけっこう狭く区切られた同じ地域の中に住んでいるって分かっている人だから、どこの道端で顔を合わせてすれ違っているかも分からない。そういう人たちが私のことを『あの人、オカマなんだって』っていうふうな感じで一方的に知っていくことになるんですよね」*

――それは、かなり平等じゃないですね。

E さん「*それ、ひどいんじゃないのって、私は考えるんですけど。他の人は住所と名前を照合されるだけなんですよ。住所、名前、性別を照合されるだけなんですよ。何も残らないけど、私の場合は完全に認識されます。『ん？』みたいな感じで相手が止まるので」*

F さん「*それに対して文句を言うと、『好きでそうやっているんだから、しょうがないだろ』*

って、自己責任論が出てくる」

E さん「*そうそう。『アナタはそういう道を自分で選んだんでしょ』って言われる。選択式スティグマみたいな感じ。仕方なくその状態になっていて、これは病みたいなものである。それを、無理矢理背負い込まされているんだ。だから、むしろどっちかっていうと、周りがフォローしたほうが平等なんだぜっていう話は（周りの人、マジョリティにとっては：筆者註）理解できない。だいたいみんな、そこまで考えは及ばないんですよね。それは、そういう公的な試験の時とかに必ず起きる問題です。なので、私、公的な身分証明が必要なものを作るのはすごい嫌いです。クレジットカードはそうですね。この間、新しいの 1 個作ったんですけど、本当にイヤでしんどくて。どこで何がバレるか分からないから。運転免許証は女として作っているんですけど、そういうのも、例えば、『それ以外にもう 1 枚必要です』『保険証も見せてもらえますか』とか言われたら困っちゃうし、（身分証明書によって表記されている性別が：筆者註）両方と違うっていうことになるし。女として通ったクレジットカードやキャッシュカードにしても、例えば私が何かしら事故に遭って、情報を照合したら『データが違うぞ』とかいう話になった時に、必要な補償を私はちゃんと受けられるのかとか、賠償金請求されたりしないかとか、偽名を使っているということで私文書偽造という悪いことに判定されないかとか、そういうのはすごくプレッシャーとして感じます*」

――なるほど。

E さん「*『そういうことがないためにはどうしたらいいですか？』と公的なところに聞いたら、当然だけど、『書類上の性別で登録して下さい。書類上の性別に合わせる以外に安全だと言える方法はない。それが、手続きの際には確実に問題が起きないです』って言ってくるんだけど、『それができねぇから困ってるんだよ』っていう話をすると、平行線になるんですよね*」

第６項　現在の職場　―社内の「LGBT ワーキンググループ」でも活躍の場を広げる―

E さんは介護の研修を受け、資格を取得し、介護ヘルパーとして事業所に勤務するようになり、後に正社員になった。そして、現在、社内で「LGBT の働き方を考えるガイドライン班」を作り、サブリーダーとして活躍している。それに関する語りは、以下の通りである。

E さん「*＊＊年の暮れに、＊＊に引っ越してきて、そこで何もかもまた全部立て直さないと話にならないから、まず、なにか資格を取ろうと思ったんです。ウチの実家から『オマエ*

はこれから、やがてひとりで暮らすんだから、資格を取れ、資格を取れ』ってしつこく言われてたんですよ。なので、『資格を取る勉強の代金をくれ』って私が言えた」

F さん「引っ越してすぐ 311（東日本大震災：筆者註）が起きて、あれはけっこうメンタルにきました。この先どうなっちゃうんだろうって不安もあったね」

E さん「その時に、いったん、私が取りやすい資格からやり直そう、視点を変えようと思った。それで、今私が勤めている会社が、重度訪問介護事業者っていう重度障害者の身体障害者の介護の研修を開いていたので、そこを受けた。今の会社の人が研修してくれて、そこで資格を取った。重度訪問介護事業者、重訪（じゅうほう）の資格を生かして、勤められるところにパートとして勤めようと思って。で、（現在勤務している、研修を受けた会社とは別の：筆者註）ある会社に行って、そこは障害者とかそういうのをやっているから、自分のジェンダーを明らかにして勤められないかなと思って、＊＊というところを受けたんです。そこの理事長さんは身体障害者の女性で、同性介助をそこのルールとして守っていた。そこに私の事情を相談して、今度は戸籍上の性別を話して『やりたい』って言ったら、すごく考えてはくれたんですけど、『申し訳ないんだけど、今回は見送りで』ということになったんですよ。ああやっぱり、ここにも私の居場所はないのかと思った。

　でも、最初にその研修受けたところには、性別のことについては事情を話していたんですよね。で、すぐにはそこに入らずに他のところを受けたのは、研修のところには自分でカミングアウトするしかない。これって国の資格だから言うしかないじゃないですか、登録されるから。で、研修は別のところで受けて、本命で働きたいところでは、『（雇用主など一部の人には：筆者註）事情は話すけど、自分の性別はできるだけ隠して働きたい』って言おうと思っていた。でも、結局それはうまくいかず。じゃあ、カミングアウトしちゃったあの事務所はどうだろうと思って、今勤めている＊＊というところに受けに行ったら、『ウチは障害者の自己選択、自己決定を一番大事にしている』と。そこもまた社長が当事者で身体障害者なんですけど。で、そういうのを大事にしているから、『ウチに登録する分には何の問題もない。登録はしてくれ。誰も拒まない。で、登録してもらった上で、直接、あなたとタイムスケジュールが合った利用者さんを紹介するから、利用者さんとまた 1 対 1 で面談をしてもらう。それで、利用者さんが OK だというふうに言えば雇うことになる。だから、利用者さん次第であって、あなたが働けるかどうかも、利用者さんとの面談にかかっている』という話をされて。それで、『分かりました。お願いします』と言ったら、まず最初に社長本人からお声がかかって、『日曜日の介助者が空いちゃったから、ウチに来てくれないか？』と言われて、まず最初に、社長のところに日中 8 時間入ることになった。で、『（利用者である社長さんから：筆者註）良かった』ということになった。で、そこって、事務員さんとかも障害当事者を雇っていて、障害当事者が会社を運営して。で、自分たちのヘルパーを養っていくような形、障害当事者も自分たちで社会参加することをとて

も大事にしている事業所だったんです。で、内部のスタッフの人がもうひとり、『社長のところで普通に働いている人みたいだから』という感じで、今度は私を土曜日に雇ってくれて。それからトントン拍子で仕事が増えていった。それで、その事務所は週に働いている時間が 32 時間を超えると自動的に正社員扱いになるんですね」

――そうなんですか。

E さん「*はい。正社員とパートっていう分け方が、そういうすごい分かりやすい形で分けられている。で、そこに勤めているうちに、今は正社員になった。正社員になると同時あたりで、私は介護福祉士の資格を取ることもできて、資格の取得制度があって。で、介護福祉士として正社員となった。そして、会社の事務所の中で、ちょうど（E さんが：筆者註）LGBT 当事者であるということで、『LGBT の働き方を整えて、LGBT のスタッフをもっと雇い入れていきたい』という話が社長から出て。で、『そのために E さんにも会議に参加して欲しい』と言われて、私はそのワーキンググループに入ることになった。で、私が 2、3 人集めた LGBT の友達も、私が声をかけることで、ウチの会社に入ってたんですけど、その子たちもそのグループに入れてもらった。で、その時にようやく落ち着いてきていた F さんも、この会議だけでもオブザーバーとして参加してくれないかと私が声をかけて、会議の人たちも『ぜひぜひ来て！』という話でいてくれたので、その会議に参加するようになった。そしたら、その会議を運営している会社の偉い人が、会社の相談支援業務っていうのを担当している人だったんですけど、会社の中にある相談支援事業所の所長をやっている人で。で、『この仕事はどうやら E さんと F さんにぴったりと思うんだけど、こっちもやってみないか？』と誘って下さり、ヘッドハンティングをしてくれて。私はその所長のお宅に、その所長も障害当事者なので、ホームヘルパーとして入って、週に 1 日はその相談支援の仕事もすると。で、F さんは相談支援の事務員として会社に入るっていう話が進んで、今その会社でどうにか（勤務している：筆者註）*」

――じゃ、今はおふたりは同じ会社にいる？

E さん「*そういう経緯で、同じ会社に入ることになって*」

F さん「*最近ようやくかな、お金稼ぎたいって思って。それまでも、自分は社会に出れないんじゃないかって思ってて*」

E さん「*随分変わったよね、ホント。もう、ゲーセンに勤めてる時は本当にヤバくて、もうパニックに陥った電話がひっきりなしにかかってくるみたいな感じだった*」

F さん「*『オマエがまた働くようになるとは思わなかったね』って友達に言われました*」

――それが、現在に至る話で。

（中略）

F さん「*8 月末にワーキンググループの発表会があった時も、ふたりともすごく忙しかったけど、ふたりで一緒にパワーポイント作ったり資料まとめたり、本当に徹夜みたいな感じでやって発表もすごくうまくいって。役員の人にも『すごい良かったよ』って E さんも私も評価してもらって。で、プライドパレード行った時も、弁護士さんのグループがブース出してて、その時に『ウチの会社で、ワーキンググループで LGBT 雇用のことやってるんですけど、こういう案が出ててどうしたらいいですか？』みたいな相談したら、『おそらく日本で一番進んでいることしていると思いますよ』って言って下さった。で、LGBT 雇用のガイドラインを E さんが作ったら、私は弁護士の名刺をもらってきたので、『これで弁護士さんから見て、法律的な不備ないですか？』とか相談しながら。その弁護士さんも『面白い試みだから、経過を見たい』って言って下さったんで、ホント、そういう部分では、大変だけど前向きですごい『いい仕事してる！　ここは生きてる！』みたいな*」

（中略）

E さん「*今の会社に入ってからも、ところどころでマイクロアグレッションっていうか、無自覚の小さな差別みたいなのはやっぱりすごくあるんですよね。私は結果的に、MtF カミングアウトした人っていう形でしか入れなかった。その形で入ると、いくつかやっぱり面白いことが起こって。私を知らない人が私の情報を知っていることは、いっぱいありました。私のおじいちゃんの件ほどではないけど、私の噂というのが遠くまで広がっているのは露骨にいくつか聞きました。アウティングの概念はまず誰も持っていなくて、みんな優しい言い方で、『(多少ゆっくりと柔和な言い方で：筆者註）オカマの女の子が入ってきたんだって』って感じなんですよね。ちょっと現代的になっているんですよ、みんな福祉に携わっているから。『ハンディがある人なんだ。でも、ハンディを背負っても頑張ってやっているんだ』っていうような*」

――オカマっていうのは、ハンディという扱いされるんですか？

E さん「*どっちかっていうと、やっぱりハンディですよね。今の人たちって、ドラマとかで性同一性障害っていう存在はもう認知してきたから、『性同一性障害というのを持っている人がきた』って認知をしているんですよ。で、それは、『障害、ハンディキャップなんだ』*

という。『ハンディキャップを持っていても、ここではみんなしっかり平等に頑張れるんだ』っていう、とても無邪気な福祉的感覚をしっかりみんな持っている。まあ、それは全ての基礎になるからとても大事なことなんですけれども。みんなそういう感覚を持っているから、私のことを一応『ある程度のハンディキャップがあるけれども、仲間として認めていきたい』みたいな認識でみんないてくれて。なんか、ありがたいような迷惑なような微妙な気持ちにはなりますね（笑）」

――なるほどね。

E さん「*だから、私が『私の情報がどこまで広がっているのか』を全く把握できない。今だに把握できないんですよ。自分の担当の利用者さんには全て、担当のチームリーダーがいるんです。サービス提供責任者、サ責って言うんですけど。利用者さん A には、B というサ責がついていて、その A と B は比較的密接に自分のチームの介助について相談し合うというような感じでコミュニケーションを取る。サ責たちは、利用者さんたちが『何時から何時まで、何曜日に人が欲しいんですけど』みたいな要望を聞いて、私みたいな登録してある台帳と照らし合わせて、『この人、何時から何時まで空いてる。こういう人がいるけどどうですか？』『う～ん、この人はイヤだ。こっちの人にするわ』とか、そうやって自己選択できる方法を採っているんです。そうなると、私の情報っていうのは、サ責はみんな共有できるし、履歴書も全部見れるんですよ。それもあって、最初、サ責たちには私の情報が知れ渡ったみたい。でも、もちろんそんなことを気にしていない、知らない人もいるんですよね。『E さんっていう女のヘルパーが普通に働いているらしい』みたいにしか認識していない人もいるし、『情報を見たら E さんは男って書いてあった。この人はオカマな人で頑張ってるんだ』って認識している人もいるみたい。というような感じなので、今の会社に入ったら自分の情報がどこまで行っているのか全く把握できなくなりました。*

で、私が更に珍しい MtF レズビアンだということを、私は最初、社長には話したんです。『自分のパートナーは女性なんです』ということを話して、社長はそれには大いに賛同してくれた。でも、社長はアウティングの細かいことは分からないから、たぶんベラベラと他の人にも話したんだと思うんです。

社長さんたちは、障害が目に見えているから、またちょっとスティグマの押され方が違う。つまり、歩いているだけでアウティングというものを周りにされているという状況になってしまうので、それに対して神経質になる概念が分からない。それで、たぶん、社長がベラベラと喋ったと思う。面白かったのが、その噂を聞いて、『E さんは、MtF っていって、GID、性同一性障害っていうのを抱えている、元男の女の人なんだって』って認識している人の中に、『私のパートナーは男性だ』って思い込んでいる人と、『話に聞いたら女性パートナーを持っているらしい』って思い込んでいる人の両方に分かれていた。で、もうひとつ、『E さんってレズビアンの女の子なんだって』って思っている人がいて。私が『MtF

です』って言ったらビックリする人がまず出てきて、『私のパートナーは女性です』って言ったらビックリする人も出てきたんですよね。だからもう、どういう形で噂が広まっているのかも把握できない。『レズビアンの女の子』っていう噂と、『MtF でパートナーが男性』っていう噂と、『MtF でパートナーが女性』っていう一応真実とが混在していて、なかなかカオスな状態になりました。

私の噂はひとり歩きして社内に広がってしまって私の制御を離れてしまったけど、私からはできるだけ噂は広めたくないから、『私のことをどう聞いていますか？』って聞けないみたいなことになって、私が私の情報がどうなっているのか把握できないみたいな状況には陥りました。自分がアクセスできないところに自分の情報が行ってしまったっていう感覚ですね。それは、トランス特有だと思います。ゲイの人やレズビアンの人にも起こり得るとは思うんですけど、今、正確な認知がされているとは全く思えない状況なので。例えば、私がレズビアンの女の子だったとして『レズビアンの女なんです』って周りの人に言ったとしても、おそらく噂はどこかでねじ曲がって、『E さんは MtF なんですって』とか、『E さんって FtM なんですって』っていう噂に誤変換されていく可能性はたぶん十分あると思います」

――あ～。下手な伝言ゲームみたいな感じ。

E さん「*そうそう。だから、これは本当に下手な伝言ゲームの見本みたいな形で、いつの間にか私はレズビアンの女の子になっていたりするんです。別にそれによって不快なわけではないけど、自分の情報が制御下を離れて完全にひとり歩きしてどこかに行っちゃうのは驚きました。そして、その間違いが起こっているのかどうかを確認すると、自分の情報が相手に渡ってしまう。*

だから、本当は私は女性として自己紹介したいんですよ。で、後々に、『戸籍は男性なんです』って言うのはいいと思っているので。そうなると、第一印象が変わらないから。でも、先に情報が伝わって第一印象として『オカマが来るぞ』というふうに身構えられていると、ポロポロと男扱いをされる。それが、棘が刺さるようにイヤだなと思うんですよね」

――そりゃそうですよね。

E さん「*別に『女として扱え』っていうのは、性的対象として消費して欲しいという意味ではなく、『性別は女』という属性を持っているということで扱って欲しいという話なので。『女扱いして欲しい』っていうのはそういう意味合いなんですけど、それもなかなか難しい感じですね。それは、ジェンダーの問題も関わっていると思うんですけど、男性文化にとって女性は性的客体として消費するものだから、『女として扱って欲しい』と言うと、そもそもその言葉の意味を理解できない人はたぶんいっぱいいるはずなので。『異なる属性を*

持つ人間として扱って欲しい』という意味合いではなく、『性的客体として捉えて欲しい』っていうふうに捉える男性がたぶんいっぱいいると思う。その説明も難しい」

（中略）

E さん「*私、今の会社で、LGBT のアウティングに対する対策であるとか、面接の時のルールとか、そういったことを決めるワーキンググループに入って、サブリーダーを務めているんですね」*

――そうなんですね。

E さん「*はい。まず、当事者としてそこに入り、最初は全然違うことをやっていたんですよ。会社が大きくなってきたから組織的な経営に移していきたいっていうのがあって、ワーキンググループをいくつか作って。で、人材育成班とか、業務改善班とかいろんな班があって、私はガイドライン班っていうのに入ったんですよ。それで、『E さんという当事者がガイドライン班に入ってバリバリ働いているらしい』という話が社長の耳にも入り、『せっかく当事者が来たんだから LGBT の働き方を煮詰めてくれ』と、社長からガイドライン班に依頼があったんです。で、私は LGBT の働き方を、自分ひとりでやるのは良くないと思ったので、私を含めて 3 人の当事者がいたことは知っていたんで、私から当事者仲間に声をかけて『集まるようにしたい』と言って。で、その上で、オブザーバーとして、『F さんを会議に参加させて頂きたい』と言って、会議に引っ張ってきた。で、それで新たに始まったのが、『LGBT 対策をやるガイドライン班』ということで、昨年 1 年活動し、今年から私がサブリーダーになったという経緯で、働き方を整えているところなんですね。で、私たちの発案で、ヘルパーとして LGBT のスタッフが受けにきた時（採用に応募してきた時：筆者註）の対応マニュアルをまずは去年どうにか作り上げて。*

あともうひとつ、社長から『アウティング防止のガイドラインを作ってくれ』っていう要望があったんですね。私もそれには大いに賛成していて。さっき言ったように、自分の情報が制御不能になって、自分の手から離れていくっていうのはなかなかイヤな経験だったので。で、そのために制度として、『LGBT という存在がいる。LGBT とはこういう存在である。だから、LGBT の扱いはこうする。アウティングは禁止である』と書いた。そうすると、入ってきた人全員に、『アウティングとはこういう行為である。アウティングは禁止されている』という説明が、面接時にされる。で、当事者はカミングアウトをしなくても、アウティングするとどうなるのかとか、そういう当事者が必要となる情報をそのガイドラインによって全部得ることができる。そうなると、LGBT 当事者ではない、受けに来た人にも情報がいく。その人たちに対する啓蒙にもなる。『LGBT という人たちがいる、アウティングというのはこういう行為である、アウティングはしてはならない』ということ

が伝わるように作成しました」

第７項　当事者同士の軋轢　―当事者が当事者を「ポリコレ棒で叩く」―

E さんと F さんは現在、特定の当事者コミュニティには関わっていないという。その経緯について、以下のように語られた。

E さん「*発信力が強いマイノリティって、同じ属性を持つマイノリティの自己スティグマに晒される。でも、その自己スティグマが間違っているかっていうと、決して間違ってもいないというものもけっこうある*」

F さん「*もう～、蕁麻疹が増えちゃう*」

――声がデカい当事者の話は、つい最近も、杉田水脈の時、ツイッターでやたら挑発的な言葉を並べ立てている当事者の人とかいたけど、そんなことやったって何の解決にもならないけどなって思う。人の感情を逆なでする以外、何も生み出していない。

F さん「*＊＊とかそうじゃん*」

E さん「*まあ、いったん落ち着いて。私が今、声デカいって言ったのは、自分に発信力がないのに無理矢理声をデカくして目立っている人たち。それは、今、川股さんが言ったような人たちじゃないですか。杉田水脈もある意味そうですね。ただ、杉田水脈は総合的な発信力はあったはずですけど。比較的ギャアギャアとインターネットの中でだけ声が大きい人たちっていうのはそういう人たちじゃないですか*」

――そうですね。

E さん「*で、＊＊さんは比較的インターネットの中とかではおとなしめにやっていて。でも、本人のマンガがセクシュアル・マイノリティ当事者に売れているので、当事者への発信力が非常に強い存在なんですよね。本人が本当に持っている発信力、わざと悪いことをやって目立ったりイヤなことを叫んで目立ったりするようなことをしなくても、全うなことを言っているだけでもすごく発信力が高い*」

――ある意味、それが理想ですけどね。マトモな人がマトモなだけ目立つという。

E さん「*なんですけど、そうなると、そのマトモな人の意見に入らない人たちっていうのは、埋もれるわけですよ。＊＊さんは、自分を確立しようといろいろやって、いろんなことを*

やる中で、自分の人生をマンガ化しているんですよね。それって、その人の個人的な体験をマンガにして、個人的な成功体験とかも、その人が感じたことをそのまま書いている。

で、そうなると、その人の発信力がマトモな形であれ、大きくなっていけばいくほど、同じ属性を持っているのに反対の生き方をしている人たちっていうのは、その人の存在感や影響力が大きくなればなるほど隅っこに埋もれていく。

つまり、反対の生き方をしている人たちにとっては、その人と同じ目で見られるのは大変なんですよ。『＊＊っていう人がいてね、こんなふうに生きているんだよ』って言われるのは、その人たちにとっては新たなスティグマの押しつけに過ぎないんですよね。自分たちはこっちの生き方を選んだのに、同じ属性の人たちがその方法で成功したからといって、それを私たちに押しつけられてくるという話になる。で、それを押しつけるのが、マジョリティ側っていうか、力のある側、少なくともその場ではマジョリティに属している者なんですよ」

（中略）

E さん「*私たちは、当事者コミュニティからはけっこう遠くて。一応、その理由が、当事者コミュニティの閉鎖性みたいなのが、ちょっと気になってしまう部分があって」*

F さん「*友達で今、遠方に行って仕事している子で、FtM の子がいるんですよ。本人は『FtM だけど限りなく X だな』って言っている部分があって。ただ、男ホル（男性ホルモン注射：筆者註）はしっかりやってて、見た目は男性だなっていう感じなんですけど。その子が同じ FtM の子の結婚式に出席した時に、『FtM のノンケっぷりにちょっと耐えられない』って言ってて。『ノンケ男になろうとする、ノンケ男の雰囲気が出ることがすごく居心地が悪い』ってその子が言ってたんですね。ノンケの男性文化を踏襲していくんですって。で、そういう人たちっていうのは、中性っぽい FtM をないがしろにしたがるんですって」*

――なんか、それ聞いたことある。

F さん「*だから、FtM のコミュニティになかなか入っていけないっていうのを聞いたことがあって。MtF でもそういうことを聞くんですよ。例えば、『MtF レズビアンであってはいけないんじゃないか』っていう考えを持つ人はやっぱりいます」*

――押しつけだ、押しつけ。さっきの話。

F さん「*そう。『自分は MtF だと思うけど女の人が好きなんだ』って言っている若い子がいたんですね。そしたら、『オマエは偽物だって言われちゃうんじゃないか』って不安がって*

いたんですね。私はその子に対して、『それはレズビアンの否定だから、差別的だと思わないかい？　だから、別にいいんじゃない？　あなたが女の子を好きで。でも、女の子になりたいんだったら別にそれは何も問題ないと思うけど』って言ったら、『だって、そういう『MtF はこうじゃなきゃいけないんだ』っていう正当性がいっぱいあるところに行ったら、自分は潰されてしまうもの』って、とても不安がっていた。そういう意味でコミュニティに入りづらいっていうのを抱えている人はたくさんいるし、私や E さんもそう思っている部分はあります。

『MtF のスタンダードな路線は MtF レズビアンにやさしくないだろうから』っていう意識もたぶんあるし、レズビアンはレズビアンで『MtF と付き合っていたら結局オスが好きなんでしょって言われそうで怖い』とか、表には出てこないけれどうっすらと危惧しているようなことっていうのはたくさんあると思います」

――今、「MtF スタンダード」っていう言葉、初めて聞いたけど、逆に斬新。言いたいことは分かるけど。

F さん「*私が今作った言葉だけど、やっぱりヒエラルキーがあるんですよ。たぶん、当事者本人がすごい感じていると思うんですけど、『何をしたら、より偉い』みたいなのがあって。一番下はパスできない MtF なんですよ。で、次がホルモンとか、あとお化粧ができて、パス度が上がっていく。一番偉いのは、SRS を受けて戸籍まで変えちゃった人。なおかつ、男性が恋愛対象だな、きっと」*

――そこ（男性が恋愛対象）は関係ない気がするけど。

F さん「*うっすらとはあります。たぶん FtM もすごくいっぱいあると思います。過度に男っぽく、EXILE みたいになっちゃう子とか、ヤクザっぽくなっちゃう子とかいるらしい。でも、『どっちのほうが偉い』っていうの、あるんですよ。*

＊＊に行った時、MtF ですごく綺麗な方いたじゃない？　やっぱり、『こうじゃなきゃ女じゃないわよ』みたいな雰囲気、とても出してたよね？」

E さん「*雰囲気も出していたし、本人が『その雰囲気に当てられて大変』っていう話もしてましたね」*

――自慢じゃねぇか（笑）。

E さん「*ええと、自慢なのかどうなのか、また微妙な話」*

F さん「*でも、そういうすごい綺麗にしている人って、なんかもうね、綺麗すぎてアンドロイドっぽいから、かえって身内にバレるよねっていう雰囲気はありますよね*」

E さん「*ちなみに、さっきのコミュニティの話で言うと、私たちより 10 若い世代の子たちが、怖がっている感が強い気はするんですよ。社会的なことに対して、特にいわゆる『左寄り』と言われることを声に出して大にすることをとても怯えます。『そんなことを言ったら生きていけない』みたいな感覚が、私たちより強い気がします。だから、LGBT っていう意識のある子たちも『目立たないように埋没しなきゃ』みたいになっている子は、すごく多いんじゃないかなと思います*」

F さん「*両極端です。もう正しさでゴリゴリと押しつぶす感じの子もいるけど、例えば『自分はトランスジェンダーだと思うけど、LGBT 権利運動はどうかと思う。個人的にやったほうがいい』みたいにって言ってしまえる人たちがとっても多いです。まあ、分母が把握できていないから、絶対にそうだとは言えないんですけど、ただ、そういう抵抗感はとっても感じます*」

E さん「*だから、その件もあって、私はちょっとコミュニティからは少し離れる感じがありますね。今の主流ですけど、（リアルな場所のある：筆者註）コミュニティには属さずに、個人個人でネット上でゆるく付き合いながら、ツイッターとかで声を上げるというほうが、たぶん主流だと思うんですよね。みんなで一箇所の場所に集まって運動家的な活動をするっていうのが、良くも悪くも前時代的で流行らないという感じになってきたみたいなので。私、実際にはそっちの活動をちゃんとするほうが絶対にいいと思うんですけど、当事者たちはしがらみの中に行くっていうのはやっぱりすごい大変だと思うみたいで、インターネット上で声を上げるのを個人の活動としてやっているような若い子がいっぱい増えてきた感じがしますね。『具体的にどこに所属しているの？』って聞くと、『別にどこにも』っていうような。そこがまた、＊＊さんみたいな一昔前からの活動家たちと現代の人たちのすごい温度差の原因のひとつにもなっているみたいで。（一昔前の＊＊さん世代の活動家たちは：筆者註）『ゲイリブ活動なんて、結局してないじゃん』って言ってあざ笑ってくるんですよね。で、私たちぐらいの世代からすると、その人たちのやっているゲイリブ活動が居心地悪くて入れないということで、自分たちの仲間とゆるくつながり合いながら声を上げていくというのが活動であると認識しているんですよ。で、そこにもう感覚の齟齬が生じている、もうすごい貶し合いになっているみたいな。それを見ているとつらいですよね*」

F さん「*本当に不毛です。何も発展しません*」

――そうですね。

E さん「*なので、そういうコミュニティには今のところ所属できていないけれど、個々人がひとつひとつの問題に対して（インターネット上で：筆者註）声を上げてそれに対して賛成を投じていくっていう方式の運動、運動とも言えないようなちょっとしたものがいろんなところでポコポコと起こりまくって、叩かれることがない状況が私にとっては理想なんです。『これには賛成できる』というのには賛成して、『これに賛成できない』っていうのは無視して。なんだけど、現在、そういう運動を始めると、叩くほうが勢いあるんですよね。現実には賛同してくれる人数のほうが多くても*」

F さん「*そう。目立つのは*」

E さん「*私も、実際に（インターネット上で：筆者註）署名を集めた時に、集まった署名は 500 ぐらいまでいったのは確認していたんですよ。なんですけど、その 500 人は別に声を上げて私を擁護してくれるわけでも戦ってくれるわけでもない。ただ、賛成を投じてくれるという話で。でも、反対の人たちはすごい声を上げるんですよ*」

F さん「*ヒマなんだろうね*」

E さん「*でも、人数を見ると、反対の声を上げて私を攻撃してきた人たちは。多くて数十人ぐらいじゃないかと思うんですけど、そっちのほうが声は大きくて力は強いんですよ。それがかなり問題だなとは思います*」

F さん「*媒体がネットだからっていうのもあると思います。ツイッターなんかでは、政治的に正しいことを言うよりも、『ポリコレ棒で叩かれる』といって茶化すほうが強いです。『ポリコレ棒で叩かれる』という言葉を初めて聞いた時に、なんてひどい差別的な話だと私は思ったんだけどね*」

E さん「*それが、私がコミュニティとあんまりつながらない理由のひとつですね。コミュニティの単位でどういう運動をどう展開するかっていうのは、本当に戦略的にしっかりやらないとなぁ、と署名活動を通して思った。署名活動にしても、私ひとりでやるもんじゃなかった。5、6 人でいいから、組織だってやるべきだったんじゃないかとか、ちゃんと業界の人も入れるべきだったんじゃないのかとか、いろいろ反省点もあって。ひとつの活動だったら、まずそこに絞って賛同者を募って、負担を軽減して、みんなでそれに対して行動を行う。で、その行動に対するアクションが終わったら解散するという、ひとつの目標に対するコミュニティ活動みたいなのをいくつもいくつも作って、それが横のつながりをある程度持って。で、その中に自分がいくつもいくつも、『これとこれとこれは賛同できる』*

っていう感じで選択して、自分の中にコミュニティ・ネットワークとして持っているのが、私にとっては理想という感じですね」

――そうすれば、ある人から全てについて意見や考え方を押しつけられるわけでもなく、自分はこの人に賛同できる部分もあるけど、賛同できない部分もあるっていう。

E さん「*そうですね。そういうひとつの目標に対する小さな輪っていうのがいっぱいあって、それはそれぞれ横のつながりを持っているけど、全ての考えを押しつけられるわけではない。その中から選択できるということが、私にとってのコミュニティの理想ですね*」

第５節　　Ｇさん

インタビュー日：2018 年 10 月 22 日、11 月 30 日
インタビュー時間：6 時間 12 分
年齢：40 代

G さんは、インターセクシュアル当事者である。G さんの出生時に割り当てられた性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は公務員である。インタビューは、G さんの仕事後、職場近くのカラオケ店にて行った。

第１項　Ｇさんの生い立ち

まず、G さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*生まれた時は、インターセクシュアルなんですよ。ウチ、姉がいるんですけど、父親はずっと男の子を希望してたみたいで。昔のことですから染色体検査もないし、最初に取り上げてくれたお医者さんも『ついていれば男の子。ご両親が希望していれば、男の子でしょう』みたいな感じで、男の子として育てられたんですよ。トランスジェンダーの皆さんが言うみたいに、『生まれつき心が女の子で女の子の物が欲しかった』とか、『女の子として生きたかったのに』とか、それを望んだらみんなから罵倒されたりいじめに遭ったりっていう話をされますけど、私はあれを聞いても自分と違くて。私はどうかというと、普通に男の子として育って、周りも男の子扱いするんで、何も不思議を感じず、普通に暮らしてて。で、まあ変な話、両方の性器もついていたんで、でも、他人のものを見るなんてこと、まずないじゃないですか。で、そのまま私、育ってきて。だから、男の子として育って、虫かご持って虫も取りに行ったし、全然女の子っぽくない。逆に、女の子っぽくするのがイヤみたいな。*

でも、母的にはちょっと微妙なところがあって。父はそうやって男の子を嘱望してたんですけど、母的には『女の子でも構わない』っていうところがあって。で、私が『どっちもついてる』っていうのは、心のどっかにあったみたいで、まあけっこう女の子っぽい恰好をさせられることが多くて。ええ。幼少の頃の恰好を見ると、まるっきし女の子。フリフリの靴下履いて、つばの広い帽子をかぶらされてみたいな。母は、『どっちか』っていうわけじゃなく、私が『もし女の子として生きていくんだったらそれはそれで構いませんよ』っていうスタンスだったんですよ。ただ、容姿がちょっと男の子だか女の子だか分からないふうに生まれたんで、まあ、女の子にしょっちゅう間違われる容姿をしてたんで、『だったら可愛い恰好させちゃえ』みたいな軽い感じで。ウチの姉と母は、私に女の子みたいな恰好をずっとさせてたんですよ。だから、私は別にそれを嫌うということもなかったけれども、周りは私のことを男の子として接してくるんで、私は男の子として生きてるんですけど。じゃあ、母からその恰好をさせられたからといってイヤだったかというと、別になく。それも受け入れて。だから、どっちつかず。もう生まれた時からどっちつかずでしたね。別に『男の子と遊びたい、女の子と遊びたい』っていうのはなく、性別の意識がそもそもない。男とか女とか考えたこともなくずっと育ってきて。

小学校入ろうが何しようが、友達も男の子もいれば女の子もいる。男の子的な遊びもすれば、女の子的なおままごとをしたりお人形遊びをしたりゴム飛びをしたりとか、そういうことも全然していたし。男の子とドッジボールをしたりサッカーをしたりとかもしていたし。ある意味ジェンダーレス状態でずっときてて。だから、どっち側からも何も（排除的なことを：筆者註）言われたこともないし、普通に育ってきて。なんかこう、分からないというか、性別なんて考えたこともなかった。だから、テレビとかで『女の子で赤いランドセルが欲しかった』とか、『スカート履きたかった』とか、全然なくて」

――小学校の時は、黒いランドセルだった？

「ところがですね、ウチの母親がそんななんで、『何色でもいい』って言ったんです（笑）。もういい加減なところもありましたけど。そんな母だったんで、私も困っちゃって、どうしていいんだか分からなくて、青を買ってしまったんですよ。だから、その当時、私らの年齢的にもそうですけど、周りは男の子は黒、女の子は赤って世界で、私ひとりだけ青だった（笑）。『あいつ青い！　あいつだけ青いランドセルしょってる！』みたいな感じで、みんなからけっこう言われて。『オマエ、なんで青にしたの？』って。『かっこいいじゃん！』とかなんとか言ってて」

――へぇ～。ひとりだけ青いランドセルをしょっても、それでいじめに遭うとか？

「ないです。かと言って、私も否定するわけではなく。いまだにそんなよく分からない状態が続いてて（笑）。なんかこう、『好きなように扱って』みたいな。昔からそうだったんで。

*　昔は、ウチの近所も空地とか林とかがあったんです。だから、小学校の頃、男の子普通にしてたんで、カナブンか何か取りに行った時に、スズメバチがいたりとかしますよね。あれを帽子のツバでパンッ！　って落としたりとか」*

――ワイルドですねぇ！

「ワイルドですよ。だから、普通そこらへんの男の子より、よっぽどワイルドなぐらいワイルド。『この野郎！　クワガタ取れねぇじゃねえか！』とか言って（笑）」

――ああ～。「オマエのせいで、バシッ！」みたいな。え～、そうですか。それはすごいすね。

「ははは（笑）。そんな小学生で。でも、そんなふうにしてるんだけど、学校にはフリフリ着てったり。母親が買ってくるから、私はそれを拒否することもなかったから、フリフリ着てって、前の日はGパンの半ズボンにタンクトップで男の子みたいな恰好して、まあ男の子だから男の子の恰好なんですけど、普通に学校行って『よぉ～！』とか言ってたんですけど。明くる日になったら、フリフリの恰好して『よぉ～！』とか言って（笑）。フリフリの恰好してたからいじめられたかっていったら、女の子とかから『可愛いじゃん、今日の恰好』『でしょ？！』なんて言って。普通に、周りの男の子とかも特に何も言わず、『まぁ、Gだから』みたいな感じで」

――なるほどね。お話を伺っている限り、ジェンダー、セクシュアリティの部分で、抑圧を感じていたようには全然思えない。

「そうですね。だから、本当、幼少期なんか全然普通にしてて、それが当たり前だと思ってて。小学校の時は、全然何もなく、そうやってきて。中学校行ってから、ちょっといろいろあったんですけど」

――インターセクシュアルっていう自覚はお持ちだったんですか？

「人と違うっていうのも全然思っていなくて。別に男の子のお股を見たわけでも何でもないし。ウチの両親からも、『ちょっと違うけど男の子だ』って言われて育ってたんで、幼

少の頃は気にしたこともなくて。だから、性自認とか性別自体を気にしたことがなく、ずっと育ってきて。

中学入ったら、他のところから来るんで、知らない人が入ってくるじゃないですか。それでもまあ、男の子の学生服を普通に着て、振舞ってたんですけど。まあ、いつの間にか小学校と同じ状態で、女の子ともいて、男の子ともいてみたいな感じで遊んでて。だから、その後男の子から目をつけられるようになっちゃった。私が忘れ物とかけっこうするんですよ。そそっかしいんで。そうすると、クラスの女の子とかウチの近所の女の子とかが私の忘れ物は届けてくれて。『G ちゃん、忘れ物だよ。おばさんから頼まれたよ』『サンキュー』とか言って、もらったりとかして。で、その調子で、ウチの近所のお母さんが『じゃあ、ウチの＊＊のも届けて』って言ったら、『＊＊ちゃんは、ヤだ』とかって（笑）」

――ははは（笑）。仲介役の女の子が「G くんのはいいけど、＊＊ちゃんのはヤだ」って。

「そうそう。ははは（笑）。『なんだ、あいつばっかり』みたいな感じになっていって。それでも、以前から知ってる人間は『G だからしょうがない』みたいな感じだったんですけど、その他のところから来た子とかは分からないんで、『なんだあいつ、ちやほやされて』みたいな感じで、目をつけられたりとかして。で、その頃から、体力的に敵わなくなってきちゃって、ケンカしてもやられる一方みたいな。それまでは全然平気だったんですよ。でも、中学校ぐらいかな、もう体力的に全然敵わなくなってきて。それでも悔しくて、毎日鍛えてたんですけど、ダメで」

――筋トレとか？

「筋トレとかして。で、インターセクシュアルっていうのはそうらしいんですけど、身体が本当に虚弱体質で。小学校も 3 分の 1 ぐらい休んでるような感じの生活で。でも、中学校入って身体ができてきて、って思っていても、それでも体力がなくて。本当は運動部に入りたかったんですけど、お医者さんと両親から止められて、『文化系に入れ』って言われて。絵が好きだったんで美術部に入って。で、余計、体力的に敵わなくなってきたり」

――っていうことは、運動が嫌いだったわけではなく？

「ではなく、体力的に敵わなくなって、男子と同じ授業がままならなくなってきちゃった。

小学校低学年の頃は体力差があんまりないんで、やられたらやり返す的な体力もあったんですけど。もうだんだん、高学年、中学校ってなっていくと、体力差が出てきちゃって全然敵わなくなっちゃって。でも、悔しいから毎日走って鍛えるみたいな。ひとり密かに夜中の土手走って、腕立てしたり腹筋したりやってたんですけど。それでも敵わなくて。

悔しくて。けっこうストイックなほうなんです、そういうこともずっとやってたりとかして。だから、そうなってきちゃって、ちょっといじめの対象になったりとかもしたんですけど。まあ、持ち前のこういう性格なんで、『いつかやり返してやる！』みたいな感じで思ってたんですけど、そうもいかず。

*　で、思春期になって、身体がだんだん女性化してきちゃったんですよ。胸が出てきちゃったり、初潮がきちゃったりとか。きちゃいましたね。びっくりしちゃって。私、普通に男の子だと思ってたんで。ある日突然、なんかこう･･･、血の塊というか、ポロッと出てきて。『なんだこれ？』と思って、触って、『うえぇえ～～』って思って。『お母さん、大変だよ。切れ痔になっちゃったよ』って言って。ははは（笑）」*

――ははは（笑）。それは、おじいちゃんですね。

「*ウチの母親から『オマエ、拭き過ぎなんだよ』って言われて*」

――じゃあ、お母様がそれを聞いても、まだ男の子として？

「*いや、まさかそんなものが来るとはウチの母も思ってなかったんで、身体的には男の子だと思ってた。ただ、ちょっと女性器がついちゃっているだけだと思ってたんですよ。少し女的な部分がついちゃってる男の子って思ってたんで、まさかそんな、生理が来るとは思ってなかったんで。身体が、女性化が始まっちゃって*」

――中学生の頃に、女性化が始まった。

「*ええ、始まっちゃって。で、まあ、『切れ痔』とか言ってたんですけど。私は最初、それが生理だと全然分からなかったんですよ。で、すぐ終わっちゃったし。その間に、お姉ちゃんからは『オマエ、血出てるんだったら、私のナプキンを使っておけ』『そうなの？　どうやって使うの？　お姉ちゃん』って、その時、お姉ちゃんにナプキンの使い方を聞いたりとかして。で、学校行ってましたけど*」

――へぇ～。お姉ちゃんにナプキンのつけかたを聞いたんですか？

「*聞きました。『どうやってやるの？』って言ったら、『パンツに貼るんだよ。危ない。聞かなかったら、この貼るほうを自分に貼ってたよ。バカじゃないの、アンタ』とか言って*」

――なるほど。すごいですね。そこまでフランクな。

「ウチのお姉ちゃんも、私を男の子って思いつつも、どっかあって、あんまり男の子扱いされたことがなくて。で、お姉ちゃんは、その時おかしいと思ったみたいで、『アンタさぁ、他のものなんじゃないの？』『他のものって何だよ？』みたいな感じで言ってて。『だから生理とかそういうのなんじゃないの？』『なるわけないでしょ、そんなの』とか言って。ははは（笑）。私の感覚的に、生理っていうのはすごく血が出るもんだと思ってたんですよ。ところが、さっき言ったみたいに、塊みたいなのがボロッと出て、その後でちょっと血が出て終わりだったんで。もう完全に切れ痔ぐらいにしか思ってなくて。

一番最初はそんなのですぐ終わったんですけど、何か月後かにまたそれが来たんですよ。で、その時、やっぱり最初に塊みたいなのがドンと出たと思っていたら、止まらないんです、今度は。けっこうな量、勢いが出て。気がついたらズボンも血が染みてるみたいな。『うわぁ！　とんでもないことになった』と思って。トイレ行ったら、『いや。これ、切れ痔じゃない』と思って。で、お姉ちゃんの話をハッと思い出して、『あ～っ！』と思って。で、クラスの女の子に話して、『ちょっと生理になっちゃったみたいなんだけど』『なんで生理になるの？』『だって、なっちゃったのはしょうがないじゃん』って言って。血ついたものを『見て、これ』『うわぁ～』って言われて。したら、クラスの女子がやっぱりナプキンくれて、『どうしよう』って言って。トイレとか行ってギャーギャー言われるのイヤだから、学校にベランダがあったんですよ。『じゃあね、私ら見ててやるからベランダでつけてこい』『マジで？！』って思って。みんなが『どうしたどうした、G、どうした？』『ちょっと来んな！　男は！』って、みんなが追いやってくれて。で、ベランダで貼って。で、ジャージに着替えて、ズボンの血を洗って」

――みんなのチームワークですごい。

「なんとか乗り切ってるみたいな感じがあって。でも、男子から嫌われてたり馬乗りになっていきなりやられたりとかあったんですけど、女子は別にそんなことなかったんです。だから、プールの授業とかも普通にやってたんですけど、段々段々イヤになっちゃって。で、見学とか。で、胸もちょっと出てきたりとかしちゃったんで。で、昔だからしょうがないんですけど、中学校の先生が余計なこと言っちゃって。

私の身体のことを、ウチの母もちょっと『普通の子と違う』ってなんとなくは言ってたんで。で、学校の先生が、そうやって私が生理だなんだってワーワーなったこともあったんで。で、体力的にも敵わないってことになった時に、私のことを自分の知識の範囲内で、言っちゃったんですよ。『G は身体が普通じゃなくて、女の子みたいな男の子みたいな身体だから、みんな、そこらへん分かってやれ』って。自分も分かってないのに言っちゃって、予備知識がない中で。だから、『何だよ、見せろよ』が始まっちゃったんですよ。だから、幼馴染、小学校の友達とか、ずっと一緒にいる友達は分かってるんで、そういうの

全然言わなかったんですけど。後から、あんまり関わっていない人から、始まっちゃって。『もう学校行きたくないな』とかずっとあって。で、プールの授業とかも、『なんだよ、オマエ、オカマだから海パンになれないのか？』みたいな感じで言われたり。腹が立つから、先生の制止を振り切って、『オレ、プールの授業出るから！』『ダメだ。オマエは出るな！』みたいな感じで言われたり」

――先生から止められた？

「*先生から止められた。今じゃ考えられないんですけど、昔はそんなのがあって。『オマエは普通の身体じゃないんだから、問題になるだろう。だから、オマエは見学してていい』って*」

――確かに今じゃ考えられないですね。ちなみに、中学校の体育の授業って男女で分かれると思うんですけど、

「*男子のほうでやってた。だから、全然できないんですよ。走り幅跳びにしたって、棒高跳びにしたって、球技にしたって、敵わないんですよ。それで、体育の先生も『全く、オマエ、ダメだな』みたいな感じで言われたり。体力的に敵わないから無理なんですよ。で、そうなるとどうなるかっていうと、クラスで『なんだあいつ、へなちょこだな』みたいな感じで、いじめの対象になっちゃって。体育倉庫でマットの上に投げられたりとか。で、そこで大暴れして、イヤじゃないですか。物でも何でも投げてやるじゃないですか。で、『誰やった？』ってなると、『私』って話になって。『なんでそんなことするんだ！』『そうやってやられたからだ』って。『そんな時は先生に言え！』とか言われたけど、でも先生に言ったって相談相手にもならないから言いたくないって思いながら*」

――なるほどね。じゃあ、実際、あんまり相談にも行かなかった？

「*行かないですね。どっちかというと、先生嫌いでしたね。言ったところで分かってもらえないし。昔は学校でもそういうことにちゃんと対応してなかったんで。だいたい、私が『迷惑分子、異端児』みたいな感じで学校は捉えていて。だから、学校もどっちかっていうと、私が何かあっても『知らない、見ない』みたいな感じになって。でも、暴れたりするとお説教はされてたんですけど、私からしたらそのぐらいのことをしないと逃げれないんで。腕力的には敵わないし。だから、体育倉庫の中にあったポールとかを振り回したりとかしてましたけど。だから、中学入ってから、全然、人生が一転しちゃった。で、行く高校がなかったんです*」

――ん？　行く高校がなかったっていうのは？

「*受け入れてくれる高校がなかった、昔だから。公立高校とか『前例がない』とか。私立高校でも『そういう子を扱ったことがないんで、何か起こった場合に責任が持てない』というので、進学の時期になったら、成績とか内申どうのこうのじゃなくて、『普通じゃないから無理だよ、ウチの学校は』って、公立高校とかことごとく断られて。行く高校がなかったんです*」

――私立が断るんだったらまだしも、公立が断るっていうのはちょっとどうなんですかね。

「*昔だったからでしょうけどね。なんかそういう身体的なことを言って。中学3年の担任が女性の教師で、いい先生で、『普通の子と同じ、男子と同じ生活ができない。だから、そこのところを考慮して、よろしくお願いします』とか、そういうのを全部内申書に書いてくれたんです。でも、高校のほうとしては、『そんなのが来られても施設的にどう使わせていいのかも分からないし、どう扱っていいのかも分からない。だったら来させないほうがいい。扱いが困るから、ちょっと遠慮願います』みたいな感じ。公立高校も全て断られて*」

――実際に高校入試は受験されたんですか？

「*そうです。だから、『行く高校がない』って先生から言われて。先生が一生懸命探してくれて、『私立も事情を説明すれば入れてくれるところがあるかもしれない』って言われて。でも、結局ダメで。で、＊＊のほうにあった私立の通信制の高校が、いじめられた子とかも受け入れてくれるところで、入れてくれたんです。そこだけ、唯一。で、そこに通ったんです。通信制なんですけど、行くんですよ*」

――スクーリングって言うんでしたっけ？

「*なんかそんな感じで。まあ、校舎もちゃんとあって、行ってたんですよ。そこに行ったら、みんなちょっと変わっている子とかいろいろされた子とかもいるんで、けっこう仲良くやれて。男子校だったんで、普通に男の子としての扱いなんですけど。緩い高校っていうか、なんかよく分かんない高校で。柔道の授業で下にTシャツ着ようが何しようが勝手だったし、プールの授業もなかったし。いじめられた子とかも来てたんで、持ちつ持たれつじゃないですけど、あんまり人のことをどうこう言うっていうのはなくて。許可さえ出せば、車の免許も取れるしバイクの免許も取れるし、自由にできる高校で。だから、緩いから、悪い子も最初は入ってくるんですけど、ああいう子って反発してナンボみたいなと*

ころがあるじゃないですか。『やっても構わない』って言われちゃってるから、つまらなくなるんですよね。そのうちみんな（高校から：筆者註）いなくなっちゃったよ、みたいな」

――反発し甲斐がないから、つまらない？

「し甲斐がないんですよ。ははは（笑）。例えば、バイクで学校の前に乗りつけるとか、昔の不良じゃないですか。ところが、それをやったところで、『別に、許可もらえば乗れるから』みたいな。だから、悪い子がどんどん（高校を：筆者註）やめていっちゃったんです。だから、最終的には、普通な子だけが残った。もう平和そのものみたいな感じで」

――卒業アルバムを見ると、まるでいい子ばっかりいるような？

「そうです、本当に。緩い高校でしたよ。逆に、だから、語ると言っても何もないというか。平平凡凡と過ごしすぎちゃって」

（中略）

「（中学時代の：筆者註）さっきの生理の話も、クラスの女子から話が分かって、私は『女子トイレを使わせていい』って言われて。『男子トイレだと不都合がある』って。で、先生にそれを言ってくれて、私は『特例で使っていい』みたいな感じになって。で、男の子のクラスメートが帰って、『G は女子トイレ使えるんだよ』っていう話をするらしいんですよ。そうすると、その親からクレームが入ったりとかして。『なんで G さんちの子は女子トイレを使えるの？』って言った時に、また先生が言わなきゃいいのに、『いや、あの子はマトモじゃないから』みたいな感じで。そうすると、余計『あの子は普通じゃないから、付き合うのやめなさい』みたいな感じで言われたり」

――先生の対処、あんまり良くないですね。

「昔だからでしょうけど。今みたいにトランスジェンダーとか LGBT だとか、教育や情報発信があればいいんですけど。インターネットもない時だから、もう情報がなかったんですね、何も、先生とかにも。特殊な事例っていうのが。だから、もうそう言わざるを得なかった、同情して考えるならば。今になればそう思えますけれど、当時は本当に恨んでた。『なんでそういうこと言うんだ』と思ってた。だから、私は言ってもいないのに、女子トイレを使うのを、先生から『周りに言うな、特例なんだから』みたいな感じで言われて。

いや、私は言ってないよ。オマエ（学校の先生：筆者註）がクラスで言ったから、それが広まっただけじゃん』とか思いつつ。先生は自分のせいにしたくなかったんでしょうけど。

クラスの女子から『女子トイレ使っててもいい』って言われてて。で、上級生、下級生もいるし、『あれ？　男がなんで？』って言った時に、『アイツはこうだから』みたいな感じで、クラスの女子がやんわり言ってくれた。『本当に？』とか言うから、『本当だよ。痛いんだから、下腹部が』とか言って。『え？』とか言って、『めんどくさい、見せるわ。ほら』とか言って。血のついたナプキンのついたパンツをこうやって見せたりとか。『あ、ホントだ。ごめんごめん』とか言って」

――そりゃ、「ごめんごめん」って言いますよね。そこまで見せられたら。

「*女の子は悪意があるような感じしない。男の子は悪意がある感じに取ってたんですよ。『見せろよ～』みたいな感じだったけど、女の子はどっちかっていうと、『え？　どういうこと？　そんなことあるの？』みたいな感じで言ってくるから、『あるよあるよ』とか言って」*

――へぇ～。男の子は興味本位的な？

「*そうです。そういう感じで接してくるんで、すごくイヤだったんですけど。女の子は理解しようと思って言ってくれている部分があったからなんでしょうけど、言われてもイヤじゃなかったし。口で言うのがめんどくさかったから、『見ろよ、ほら』って。股開いては見せないですよ。ただ、血のついたナプキンをこう見せて、すぐ履いたりとかしてましたけど。昔だから、理解がなかったからしょうがない。そんなの、日常茶飯事あって。だから、先生も何かあっても、私がそうやってやられてもいじめられても、『オマエは普通じゃないんだから、逆らうな！　逆らったら、そうやってやられるんだから、穏便に済ませ』みたいな。逆に、私が怒られちゃうみたいな感じ。*

そういう学校で。唯一分かってくれたのが、中学3年の担任の女性の先生だけ。男性の先生はことごとくそんな感じで。そこらへんが、ちょっと男性を毛嫌いしているもあったんですけど。でも、好きになるのは男性って、よく分かんなくて」

――中学生ぐらいから、女子のほうが柔軟に対応してくれるんですね？

「*全然柔軟でした。興味本位っていうのがなくて、分かってくれようとしてましたね、今思えば。だから、何も疑問も抱かずに優しくされたことに対して、『ありがとう』ってできたし。男子は、なんかこう興味本位だから、『もういい』みたいな。*

先生もそんな感じだったのかな。男性教諭の人は一切合切そんなだった。分かろうともしてくれない。ただ『めんどくさいのがいる』みたいな感じで。女性の先生が分かってくれてましたね。だから、男の人が怖くてしょうがなかった。自分、男なのに、男が怖かったっていう（笑）。自分の性自認がまだその時、男の子だと思ってたんですけど、男が苦手で。女の子と話したり遊んだりとかしてましたね、中学の時。でも、初恋は柔道部の主将の男の子だったんですよ」

――中学の時に男性に初恋をして、G さんの性自認的にはその後どういうふうになっていったんですか？

「*それから、考えないようにしました。好きとか嫌いとか、考えると辛いし。男の人が嫌いで怖いのに、なんで＊＊君を好きになった？　とか思って。だから、もう考えないようにしようと思って。性自認もまだその時確立されてないっていうか、男の子だと思っていたんで。昔だから言葉がないから、今でこそゲイとかそういう言葉がありますけど。それこそ、テレビをつければ保毛尾田保毛男（ほもおだほもお）が出てるみたいな感じなんで、『もしかして自分はホモじゃん』とか思って。これは一生、墓場までしょっていかなきゃいけないと思って*」

――なるほどね。そうですか。

「*で、高校生活は無難に終わって、イラスト、デザインの専門学校に行ったんですけど、その時に今度は女の子から告白されるんですよ*」

――専門学校のクラスメート？

「*はい。告白されて、とりあえず付き合ったんですけど、どうにもこうにも、友達感覚が異常に強くなって、買い物とか行くと楽しいんだけど、一緒にイチャイチャするのが全然楽しくない、苦痛以外の何物でもないみたいな感じ。で、結局、最後に何て言われたかっていうと、『男を感じない』って言われて。*

で、性自認が出てくるのは全然後のほうで。全然、その時まで自分は男って（思っていた：筆者註）」

――イラスト業界の専門学校に行かれて。それって 2 年間？

「*2 年間です*」

第２項　就職、性別の揺らぎ

G さんは、専門学校卒業後、公務員になった。その後、男性らしくなるために男性ホルモン投与を開始した。しかし、ホルモンバランスを崩したことをきっかけに、女性として生きていくことを受容する。その部分の語りは、以下の通りである。

――2 年で卒業されて。その後、役所に？

「*専門学校出て、1 年ぐらいはデザイン業界の仕事に行ったんです。でも、その業界って給料が安すぎちゃって、食べれないんですよ。寝る間も惜しんで働いても、『勉強させてやってるだけありがたいと思え』みたいな。これは無理だってなった時に、ウチの親に相談したら『役所に入れ』って言われて。それで、試験受けて合格はもらってたんです。でも、その時、入る人数が多くて『待って下さい』って言われて。私、2 年待たされてるんですよ。だから、その間、定職に就くわけにもいかず、実家の仕事を手伝ったり、工業系の資格を取ったり、『ウチの知り合いのところで暫く働いてこい』と丁稚奉公みたいな感じで行かされたことがあるくらいで。で、役所に就いて*」

（中略）

――女性の身体になっていっちゃうのがイヤで男性ホルモンをしてた？

「*イヤで、してたんです。男性だから男性ホルモン療法は意外とすんなり行けて。で、普通にしときゃいいのに、足りないと思って、1 つのクリニックで男性ホルモン打ってもらって、他のクリニックに行ってそれを黙って、もう 1 回、2 度打ちしてたんですよ。そしたら、身体こわしちゃって、男性ホルモン療法できなくなっちゃったんですよ。そうなると、ホルモンバランスがガタガタに崩れちゃうんです。だから、そこから逆に、余計、女みたいになっていっちゃって。*

で、そうなっていっちゃって、恋愛対象も男性だし、どっちかって言ったら、女性の自認っていうよりも、もう女として生きていったほうが、私、ラクだなと思って。頑張ってきたけど、男として生きるよりも、やっぱり女として生きたほうがラクだなと思ったのが＊＊ぐらいの時です。そこで初めて、自認が生まれたんですよ。

もう見た目も女性っぽくなってきちゃったし、女性として生きたほうが自分はラクだって思った。だから、MtF の人と事例的に逆になりますよね。身体がそうなっちゃったから、その身体にメンタルを持っていった。『身体がそういうふうになっちゃって、そうやって世間様が見るんだったら、もう女として生きていこう』みたいな。髪の毛も伸ばして女の恰好して生きていこうって思ったのが、そのぐらいの時」

第３項　LGBT 団体での「居場所のなさ」　―メジャーマイノリティがマイナーマイノリティを差別する―

G さんは、ジェンダー・アイデンティティを模索しながら、いくつかの LGBT 団体を訪ねた。しかし、そこには「マイノリティの中のマイノリティ」の人にとっては居場所がなく、LGBT パレードに行っても G さんは幻滅してしまった。その部分の語りは、以下の通りである。

「もともと恋愛対象も男性だったし、無理はなかったんですけど。でも、LGBT 団体だとかあるじゃないですか。なんかね、私みたいなインターセクシュアルっていうのは、除け者にされるんですよ、LGBTQ とか IQ とか言われている割には、行くと、私の居場所ってないんですよ。MtF でも FtM でもないし。レズかゲイかでもないし。じゃあ、X ジェンダーかっていうと、いやそんなこともないし、ってなった時に居場所がないんですよ。

＊＊さん（LGBT 団体の代表者：筆者註）は、『大丈夫。相談してくれたら何でも協力するよ』って言ってくれるんですけど、でも、中に入ったら居場所がないんですよ。クラインフェルター症候群とかあるじゃないですか」

――ちょっと存じ上げない。クラインフェルター症候群？

「染色体異常の人たち。染色体が男性、女性、XX、YY とか、そういう染色体が滅茶苦茶になっちゃっている人たちのことを言うんですけど。っていう人が＊＊の中にもいて、その人たちの集まりがあって、私も『クラインフェルターの重症版』みたいな感じだから、一緒に入ってもいいのかなと思って行ったら、『オマエは違うじゃないか。完全体のほうだろ』って言われて。『なんだ、完全体って？！』とか思ったんだけど。『申し訳ないけど、ウチの集まりからは出ていってくれ』って言われて、『じゃあ、私、居場所ないじゃん』って＊＊さんに言ったら、『でも、困ったら相談受けるから』って言われて。あ、そういうことか。団体の中にいて困ったら『俺がちゃんとするから』っていうことじゃなくて、ウチの団体にいなくても、何か困ったことがあったら言ってくれたら協力するよっていうことだったんだ、ってその時気がついて」

――その後、実際に何か相談に行かれた？

「もう、行きたくもないから行かなかったんですけど。で、それまではけっこうね、LGBT だとか何だとか解放的なことに対して望んだりして、レインボープライドに参加したりだとか、何か言われたら行ったりしてたんですけど、もう全部興覚めしちゃって。もう LGBT だとかどうでもいいみたいな感じになっちゃって。まあ、いまだにちょっと思ってるんですけど」

――パレード歩いたことあるんですか？

「*ります、あります。ウチの母も連れて行ったんですけど、『あのパレードに母を連れて行かなきゃよかったな』と思ったのが、母にそういうのがあって『みんな頑張ってるでしょ』って見せようと思ったら、母は捉え方が違ったんですよ*」

――どういう捉え方？

「*一般の人（LGBT 非当事者：筆者註）はそうやって捉えるんだなと思ったんですけど、結局、パレードの中でそういう人たち（LGBT 当事者：筆者註）だけだったらいいんですよ。お祭り騒ぎみたいに半裸の人たちが歩いてたりするじゃないですか。そうすると、『なに、あの人たち。頭おかしいんじゃないの』って、ウチのお母さんは言い出したんですよ。レインボープライドで、自分の訴えを主張して歩いている人とかだったらいいんですよ。それが、お祭り騒ぎみたいにビキニみたいな半裸な恰好していたりだとか、性器が見えるギリギリの恰好して歩いたりとかしている人を見て、ウチの母親は何て言ったかと思ったら、『マトモじゃないじゃん』って言ったんですよ。『ああ、連れて来なきゃよかった。やっぱりそう捉るんだ』と思って。私、今まで自分の中でちょっとそういうのイヤだなっていうフシがあったんですけど。『あ、やっぱ、そう思うよね』っていうのが、もう確信になって*」

――あれ、はっきり言って、露出狂ですよね。

「*ですよね。だから、私もあれ大嫌いで、（パレードで自分の：筆者註）訴えとやってる内容が違うというか。あれはただ、露出狂というか。う～ん。それを認めろって言われたって、認められるわけないじゃんって思って。ジェンダーレスとヌーディストは全然違うと思って。で、これもどうかと思うんですけど、なんか、ゲイの身体のすごいごっつい人がパンツ一丁でね。あれは、世間体的に見たらおかしな人にしか見えなくて*」

――そうですね。当事者しかいない場所で勝手にやってればいいのにと思う。

「*ですよね。だから、あれは違う。あれがゲイの人たちだとたぶん認識されちゃうと、一般的にやっぱりゲイの人は差別されちゃうんだろうなと、自分の中で考えたりとか。普通に服着てパートナーの人と仲睦まじく歩いている人もいるんだけど、パンツ一丁のゲイの人、目立つじゃないですか、逆に。で、世の中の一般的な人は目が行くのは、その人に行っちゃうから、『あ、ゲイってああいう頭おかしい人なんだ』って思われちゃうなぁと思*

った時に、これは私のしようとしていることと全く違うと思って、もう関わらないようにしようと思って」

第４項　家族へのカミングアウト、説得と理解、性別適合手術

G さんは「女性としての身体に合わせて生きていこう」と決めた後、それをご家族にカミングアウトし、理解してもらうために格闘した。その結果、G さんは「生きやすさ」を獲得していく。その部分の語りは、以下の通りである。

――ご家族の方に、性自認とか「今後は女性として生きていく」ことを説明されて、その後、ご家族からどういうリアクションがあったんですか？

「＊＊*の時に意を決して、もうそうやって女性として生きていこうと思って、両親に言ったんですよ。母親は『まあ、好きにすれば』みたいな感じで、姉も『好きにすれば』みたいな感じだったんですけど、父親だけは納得してくれなくて。ずっと、説明してたんですけど。でも、いまだに MtF の人たちに言うんですけど、『分かってくれないからって諦めたりとかしたら守ってくれるものも守ってくれなくなるよ。そこから逃げるな』って。家族が分かってさえすれば、私が女の恰好で生きたとしても、『オタクの息子、どうしたの？』って言われた時に、『私も信じられない。なんで、あんなになっちゃったんだろう』って言われるか、分かってもらえてたら『違うんだよ、アイツもいろいろあってああいう生き方をしなきゃいけなかったんだよ』みたいな感じで言ってくれるのと、全然立場が違ってくるぞ、ってよく言うんですけど。家族から突き放されちゃったら、『アイツ、頭おかしいんだよ』って言われちゃったら、周りも『あそこの息子は頭おかしい』が広まっちゃう。身の回りが全部それで広まっちゃう。でも、そこを敢えて、もう苦虫を噛んで煮え湯飲んででも、分かってもらう努力を続けて分かってもらえさえすれば、そういうふうに家族が言い訳をしてくれる、世間様に。だから、世間様は『あそこの息子はそうだったんだ。今までそうやって苦労を抱えてきたんだ』って言って、『これからは女として生きるんだ』っていうのを広めてくれる。で、結局、父親には分かってもらえなかった。最終的には父親は亡くなっちゃって、分かってはくれなかったんですけど、まあ性別適合手術をするのも認めてくれて。で、母親も分かってくれて。ウチの姉も当然分かってくれて。ウチの親戚もみんな分かってくれて。で、性別適合手術を＊＊の時にしたんですよ*」

――じゃあ、すんなり認められたわけではなくて、特にお父様に対しては、

「*ええ。普通に男性として生きてきたんで。最終的にはどうなったかって言うと、私が実家に行くとその話をするから、父親は『顔も見たくない』って言って、自分の部屋に入っちゃうんです。でも、逃がさずに、『お父さん、聞いて。お父さんに納得してもらわない*

と、私もう身の振り方が決められないから』って言って。『もう帰れ』って言われて。でも、それでも諦めずに、毎日のように実家に行っては説得し続けて。そんな姿を見てるから周りの親戚とかも分かってくれて。その時は『辛いな』みたいな感じで。で、ウチの父親も結局、周りから後押しされる感じで、『もう好きにすればいい』みたいな感じで。

そうなるとどうなるかっていうと、私のことを擁護してくれるハレーションが起きていって、親戚、近所でもこの恰好で堂々と歩けるし、『G ちゃん、おはよう。ずいぶん変わったねぇ』『そうでしょ、綺麗になったでしょ』とか、近所の魚屋さんに行ったりだとか。幼馴染とかも会ったりしても別に普通に。だから、ウチの甥っ子、姪っ子もいるんだけど、別に普通にこの恰好でどうってことないし、近所のおじさん、おばさんにだって『おはよう』とか言って。ウチの近所も全然この恰好で平気だし。だから、MtF の人がなんで生きづらいのかっていうと、それが起きないと結局辛いんですよね。『頭のおかしい人』っていうレッテル貼られちゃうし、家に帰っても『あそこの息子、どうしちゃったんだろう』って。で、自分で自分の首を締めちゃってるんですよね。だから、『逃げるな』ってよく活を入れるんです。結局、そうやって言われちゃうから、いたたまれなくなってメンタルを病んだりおかしくなっちゃったりするんですよね。拠りどころがどこにもなくなっちゃって」

――人間、やっぱり、どっかしら拠りどころは必要ですからね。

「*絶対必要ですよ。それが、だから、『最終的な拠りどころはどこだ？』って言われたら、『もうイヤでも何でも縁が切れない親戚、家族だよ』って私はよく言うんですけど。だから、『認めてもらえないから＊＊に出てきた』とか言う人がいるんだけど、そういう人にも全然遠慮せずに、『帰れ。今すぐ帰って説得してこい』って言うんですけど。後ろ盾がないと、何もできない。だから、私の生きてきた事例として、『逃げるな』って」*

第５項　職場でのハラスメントと配慮

G さんは、性別移行をめぐって職場でのハラスメントと親切な配慮を経験した。その部分の語りは、以下の通りである。

「*職場は、＊＊で役所に入ったじゃないですか。それからは、もうずっと普通の役所の職員として、どっちかって言ったら肉体労働系の仕事なんですよ、私の仕事って。ごみ収集とかそういう仕事で。まあ、それでも嫌いじゃなかったんで、そういう仕事をずっと続けてたんですけど。で、ごみの焼却処理場に勤務するようになって資格を取ったりして。で、男性で暮らしてる間は、男性として普通に仕事してて。で、洗身とかもしなきゃいけなかったんです。ごみ収集って汚れるんで、仕事の一環で洗身も入ってるんですよ。みんなで共同浴場みたいなのがあって。そこ使わなきゃいけなかったんです。男性ホルモン打って*

た時は、男性化してたんでまだ大丈夫だった、入ってましたけど。まあ、苦労といえばそのぐらいで。普通に男性として暮らしてて。で、収集作業が体力的にきつかったんで、なんとかならないのかなと思って。で、焼却処理場っていう、どっちかっていうと技術職で、ボイラーやクレーンを動かしたり、薬剤管理をしたり、そういう資格をとりあえず何個か取ってきて、＊＊の時に職場を異動した。で、それまでずっと、普通に焼却処理場の一職員、男性として暮らしてて。で、途中から、ちょっと女性化が始まっちゃってたんですけど。まあそれでも（従前通りの勤務を：筆者註）やってて。まあちょっとなよなよしてて女っぽいなっていうのはよく言われてたんですけど、『G、女みたいだ』ってよく言われて。で、さっきのカミングアウトの話じゃないですけど、＊＊の時『もうダメだ』と思って、もうそうやって決めたし、両親もそうやって説得するって決めたし、それで生きていこうって決めたんだから、職場もやっぱりそうしようと思って。もうなんかハレーションが起きてもしょうがないと思って。で、女性の恰好で職場に行ったんですよ。で、その時に、周りは、『どうしたんだ？　G、どうしちゃったの？　え～！？』みたいな感じで言ってたら、ウチの係長が理解のある人で、私も『私、もう男性として生きていくのが辛くて、女性として生きていこうと思う』ってウチの係の中では相談してたんで。で、その係長がいい人で、ちょっとこう、べらんめぇな感じの人だったんですけど、『オマエら、G がどういう気持ちで、どういう覚悟で今日こういう恰好してきたか考えろ！』って一喝してくれて、すごくいい人で。で、黙って、『そっか。G、元々女みたいだし、いいんじゃね？』みたいな感じになって（笑）。そうやって、ウチの職場も丸く収まっちゃって」

――係長さん、ありがたい方ですね。

「ありがたい。だから、この人にはついていこうと思って、その人から言われたことはもう何でも実行してました。そう、その時の職場はすごくいいところで、女性として暮らし始めて。で、私、その前から洗身場を使ってなかったんですよ、身体が女性化しちゃっているから。洗身の時間があったんですけど、私は入らなかったんです、ずっと。そしたら、それを気にかけてくれている他の職員の人が来て、『G ちゃん、お風呂なんで入んないの？』『だって、私入れないじゃん』『分かった』って言って。で、何日か経ってから、『G ちゃん、お風呂入ってきな』って言われて。『なんで、無理だよ』って言ったら、『いやいや、あっちの来客用のお風呂、使っていい』って言われて。来客用のお風呂っていうのがあったんですけど、来客があってもそんなに汚れるところには行かないし、ほったらかしのお風呂があったんですよ。『え、いいの？』って言ったら、『だって、あそこさぁ、洗濯機が横に置いてあって、私がお風呂に入っちゃったら、洗濯機取れないじゃん』って言ったら、みんなにちゃんと周知して、私がお風呂に入ってる時は『洗濯機の中に入っているものを取り出すのは、G が洗身終わるまで待て』っていう話になってるから。で、『中に鍵つけた』って言われて。『え～っ！』って言って行ったら、鍵ついてて、『使用中』

っていう掛札があって、『それをひっくり返して入れ』って言われて。もう涙が出るほど嬉しかったんですよ。それでもう、入れるようになって。なんていい職場だと思って」

――そうですよね。

「で、お風呂もそうやって入れるようになって。で、私、もともと力がないんで、『力仕事をなるべくやらさないようにしてくれ』って言ってて、考慮してくれた。ただ、『その代わり、事務的なことはちゃんとやれよ』みたいな感じで。書き物とか、機械がパソコンみたいなタッチパネルで管理する仕事があるんですけど、『メインでやってくれ』って、そればっかりやらされたりだとかしてて。けっこうそういう職場が考慮をしてくれて。

ところが、その職場が閉鎖になっちゃったんですよ。焼却場って40年の寿命があって、だいたい40年で1回取り壊しになるんですよ」

――考えたこともなかったですね。ごみ焼却場にも寿命がある。

「寿命がある。で、その寿命がきた。だから、来年度は職場がなくなっちゃうってなった時に、私は今まで散々いい思いをしてるじゃないですか。だから、ウチの職場は理解があってすごくいいところだ、私は困ることはないって勝手に思ってて。で、その時にどうなったかっていうと、組合が『Gちゃん、行く場所ないし、こっちのほうで用意してあげる』って言われたところが、焼却灰を埋め立てるところがあるんですよ。『そこに』って言われて。で、まあなんていうかな･･･、『そこには外国籍の人がいる』って。だから、『同じように、ヘイトされたりもしてるから気持ちは分かってくれるし』って。でも、私、実際、ヘイトはあんまりされたことないんでどうでもよかったんですけど。『あ、そっか』っていろいろ、なんかこう、苦労話も共感できるのかなと思って、『分かった。ちょっと遠いけど、頑張って行くよ』って話をして。で、そこに異動したんですよ。

で、その埋立に行って。たいした期間いなかったんですけど。そしたら、組合とかをやっているけっこうお偉いさんの、その外国籍の人からヘイトが始まったんですよ。中学校の時みたいな感じで、『性別適合手術しました』『見せろ、やらせろ』って毎日のように言われて。もう頭おかしくなりそうになって。で、その時に異動したのも、『運転手として行け』『運転はしたくない。自信もない』って。そこって、大型特殊がないとできないところなんですよ。だから『私は大型特殊免許、持ってない。できない』って言ったら、『ボイラーの管理、施設管理をしてくれ』『だったら大丈夫』って、行ったんですけど、結局、人が足りなくなって、『大型特殊を取ってこい』『でも、お金かかるし。私、性別適合手術1回じゃなくて、まだこれからもお金かかる。だから、無理』『そんなこと言ってられない。職場の立場的にそんなこと言ってられないだろ』『私がここに来たのは、ここだったら安心して働けるって聞いて来たのに、条件が違う』って言って。で、そうした

ら毎日のように『足開け』『状況考えて資格取ってこい』『見せろ』とか。下手すれば『オカマ』『おい、オカマ、ちょっとこっち来い』とか、その外国籍の人から平気で職場内で言われたりとか。で、所長に相談行って、涙ながらに訴えて、『私はここには居られない』って。途中で擁護処置的な感じで＊＊年前に職場を異動させてもらって。

その時に、話戻りますけど、LGBT 団体さんとかにもいろいろ相談したんですよ。で、結局、こうやって（筆者のインタビュー調査のように：筆者註）ボイスレコーダーもないし証拠がなにもないからどうにもできないって話をされて。私も、＊＊さんとかにも言ったんだけど、『助けてあげるよ。何か協力できることがあったら』って言ってたんだけど、もう全然なしのつぶてだし。なんだよと思って。諦めて。とりあえず職場異動できたからいいや、みたいな感じで。

だから、いまだに、ウチって進んでいるようで進んでいないところがあって怖いなぁと思うところがあって。もう考えないようにしてますけど、いまだに言われますもんね。勝手に調べられたりとか。職員簿を調べて、『G ちゃん、昔、男性の名前、＊＊だったんだね』とか」

――完全に興味本位ですね、それ。

「ええ。そんなの日常茶飯事なんで、もう気にしてられないから、『ああ、そうだよ』って最近も言ってますけど。もう打たれ強くなっちゃって。もう考えてもしょうがないと思って」

――いちいちそういう人に対して、真面目に説明しようとする気にならない？

「ならない。＊＊に来る時に、私、言ったんですよ。『そうやってイヤな思いしてるから、勝手なことをされると私はイヤだから、何も言わずに『女性職員が来る』程度のことで理解を得ておいて下さい』って。なのに、その時の課長が『分かった』って言うにもかかわらず、『G さんって性別適合手術を受けた人が来るから、女性として扱って下さい』って言ったって」

――それ、余計でしたね。

「そうそう。だから、『『女性として扱って下さい』って言ってる時点で、『女性じゃない』ってレッテル貼ってるようなもんなんだよ』って言ったにもかかわらず、言っちゃって。だから、みんなの認識的には『オカマが来た』っていうのがもうあるから、もうそれは崩せないし、言い訳になっちゃうから、めんどくさいから、もう言わないようにしてるんです」

――その課長さんは、ミスコミュニケーションだなっていう気はするんですけど、完全に悪意があるかっていうと、そうとも言えず。

「*ないんですよ。だから、中学校の時の先生の説明と同じなんですよ。あの時から何も変わってないんですよね。本人は善意としてやっているんだけど、余計なお世話なんですよね。*

でも、職場も全部が全部悪いのかっていうとそんなことはなく、私は普通に女性として職場の健康診断、乳がん健診を受けられる。でも、それって難しいところで、私をヘイトしてきたその外国籍の人が言ってくれたおかげでもあるんですよ。私に悪意を持って『股開け。見せろ』って言ってきた、その組合の偉い人が言ってくれて、結果的にそうなったりとかもしているんです」

――同じ人が？

「*同じ人なんですけど。だから、その人も全部が全部悪いわけじゃないんですよ。その人のお陰で適合手術後の経過処置の時に休暇を取れたりもしてるんで。不思議なことに。だから、私、異動した後に『会わせてくれ』って言ったんですよ、何度も言ってるんですけど、本人が出てきてくれないんですよ。私は攻撃するつもりじゃない。そういうのは感謝してるし、『なんでそういうことを言われたのかなって疑問に思っているから、会って話がしたい』って言っているのに、会わせてくれないんですよ*」

――へぇ～、なんでですかね？

「*分かんないです*」

――これ以上、事を荒立たせたくないという？

「*でしょうね*」

第６節　　Ｈさん

インタビュー日：2018 年 10 月 25 日
インタビュー時間：1 時間 44 分
年齢：50 代

H さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は

キリスト教牧師である。インタビューは、H さんが出張で東京に来られた際に、筆者の所属する大学にて行った。

第１項　Ｈさんの生い立ち

まず、H さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*生まれは＊＊年、＊＊というところです。そこで生まれるんですけれども、物心つかないうちにどっかに引っ越したらしいです。ちょっとそこはもう全然記憶になくて、物心ついた時には＊＊にいました。そこで幼稚園に入ります。で、トランスジェンダーっていうことに関しては、その頃に初めて夢で、違和感らしきものの記憶として夢を見るんですね。夢の中でヒラヒラの可愛らしいドレスを着て走り回っている。でも、それが夢でしかない。だから、その頃既にそれは許されないことなんだって自覚をしてたんだろうと思います、今思えば。その頃、もう女の子の友達が多かったように思いますね。それは、もうずっとなんですけど。*

小学校に入るのと同時に＊＊に引っ越しました。6 年生になった時に、父親が＊＊で転勤族で＊＊に引っ越します。で、そうですね、小学生の頃にはたぶんちょいちょい隠れて母親のものを身につけていました。女もののシャツとか、パンツとか、留守の時に口紅をひいてみるとか。よく人前で講演する時には、『息継ぎみたいなことだった』って。『出てくるな』と閉じ込めている自分の中の女の子が、時々表に出て息継ぎをするみたいな。そんなことだったって今にして振り返ると思う感じです。普段の友達関係は、むしろ人並以上に常に男の子らしくあろうとしてたと思います。成功したかどうか別ですよ、たぶんバレてたと思いますけど、隠そうとしてました。

小学校 6 年から高校 1 年の 1 学期まで＊＊で過ごします。正確に言うと、高校に入ると同時に転勤で家族は＊＊に戻るんです。だけど、高校は＊＊でもう決まっちゃってたもんで、決まってた高校に入って、1 学期そこで下宿をするんですね。で、夏休みに転入試験を受けて、＊＊っていう近くにある高校に入る。だから、親元に移動するっていうか、私もついていく感じになって。

クリスチャンになったのが中学校 2 年生の時。やっぱり学校の中でちょっと浮いてたんでしょうね。女の子の友達が多かったもんですから、いじめられちゃうんですよね。『変わった奴』っていうか『女好き』みたいな目で見られたり」

――女の子の友達が多いと、男子からいじめられる？

「*そうです。そんなんで、居場所を求めてかな、教会に行き始めて。中学校 2 年生の時に洗礼を受けています*」

――お生まれになったおうちがクリスチャンだったわけではなく？

「*じゃないです。全然違う。親は 2 人とも無宗教ですね。中学 2 年生の時に教会に行き始めました。その時に、聖書を読み始めて、旧約聖書の最初のほうに『男は女の服を着てはならない』って書いてあるんですよ。そこを読んだ時にとってもショックを受けて、すごく残ってますね。ああそうなんだ、ダメなんだって、禁じられてるんだっていう感じでした。だからっていって、ちょいちょい息継ぎをするみたいなこと、母親のものを家で身につけることは止めれたわけじゃないです。*

高校に入った時に、＊＊の教会に通うんですね。2 年半＊＊の高校に通って、＊＊大学＊＊学部に入ります。

恋愛対象は主に女性なんです。それは『自分は何なんだ』という訳分からない感じの、ものすごく混乱したところですね。『女の子が好き』っていうのと『女の子になりたい』っていうのが矛盾する、って当時は思った。

高校の頃付き合っていた女の子がいたんです。でも、大学に入って半年ぐらいで失恋するんです。そのショックもあって、もともと高校 2 年生ぐらいから『牧師になりたい』って思っちゃったんですね。思っちゃったけども、親がクリスチャンでもないし、神学部に入ることは許してくれなかった。で、『ツブシも効く勉強しとけ』っていうことで、いわゆる普通の大学っていうことで進むんだけども、そもそもそういう中途半端な気持ちで入ってんのと、付き合ってた女の子と別れたショックもあって、大学に行かなくなっちゃって、麻雀ばっかりやってました。

そんなんで、2 年で＊＊大学を退学して、今度こそ牧師になる勉強しようと思って、＊＊大学の神学部に入り直します。＊＊大学に 2 年、＊＊大学の神学部に 5 年、院に 2 年、つごう 9 年大学にいました。院 2 年で出て、牧師になりました」

第２項　就職、同性愛者の同僚牧師の差別事件をきっかけにカミングアウト

H さんは、大学院卒業後、キリスト教牧師になった。数か所かの教会で仕事をしていくうちに、H さんの同僚牧師で同性愛者の方が差別的に扱われる事件が発生した。その差別事件と戦いながら、H さんは「自分がさもセクシュアル・マイノリティでないかのようにしゃべってる」という違和感に気づき、自らもカミングアウトした。それに関する語りは、以下の通りである。

――牧師になられてから、ずっとキリスト教の世界一筋で。

「*そうですね、一筋です。その頃は『隠れ』だったんです。ジェンダーということでは何の障害のもなく*」

――でも、ご自身としては、違和感は、

「*違和感はずっとありました。隠し続けて大きくなって、頑張って『男』しました。*
牧師としては、＊＊年＊＊の教会で、それから＊＊の教会に赴任します。そこで＊＊年。そして、＊＊年に＊＊の教会に変わります。
で、ご存知かどうか、＊＊年に『＊＊』っていうふうに言われる、＊＊での差別事件っていうのがあって」

――ちょっと存じ上げないです。

「*それこそ、＊＊さんが標的になるんです。＊＊さんが牧師になる試験に合格したんだけども、合格者承認が諮られるところで、＊＊っていう人が『簡単に認めるな』って言っちゃったんですよね。そういう事件、事件って私らは呼んでいるんだけれども。で、それと戦っていくんですよ。戦っていく中で、自分がさもセクシュアル・マイノリティでないかのようにしゃべってる自分がいて、第三者のこととして三人称で喋ってて。だけど、それが自分の中で『違うやん』ってなっていくんですね。自分のことなのに、自分のことのようにしゃべれないっていう･･･。で、カミングアウトするんですよね。その仲間内、一緒に戦っている仲間内で*」

第３項　カミングアウト後の「真綿で首を絞められる」苦しみ、職場を異動

H さんは、同僚牧師の差別事件をきっかけに牧師仲間にカミングアウトし、当時牧会していた教会でもカミングアウトした。ところが、その教会では「真綿で首を閉められる」ような雰囲気ができてしまい、居場所を失った。それに関する語りは、以下の通りである。

――っていうことは、牧師仲間？

「*牧師に限らないけど、一緒にその差別と戦っていく輪の中でカミングアウトしました。同時に、本格的に『トランスしたい』って思い始めるんですね。雨後の筍みたいな感じ。乾燥わかめみたいなもの。水かけたら戻っちゃった、膨らんじゃったみたいな。講演で『乾燥わかめ』って言って、ちょっと笑いを取るの（笑）。だから、そのあたりから本格的にトランスを始めるんですよ。*
で、＊＊の教会の牧師をしながら、＊＊年、教会の中でカミングアウトした。『女性の牧師になりたい』って、牧師に女性も男性もないんだけど。そうすると、『いや、我々は男性の牧師を招聘したんだ』みたいなこと言う人もいた。教会の人たちも二分することなって、分かってくれようとする人たちもいたんだけども、その、目の前でトランスしていくって

いうのはキツかったんだろうと思いますわ。やっぱり、牧師がトランスしていくっていうのは。それで、＊＊年にその教会を辞めることになるんです。

その教会では、カミングアウトしてトランスしていく中で、居づらくなっていくんですよね。具体的にというよりは、真綿で首を絞めるように不適格者みたいな感じを、空気を作られていくっていうか。

できればそこに踏みとどまって、そこでトランスできれば良かったんだけど、それは私のほうもやっぱりキツかったですね。会う人会う人にいちいち説明せないかんじゃんっていう、そんなキツさだった気がします。だから、フルタイムでトランスすると同時に、職場そのものを一旦リセットしたほうが楽かもねって思った。教会でカミングアウトして辞めるまでの間の 1 年がキツかったですね。教会と話し合いをするけども、折り合いもつかず。そのあたりは今思い出しても辛い感じですね。

それで、＊＊教区主事という事務方になるんです。その教区っていうのは、さっきの差別事件とも戦っていこうっていう人たちが多くて、そういう意味ではトランスしても居れたんですよ。それから、＊＊年間、事務所で働くんですよね。

その後も、外で教会の人に見つかったことがあって、噂になったっていう。『H 牧師、女装してたよ』みたいな。洗濯物を干してるのを見られて『え？　なんでブラジャー干してんの？』とかいうのも聞こえてきたり、『密かに誰かを連れ込んでるの？』みたいなこととか」

――そっちの噂のほうがまだマシなのかな。

「ははは（笑）、よく分からない。で、後からカミングアウトして、『ああ、そうやったんか』ってなったとか。色々ありましたね」

第４項　性別移行、当事者仲間との出会い、ジェンダーを知った上で新たな教会に招聘される

その後、H さんは「フライング」によってホルモン治療と性別適合手術を受けた。そして、現在牧会している教会では、H さんのジェンダーを理解した上で招聘された。それに関する語りは、以下の通りである。

「で、そこの教会を辞める直前、＊＊年に、タイのバンコクで SRS 手術を受けた。だから、もう辞めるって決まって、カミングアウトもしてるし、もういいやって『2 週間ちょっと休暇ちょうだい』って言って、『もう今しかない』と思って、行っちゃった。主事になって働き出したらなかなか、それはそれで事務方だったから毎日の仕事なんでそこから SRS は大変かと思って、そこで思い切っちゃったんです。

インターネットがそろそろ本格的にっていう時代ですね。よく話する時に言うんですけ

ど、インターネットっていうのは本当に情報アクセスの敷居を劇的に下げてくれたツールですね。本当にあれは大きかったですね。仲間がこんなにもいるっていうのも分かるし、当事者のグループにもアクセスできるし。だから、牧師たちにカミングアウトして、教会にカミングアウトして、っていうのと並行して当事者のグループにも出入りするようになった。＊＊年になってからかな。＊＊っていうのがありました。そこに出入りするようになりました。初めて人前で女性の格好をしたのは、そのグループの中です。人前でっていうのは、つまり、女性の恰好をして出歩くことはあるんですよ。だけど、私と認識されている関係の人を前にして、女性の恰好を初めてしたっていうのは、その＊＊の中ですね」

――それ以前は、例えばひとりで買い物に行くとか、知り合いに会わずに普通にただ道を歩くとか、そういう外出だったっていう意味ですよね？

「*そうですね。関係性の中で女性の恰好をするようになり始める。いわゆるクローゼット*[28] *だったし、女性の格好するのも密室だったり、見られてはいるはいるんだけど主観的には人知れず、っていうことだった*」

――＊＊歳ぐらいまでは、同じ指向の仲間を探すということもなかった？

「*なかったですね。本の世界、ええとね･･･、『リボンの騎士』にすごくハマりました、小学生の頃。『リボンの騎士』は逆なんだけど、女の子が実は男の子として認識されて、社会生活してるっていう漫画だった。自分が、だから本当は自分の中に女の子がいるのにっていう感じがすごく･･･。カルーセル麻紀さんが手術して帰ってきたのは＊＊の頃やったかな。すごいニュースになって、あれはショックだったっていうか、『すげー、こんなことできるんだ！』って。講演を聞いたことあるけど、『死にそうになって帰ってきた』っていうものすごい壮絶な話だったわ*」

――それまではテレビの世界だと思っていた。

「*そうですね。だから、自分ひとりじゃないっていうのは分かってんだけども、自分がそうだということを人にも言えないし自分でもそんなに認められていないみたいな感じでしたね。で、インターネットですごい仲間に出会える。で、それから、＊＊大学の GID 外来に通い始めるんです。そこで、カウンセリングを受け始めて、最初に医療の力を借りたのは、ヒゲ脱毛。＊＊年かな。で、＊＊年が手術でしょ。その前の＊＊年にホルモン療法をフライングしちゃうんですね。＊＊大学の正規のルートじゃなく、いわゆるニューハーフ*

---

[28] クローゼットとは「自分の性自認や性的指向を公にしない人。または、その状態」を指す [Label X, 2019, ページ: 89]。

の人たちが行っているようなところでホルモン治療を始める」

――巷のクリニックみたいなところですか？

「*そうそう。＊＊では有名だったところで*」

――それはもう＊＊大学の診察を待ちきれなくて？

「*そうですよ。カウンセリングは受けながら、正規のガイドラインに則ってっていうのが、けっこう間口狭いんですよね。けっこう待たされる感じで、待ちきれなくて。フライングですね。だけど、先生に『フライングしました』って言ったら、『おめでとう』って言ってくれたから、『ああ、いいんだ』って思って（笑）*」

――へぇ～、意外な反応ですね。

「*そうそう。『おめでとうございます』って。だから、もう大丈夫って先生も思ってくれてたんだと思う。で、そこから約＊＊年ですね。だから、手術もフライングですよね。そういう意味ではね。＊＊大学で手術という話になるんじゃなくて、勝手にタイの病院探して行った。*

英語でメール書いてね、予約取ってね、ようやったと思うわ。何のつてもないところで。もう本当に手探りでしたわ。で、そんなんで、病院探して行きました。片言の英語で。日本語の通訳もいたんですけどね。タイはSRSで外貨稼いでますから、けっこう日本語のスタッフなんかもいて」

――手術は順調に？

「*順調ですね。何の問題もなく後遺症もない*」

――じゃあ、タイに手術のために渡航されたのは１回だけ？

「*そうです*」

――その後の経過治療的な部分は＊＊大学で？

「*ない。＊＊大学でもない。もう勝手に卒業しちゃった感じです。＊＊大学には報告だけ行った。もう目的達したみたいな感じ*」

――なるほど。そこはトントン拍子っていうか。

「*そうですね、思い切っちゃった感じですね、自分の中ではね。で、名前も変えてなければ性別も変えてないです、戸籍的には。それで、困ることって実はそんなになかったです。保険証が切り替わってないとか、免許証の名前が戸籍名だとか、それで見つけた時に『ふうん』って顔はされるけども、だからって、まあ、今となってはそれをいちいち楽しんでる感じぐらいです、持ちネタにしているような感じです。その相手の反応を見て楽しんでるぐらいの感じ。*

それよりか、トランス途上の今ほどパスできてない時のヒソヒソ話とか、こっち見ながらのとかのほうが辛かったですね。そのほうが辛かったですけど、もう今はそれも含めて『まあ別にいいや』ってなって。今は別に『トランスだけど何か？』っていう感じです。だから、フルタイムで女性として生きるようになって、お風呂も入れるようになって。そういう意味ではストレスなく、ジェンダーっていうことに関してはストレスなく。

で、主事として＊＊年働いて、＊＊年に主事を辞めて、今の教会の牧師になった。その教会はいい教会でね。私のジェンダーとかセクシュアリティは一切問題にしなかった」

――最初から？

「*最初から*」

――知った上で？

「*そうです。前任者が何回か説教の応援に呼んでくれたんですよ。そこで気に入ってもらえて、最初は本当に不思議なほど抵抗なかったですね。普通に男声で説教したんですよ。そんなことは何の問題もなく、中身だけで評価してもらいました*」

――牧師さんのお仕事だと声ってすごく大事な要素ですよね。

「*はい、そうですね。っていうか、今のこの声。だけど、そうやって別に違和感もなく、みんな聞いてくれています。だから、今の教会と出会えたのは、本当に恵まれましたね。事務方は事務方でやりがいはありましたけども、やっぱり牧師の本職をしたかったですから*」

（中略）

「*(カミングアウトした教会を辞めてしまう頃に：筆者註）周りの牧師たちは応援してくれました。『教会でカミングアウトしていく』って言ったら、『繋がってるよ』とか、教会的な言い方で言えば『祈ってるよ』って言ってくれたり*」

――それは嬉しいですね。

「*嬉しいですよ。だから、逆に辞めるとなった時に、申し訳なさを感じました。『ごめん、もう居られん』っていう感じでした。だけど、そういう意味では恵まれてましたね、環境的に。セクシュアル・マイノリティ差別のことをみんなで考えていこうっていう機運がちょうど高まった頃でしたから*」

――＊＊さんの件が直接的なきっかけになって。

「*そうです。あれは大きかったですね。＊＊さんは大きい存在ですね。そういう意味ではね、最初のカミングアウトも含めて、何度も幸せなカミングアウトさせてもらいました。集会で涙を流して話聞いてくれたり、『こんなに心を強くしてもらったことない』と言ってくれる人がいたり、本当に幸せなカミングアウトさせてもらいました*」

第５項　社会の意識改革の必要性　―「ハードウェアはあとからついてくる」―

H さんは、日本の労働環境を改善するためには「社会の意識改革が必要」というご意見を語って下さった。それに関する語りは、以下の通りである。

「*『トランスすることが普通にあり得ることなんだ』っていう意識、『トランスする人がいて、目の前でトランスしていくことがあり得るんだ』コンセンサスができていれば、だいぶ違うと思います。あり得ないと思っているから、みんな戸惑うわけじゃないですか。牧師の仲間たちは、さっき言ったような機運の中で、そういう感じで受け止めてくれましたから。*

だけど、一般の会社はどうだろう。今、だいぶ変わってきたのかな。だから、職場の意識ですよね。特に中高年のおじさん達の意識でしょうね。ええとね、MtF に限られる話かもしれないけど、『女性社員には割と仲良くしてもらった。おじさんたちの反応がキツかった』って（H さんの知人は：筆者註）言ってましたね。だから、意識改革っていうのは大きいと思いますね。それが社会の中で広く『あり得ることなんだ』っていう認識が広がるっていうかな。で、ハードウェアな部分はあとからついてくると思いますよ。例えば、トイレひとつ取ってもそうだし、意識が変われば、ハードウェア的に整備すべきことっていうのは、たぶんケースバイケースで、具体的にやっていけばいいことになっていくんかなと思いますね。あとは具体的に工夫できると思います」

第７節　　Ｉさん

インタビュー日：2018 年 11 月 19 日
インタビュー時間：1 時間 1 分
年齢：30 代

Ｉさんは X ジェンダー、ア・セクシュアルの当事者である。Ｉさんの出生時に割り当てられた性別は女性である。職業は、MR、胚培養師などを経て、地方議会議員である。インタビューは、Ｉさんの議員用応接室に伺い、行った。

第１項　Ｉさんの生い立ち

まず、Ｉさんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「生まれた年は＊＊年で、出身地は＊＊です。ジェンダー、セクシュアリティはア・セクシュアルの X ジェンダーと自認しています。

ア・セクシュアルのほうは、『人を好きにならない』ということを私は意味のメインとしてるんですけれども、小学校、中学校で周りが『好きな人が』とか『〇〇ちゃんは誰が好きなの？』とかそういう会話が行われる中で、私にはその気持ちは分からないなとずっと昔から思ってました。で、高校生ぐらいでそれを強く認識して。私は家族の関係性があんまり良くない家庭で育ったので、人を好きにならないこと以外に悩みが引っ張ったんですけど、その中で、いつしか家族に恵まれないっていうのはうまく愛されないで育ったことに繋がると思うんですが、そういう関係で愛されることをよく知らないから愛することも知らないのは当然かなって思うようになっていって。でもまあ、それはそれでしょうがないじゃないですか。今更、赤ちゃんに戻ってもっと愛情豊かな家庭に生まれ変われないし、自分の生まれ育った環境はそれはそれでしょうがない。そういうところで、人を好きにならない性格なんだってずっと思ってたんです」

――中学、高校くらいの時は、「クラスの中で誰が好き？」みたいな話って、どこに行ってもあるのかなって思うんですけど、そういう話題に乗れないことで、苦しい経験があったとか、そこまでのことは特にはなかったですか？

「やっぱり、そういう話題に乗ってこないと、それくらいの年代ってみんなと一緒なことが当たり前で、そこから飛び出てるような人は、陰で指差して『あの人は･･･』みたいな社会じゃないですか。なので、私は飛び出ていて、指を指されるような存在ではありましたね。中学の時は溶け込めませんでしたが、高校生の時は運がよかったのかなんなのか、割

と指を差される人ばっかり集まるような高校だったんですよね。だから、指を差されたり誰かを除け者にしたりっていうことは全然なかった。それでも、恋愛の話に入っていかないと、『I さんはね･･･』みたいな感じで言われるような。なんかだんだん空気を読めるようになってきて、あまり触れない方がいいかな、触らないでおこうかなみたいな、そういう感じはありました」

第２項　就職、選挙に立候補　―ジェンダーを勝手に決めつけられる不快感―

Ｉさんは、大学卒業後、就職した。そして、いくつかの仕事を経験した後、ある政党から誘いを受け、選挙に出馬することを決意した。そして、現在、議員として活躍されている。それに関する語りは、以下の通りである。

「*職業については、大学を出て＊＊年間、製薬会社で MR という仕事をしていました。MR というのは、病院に行って自社製品をお医者さんに『ウチの製品を処方してください』ってお願いする仕事ですね。それを辞めてから世界一周しました。どうしても海外を見てみたいと思って、それまで日本から出たことがなかったので。で、世界一周する中で、自分が何の職業に向いているのかなっていうのも考えながら旅行したんですけども、とりあえず日本に戻ってからはいろんな職業を経験したいと思って、日雇いの派遣バイトを＊＊年くらいしてました。その中で、私、もともと大学で配偶子を顕微鏡で扱う研究していて、それが好きでもともとそれを生かした仕事に就きたいという気持ちが大学時代にあったんですが、それを生かせる仕事が給料が低かったので、その時はそこには就職しなくて、給料の高い MR をしたんですけども、やっぱり色々な経験をする中であの時の夢を叶えられないかと思って、もう一回大学に行き直した。ちゃんと所属したわけではなく、研究生という制度で研究室にいくらか金を払って自由に出入りして物品を好きに使っていいという権利を入手して、そこでバイオ技術の練習をしながら、かつ、就活もしつつ過ごして、その後、運よく胚培養師の仕事に就けたんですね。胚培養師という仕事に就きたくて就活をしていた。胚培養師というのは、不妊治療クリニックで、医師が患者さんから精子と卵子を預かって、それを管理したり培養したりを実際にする仕事です。その仕事にラッキーなことに就けた。ところが、そのクリニックではパワハラがひどくて、こりゃいかんと思って辞めた。たまたまその時にお金持ちの知り合いがいて、その人が別荘を持っていて、そこを使って民泊をやりたい。それにあたって、働いてくれる人を募集するというので、そこに転職しました。で、そこで働いてる途中で、＊＊党から、『今度、選挙があるんだけど立候補しないか』と言われて、立候補して現在に至ってます*」

――＊＊党とどうやって出会って、どのようにアプローチを受けたんですか？

「*それはですね、世界一周した後、派遣バイトをしている時に、私の知人が選挙に出ると*

いうことで、選挙の手伝いをできる人を探してたんです。で、共通の知り合いを介して、『選挙のバイトしないか』って言われて、選挙のお手伝いをしたんです。その時に、党の本部からスタッフがその選挙の手伝いに来てたんですね。で、そのスタッフさんとバイトに来ている私が同じ仕事をするポジションに当てられたので、割と仲良く喋ってて、普通に知り合った。その関係で、『今度、選挙があるけれども、やってもらえないか』みたいな感じで連絡が来ました。そこから話していく中で、立候補してみるのも人生のひとつの選択肢なのかな、みたいな。それで、現在に至っています」

（中略）

「X ジェンダーっていうのは主に 3 つあって、1 つ目は男だとも女だとも思っていない、2 つ目は男と女の真ん中だと思ってる、3 つ目は男とも女だと思ってる、あるいはその中をうろちょろして移る方もいるかと思います。けども、別に自分が女であることが嫌だという気持ちが違うかと言うと、そんなに違わないような気もしますが、私は男になりたいとか、本当は男なんだとか、そういうことは全然思ってないです。ただ、私は女扱いされるのはあんまり好きじゃないです。なので、私は、よく女性の政治家にある『女性ならではの視点で、私は住みやすい世界を作っていきます』みたいなの、よく言うじゃないですか。そういうのは、私嫌いなんですよ。私は、『女性ならでは』という言葉は何も使ってないですし、基本的には、女性か男性かじゃなくて、その人がどう考えているかではなかろうかと思っていますね。

就活の際に、セクシュアリティに関して直面した困難はないですね。性別欄に男だとか女だとか書くことに対しても、『この欄いるのかな』って私は若干疑問には思ってますが、別に女って書きたくないのかって言うと、そんなことはないですね。とりあえず、それはそれで割り切って書くだけなので。私は女性として生きるようにしてるので、見た目と記入する性別が一致しているのもあって、特にないですね。名前も女性っぽい名前だと思いますし。そこがトランスと X の違いのような気もしますね。

ただ、『女性ならでは』っていうのを私が言わないことで、周りはやっぱり女性だからっていうのを売りにしたい部分もあったと思うんですけど、なんか思っていたかもしれないですね、言われたことはないですが。あと、私は言わないですが、政党にいると他の議員が応援に来て、『この人はこういう人で素晴らしいのでぜひ投票してください』って、みんなプロだからそういうこと言うんです。そういう時にやっぱり、『女性ならではの視点で、女性議員なので、女性を増やしましょう』みたいなことは言われたんですけど、それに対してちょっとモヤッとしている部分もありました。わざわざ『勝手に女性だとか決めつけないでくださいよ』とか言わないですけども。まあ、こう、黙って横に立って、そんなに女性、女性って、女性がどうしたんだよって、思ってた部分はありました」

――それが、I さんにとっては、言ってみれば違和感だったということですね。

「*そうですね*」

（中略）

「*現在の労働環境は、公の場なので男女差別するようなことは基本的に排除されていると思います。ただ、やっぱり支援者の中には、当たり前のようにセクハラ発言をしてくる人がいます。性的なジョークを言ったら相手が喜ぶみたいに思ってる人いるじゃないですか。あくまで議員と支援者っていう関係で話をしてるのに、突拍子もない人もけっこういるんですよね。若い人でそんな人はいないですけど、いわゆる高齢者世代にそういうセクハラ発言がおかしいということに気付いてくれたら、労働環境はもっと良くなりますね。たぶん、若い世代じゃなく、上の世代の人たちの考えを変えていくことが、どんなものに対してもこれまでと違うことをするにあたって大事になってくると思うんですが、やっぱり人って年齢を重ねれば重ねるほど、自分が正しいと思ってるものを持ち越して、強固なものになってしまって、人がちょっとやそっと言ったところで、考え方は変わらないんですよね。それって難しいよなって、昔から思っています。やっぱり、経験を積んでる人の考えを変えるのは難しい。*

パワハラを受けていた時に思ったんですけど、セクハラでも一緒だと思うんですが、本人はあんまり悪いことだと意識してないからやっているじゃないですか。例えば、『自分より先輩がこうしてきたから自分もそうするのは当然』という価値観で動いてるので、そこに対して『そういう表現を大人同士で言うのはおかしいですよ』とか、仮に言ったとしても逆ギレされるだけですよね。気づいて変わってくれればいいですが、それが年齢を重ねるほど難しいのかなって思います」

――さっきの性的なジョークのお話は、まあ聞くまでもないですけど、男性の方がそういうふうに言ってくるんですよね？

「*そうですね*」

――女性から不快な発言を受けたことはない？

「*あんまりない。たぶん、私の周りにいる高齢の女性の方っていうのは、政治に興味がある方がほとんどです。元々ご高齢の女性の方で知り合いなんていない、自分の祖母ぐらいで。この仕事を始めるってなってから知り合った方ばかりですけども、やっぱり政治に興味があるから私とコンタクトをしてくれる方ばかりなので、そういう方って、女性の意識、*

女性の地位向上とかそういうのに意識がある方が多いのか、あまりそういうセクハラ発言は、考えてみるとないですね。逆に、それこそ、『結婚しろ』とか『子供を産め』とか、そういうのも全部男性に言われます。今、改めて考えてみると、女性からは『結婚しろ』とも『子供を産め』とも言われたことはないですね。『今の若い人は、いろんな生き方があるわよね』みたいな」

――いいですね、そういうふうに言ってくれるのは。

「*そうですね。これがもっと普通の人とかになってくると変わるんでしょうけど、政治に興味があるような女性からは、言われたことないです。*

性的マイノリティとかLGBTの方がもっと政治に関わってくれるといいなって思います。やっぱり、議員の中にいろんな人がいた方がいたほうが、『いろんな人がいて当たり前なんだね』ってなってくると思います」

第３項　ジェンダー概念との出会い　―「あれ、私これじゃん」が入ってきた―

Ｉさんは、議員になってから、LGBT政策に取り組み始めた。そして、知人に紹介してもらった学会に行き、講義を聞いた時に「Xジェンダー」という概念と出会い、やっと自分が何者であるかが分かった。それに関する語りは、以下の通りである。

「*議員になってから、LGBT政策っていうのを始めたんです。差別を解消するにはどうしたらいいかっていうのを、ヒントを探るために色々勉強してたんですけど、その中で＊＊学会に行ったんです。私が＊＊学会を知ったのは、『＊＊』さんっていうLGBTとか性的マイノリティの方が集まってお話ししようよみたいな会があるんですけど、そこに私が行った時に、＊＊さんがいらっしゃってたんです。その方が、『自分も講義するし、来てみなよ』みたいな感じでチラシをくれて。それで、それは是非行ってみようと思って行ったんですね。で、いくつかある講義の中でやっぱり、＊＊さんが勧めてくれたから＊＊さんを聞きに行くじゃないですか。そしたら、その時、＊＊さんはXジェンダーの話をしてたんです。私は、Xジェンダーという名前は知ってたんですけど、あんまり真剣に考えたこともなくて。その時初めて細かいこと、Xジェンダーの人はこう考えますよとか、こういう気持ちですよとか教えてもらったんですけど、『あれ、私これじゃん』って。本当にす～っと話が入ってきたんですね。*

昔から、男性らしさとか女性らしさということは嫌いだったんですけれども、だからといって男になりたいとかそういうことも思ったことがなくて。でも、そういうのもXジェンダーのひとつの特徴なんですよね。私は男とも女とも思わないタイプなんですが、そういうのにもちゃんと名前がついているねと思って。で、講義を聞いた翌日ぐらいに＊＊さんにメールを打って、『Xジェンダーのお話を拝聴しました。私自身がXジェンダーだとい

うことがよくわかりました。私は、（人と話をしていると：筆者註）恋愛の話がいっぱい出てきますけれども、私は自分自身に欠陥があるので人を好きになれないんです』って書いて送ったんです。そしたら、その返信の中で『人を好きにならないのはひとつのセクシュアリティで、それにはア・セクシュアルという名前がついてますよ。それは全然欠陥ではないんですよ。人を好きにならないというのは、人と距離をもって人を冷静に見れるっていう利点もあるし、人が恋愛に使う時間を自分磨きとか自由に使えることもできるし、それはそれで素晴らしいことだから自分を大切にしてくださいね』っていうことがメールに書かれていて。その時初めてア・セクシュアルという言葉を知った。私は X ジェンダーでア・セクシュアルなんだってはっきりと分かった」

――ア・セクシュアルというのは、他者に対して恋愛的あるいは性的に興味が湧かないということであって、社会的に人と関わるのが嫌だとか、興味がないっていうことではないんですよね？

「*そういうことではないですね。好きという感情自体がないわけではないです。恋愛対象として好きにならないだけで、人として好きっていうのは全然ありますし。『川股さんは好き、誰々さんは嫌い』とか全然ありますし。あと、子供たちはすごく可愛いと思うし好きですし、動物を飼っているんですけど、愛情かけて育てているつもりですし。そういうのは他の人と何も変わらないですね。*

よく『マイノリティの中のマイノリティです』って説明するんです。実際、数字的にはそうなんですよね。でも、私は本人が認識してないだけで、実際はア・セクシュアルの人ってけっこういると思うんですよね。だから、結婚してない人とか付き合うパートナーいない人とかが増えてるんじゃないかなって思う部分はあるんです。単にア・セクシュアルという概念自体を知らなかったということで、この珍しさが生まれているだけのような気もなきにしもあらずですね」

――確かに。ア・セクシュアルかどうかを客観的に判定する基準みたいなものってないですし。

「*ないですよね。自分がそうだと認識する以外の方法はないですね*」

第８節　　Ｊさん

インタビュー日：2018 年 11 月 20 日、12 月 7 日
インタビュー時間：2 時間 51 分
年齢：60 代

J さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は、製造業勤務を経て、現在、フリーランスコンサルタントである。インタビューは、J さんが出張で東京に来られた際に、喫茶店にて行った。

第１項　Ｊさんの生い立ち

まず、J さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*稚児行列って知ってる？*」

――稚児って、子供の稚児？

「*お寺で法然上人の何百年忌かやったと思うんやけど、要は、祖父が紋付袴で、みんなで綺麗な恰好して練り歩くわけですよ。で、その時に着ているものは男女でほとんど一緒なんだけど、かぶるものが違う。男の子は烏帽子（えぼし）なの。烏帽子って、時代劇なんかでさ、三角の、昔々のお役人さんなんかがかぶっているようなもの、男の子はそれで。女の子はビラビラと飾りのついた冠なんよね。なんでこんなことになるんやろうって感じ。綺麗な着物が着れるのはいいの*」

――男の子のをかぶせられた。

「*そうそう。無茶苦茶イヤではないんやけど、着物は着れるから。でも、『冠はもっと可愛らしいもの！』とかさ（笑）。でも、ウチの家庭ってそんなに無茶苦茶男らしさ、女らしさを求めている家ではなかったから、そんなに生きにくさはなかった*」

――「男らしくない」と言ってビシッと叱られるとかそういうこともなく。

「*そういうことはない。五月人形はあった。おひなさまは女友達の家に行ったら立派なやつがあったりするわけ。五月人形があったからええと言えばええんやけど。だから、そういうのはけっこう好きやったですね、どっちかって言うとね。飾り物とか。五月人形は、小学校に上がった頃にはもう家では飾らなくなって、幼稚園に寄付して、幼稚園の飾りつけに小学校の間ずっと行った*」

――小学校に上がってから、そういったお手伝いにも行っていた。

「うん。もともとウチの家自身は＊＊宗やけど、幼稚園が＊＊宗やった。地域的に＊＊宗の少ない地域で、＊＊宗がけっこう強くて。だから、そのへんでけっこう幼稚園とはよくつながってた。けど、そこで別に性別のことであんまりどうこうということはない。
　幼稚園から小学校低学年までは、近所の女友達の中で遊んでた。長屋だったんですよね。長屋で遊ぶ時は関係ないけど、幼稚園の友達とか小学校の友達は女の子のほうが多い、という状態」

――割と違和感なく溶け込んでいた？

「違和感なく。第二次性徴も出てきているわけでもないし、遊びも特に違うっていうこともない。違うんだけどね、男の子はやっぱり、野球とかサッカーかな。女の子は、ゴム飛びと、お手玉とか。駄菓子屋さんで糸と針がセットになって。それで、本当は小豆を入れるの。で、豆腐屋さんがあって、友達と大豆で作って、みんなで遊ぶとか。リリアンとかさ。どっちかっていうと、そういう傾向の遊びをしてた。
　お人形遊びはさすがにせえへんかった。バービーとかリカちゃん人形の世代よりは少し前になるのよね。お金持ちのところにはバービーはあったけど、だいたい周りはそんなのないし。いうて、こけしとかそういうので遊ぶ世代でもない。ミルク飲み人形っていうのはあったけど、それもやっぱりお金があるおうち、みたいな感じ。だから、ジェンダーとしては女性ジェンダーの中にどっぷりと浸かっていたと思うわ」

――周りの女の子からしても、J さんが一緒に遊ぶことには、

「おることには、あんまり違和感がない。低学年ぐらいはそんな感じかな。
　高学年になると、男の子とも遊ぶようになったけど、どっちかというとそれはプラモデルとかそんな系統」

――あんまり激しく外で運動するみたいなことではなく？

「ことではなくて。まあ、自転車乗るのは好きやったから、自転車で遠くまで行く友達はいた。5 年、6 年も、行き帰りさすがに女の子と一緒にっていうのはちょっと･･･。なんとなく男の子のグループと一緒に下校した。違和感ないことはないけど、そんな強烈に困ったっていう感じもない。それで、小学校後半からクラブ活動は音楽部に入ったんですよね」

――楽器をもう小学校ぐらいからされてたんですね。

「*それは、幼稚園からやってた。ピアノはやってた。小学校卒業するまではピアノをずっとやってた。それは、たぶん微妙にね『女子の中では負けたくない。女子のコミュニティの中では負けたくない』みたいな感じ。*

当時、ヤマハが音楽教室を始めた。幼稚園とか、そういう会場で。で、たまたま幼稚園の時に、その幼稚園が音楽教室を始めたから、親も芸術系には興味があったから音楽教室は行かせてくれて。当時は2年やったかな。ウチの母が教育熱心だから、幼稚園を卒業したら、個人レッスンを音楽教室のメンバーで、生徒を集めて個人レッスンをしてもらってた」

――その音楽教室とかけ合って？

「*その先生に個人的にお願いしてたみたいな感じ。そこでだいぶ男の子は抜けていったけど、私はしぶとくやってた*」

――ピアノは割と好きでやっていた？

「*う～ん、好きなのと、そこでは負けたくない（笑）。妙にね、あるんですよ。見栄ではないけど、やっぱり弾ければそれなりに高く見てもらえる。だから、そんなのもあって、小学校の間、ピアノはずっと続けてきた*」

――多少ジェンダー的な要素が、

「*それは明らかにあると思う。それは違和感っていうよりも、なんて言ったらいいんか、自分の所属するジェンダーの中で高く見られる自分の価値観、存在価値っていうのか、それを高めたいっていう意識はあった気がする。高学年では『家庭科では負けたくない』とかね。昔、小学校では男女混合やったんです。で、中学になると男子は技術で、女子が家庭科。せやけど、家庭科の先生は絶対に『5』をくれない。そこは、えこひいきする*」

――なぜですか？

「*だから、ジェンダーギャップっていうのか、先生としては、やっぱり家庭科っていうのは女子の科目やから、女子にやっぱり点をつけてあげたい。後々、なんやかんやあった時には、やっぱり女子が家庭科で『5』を持ってるとかさ。通信簿を見た時にさ。あるでしょ、昔やったら。今やったらそんなことはないけど。それで、いくら頑張っても『5』はくれなかった。『しゃあないなぁ』と思いつつ*」

――でもなんとなく、悔しいとも思いつつ。

「*そりゃ、悔しいよね。音楽はさすがに『5』やった。だから、ジェンダーごとの科目っていうのか、そういうのはありますよね*」

――あ、でも、その辺はジェンダーの意識とすごく関係のあるお話かなと思います。

「*たぶんそれはね、後になって、ものすごい効いてきたと思う。中には、男の子のコミュニティでしか育っていない人、同じ立場の人（トランスジェンダー当事者：筆者註）でね。その人ってたぶんね、大人になった時にものすごいコミュニケーションの取り方に困る。明らかにジェンダーごとにコミュニケーションの取り方違いますやん。それに、たぶん困る人が多いんやろうなぁと、自分がその立場になると思った。OL の中で生きていくっていうか、なんとなく暗黙の了解事項みたいなのありますやん。給湯室の話題についていけるか。ついていけない人もいるわけやん。自分の身体に対する違和感とそれまで生きてきた生活史の中で、どんだけ女子のコミュニティに関わってきたか、みたいな。そこは、子供の頃のそういうのってけっこう効いているんやろうなって思う。まあ、逆もあるんやけど。逆に、大きくなる時に男性のコミュニティにものすごい入りにくいっていうのはあった。とりあえずお付き合いはするけど。個人的な違和感っていうよりも、社会的なジェンダーに対する違和感というのはあるんやないかなぁと思う。*

中学校は、クラブ活動は音楽の延長で吹奏楽をやってた。あとは、男女でけっこう分かれるけど、相変わらず女子のコミュニティには混ざってた。お昼休みはどうしてたやろ、あんまり覚えがない。割と一人でおることが多いといえば多い。図書室にはけっこう行ってた。かといって、コミュニケーションを断っているわけではない。

女子には友達以上の感覚はなかった。男子っていうか、そこは微妙なんやけどね。でも、『男の子のかっこよさ』っていうのは、『分かりますよね』っていう感じ。あえて、向こうも（周りの女子も、J さんを：筆者註）男子として見ていない気がしてた。（女子が J さんの：筆者註）目の前で平気で着替えた。『ちょっとやめてよ』って言いながら。体育の後とか、クラブ活動の時や。『別にかまへんけど』って。

憧れの対象としては、女の子にっていうか。憧れの対象って言うとアレやねぇ･･･。どう言ったらいいんやろうねぇ。やっぱりだから、そこは自分の身体に対する違和感はあったっていうか、女子の着ているものに興味はあるし。『可愛らしい服着れて、ええよね！』とか（笑）。男の子の服にしては可愛らしい的な服を着せてくれてたけど。

そうそう、それ言うと、小学校の時、長ズボンを履くのがイヤでね。明らかに長ズボンっていうのは男子っていうのか、当時、女の子でズボンを履くことはそんなになかった」

――冬でもですか？

「冬でも。だから、靴下の長いやつ。ストッキングじゃなくて、タイツじゃなくて。パンストになる前に、ストッキングの長さで、生地がもうちょっと厚くてみたいな。

だから、男子の記号性、女子の記号性っていう部分で、男子しか着ないようなものはあんまり着たくない。かといって、フリフリのものなんて着れないし。で、赤系がけっこう好きやった。ピンクは着れないから、エンジぐらいのね。かといって『赤いランドセルが欲しい』とまでは思わへんかったけどね。ランドセルの黒い、赤いはね、こういう取材してはったら出てくるよ」

――けっこう出てきます。

「出てくるでしょ。逆に、そこまで思ってへんかったのはなんでやろうな。せやけど、ある面で見かけだけでないところで『女子に負けない』っていうのがあったからかもしれん」

――さっきのピアノの話は、その部分如実に出てますね。

「そう。ピアノの話も家庭科の話も『人は見かけじゃないんだよ』みたいな。本当にそう思っていたかどうか分からへんけど、たぶんそんな感じではあったんちゃうかな」

（中略）

――どうして普通の高校ではなくて、高専に行ったんですか？

「あ、それは親の影響。親から見れば学資が安い。自分の立場からすれば大学受験がない。で、やりたいことは車両デザインをやりたかった。模型が好きっていうのがあって。模型っていうか、鉄道とか乗り物好きですよ。だから、高専に行った理由は、鉄子の延長ですよね。一応男の子としてですからね。

高専の同窓会の幹事やることあるし。こんな恰好して同窓会に行くと、みんなびっくりせえへんしね」

――ん？　びっくりしない？

「うん、そんなに（びっくりしない：筆者註）。『誰かと思った』ぐらいな話。だいたい、せやから、そういう要素があるっていうのは、イヤな言葉で言う人もおるけど、ある程度なんとなく（J さんのジェンダーが：筆者註）分かってた部分もあるのかなとは思う」

第２項　就職、戦略的カミングアウト、性別移行　―在職トランス―

J さんは、高専卒業後、製造業の企業に就職した。その企業には定年退職まで在籍したが、在籍中に性別移行する「在職トランス」を行った。J さんは、社内でカミングアウトしていく順序を考え、少しずつ理解者を増やしていく「戦略的カミングアウト」を行った。それに関する語りは、以下の通りである。

「*学歴は、工業高専の機械科卒です。で、職歴は、包装資材の会社に入って、ライン職、品質管理の仕事、それから、現場のスタッフ職、要は人の割り振りとか材料の手配に携わった。で、その後は、品質管理、研究、新商品の開発をしてきた。60 まで転職はありません。社内でいろんな職種には就いたけれど、60 で定年退職しました*」

――社内でトランスしていく中で、どういうふうに周りにカミングアウトして受け入れてもらったんですか？

「*とりあえず、女子を攻めました。女子のコミュニティに取り込まれるようなカミングアウトをした。あとは、いきなり社長に話をして。で、『あとの詳しい話は取締役にしてくれ』って言われて。取締役と話をして。で、1、2 か月後かな、毎月全体朝礼があるんで、そこで皆さん集めてもらって『こういうことになってて、見た目変えます』って話をした。その時点までに、女子社員はほとんど知ってた。男性もある程度、半分以上は知ってるかな、怪しいと思っているかな。反応は、そんなに悪くはないですよ。*

職歴以外に、専従じゃないですけど組合活動やってました。執行委員と書記長を 2 年ずつやりました。会社側との交渉事はやっぱり、団体交渉とか入らなあかん。そういうのをやって。その後、10 年ぐらい経って、全社の前でカミングアウトして。カミングアウトしてから、GRS（Gender Reassignment Surgery（性別適合手術）：筆者註）しました」

――定年退職されてからは、今のフリーのお仕事で？

「*フリーのコンサルやってます。元の業界です。毎日は行ってないけど、週に 2、3 日は、どっかに行ってる。あるいは、家で仕事してる。だから、お客さんからの依頼で『こんなのが欲しい』って言われて調べたり、図面書いて送ってあげたりという仕事をしてます*」

――そこでは、女性として？

「*もう当然（笑）。知ってる人もいるし、まあ同じ業界やから、付き合いの長い人は知ってるけど、今更、話題にはできない。怒らせると怖いから。それも、会社のスキルと一緒でしょ？　損になることをせえへんでしょ？*」

――そうですね。

「*だから、ほぼ同じくらいの年代の人は、昔の私を知ってる。けれど、今新しく行ってる会社で、他の人はたぶん知らない。たぶん知ってる人も言わない。問題があったのは、カミングアウト直後。やっぱりこう、話題にするんですよね。で、同じ業界で同じ仕事しながらっていうと、ネタにされるのはしゃあないんやけど。それにも耐えて（笑）*」

――ちょっと不躾なことを言われたりとか？

「*うん、本当に近くで仕事してる人は、割と気を遣ってくれる。ちょっと離れたところの人が、一番良くないかな。野次馬的に見て、自分と仕事が関係ない人って、そんなことを言う人が何人かいた。でも、そんなに多数派じゃない。で、カミングアウトした時に言われたのが、『それで、仕事どうすんの？』って*」

――「会社を辞めちゃうんじゃないか？」みたいな。

「*会社じゃなくて、業界団体で。業界活動もしてたから。そこもやっぱり女子から攻めた。会議の時に皆さんびっくりしないように。いきなり『そういうことをするから』って言うても、だいたい分かってるやろうけどね、『聞いてるよ』って。で、その時に『まさか、委員辞めるんちゃうやろうねぇ？』『いや、辞めへんよ』って*」

――納得してもらえるように努力をされてきたっていうことですよね？

「*納得してもらうっていうか、仕事している時は、あんまり関係ないやん。会社もやけど、その業界にとってプラスの話ができるかどうか。そこに一番やっぱり良かった点があるんとちゃうかな。包装業界って工学系が少ないんですよ。だから、特に存在価値があった。*
転職は考えないことはなかったけれど、デメリットを考えると既に管理職の給料を頂いてたから、そこで辞めて新たな仕事に就いたところでこんだけは貰えないという経済的な面もあった。まあ、力関係もあるやろうね、きっとね。陰では言う人はおったけど･･･、みたいな感じ。あとは、労働環境的にはどうかな。営業が困ってたね。営業に同行で行くこともあったから『どう紹介していいやら』って。私は平気で行ってたけど。『前の恰好（男性の服装：筆者註）で来て下さい』って言うから、『そんなんやったら行かへんわ』って」

――じゃ、継続的にずっとお付き合いのある客先のところ、

「も、そこでカミングアウトしたことになっちゃった」

――服装が変われば当然分かりますよね。

「うん、当然分かるし。だいたい先に言ってるけど。悪びれもせずに言ってしまうけど。それと、男性に比べて女性の、仕事におけるステイタスってやっぱり下やん。だから、まあこういう言い方があんまり良くないとは思うけれど、男の仕事をしている女の人って割と許されるけれど、女の仕事をしている男の人、しかも女性の恰好してっていうのが許されへんやん。そこがやっぱり難しいとこやないのかなあ。だから、今の私の立場は『男らしい女の人』になってます、割と評価的には」

――男らしいというのは内面的にですか？

「仕事とか社会的地位としては『男の仕事もできる女性』みたいに周りから見られているほうが多いと思う。自分自身でもそれで別に違和感感じてへん。『変な恰好している人』とは思われてんかな。でも、そこはあんまり、何ていうのか、聞こえなくていい。クリアしないとあかんことはあんまりない。割と素のままでいけるというぐらいかな。『男前』って言われるの。昔のほうが『女々しい』とかね、まあ日本語の意味としては、やっぱり、『女々しい』『なよっとした』とか言われたけど、今の恰好でそういうこと絶対言われへんからね。今の方が自信たっぷりにやってる。人前で、もう平気で何でもやってる」

――リアル・ライフ・エクスペリエンスをされていたというのは？

「『実生活で望む性別で生活している』ということ。昔のガイドラインがけっこうきつくて、望む性別の姿でちゃんと生活できているかどうかっていうのは、けっこう重要なポイントだったんです、昔。当時、2年ぐらいかな。だから、オペをする人もガイドラインをクリアしなきゃあかん、というのがあった。最近、そんなにうるさく言ってないと思う」

――あと、＊＊（インタビュー以外にJさんから頂いた資料）の中に書いてあったことで、「ステレオタイプ化された性役割を受け入れることも必要」というのは、どういうことですか？

「ステレオタイプって？」

――男性か女性か。男性の役割か女性の役割か。

「みんなの思ってる、そういう形っていうのか、自分はこうしたくないんやけど周りはこういうことを期待してるんやから、まあそれは敢えて反対せえへんほうが移行はスムーズにいくんじゃないかっていう意味。例えば、昔やったら『女子はお茶入れましょう』とか。それは、フェミニズムの観点からすると『おかしい』って言うけど、世間一般はそう思っているから『それは嫌』とは言わずに、素直に世の中のそういう思い込みっていうのか、それは敢えて避けずにそういう性役割を受け入れたほうがトランス的には上手くいく。一応、他の人に対するちょっとアピールみたいな感じ。私はフェミニズム的に考えるんやけど、でもそれだけでは世の中に受け入れにくいから、受け入れやすくしてもらうためには、そこはちょっと仮面をかぶるっていうか。そういうのもアリやないの？　という」

――なるほど。ちょっと現実も見て、という。

「そうそう。だから、『戦略的にトランスしました』って言ってたんですよ。何も考えずにやってたんじゃなくて、外堀から埋めていくとかさ、賛同者を増やしてから最後に（会社の中枢に：筆者註）上げるとかさ、ということをやりました」

第３項　当事者コミュニティ　―当事者によって異なる意見―

Ｊさんは、トランスジェンダー当事者が集まる場において、自らの「在職トランス」としての経験を話したところ、他の当事者に受け入れられなかった。それに関する語りは、以下の通りである。

「＊＊研究会で『在職トランス』をテーマに話した時に、ある人からむっちゃ皮肉を言われて、『スキルがあれば会社は認めるっていうことですよね』って。結局は『確かに世の中そうですよね』という話になっちゃうんですよ。少なくとも労働環境的には『人は見かけじゃないんですよ』って。性別移行は犯罪じゃないからね、その人がおることによる会社としての価値が高ければ、スキルさえ認めて、お客さんにもプラスになれば、そりゃあ生理的にイヤやっていう人は確かにいるんやけど、労働環境という話をしたら関係ない。『性別なんて関係ない』というところに落ち着いてしまいません？」

――そうですね。「スキルがあれば会社は認めるっていうことですよね」って皮肉を言われた時に、Ｊさんはどういう返事をしたんですか？

「後でブログで書かれてた」

――あ、そうなんですか。対面で言われたわけではなくて。

「*後で対面でも会っているけど、その皮肉には言い返してへん。けど、『いや、当たり前でしょ』って言うしかないです。だから、そうなったら性別もジェンダーも関係ないですやん。結局はそこになるんでしょうね*」

第４項　特例法「子なし要件」訴訟、戸籍上の性別変更、年金の受給開始年齢

Ｊさんは、かつて、特例法の「子なし要件」訴訟にも関わった。それに関する語りは、以下の通りである。

「*その後、特例法の『子なし要件』の削除（の訴訟：筆者註）に関わって、『子なし要件』がなくなった時点で『もうええか』ぐらいの感じはあった*」

――「もうええか」というのは？

「*もうそういう活動は。っていうか、戸籍が変えてしまえるようになったから、もうそれで別に何も社会的に問題はない。それを理由に解雇されることもないやろうし。その、本人の気持ちの問題はあるし、昔知ってる人がおるところで仕事するのかどうかっていう、本人の判断次第ちゃうかな*」

――特例法の「子なし要件」がもう撤廃されて、現在は裁判には関わっていらっしゃらない？

「*うん、もう関わってないですね*」

――で、戸籍上の性別変更も終わっているから、特に実生活上の問題はない。

「*もう全然問題ない･･･。ないことはないんですけどね。年金の記録を見たら残ってる*」

――あ、そうなんですか。戸籍と連動して自動的に変えてくれないんですか？

「*いや、普通にいてたら分からへんねんけど。年金って、何年どこ勤めて、何年どこ勤めてっていうのが分かる。たぶんそれは残っていると思う。係の人が、ちょっと変な顔したから。でも、それは役所としては言えないし、なんかそういう気配はした。ただし、それは私の思い過ごしかもしれない。けど、今の年金制度っていうのは男性と女性で受給開始年齢が違うんですよね。2 年ずれるんですよ。だから、当然（性別の情報は：筆者註）残っているはずですよね。で、特例法にも年金関係の項目があって、実は『どっちでくれるんだろう』って思ってた。一応、女性でくれた（女性の受給開始年齢から年金が受給された：筆者註）。*

特例法が改正されて、それからこういう活動はしてないんです。特例法の改正の時に、けっこう表立って出ましたよ。ニュースとかにも出ましたよ。＊＊大学の教授が後押ししてくれてて。で、まあ、特別抗告しても絶対あかんのは分かってんねんけど。でも、そういうのを取り上げてもらわんと、やっぱり議員さんなんかも動かせられへんっていうことで。

だから、私みたいなタイプは移行したら困らへんのよね。あんまり困ってへん。いや、そりゃいろいろあるけど。ましてや、こういうインタビューに応えましょうかって言っている人っていうのは、一応自我が確立されてて揺るぎがないんやと思いますよ」

第９節　　Ｋさん

インタビュー日：2018 年 11 月 25 日
インタビュー時間：2 時間 18 分
年齢：40 代

K さんは、出生時の性別は女性であったが、現在は男性として生活されている。職業は酒造メーカー、居酒屋勤務、居酒屋自営を経て、バーを自営されている。インタビューは営業時間外の日中に、K さんが経営するバーに伺い、行った。

第１項　Ｋさんの生い立ち

まず、K さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*ジェンダーについて、ある日、気がついたのは幼稚園の時ですね。幼稚園の時に、荷物を置く場所で男女別にシールが貼られてまして、私自身は男の子だと思ってたもので、男の子のほうについて行って、荷物を直そうと思ったら、名前のシールがなかったんですね。『あれ？』と思ったら、『あなた、女の子ですよ』っていうことで、女子ばっかりの棚のほうに名前があったんで、『あ、そういうことか』っていうところから始まったんですけど、祖母言わく、もっと小さい頃から、例えば七五三の 3 歳の着物が『女の子のじゃ嫌だ』とか、そういうのは言ってたそうなんで、もう私が自認するずっと以前にトランスジェンダーだったのでしょう。はっきりと、まあ、女の子だと思い知らされたのは、その幼稚園ですね。その後は、そういう事ある毎に、その都度ですね、『あ、やっぱり、やっぱり女の子なんや』っていうのの繰り返しですね。それについて、小学校の 4 年生ぐらいまでは仕方がないし、あんまり深く考えてなかったんですけど、あの、よく小学生の女の子がバレンタインのチョコレートね、誰かお友達の家に行って作ったりするじゃないですか。『誰に渡すの？』って言われた時に、『もらう方に決まってるやろ！』と思ってたんですけど、やっぱりやらないといけないことになって、男の子で好きな子はいなかったんで、担任の先生*

に渡すことにして、作ったりしてましたね。思春期ですよね、10 歳以上くらいから、だましだましやってましたね。環境に馴染んでおかないといけないので。まさか『女の子が好きだ』とも言えませんし」

――恋愛対象は女性なんですね？

「*そうそうそう。もう、早くから（恋愛対象は：筆者註）女性でしたね*」

――なるほど。K さんの性自認は男性で、恋愛対象は女性？

「*はい。私の中ではそれは普通なんですけど、社会的には普通ではないので、子供でもそれは分かってましたんで、なんとかそのクラスの中で一番足が早い男の子のことを好きなフリをしたりとか、そういうみんなが好きやと言ってるような人のことを好きやと友達には言って、なんとか、こうね、周りを騙してきたと言うか、もうそうするしかなかった。自己防衛ですよね。本当は女の子で好きな子がいたんですけど、言うと変だ、言ってはいけないというのは分かってましたんで*」

――それは、誰かから言われたからじゃなくて、

「*じゃなくて、もう感じ取っているものですよね。やっぱり、まだまだ『男の子は男らしく、女の子は女らしく』っていう教育の下、家でも躾されますし、まあ、学校でも社会的にもそういう躾がありますんで、私はすごく活発な、もうどっちかと言うたら男の子を叩いて泣かすぐらいの勢いの元気な子だったんですけど、やっぱり『女の子らしくしなさい、スカートを履きなさい、髪の毛をもうちょっと伸ばしなさい』とかね、言われましたけど、スカートも履く気にならないし、髪の毛はいつも短く切ってくるということで抵抗してましたけど。言葉ではっきりと言うことはできませんしね、やっぱり。*

私の 2 つ下に弟がいるんですけども、やっぱり家庭内でも弟が長男にあたりますんで、『長男は男の子やから、この用事はせんでいい』とか、もう小さい頃からそういうジェンダーでしっかり分けられてる家だったんで」

――例えばどんなことはしなくていいと？

「*ごみ捨ては男の子はしたらダメっていうね。ごみの日にごみ出すじゃないですか。あれは『女、子供の仕事や』って父は言うんですけど、子供の中にも男の子は含まれないんですよね。う～ん。だから、女の仕事なわけです。家事も進んでやるのは『女の子の仕事や』というね。まあ、それについても反抗期はかなり反抗しましたけども、なぜ反抗してるか*

理由は言えませんでしたね、『私が女の子じゃないから』っていう理由で反抗しているとは言えませんでしたので。もう、周りの反抗期と同じようなふうに、両親は思っていたと思います。『遂に来たか』みたいなね。

中学校に入ってからは、まあ、より男女で差ができてきますので、本当、活発でしたね。ソフトボール部に入部したんですけども、野球部に本当は入りたかったんですけども、女子野球がないので、ソフトボール部に入って、有り余るエネルギーを部活にぶつけてましたけど（笑）。それでもやっぱり、その中でも女性らしさは求められますんでね、難しかったですけど。より、女子は女子、男子は男子で、集まっていく年代なんですよね、中学生は。その中で、女子の話の内容はほとんど好きな男の子の話なんで、もうまったくついていけない。で、女子はどんどん女性になっていく年ですので、例えば顔のこととかね、眉毛をどうしたいとか、髪の毛をどうしたいとかっていう話をしているんですけど、そのあたり、ホント全くついていけなくて、どっちにも所属しきれないっていう、やっぱり劣等感はありましたね。男子のところに行ったら、男の子はちょうど女の子と喋れない時期なんで、逃げて行っちゃうし。中には、仲良くしてくれる子もいましたけど。それはやっぱり、（Kさんを：筆者註）女子として見ていますよね、相手もね。で、女子の中では、やっぱりちょっと浮いていますんで、スポーツがよくできるボーイッシュな女の子（という存在だった：筆者註）」

――先程、中学の部活、ソフトボールの部活の中でも、「女子らしさを求められた」っておっしゃったと思うんですけど、具体的にはどんなことがあったんですか？

「そうですね、あんまり、その、ソフトボールも激しいスポーツなんで、だんだん髪の毛が短くなっていくんですけど、特にキャッチャーとかしてましたら、かぶったりするのでね。短くするんですけど、やっぱり『刈り上げたらダメ、後ろを刈り上げるな』とか、いろいろつまらない校則に近いような変なルールですよね、そういうの。見た目に関してのこととか、まあそうですね、先生もけっこう厳しい先生だったんで、股を開いて弁当食べたりしてたら『ちゃんと座って食べろ！』とか（笑）って。もうどうしてもね、開いていっちゃいますよね」

――なるほどね。「脚を閉じてちゃんと弁当食べろ」って、いかにも中学校の先生が言いそうですよね。

「うん、そういうね、難しいとこやね。全然ジェンダー関係なく、みんな脚開いてますけどね、中学生なんて（笑）」

――そうですね。なるほどね。

「ちょっと思春期あたりって個人差出ますよね。そういう、覚めてる子はとっくに目覚めてるし、全くそういうことに目覚めてない子はまだ小学生の延長みたいな感じやし。私はすごく早く性自認と、性的なことに関しては早熟なほうだったんで、よりいろいろ気になりましたね」

――よりいろいろ気になったというのは？

「もう、こう、なんでしょうか、男子はより男らしい骨格になっていきますんで、羨ましさもあって、女性は女性らしい身体になっていきますんで、私も胸ができたりとか、『あ、どうしよう！』っていうのもあったし、それこそ、あの、『そろそろブラジャーをつけてきなさい』っていうことまで言われるというね（笑）、つけたくなかったわけですよ、あれは女性用下着なんで、まあ最近は男性でもちらほらつけている方いらっしゃいますけど、本来は女性用下着なんで。一番苦しんだかもしれませんね、中学生（の時：筆者註）が。好きな子もすぐできて、まあ、何がどうなってああなったのか分かりませんけど、付き合えることになって、同じ部活の女の子と付き合ってたんですけど、中学 2 年生から付き合いまして。ちょっと混乱して記憶が曖昧というか。まあ、昔過ぎてっていうのもありますけど。『好きだ』と言ったんでしょうけど、まあうまくいきまして、2 年ぐらい付き合ってましたね。なので、初めて彼女ができたのもあるし、でも、社会的には隠さないといけない。でも、隠しきれないもんで、やっぱり噂が立つ。まあ冷やかされる程度やったらねぇ、なんとか逃げ回れますけど、ほんと注意されたりとか、相手の親御さんにも怒られたりとか（笑）、そういうのありました。ウチの親はもうカンカンでしたけど。『どういうつもりで付き合いしてるんや』って言うこと聞かれても、やっぱり『自分を男だと思ってる』って言うのは言えなかったし、言っても通じないだろうなっていうのはありましたね。当時の親世代ってやっぱりまだちょっと頭固い世代なんで」

――そうですね。

「うん。で、性同一性障害なんていう言葉もありませんし、あってもオカマとかはありましたけど、オナベっていうのはなかったんで、まだ。高校生ぐらいですかね、オナベっていう、水商売の人の中でね、そういう呼び方が出てきたのは。だから、『レズ』とか言われるわけですけど、う～ん、レズでもないんですよね。それを分かってもらえないでしょうね、きっと、言ってもね。なので、言えませんでした。意地悪な大人がね、ニヤニヤしながら聞いてきましたけどね」

――え～～！　え、当時中学生くらいですよね。意地悪な大人が聞いてきたっていうのは、

誰ですか？

「*噂好きな近所のおばちゃんとか*」

――下世話な感じですね！

「*『アンタ、女の子が好きなんやろ？』とか言って、ニヤニヤと。心配して、そういう気持ちが分かってもらえるような聞き方をされたら私も相談できたんでしょうけども、もういかにもニヤニヤとね。『女の子好きなんやろ？　有名やで！』とか言われて*」

――中学生くらいでも感じ取りますよね。心配してくれているのか、ただ下世話な感じなのか。

「*そりゃあ、もう分かります。田舎だったんで。田舎っていうところは、もう本当に閉鎖的で、しょうもない噂はもう光の如く（笑）、あっという間に周りに聞こえていきます。隠さないといけない、でも一緒にいたいっていうので、悩みました。『なんで女の子に生まれてきたんやろ』っていうのをすごく悩んだし。今振り返れば、無知だし、まだ未成年で何の力もないっていうか、どうもできないっていうのもあって、一番苦しんだ時期だったと思います。高校生になればね、バイトでもなんでもして、私と同じような人がいる世界に行ってとかっていうことは可能ですけど、中学生はホント一番多感だけど、力がないっていうね。大人ぶっているけれど、本当はまだまだ子供なのも分かってるし。一番苦しみましたね。*

*　高校になって、家庭の事情で＊＊に引っ越してきまして、彼女とも別れたわけなんですけど、ある意味、その、田舎でのいろんな心ない陰口や噂から一瞬断ち切れたんで、多少スッとしたっていうか。生まれ変わったじゃないけど、＊＊に来たらまた、『もっとばれないように 1 からやり直そう』のは、多少あって。でも、やっぱり、出てるもんがね、女の子のオーラじゃないんで、すぐにまあ･･･。とくに、女子高に行ってしまったんで、そうなんですよ、もう引越しがギリギリで選択肢がなく、『ここに行きなさい』って言われたところに行くしかなくて、で、女子高に行ったんですけど、もう地獄ですね、女の子しかいないんで。その、より、中学よりも高校なんかは、女性は化粧の話とかね、そういうことが中心になってきますんで。あと、女子高なんで、包み隠さず･･･。なので、ホントにもう、あそこはもう悪魔の城ですよ（笑）。女の子ばかりで。で、子供が多い世代なんで、14、5 クラスあったのかな、すごい量の女性の中で。想像つきますか？　その中で 1 人男だっていう（笑）*」

――でも、恋愛対象は女性なので、ある意味ウハウハ？

「*ウハウハと思うでしょう。皆さん、男性の考え方は割とそうで、『女子高の中に 1 人男が入るなんて最高やんけ！』って言うんですけど、恐怖ですね、はっきり言うたらね。ちょっと変な噂が立つと魔女狩りに遭うレベルですから（笑）。エグいですね。ホント、何度かそういう目に遭って、私は今思えば心が丈夫だったんでなんとか引きこもりもせず、すっかりいじめられることもなく、戦えるほうだったんで良かったんですけど。いやぁ〜、あれはきつかったですね。先生まで言うてきますからね。やっぱり浮いてるんでしょうね、存在がね。で、まあ、同じ学年にあと数名、『私と同じだろうな』っていう匂いがする、向こうも『だろうな』って思ってたと思うんですけど、いたんですけど、その 1 人が同じクラスの子と付き合ってまして、そこがね、パッと明るみに出た時に持に、もう怖ろしい目に遭ってましたから、神経使いましたね*」

――その同級生っていうのは、レズビアンカップル？

「*レズビアンだと周りは言うんですけど、私と同じトランスジェンダーとノンケの女の子との恋愛で。その後、たぶん彼女、まあ彼でしょうね、彼は立派なトランスジェンダーになってきていると思いますけど。噂は聞きませんけど。あの当時だから、もっとぶっちゃけて話し合えればよかったなと思うんですけどね。やっぱり、『違う』って言われた場合、私だけが一方的にカミングアウトしたことになるんで*」

――なるほどね。一方的だったら「じゃあ、言わなきゃよかった」っていうことになりますもんね。

「*そうなんですよ。で、この子が何を言い出すか分からないし、言わないとは思いますけど、なんか相手もね、微妙な距離で近づいてくるんですよ、喋りたいけど喋れない。喋って仲良くしたい、部活の話とかしてるんやけど、話したいことはきっとこれじゃないんやろなっていう、『腹の探り合い』っていう方は数名いましたね*」

――潜在的にトランスジェンダーじゃないかっていう方が、数名いたっていうこと？

「*はい*」

――FtM で？

「*そうですね*」

――意外といるもんなんですね。

「*いますね。言えなかっただけでいます。ウチのお店は、トランスジェンダーとか、ゲイ、レズビアン、なんだかんだ、女装のおっさんとかもいろいろ来るお店なんで、まあ、ノンケさんも来るんですけども、そういう割合が多いんですけど、やっぱり皆さん言ってますよ。70 代のお客さんでも、『同級生にやっぱり 1 人いた』とか。どの世代でもね、いるのはいるんですよ。でも、発表できなかったっていうだけで。最近すごく増えてるようなことを社会的に言われますけど、言える環境になってきたんで。声を上げることできる時代、カミングアウトできる時代になったんで、急に増えているような気がするだけで。あとは法律で性別を変えるとか、病院もできたし。できたというか、病院でそういう GID 科っていうのもできたし。そういうチャンスを使える年代が、まあ 30 代、20 代でたくさん出てきたんで、目にして分かるだけで。もっとチャンスがあれば、今から 40 代以上の人でももっと早くそういう法律あったら、トライした人もいると思います。特に、バブルの時期なんかだったらもっといたと思います*」

――なぜバブルの時期がもっといた？

「*あのあたりは、お客さんがおっしゃっていたんですけれども、『バブルの時期でとんでもない給料がどんどん入って、みんな男遊び、女遊びに明け暮れていた。私はお金はあったけど、女遊びもできず、まあ逆もしかり、男遊びもできず、どこに行ったらいいのか悶々としていた。あの時にああいう法律が決まって性転換できるってなったら、とっくに海外に行ってやってるであろう』という人が多かったんで。『日本の地位がグッと上がっている気もしたし、社会的にそういう何でもありみたいな、金で何とかなるって言うような傾向もあったんで、日本人らしからぬですけど、あの勢いに乗ってれば日本人らしからぬ発言をしてもいけたはず』ってことをいう方、けっこういますんで。『う～ん、なるほど』みたいな。私らはね、バブルが終わってから社会に出ましたから、より、また日本人らしいというか、良いのか悪いのかですけどね、感じに戻ってきましたけれども。本当、バブルの時はみんな適当だったそうです。出社した途端、アフター5 のことを話してるし、昨日のアフター5 の話をして、『じゃあ今日そこ行こうぜ』みたいな、みんなもう遊ぶことしか考えてなかった。*

私は、高校卒業して就職したんですけど、就職氷河期 2 年目だったんで、就職の選択がすごく少なくて。去年はもっと（求人が：筆者註）来てたであろうのが、もう 1/4 になったのかな。だから、就職先が決まらず卒業した子もけっこういましたね。＊＊年に酒造メーカーに入社したんですけども」

――当時からお酒は好きだったんですね？

「大好きです！　言ったらあかんけどね（笑）。中学生くらいから、どちらかと言えば一人不良ですね。人とつるむのは嫌いだったんで。家で何でもチャレンジしてみて、夜中に徘徊してみたりとか、一匹狼のタイプでしたね。やっぱり、どっちともつるめなかったんで。悪い男の子のグループともつるめない。悪い女の子のグループともつるめない。そこは、やっぱり一番ジェンダーが関わってきたと思いますね。けっこうそれは大きかったかな。しょうもないことでやっぱり役割があって、男子と女子でね。ノンケさんはね、全くそういうことが頭にないと思うんですよ。そういうつもりなく、そうやって分けて当たり前だと思ってるんですけど、私の場合は脳みそと体が違いますんで、分けれないんですよね。で、ぱっと見、女性と思って接してる人には女性みたいな対応して、ぱっと見、男の子かなあと思っている子には男として接して、っていう。そういう、微妙なところをやってましたんで。でも、まあバレますけどね、『やっぱ、女の子やな』って」

――「やっぱ、女の子やな」っていうのは？

「最初は（私のことを：筆者註）男の子かと思って、近所のおっちゃんとか『将棋しようか？』とか言って公園でやってくれるんですけど、『あれ？　女の子か？』って途中から言い出しますんで、最終的にはバレるという。将棋指すのに男も女も関係ないのに、やっぱそういうとこで、『女の子に将棋できるんか？』とかね。もうホント、日々そういう男と女の話で溢れてますよ、本当に。『男と女しかいないから』っていう頭だからでしょうけど。まあ、それも分かります。男女で分けとかないとダメなことも分かるんで。でも、そこに、どちらにも属さない、属せない、属したフリをしている人らってのは、難しいとこですよね。

*　ネタでやって行くか、割り切って面白おかしく、ちょっとボーイッシュな面白い女の子のキャラで行くか、硬派で通すか、難しいとこですよ、ホントに（笑）。バイト先では硬派で通しましたけどね」*

――どんなバイトされたんですか？

「バイトはね、炉端居酒屋でバイトしてたんですけど。で、まあ、当然の如くバイト募集で面接に行っても女の子なもんで、『ホールの希望ですか？』って言われて、そういう話で進んでいくんですけど、『いや、私は厨房のほうで焼きたい』と。『あ、そっちをやりたいんか？！　女の子は、ウチやったことないから、できるかなぁ？』って。『いや、できますよ』って。魚焼いたりね。でも、やっぱりそういう考え方なんですよね、社会的に」

――「女の子はホールの仕事をするものだ」という。

「*そうそうそう。でも、お客さんの大半がおっちゃんなんで、お兄ちゃんがビール運んでくるより、お姉ちゃんがビール運んできたほうが嬉しいに決まっているんで*」

――すごい価値観ですよ、それ。イヤだなぁと思いますけど。

「*でも、まあ、そういうもんだっていうのは分かってたんで、最初は『どうしようかな～』って言われて、『最初はとりあえずホールから入ってもらわれへんかな』ってなって、まあしゃあなしに。これもどこ行ったってそうだろうなと思ったんで、ホールからやりまして*」

――その炉端居酒屋のバイトをされたのは、高校１年生の時？

「*高校１年生からです。すぐにバイト始めて。お金欲しかったですよね、やっぱりその、『性転換したい』っていうのは中学生の時すごく強く思ったんで。何で見たんかなかそういう、カルーセル麻紀の話やったかな、海外に行ったら性転換できる、その当時は女から男へっていうのはほとんど話聞きませんでしたけど。何か出来るだろうっていうか、もう一人で暮らしたいと言うか。親の元でいて親にカミングアウトできないんで、父親とねホント仲が悪くて。やっぱり、ウチの父は女の子らしくして欲しかったんでしょうね。あと、けっこう男尊女卑の考え方の人だったんで*」

――じゃあ、高校時代からアルバイトをされて、性転換をするためにお金を貯められた？

「*貯めようと思ったんですけど、まぁね、子供なんでね、違うのに使いますよね（笑）。で、また好きな女の子もできましたので、その子にね、お金を使ったりもしますし*」

第２項　就職と軋轢　―「女のくせに」事件―

K さんは、高校を卒業して就職した。しかし、就職後には多くの女性差別的な状況に遭遇した。以下は、それに関する語りである。

「*就職は酒造メーカー。で、女性としてしか就職できないことは分かってましたんで、当然女子高なんで、女性の募集。その当時、まだそういう募集の仕方が良かったんで。今はダメでしょ、『女性だけ募集』とか『男性だけ募集』とは書けないじゃないですか。『女性が活躍されている』とか、そういう書き方しかできないでしょ。でも、その当時は、『女子はこういう仕事』ってきっちり決まってて。で、そこの枠で探すしかなく。で、『ここにしよう』って言って。で、第一希望で通りまして。春からそのメーカーに勤務するわけなんですけども。*

ここからがまた大変で。もう女性として生活するのには随分慣れてますんで、周りをだまくらかしてやってるんですけれども。相手は大人でね、定年退職する 60 歳までの大人がずっといるわけですよ。18 歳でしょ、私ね。19 歳から 60 歳までいるわけですよ。その世代においての女性としての役割をね、やっぱり、求められますよね。

『女はこうだ』と、『女は黙っとれ』と。で、私は手先が器用だったんで、機械修理なんかもけっこう得意で、製品工場で勤めてますんで、たまにベルトコンベアがちょっと外れたりとかあるんですけど。そういうできる人呼んでくるより、さっとどこが悪いんかを見て直した方が生産率も上がるんで、パッパッとやってたんです。やっぱり『そういうことするな。女のくせにそういうことするな』というのもあったりとか。で、男性が多い職場だったんですけど、女性は女性がやる仕事のところに配置されてまして。『あの仕事やりたいな』と思っても、周りは男の仕事。我々女はこれしかできないって、しっかり分けられている時代だったんで。あとは、お酌せなあかんとかね、飲みに行ったら。まず、偉いさんから、女の子が。男は同期でもこうやってやってるんですけどね。女の子はお酌して回らなきゃあかん。あと、私、化粧を全くしなかったら、それもけっこう突っ込まれましたね。『なんで化粧してけーへんのや？』とか。男は化粧せえへんに決まっとるやろとか思いながら（笑)。それ、言えないんで。で、(年が：筆者註）明けて、阪神大震災ですね。大変でしたね、あの時。もう相当大変で男だ女だと言ってる暇もなかったっていうくらいですね。よく命があったなと、ホントに。で、その後は内定してた子も取り消されたようで、後輩が 5 年間入ってこず。まぁ、私はずっと下っ端で使いパシリと与えられた仕事をしながら、そして女性としての役割もしながら、お茶汲みして、毎日早よ行ってコーヒー入れたりせなあかんのですよ。めんどくさいなあと思って。男の子はあとから来てね、『ありがとう』とか言って」

――その一言で済む（笑)。

「『ありがとう』言ってくれたらいいけれど、言わない人もいますよね。寡黙な人なんかは持ち場まで持って行ってあげなあかんとかね。好みをすぐ覚えないといけないんで、最初に言われましたね。何を教えられたかっていったら、入社して配属先が決まって、で、指導員っていう女性の方がついて、10 歳ぐらい年上の。で、まあ、『今日からこのラインで仕事してもらうんやけど、主な仕事はこうでああで』って言われて。『じゃあ、まずここにコーヒーの』って。ああ、そっからな、って（笑)」

――それが、最初に教えられた仕事？

「そうですね。で、そこのライン長はミルクだけとか。もう、何のメモやねんってやつですよね、最初はね」

――「それを仕事として覚えなさい」っていうこと？

「それ、仕事ですね、完全にね。その時ね、15 人ぐらいいたんですけど。まず朝一は 15 人分を作らないといけない。『いらない』っていう人もいるけど一応 15 杯ですね。コーヒーじゃない人もいるのでややこしいんですよ、いろいろ。『お茶入れて』とかね。ミルクだ、砂糖だ、なんだかんだ。で、自分のが分かるように家から自分のコップを持って来てはるんですけど、それを覚えるのがね（笑）。名前書いてくれよと思うんですけど」

――そうですね。まあ、今だったらスマホでちょっと写真撮ったりできますけど。

「そうそうそう。まあ、今はお茶入れるのを仕事にしたら怒られる時代なんで、絶対ないですけど。あとは、今は捨てれるようになってるでしょ、紙コップの機械を設置して。あれは画期的だったと思いますよ。個人的に勝手にやってくれっていうね。女性の仕事が 1 つなくなったんで。休憩時間がもうすぐ入りそうやなあって言ったら先輩が来て、肩叩いて行きますんで、私はお茶を入れないといけない。仕事があるのにお茶を入れないといけないというね（笑）。10 時と 3 時ですね。あとは、洗濯物とかちょっと軽いものが出るんです、軍手とか。ああいうのを手で洗って強い汚れを落として、あと洗濯機なんですけど。まあ、男の子はみんなボンと置いていきますよね、洗い場に。私は女子なんで、洗って洗濯する。逆は見たことないですね。もう勝手に決まってて、あれが当たり前やと思ってるから文句も出ない。女性もそういうのは当たり前と思ってるから、当たり前に洗って、当たり前に洗濯してるんです。会社の中でも、そういう男女の役割を勝手に押し付けられるって言うほどでもないんでしょうけど、まあある意味からしたら」

――そのへんのコーヒーを入れるとか、あるいは洗濯をするっていうのは、職場にいた女性たちはどういうふうに捉えていたんですか？

「当たり前なんで、私らから上の世代しかいませんので、女はそういう仕事するの当たり前と思ってる人達ばっかりなんで」

――じゃあ、特に反発するとかはなし？

「なしですね。全くなし。『させられてると思えへんのかな？』っていうのは疑問でしたけど、なしですね。で、私と同じ時に入社した男の子は、汚れ物洗う仕事とコーヒーを入れる仕事はしてないので。同じ職場で同じ持ち場だったんですけど」

――男性はやらないんですね？

「*だから、明日休みっていう、有給を取らないといけない時に、前の日にコーヒーカップを並べて、明日の分を入れてラップして、置いて行ってました。先輩が困るでしょ。私が休みなのを次の日の朝に気づいた時に、『あ！　K、休みや！　しもうた。誰のコーヒーやったっけ？』。もう1年やってないんでね、先輩はね、私が入ってきたことによって。慌てるんで。それだけはやっていってましたね*」

――置き手紙みたいにして、「お願いします」みたいな？

「*そうそう。女性の仕事なのでね。ホント、謎の仕事が多いですよね、女性のってね。*
　で、炉端時代に仲良くしてた先輩が『独立するからけぇへんか？』言うので。まぁ、入社4年目ぐらいから誘われてまして、『じゃあ、もう辞めよう』っていうことで、5年半勤めた酒造メーカーを辞めた。
　で、そこから、飲食業に入っていくんですけど、またこれもね、あの･･･『コックさん』って聞いて、男女どっち思い浮かびますか？」

――男性。

「*男性ですよね。『板前さん』って聞いて？*」

――男性。

「*男性ですよね、っていう環境なんで。そこへ私は入りますんで。誰よりも長く、その兄弟子のことを知ってまして、高校の時から知ってますんで。で、誰よりも多くその人と仕事した、調理場で仕事して。私、調理師免許は＊＊歳に取得してますんで、調理師としてもまあまあ夜は活躍していたつもりなんですけど。その飲食業に入っていって、調理師として入社した時に、『女のくせに』がやってくるわけですよ（笑）*」

――2つ目の仕事で。でも、その「一緒にやらへんか？」って誘ってくれた先輩は？

「*誘ってくれた先輩はもう社長になってしまっているんで、なかなか現場には下りてこないんですよね。で、『コイツは前からずっと一緒に働いてきたヤツで、調理師やし、中途入社やけどまあみんなで助け合ってやろうな』みたいに、調理場にポンと放り込まれたんですけども、周りはもう年上の男性ばっかりで、『女やのに調理するんかい！』みたいな。『いやぁ、オマエのオカン、家でごはん作ってへんか？』って思うんやけどね。その、外でお*

金をもらって料理を提供するのは男の仕事やっていう、なんか変なね（笑）、社会なんですよね」

――言われてみればそうですね。

「*でも、板前と聞いたら男性。コックさん男性。シェフ男性。全部イメージで出てくるのは男性ですよね*」

――でも、家庭の台所に立つのは女性。

「*そうそうそう。で、なんでしょうか、定食屋のおばちゃんのごはんが美味しかったりするでしょ。あれは、別枠なんですよね。だから、あれは家庭の延長みたいな感じ*」

――だから、「家庭の味」とか「おふくろの味」って言うんだ。

「*で、それ以上のところになってくると、男性社会なんですよね、これが*」

――ちょっとヒエラルキーを感じてしまって、イヤだな。

「*そうそうそう。でも、『女のくせに事件』ですよ、ホントに。市場に仕入れに行っても、『ああ、もう触んな！』って言われるんですよね。『女は体温が高いから』って。いやいや、知ってますか。本当は、男性のほうが体温高いんですよ。（女性は：筆者註）生理があって、それで体温が変動するっていうだけなんですけど、それが顕著に出る人と全く変わらない人もいますんで。私は生理痛も軽いほうだったし、生理日数も少なくて3日ほどしかない。だいたい皆さん1週間ほどあるんですども、3日ほどしかない。全く生活に影響はない。精神的には若干落ち込みますけど。『ああ、やっぱり女なんや』っていうのを毎月毎月ね、見させられますんで。でも、仕事休んだりするようなことではないので、仕事に差し支えないんですけど。だから、『刺身を切る前に氷で手を締めろ』とかね。『いやいや、お前らのほうが体温高いんや』って思いながら。で、『女やからこれはさせへん』みたいな。う～ん、戦いましたね、かなりね。今はね、女性のシェフとか女性のコックさん、たくさん活躍してきて、いい時代になったなって。それの先駆けが、パティシエが一時職業として世に出た時があって、20年近く前ですけど。その、パティシエの中に女性がけっこういたんです。パティシエも最初は男の仕事だったんです*」

――パティシエって、20年前より古い時代ってなかったんでしたっけ？

「あったはずなんですけど、調理師ほどの人数はいなかった。あれでね、パティシエが女性、綺麗な女性の人がテレビに出てきたりするようになってきて。あれで、調理、製菓の社会分野に、女性が増えてきたんで、料理人も多少女性が出てきて。で、今では寿司職人も女性いますよね、タブーだったんですけどね。昔、寿司を握るのは女の体温じゃあかんっていうね。

で、他の兄弟子からの意味分からんいじめとか。明らかに女では持てないだろうなっていうようなソースの鍋を置いとかれるんですよ。それをどけないといけないっていうんで。『こぼすやろうな』みたいな感じで見てるんですね。で、私けっこう負けず嫌いで力持ちなんで、絶対こぼさないんですけど。その分、ヘルニアになりましたけど（笑）」

――いや～、そこまで頑張ったんですか。

「心は男なんで、男性がやって当たり前の仕事は人に頼りたくなかったのと、やっぱりね『だから女は』とか、『やっぱり女やから』っていう言葉を一個でも減らしたかったんです。何と戦ってんねんっていう話やけど、もういろいろ本当に。めちゃくちゃ硬いのを割らなあかんとかね。そういう仕事、わざわざ置いとかれるんですよ。これはもう完全にわざとやな。でも、まあ、コツさえつかめば。でも、もう何をしてるのか分からなくなってきたんですよね。『女だからできない』とか、『女だからさしてもらえない』とか。その、『女がする仕事じゃない』みたいな感じがどこに行っても強かったんで、けっこう市場に行ってもそうやし。他でね、ケータリングの仕事なんかもしてる会社だったんで、よそに行くんですけど、『えっ！　女の人なんや』みたいな。お客さんもね。で、ホント何をしているのか分からない。もう、男として認められるために仕事を頑張っているのか、調理が好きでやってるのか。もう何と戦ってるんやろっていうので、疲れもあったのと、『女のくせに』を言い続けられたんで、そんなことばっかり言うてる男を見返したろうと思うので、一念発起して自分で居酒屋を始めまして。＊＊歳で。

で、まあ、やっぱり私のことを『女のくせに』って言っていじめてた兄弟子からは、花は一つも届きませんでした、やっぱり。そういう、いじめてて、『女のくせに』と言って下に見てたヤツが先に独立したんでね、気に入らんかったと思いますよ（笑）。でも、もう自分の力でやっていくしかないなと思ったので、『女のくせに』とは言われませんので、まず。職場内では私が一番上なんで。でも、市場に行けば、名刺持って行って、『今度から居酒屋するんですけど、魚を仕入れたい』とか、『肉を仕入れたい』って言っても、まあ若いっていうのもあったし、女だっていうのもあって、『ウチでは売られへん』とかね」

――え～！

「うん。まあ、そういうことでしか判断できない人から、物を買いたくないんで。いろい

ろ回って、良いお肉屋さんと良い魚屋さんに出会いましたんで。そのね、2人はすごく、商売の腕としてよく見て下さいましたんで、助かりましたね。楽しかったし、一緒に仕事してて。『今度こんな肉あるねんけど、どうや？』とか、『こんな魚入ったんやけど』とかね。『試してみて！』とか言ってきて。私の料理の、どういう調理してるかとか、どういうメニュー出してるかっていうのを分かってくれて、そこに男女関係ないんでね。よかったですよ。そのお 2 人には感謝してます。もう魚屋のおっちゃんは死んじゃって、一番ショックやったかもな。そらね、まだまだ居酒屋の大将は男ですよね（笑）、イメージね」

――イメージね、ありますね。和風の居酒屋だったら法被着て、みたいな。

「*そう。で、私が奥の調理場で黙々と調理を作ってたりしてるんですけど。ホールは、ウチは男の子も女の子もいて。で、中にはお客さんが『これ、おいしかったわ！　どんな人が料理してるん？』って。で、『呼んできましょか』って言って。で、私がバッと出て行って『ありがとうございます』って言うたら、『え？　女の子なの』って。やっぱりその、みんなのイメージってね（笑）、なんで男なんでしょうね*」

第３項　絵本の段階からの意識改革の必要性

K さんは「女のくせに事件」などの職場での経験を通して、職業に対するイメージが男女別に固定されている現状を見出した。そして、幼少期に見る絵本の段階から特定の職業と男女別のイメージを変えるべきではないかという意見を聞かせて下さった。前項の続きの語りは、以下の通りである。

――なんで男なんですかね。でも、＊＊年ぐらいの時代になっても、やっぱりお客の感覚としては、厨房で料理しているのは男っていう。

「*そうなんですよ*」

――そういう先入観がまだあるんですね。

「*ありますね。今でもあったでしょう、だから*」

――まあ、とっさに聞かれたら、とっさに言っちゃいましたけど。

「*パッと浮かぶのは男性ですよね、やっぱりね*」

――う～ん、そうですねぇ。

「なんでもそうですけど、電車とか乗っててもね、『あれ？　女の人運転してるわ』とかなるでしょ」

――うん、なるなる。「あれ？　車掌さん、今日は女性だな」って。

「そうそうそう。で、逆に、その場合はね『すごいなあ』とかなんですよね、『女の人やのに』ってなるんですよね」

――あれ、なんでですかね。バスの運転手さんの場合は、「女の人なのに、よう頑張ってるなぁ」みたいな感じで。

「男の人だって頑張ってるのにねぇ。だから、そうなんですよ。だから、保育士さんが男性だと、『男の人なのにね、もう子供が好きなんや、優しいんやね』って。やっぱり職業（の男女別：筆者註）って、すごくイメージで（決まってしまいますね：筆者註）。なんででしょうね、あれ」

――不思議ですよね。

「不思議ですよね。まあ、見てる絵本とか、ああいうところから入ってるんでしょうけど」

――なるほどね。じゃあ、例えば2003年頃の居酒屋のお客さんも30代から40代ぐらいの方だったら、自分が小さい頃の絵本とか教育の影響で、「板前さんだったら男」っていうことが刷り込まれちゃっている。

「だから、今から作る絵本にね、男も女も両方つけたらいいと思うんですよ。例えば、バスの運転席から顔を出してるのは女にしたりとか。もうほんと刷り込みだと思うんですよね。両方とも、職業のイメージっていうのがね」

――子供の頃の教育とか躾を疑う人はあんまりいないので、子供の頃刷り込まれたのが大人になってもずっと引きずるという。

「そうそうそう。そこから変えないと、やっぱり、どっかであると思いますよ。私、そういう話をお客さんとよくするんですけど、私たちも差別されたくないのに、私たちですら職業のイメージはやっぱりそうなんですよね。『すし職人は？』っていうと『男』。そういう感じ。イメージなんですよね、やっぱりね。だから、決して、『男じゃないとできない』

『女じゃないとできない』っていうわけじゃない仕事の方が多いと思うんですよ。ホント特殊なところはあると思います、『女性じゃないと』とか『男性じゃないと』っていうのがあると思うんですけど。でも、職業のほとんどはもう男女どちらでもできると思うんで。絵本の段階からですよね。

だから、それが、トランスジェンダーが抱える就職とか職業のことに結びついていくのもあると思います。働きにくい環境、まず、性自認で入社しても、性自認で男性やと思って男性のほうで入社しても、『この仕事は男性がするもんやから』って言われちゃったらね、イメージがあったりとかしたら、できるかなっていう風な不安を勝手に覚えられるというね、相手に。

私、アルバイトで土方も行ったことあります。何でもいろいろ、お金になることはかなりしましたけど。男の子でもヘロヘロのもおるし。もう全然、コツも分からん。重たい物を持つコツも分かってないから、すぐ腰ダメにしちゃったりとか、あるんですけど。女の人でも十分できる仕事ですよ。今は何でも軽量化されてますし。力も、道具の使い方っていうのもあるんで」

――そうですね。コツを押さえればできますよね。

第４項　学校の先生、企業経営者など非当事者から当事者への対応について尋ねられる

K さんは、現在バーを経営されている。来店客は主にセクシュアル・マイノリティ当事者であるが、そこには非当事者の学校の先生や企業の管理職なども来店され、セクシュアル・マイノリティ当事者の生徒や社員に対してどのように対応すればいいのかについて意見を求められるという。それに関する語りは、以下の通りである。

「そうそう。あとは、これからどんどんトランスジェンダーは働きやすくなるんちゃうかなっていうのは感じますけどね。今、ウチのお客さんでいろんな方いますんでよく聞くんですけど、『お手洗いが女性用がなかったから、女性をこの持ち場に就けれなかった』とかね、そういうのがあるらしくって。更衣室を作るスペースがなかった。男社会やから、男性用しかなかった。それを、女性用作らないといけないから、男社会にしてたけど、トランスジェンダーが就職を希望したことによって、『これはちょっと、もっと考えなあかんな』っていうこと考え出してる会社がけっこうあって。ウチは、ノンケのお客さんの中でも、会社を持ってはる人とか会社の偉いさんの人とかもいますんで、たまにそういう質問受けるんですよね」

――「こういう場合はどうすればいいの？」っていう。

「そうそうそうそう。社会的にちゃんと考えようと思って下さる方はすごく増えてきてて、『会社としても対応しましょう。こういう環境にしましょう』っていうのは、けっこう相談されることは多いんで。ノンケの方もいろいろ考えてるんですけど、目で見て分かりやすいトランスジェンダーの場合はいいんですけど。クローゼットの人たちに対して、しつこく聞くわけにもいかないね」

――たぶんゲイやレズビアンはクローゼット派のほうが多いので、会社が「手当を支給するからカミングアウトしろ」っていうのもおかしな話で（笑）。

「そうそうそうそう（笑）。言えるかどうか。言わないですよね。トランスジェンダーの中にも、将来的には性別移行していこうと思ってる人もいるけど、『今はこの状態で触らんといてくれ！』っていうのもいるでしょうし。もう、ホント雛型が作れない。男、女でパッと分けといたらいいっていう問題じゃないから。そこで企業はけっこう考えてますよね」

――そっかそっか。トランスの方の中にも、今はただ、ただっていうか、性別移行のお金を貯めたくて会社に来ているので、今とやかく言われて仕事が続かなくなっちゃうと辛いと。

「そうなんですよ。状況によっても変わるんで。私も自分で、やっぱりそのホルモン投与するまでは女性のお手洗いを使ってましたし、ホルモン投与するまでもかなり『えっ？！』ってなるぐらい、男か女かっていったら、『男だろうな』って思う人は9割くらいいたんで。女性のお手洗いを使うのは、すごく恐縮だったんですけど。でも、仕方ないんで（女性のお手洗いに：筆者註）行ってましたけど。でも、ホルモン投与をし出して、髭がバーッと生えてきましたんで、もうそうなったら男性のお手洗いに行きましたけど」

――＊＊歳、＊＊年で居酒屋を自分で作られて、その後の職業遍歴のあたりと、性別移行とかホルモン注射っていう話が今少し出たんですけど、そのへんのお話をお願いできますか？

「そうですね。＊＊年から3年半、居酒屋はやりまして。で、一度ここで、うつ病ですね。『一番の原因は何ですか？』って聞かれたら、やっぱり、性同一性障害のことで隠し続けてきた。友達にも、家族にも、隠し続けてきた。あとは職場でもっていうのの、もう限界ですね、疲れで。が、一番多かったかな。それで、うつ病になって、仕事ちょっと続けれないんで、居酒屋いったん閉めまして、療養、治療をするんですけど。まあ、そうじゃいけないと思って、半年後ぐらいですかね。ここ（現在経営されているバー：筆者註）をやり出したんですけど。

で、ええと、その時にどういう店にしようかなっていうのね。まあ、私自身トランスジェンダーであり、仕事するとか社会的な立場でいつもなにか人より多いこと悩まないといけないっていうのはあって。情報交換できる人も少なく、今ほどネットもね、そんな普及してないっていうか、スマホはまだない時なんで、パソコン使う人たちぐらいしか情報収集できない。すごく大変でしたね、はっきり言えばね。無駄なことを悩まないといけない。環境考えて打ち解けていかないといけないとか、どんなに酔っ払ってもペロッと言ってはいけないという（笑）。だから、どこかでいつも誰かと会う時は緊張してる状態ですよね、どこかね。と、『ホントは、ああなっていきたい』っていう、そういうので、まあ、いろいろ考えて、そういう人たちが情報交換できたりとか、そういう人たちがたくさんいるってっていうのが分かるような場所を作ればいいなと思って、ここやったんですよ。だから、ミックスバーですね、ある意味ね」

――LGBT の人たちと、ノンケの方も来られる？

「*来られます。その当時は、（このお店を：筆者註）開けた当時はまだスマホになってなかったんで、けっこうみんな駆使して連絡を頂きまして、『ぜひ行きたいから』っていうので。だから、全国各地、一番遠いところは北海道の人もね、来ましたね。『こっちで就職したいんですけど』っていう話とか、『もう地元を捨てて出て来たい』とか、まあいろいろあって。まあ、このお店して良かったと思いますよ、いろんな話も聞けたし、自分のことも役に立ててもらえたし。最近では、その社長さんが来たりとか、あとは学校の先生が来たりとかね*」

――地元の？

「*地元ですね、はい。『生徒にそういうのがいて、どう対応したらいいのか』*」

――ああ、そっかそっか。「自分の受け持っている生徒にどうやって対応していいのか分からないから、意見聞かせてくれ」という。

「*うん。で、『一応教育委員会のほうでは一応決まっててあるんだけど、私（相談に来た地元の学校の先生：筆者註）が考えるのは、その性格にもよると思うんです。その子の性格にもよるし、その子が本当はどうしたいのかを聞くべきだと思うんやけど、一応教育委員会では『こう』って決まっちゃっててね』って。どこまでやれるのか、どこまでやったらいいのかっていうので。小学校の先生は 2 人、中学校の先生は 1 人。で、高校の部活の顧問の先生が来はったことあります。だからね、先生も中には真面目な方もいて（笑）*」

――ははは（笑）。いや、先生にはみんな真面目になって欲しいですけど、先生ぐらいは。

「*そう思うとね、全てここに繋がるというか、後に就職していくんですけど、それまでのところで、早くいろんなことが分かってもらえて楽になれば、受け入れ側も勉強していくことになるんで。もうこっちサイドはね、『一応受けてみよう』とか、けっこうチャレンジする人も多いんで*」

――就活で？

「*就活ですね。『今こうだけど、男として就職したいので、どうだ？』とかね。みんなけっこうはっきり言ってますね*」

――自分のトランスジェンダーとしての状況を言っている？

「*うん。『入社してから、もしかしたら性別移行していくかもしれん。今は、見た目女性だけどネクタイ締めていきます。男性社員として入社したい。で、途中でホルモン投与したり手術をしたりしていく可能性がある』ということ言って、就活している人もけっこういるんで*」

――それでうまくいっている？

「*いっている人もいます*」

――じゃあ、昔に比べたら、

「*もうだいぶ変わりましたね！　その代わり、『休暇をうまく駆使して手術に当ててくれ。こっちから特別休暇を与えることはできへんから』っていうのは（会社から言われる：筆者註）。あとは、例えば、『女やのにネクタイ締めてることに対して周りの社員から心ないことを言われても、それは仕方ないと思って下さい』って。それは、分かって（会社に：筆者註）行ってますからね、こっちも。*

けっこう、トランスジェンダーの人で多いのは、性別移行の前段階で、例えば、試しでいったん男っぽくして生活する場所を探すんですね。いったん地元を離れて、女の子で里を出ます。男っぽい暮らしができるところのために、どっか引っ越すんですよね、一人暮らしして。で、これで試してやってみます。で、いけそうやなってなった時に性別をしっかり変えようと思ってホルモン投与とかし出して、社会的にも男やと思われた状態で、また別のところに行って。だから、全部ここで切っていく人が多くて。やっぱり、過去がバ

レるのはイヤって。『元女やった』ってバレるのがイヤ。『元女かな、怪しいな』ってバレるのがイヤ。『もう男になったから』って全部切っちゃう人が多くて。まあ、北海道の人も、それで性別移行が終わったからどっか行っちゃったのかもしれませんね」

――なるほどね。

「*うんうん。けっこうあります。仕事辞めるきっかけも、それで辞めてる人多いんで。女性社員で入ったんやけど、男性になるから、手術するから、ここまでで辞めて。で、手術して就職し直す。それでいちいち会社辞めるのもったいないなと思うんですけど、そうでないと、職場のねぇ、異動してくれたらいいんですけど、今不景気なんで、異動先もなかったりとか、あとは、社員全員が元女だったことを知ってるんで、(その会社には：筆者註)おりづらいと。そらそうですよね。逆に、男性から女性の場合はね、降格したりとかね*」

――降格？　下がっちゃうんですね？

「*そう*」

――えっ！　なんで？

「*『なんで？』ってなるでしょ？*」

――女性に性別移行したら降格なんですか？　別に職場で問題行動を起こしたとかそういうことじゃないですよね？

「*じゃないですよ。だから、男性として勤務してきて、男性だからここまで行けたけど、女性だったらここまでは行けない職場なんですよね、そこはね*」

――たぶん部長とか、そういう高いところですよね？

「*うんうん。で、まあ、そうなった時は『部署異動して降格させられた』って言う人もいるし。今、そういうのが理由で首は切れないんですけど、降格されたりとかは多少できるんですよね。その、『前例がない』っていう*」

――それは、思いっきり労働環境問題ですよ。

「*そうなんですけど。ウチのノンケのお客さんの会社さんで、『女性としてここまでしか狙*

えない』っていうラインがあるらしくて」

――あ～。「どんなに頑張ってもここまで」という。

「*『どんなに頑張ってもここまでしか狙えない』っていうラインがあって。なので、トランスジェンダーで男から女になる人は、そこまで落とされますよね、やっぱりね。女性になったってことは、『ここまでしか狙えない』というところまで落とされます。そういうことなんですよ。だから、会社としては悪いことをしているつもりはないんですよね。『いや～、だって女になったから』って*」

――でも、役職を落とされたら給料も下がりますよね？

「*そうなんですよ。うんうん。あります。だから、『給料もやっぱり下がったし』って言って。男性から女性っていうのは、給料の問題はすごく響きますね。うん、給料下がります。だから、その時初めて『女の子って、給料少ないよね』っていう人多いんで。*

で、あとは、女性から男性の場合は、その、移行していくのを知ってる人がいた場合は、やっぱり、いつまでもその話をされるし、男性としてやっていって偉いさんになれるはずやのに、やっぱ横槍入れられるとかね。『アイツ、元女やからなぁ』っていうのとか、そういうのはあるって聞きますね。うんうん。あるみたいです。『何年も何年も、なぜ上に上がれないのか。これだけ成果を出してるのに』っていうのを上司に問い詰めても、『う～ん･･･。分かってくれ』みたいな。言えないんですよね、上司もね。『オマエが元女やから』っていうのを発言できない」

――それ、性差別してるっていうことになっちゃう。

「*うんうん。会社では『そういう差別をしてはいけません』って謳ってるんで言えないんですけど、それとは裏腹にそういう『暗黙の･･･』っていうのはあるんですよね。どこもあると思います。明るく爽やかに（ジェンダー差別を：筆者註）やっているところはないと思います。*

だから、男性枠として守られているところに、女性、ないし、元女性が入ってくるっていうのはすごく恐怖みたいですよ。で、そういうのが会社の上層部を占めているんで、やっぱり仕事に関しては。トランスジェンダーは大変だから、男性から女性になるのは、（同じ職場の男性にとっては：筆者註）もうラッキーなんですよね。1人減ったわけですよ」

――そっかそっか。ライバルが1人脱落していったわけだから、「どうぞご勝手に」っていう感じですよね。

「うんうん。で、『女性から男性に』っていったら、その、『ライバルが落ちていったはずやのに、また別枠から来た。しかも、元女や。怖い！』ってなってるわけですよ。

こういう話をね、1人がしだすと『あ、それ思います』って、ノンケさん同士のおっちゃんで喋ってるからね。やっぱり怖いですよね、『女性のほうが能力はあると思う』って言って。まあ、そうはっきり言える人はいいですよね。女性のことを認めていらっしゃるんやなって思うから。でも、やっぱり『そうさせまい』と、上層部には男性がいてしっかりと（男社会を守る仕組みを：筆者註）組み込んであるからね」

――ちょっとタチが悪いですね。会社は表向きには「性差別をしません」って当然謳っているけれど、心の奥底にはやっぱり、「女性に侵食されたくない」っていう意識が、

「あるんです。やっぱり、いろいろね、法令なり何なりで決まったことは一応守らないといけないんで、企業としては企業努力をしないといけないんやけど。個人の中では、やっぱりこういうジェンダーに対しての、なんか、何でしょう、思い込みから始まってるんですけどね、完全にね」

第１０節　Ｌさん

インタビュー日：2018 年 11 月 26 日
インタビュー時間：3 時間 2 分
年齢：50 代

L さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は高校教師である。インタビューは、L さんの仕事後に、喫茶店と居酒屋にて行った。

第１項　Ｌさんの生い立ち

まず、L さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「私は＊＊生まれの＊＊育ちですね。生まれたのが＊＊年です。で、地元の公立の小学校、中学校に行って。＊＊高校、＊＊大学の電子工学、理系。まあ、元理系なんです。で、＊＊年に高校の教員です。その時、現在の学校に赴任して、そのまんま転勤せずにそこにいると。

たぶん子供の頃から、変態とは思ってました。小学生ぐらいから変態やと思ってて。ただ、自分は女性が好きなので『女性が好きな自分は男に違いない』と思っていたんですね。性的指向が女性に向くということですね。で、そのまんま男性として教員になって、男性

として結婚して、男性として子供もできて」

――特にひきこもったとか、いじめられたとかもなく？

「全然ない。まあ、いじめはね、トランスとは関係ないですね。だって、自分のことをトランスと思ってなかったら、分からないじゃないですか。だから、男の子です、友達みんな。高校でも奥手でしたから彼女ができるわけでもなく、合唱クラブにおって、何もないですね。心の中では『女性の身体を獲得したい』という気持ちはありましたけど、それは言うてみたら『翼が欲しい』ぐらいのことなんで、無理なのは分かってましたから、それは『しゃあないわ』と思って、普段は考えないように。普段考えてませんから、そんなこと友達に言うわけもなく、教員に言うわけでもなく、親にも言うわけでもなく。だから別に、そうすると『それはそれで』みたいなね」

――就活の際に直面した困難というのは、何かありますか？

「それは、単純に学力。だって、採用試験に通るかどうかの問題だから。でも、頑張って勉強しました（笑）。

高校時代から、『学校の教員になろう』と思いました。高校時代に思ってなかったら、大学に入って教職課程取らないといけないじゃないですか。工学部、無茶苦茶忙しいんで、教職課程を1年からちゃんと取っていかないと間に合わないんですよ。だから、高校時代にはもう（『学校の教員になろう』と：筆者註）思ってました。だから、私が就職する時点では全くトランスジェンダーとは関係ない」

――じゃあ、L さんのジェンダー、セクシュアリティで何か引っかかってということはない？

「ない。その頃は自分のことを男だと信じてましたから、全然ないです。私らぐらいの年代って、そんなもんでっせ。だって、自分自身が性的マイノリティと思ってないじゃないですか。そのへんがたぶん、同性愛の人たちとずいぶん違うと思うんですね。で、私は女性が好きなので、レズビアンなんですけども。でもそれって、レズビアンって気がつかなかったら自分のことを男やと思っているじゃないですか。自分の中の妄想みたいなのはありますよね。『女の身体を獲得したい、女性になりたい』っていう気持ちはあるけども、実現可能だと思わないですよ。それは、もう置いときゃいいんです。人間誰しも夢はある、それぐらいのことです。

で、子供の頃からずっとキャンプやってましたし、キャンプリーダーをやったりとか。あと、スキーやってるから、スキーのインストラクターやったりとか。で、教員になって

からも、そんなんやったりとかね。あと、人権教育でバリバリ、ホントに教育実践積んでいって。だから、すごい充実してましたよ。今も教員として充実してますよ」

第２項　就職、アイデンティティの獲得、性別移行　―在職トランス―

Ｌさんは、大学卒業後、高校教員になった。そして、職場で教職員劇の台本を書くためにセクシュアリティについて勉強した。その過程で、自らのトランスジェンダーというアイデンティティを獲得するに至った。その後、「在職トランス」として性別移行され、同僚のサポートを得ながら、女性トイレとロッカールームを使用できるようになった。それに関する語りは、以下の通りである。

「そのまんま男性として教員になって、男性として結婚して、男性として子供もできて。で、＊＊年に、ウチの学校で教職員劇をやって。その台本を書く時に、セクシュアリティについての勉強をしなくちゃならなくなった。簡単に言うと、『ホモネタをやれ』とみんなから言われて。じゃあ、ゲイや同性愛についての差別的なことはしたくなかったから、勉強しようと思って。ホントに何もなかった頃なんだけれども、いろいろと調べて。たまたま友達がゲイであるということをカミングアウトしてくれたので、その友達にいろいろと教えてもらって。それで、台本を書くと。で、その過程でトランスジェンダーという存在を知るんですね。そこで自分がトランスジェンダーだと分かって。はじめのうちは『パートタイムでいいか』という感じだったんだけども、＊＊年ぐらいにあるゲイの人から『あなたはトランスジェンダーと言ってるけど、それを実践しているんですか？』と言われて、『ああ、何も実践してねえや』と思ったんで、『じゃあ、フルタイムで生きていこう』と思って、そこから性別を少しずつ変えていった。で、性的指向は女性に向いているので、『自分は女性として女性が好きなんだ、レズビアンだ』ということが、トランスジェンダーというアイデンティティの獲得の部分に、レズビアンだという自認も獲得したということですね。＊＊年ぐらいからぼちぼちと性別を変え始めて、＊＊年ぐらいにもうええやろと思って、学校で『女性トイレとロッカールームを使いたい』と申し出をして。これは全部、女性教職員の集まりをやってもらってね、管理職は一切通してないんです。で、ほとんどの人はOKだったんだけども、ふたりだけ『イヤだ』という人がおったんで、諦めて。で、それから＊＊年ぐらい経って、結局、使えるようになって。現在では、女性のトイレとロッカールームを使っています」

――それまでは、男性のトイレとロッカールーム？

「いや。ロッカールームは男性のところにあったんですけども、使えないんで。私、放送部の顧問なんで、放送室で着替えてたんですよ。だから、荷物だけ男性の自分のロッカー

に置いて、着替えなんかは放送室を使ってましたね。それから、子供たちは全然構わなかったんです。全然、私のことはOKだったんで。まあ、今でもOKなんですけどね」

――トランスというのはバレていて？

「うん、バレていて。だから、女の子も『こっちで着替えたらええやん。一緒に着替えよう』って感じで、全然OKなんですけども。だから、今はもう何の不自由ないです」

――先程おっしゃった、パートタイムからフルタイムに移行されていくあたりは、やっぱり管理職より女性の同僚に先にカミングアウトして？

「いや。カミングアウトしてないです。カミングアウトしたのは後にも先にも、この『女性トイレとロッカールームを使いたい』って言った時だけです。あとは、ネタでいろんなしょうもないこと言いますけど」

――例えばどんなことですか？

「そうやなぁ･･･、みんなで『痛さ比べしようか』って言った時に、ある人は脳外科の手術した経験があって『痛かった』って。女性の教員が『出産して痛かった』とか言うたら、『私も別のこと痛かったよ』みたいなこと言ったら、みんなで爆笑みたいな。そんなしょうもない話はしますけども、別に深刻な話は何もない。

＊＊年にSRS受けたんですけども、＊＊年にはもう既にロッカールーム使えてたんで。だから、SRSは（職場の中では：筆者註）関係ないです」

――っていうことは、＊＊年よりもう少し早いぐらいの段階で、職場のコンセンサスは得られた？

「さっきの、女性の教職員にだけ『女性トイレとロッカールームを使いたい』って申し出をした時に、養護教員の人が私のことをサポートしてくれていたので、その人が音頭を取って『じゃあ、みんな集めるわ』『ありがとう』言うて。で、その時だけはちゃんと話ししましたけど、それ以降は誰にも説明してない。もうそのまんま既得権で。でも、もう別にみんな私が女性トイレ使うって分かってるし、何も（問題は：筆者註）ないですね。

で、もうちょっと遡ると、『女性トイレを使いたい』って言う以前から、私の職員トイレの掃除場所は女性だったんですよ。だから、（その頃は女性トイレを：筆者註）使えない状態やけども、掃除当番に割り当ててくれてたんですよ。私が何も言わなくてもね。そういう実績っていうのを、周りの教職員がたぶん積んでくれてたんですよね。そういう中

で、『（女性トイレを：筆者註）使いたい』って言ってダメになったけども、2年ほどしたら使えるようになるという、そういう感じです」

――それは、ふたりぐらい「イヤだ」って言う教員がいると仰いましたけど、2年後にもう1回言われた時は、「やっぱりいいよ」っていうふうに？

「言ってないです。女性ロッカールームは使えなかったんだけれども、女性休養室は誰も使っていなかったので、そこを使わせてもらって、私のロッカー置いてたんです。で、その女性ロッカールームと女性休養室が別々だったのが、その2年後に女性ロッカールームが女性休養室に移転してきたんですよね。女性ロッカールームが、私の置いている場所に移動することになったんですよ。で、その時に私は『もうこれ以上動くの、イヤや』って言うたんですよ。そしたら、みんな『当然だ』って言って、そのまんま使えるようになりました。その一部の人たちが『イヤだ』って言ったのが、結局、もう持って行き場もないし、『やむを得んな』ということで」

――SRSは職場の中ではすんなりと受け入れられていますか？

「SRSは、そんなのネタにしか言うてない。基本的には言うてないです。ただ、さすがに手術を受けて1週間後ぐらいに学校行ったら、無茶苦茶しんどくて。でも、その時ね、女性たちが『私ら先輩やからね』って。出産経験のある女性たちが『私ら先輩やからな。しんどいことあったら何でも言いや』って言ってくれてましたよね。でも、とくに自分のほうから『SRS受けました』なんて言うこともないんで、全く必要がないから言わない。けども、たまにネタで痛さ比べみたいな時に話をしたり。その程度のことですかね。だから、SRSは純粋に個人的な趣味の問題なんで。学校における仕事とは関係ないので、そんなことは別に言わない。

もちろんね、苦労してないわけじゃないですよ。よく『性別違和を抱えている状態がしんどい』って思われるんだけど、実際は性別を変える時がしんどいんですよね。違和を抱えている状況だと我慢すりゃいいんだけども、変え始めると外界との間に摩擦が生まれてくるのですごくしんどいんです。『テクマクマヤコン』で一気にポンって変わりゃあいいんだけども、私の場合、7年ぐらいかけて性別を変えていってるので、やっぱりオカマ状態があるんですよ。自分の目指すところと現実が乖離している状況っていうのは、距離が遠ければ遠いほど、周りはそこを奇異な目で見ますのでね。そうすると、その奇異な目っていうのは明らかにオカマ呼ばわりに変わってくるわけで、オカマ呼ばわりされている時はしんどかったですよ。でも、それはもう耐えるしかないので。で、そういう時って、私自身も、誰かに理解してもらうとか、そういうことって言えないですね。だから、自分で耐

えるしかない。あと、誰にもカミングアウトしてないんでね。ほぼカミングアウトせずに、勝手に変えていったんで」

――現在いらっしゃる労働環境において直面した困難について教えて下さい。

「ひとつだけあるのが、宿泊を伴う行事の引率はない。昔はやってましたけど。ある時、教頭が『今度、修学旅行の引率行ってくれるか？』って言うたんで、これも性別を変え始めてからですよ。『アンタ、ややこしいこと言うなぁ。知らんで、どうなっても』って言ったら、『かまへん』って言うから、『ホンマやな。知らんで、どうなっても』。で、暫くして『やめて』って（笑）、言われたっていうのがあったかな」

――教頭先生のほうから「やっぱりやめて」って言われた？

「うん、そうそう。担任らから『子供たちに対してどう説明していいか分からん』って言うから、『別に、例えば、2階が男子で3階が女子やったらば、私はその2階と3階の間の踊り場のところに寝たらええやんか』って言うてたんやけども、『いや、そういうわけにいかんやろ』って。ただ、そんな話をしていると『別にいいよ、L先生と一緒の部屋で』みたいな女性教員はおるわけで。まあまあ、混乱したんですよね。で、今は人権関係の人間（人権教育担当教員：筆者註）だということもあって、今は引率には声はかからないですね。

*　で、クラブの合宿は、みんな（クラブの生徒たち：筆者註）、私のことをなんやかんや言って女やと思ってるんで。女風呂も入るし。ただ、生徒とは別々やけど。それは、教員は生徒と一緒に風呂入らへんもんなんで。だから、女の子らに『早よ風呂入れよ。キミらが上がらんと入れへんし』『はいはい』みたいな。そんなんですよ」*

（中略）

「ある時、担任らの名前がずらっと書いてあって、生徒指導なんですけどね、女性教職員の名前に赤が打ってあったんですよ。それ見て、初めはその赤点の意味が分からんかったけど、『あ、女性に赤が打ってあるのか。私がここに入ったら、赤を打つ？　打たへん？』って聞いたら、『あ～、どうやろう･･･』って言ったの。だから、打つわけじゃないけど、打たへんのもおかしいっていう、そういう立場なんですよ」

――で、結局、どうしてもらったんですか？

「*私は担任じゃないから、赤を打つも打たないもないんだけども。つまり、みんな（職場の教職員は、L さんが：筆者註）男じゃないっていうのははっきりしてるんですよ。女かどうかに関して、みんなすっごい迷いながらも、その場その場で、『女か？』『う～ん』、『男か？』『う～ん』。みんな迷いながらみたいですね*」

第３項　LGBT コミュニティとのかかわり　―主催する立場から、関西と関東の違い―

L さんは性別移行後、トランスジェンダー生徒のための交流会などいくつかのコミュニティを作り、主催する立場で関わりを続けている。それ以外にも、様々な団体、コミュニティと幅広く関わりをもつ立場から、関西と関東の当事者団体の違いについても語られた。その部分の語りは、以下の通りである。

――トランスジェンダーのコミュニティの現状について教えて頂けますか？

「*関西と関東は全然違うんですよ。関西ね、けっこうごちゃまぜなんです。例えば、私がトランスジェンダーの生徒の交流会やってますけれども、そこにはゲイの子も来ます。ノンバイナリーの子も来るし、サポーターとして来る中にもゲイの子も来るし。*

で、＊＊（教育関係者向けのコミュニティ：筆者註）をやってるんですけども、これもミックスなんですよ。

それから、私、＊＊（女装コミュニティ：筆者註）っていうコミュニティもやっているんですけども、これもミックスですね。で、唯一トランスっていうのが、ジェンダークリニックに通っている受診者の会をやってます。で、これはさすがにそうなんです（トランスジェンダー当事者のみに限定している：筆者註）けども、でも、そこに来るカップルは同性婚の話に敏感な人は来ますからね」

――いくつかのグループを主催する立場で関わっていらっしゃる？

「*はい、やってます。で、特に、私がやっているグループがミックス系で。ですから、私と一緒にやっている人たちもミックス系なんです。ミックスでやっていくっていうことに心地よさを感じている人たちなんで*」

――ノンケは入れていない？

「*別に来たけりゃ来ればいいんじゃないですか。あんまり気にしてない。私がやっている場所に関してですけども、政治的な獲得目標があるというわけではない。私はどちらかというと、アイデンティティ保障に関心があるので、アイデンティティマニアですから。で*

すから、アイデンティティをどういうふうに保障していくのか、あるいはそこにいかに混乱を持ち込んで、ご自身がアイデンティティについてより深く考えるのか、みたいなことがメインなので。全く政治的ではないんですよ。それは、たぶん学校の教員ということもあるんでしょうね。トランスの生徒交流会なんかは、ホントにね、ノンケの人もたくさんサポーターで入ってくれているし」

――高校生ぐらいの年齢で入ってくるんですか？

「*いや。サポーターは大人です。ただ、来るのは小学生から来ますからね。小学生から卒業生までわさーっと来て、卒業生はいろいろと具体的に子供らと関わってくれたりもするし、その裏方でいろんな買い出し行ったりするのはノンケの子もするし。いろんな子が来ます。ウチ、＊＊年からやってます。もう＊＊年目ですよ。たぶん関東では全然知られてないけども。めちゃめちゃ早いですよ。で、ユースではなく生徒という形で集めているのは、そんなに（当事者団体としては：筆者註）多くはない。*

それで、もう1個ね。関西のトランスジェンダーのコミュニティっていうのは、女装から来てるんですよ。で、特に、関西の女装コミュニティのすごい有名な人がいてはって、その方が、＊＊っていうのを、＊＊年、＊＊年、＊＊年ってやっています。で、その時にはTSの人も来るし、女装者も来るし。そうやって、関西一円のトランスジェンダーがみんな集まるという」

――これは今でも続いている？

「*いや、やってないですね。でも、そういうのがやっぱりコミュニティのベースにあるんですよね。特に、我々ぐらいの上の年代はね。だから、TSと女装者の諍いみたいなのは、今のことは知りませんけども、私らの頃はそこの諍いはさほど強くないですね*」

――でも、女装趣味の方と実際リアルライフで性別移行された方は本来別物ですよね？

「*そんなことないでしょ。私、パートタイムとフルタイムっていう分け方をするならば、パートタイムのほうがよっぽど人間性はいいと思っているんです*」

――なぜですか？

「*だって、我慢できるから。フルタイムって、我慢できないからやっちゃっている。そう考えるとね、パートタイムのほうが人間性はすごい。ちゃんと分けてものを考えられる人たちですね*」

――フルタイムできちゃう人のほうが偉いのかなって思ってましたけど、そういうことでもないのか。

「*いや～、そうは思わんけどなぁ。フルタイムで変なヤツ、いっぱいいますよ。そう考えると、パートタイムの人ってすごいですよね。現実をわきまえているし、それなりの経済力も必要ですからね。それが可能な人たちだから、やっぱりすごいですね*」

――なるほど。トランスジェンダーのコミュニティというか、セクシュアル・マイノリティのコミュニティの状況って、関東と関西はやっぱりけっこう違いますね。

「*うん。私がやっているコミュニティは、ダラダラのミックス系。ほとんど酒飲みながらやってるんで、宴会ですわ、全部。だから、もうグダグダやし。まあ、そこで、互いに自分の日常の中にある様々なことを話し合うことを通して、自分を理解したり、あるいは、自分の置かれている状況を客観的に捉えてみたり、そこで解決策を見つけてみたり、そんなことやってる。これはもともと、＊＊に女装コミュニティがない。みんな、＊＊行って＊＊とか＊＊とかに行くと。でも、大学生としては金がかかる。交通費もかかるし、高いから、気軽に女装できるコミュニティを作っちゃえということで作ったのが、＊＊なんです。で、＊＊年当時、私の先代の＊＊さんとやっていたんだけれども、＊＊さんから引き継いで、＊＊年近くやってるんですよ。日本ではかなり古いコミュニティですよね。*

*　で、ここは、他のところと違うのは、＊＊はまさに埼玉医科大学の医療を正当化するためと、あとトランスジェンダー・ポリティクスを打ち出していくというポリティカルなこと。かたや、＊＊は、かなり運動的な部分と自助グループ的なんだけども、＊＊は単なる宴会なんですよ。『女装して宴会しようぜ』という、本当に＊＊の学生文化の中から出てきたコミュニティですね。*

*　参加資格は『セクハラ厳禁』。トラニーチェイサーという、いわゆる女装好きの男性がたまにいるんですよ。そういうのがたまに来て、やたらとお触りするという。トランス女性としては、男性好きなトランス女性の場合には、悪い気はしないんですよね。よほどイヤじゃなかったら、悪い気はしない。そうすると、そこでイチャイチャし始める。そうするとね、周りはすげー不愉快なんですよ。だから、そういう場所ちゃうでしょ、ここは*」

――オマエらだけ、ホテルでも行けよっていう。

「*行ってこいよ、ここでやるな。っていうことで『セクハラ厳禁』*」

第４項　戸籍制度　―「戸籍制度を叩き潰すまで性別変更しない」―

Ｌさんは、性別適合手術を受けた後も、戸籍上の性別を変更していない。その理由について、以下のように語られた。その部分の語りは、以下の通りである。

――今、戸籍上の性別はどっちになっているんですか？

「*男のままですよ。変える気はない*」

――Ｌさんの戸籍上の性別を男性から女性に変えちゃうと、結婚が成立しなくなっちゃうからですか？

「*ううん。人生、ネタは１個必要！*」

――ははは（笑）。関西人ですね～！

「*これで、戸籍を女に変えてしもうたら、不便が何もなくなるじゃないですか。不便もあったほうがええですよ。もうこの歳になるとね、もうどうでもよくなってくるから。でも、なんていうんやろな、当たり前の人生はおもろない。人生はネタがあったほうがいいんで。*

で、もうひとつは、戸籍制度を叩き潰すまでは、私は性別変更しない。だって、戸籍制度で苦しんでいる人が何万と、外国人であるとか、部落であるとか、たくさんいるわけですよね」

――関東に住んでいると、部落は知識としては知っているんですけど、あまり身近な存在ではないんですよね。

「*私にとって部落は身近な存在で。『ごめん、自分だけそっち行くわ』って言えませんやん*」

第５項　大学院生として　―「当事者をしんどい目にさせているのは社会制度の問題」―

Ｌさんは、高校教員としての仕事を続けながら、現在、大学院博士後期課程の学生として研究にも携わっている。その部分の語りは、以下の通りである。

「*＊＊年から＊＊年まで現職教員を続けながら、＊＊大学教育学研究科に行って。教育学修士ですね。で、その時のテーマが、トランスジェンダーの子供たちのことですね。で、その後、＊＊年から、＊＊大学の博士後期課程に在籍しています*」

――教育の研究をされているのは、生徒にどうやって接するかっていう研究ですか？

「*いや。今は完全に社会学ですが、やってることは『トランスジェンダー生徒の学校経験』というテーマです。トランスジェンダーの子供たちをしんどい目にさせているのは学校の問題だ。だいたい、トランスジェンダーに焦点を当てるじゃないですか。トランスジェンダーの子供たちの苦悩に焦点を当てる人が多いんだけど、私は学校の制度に焦点を当てて。だから、『この制度の問題だ』っていう話ですね。で、さらに、＊＊のほうは今度は、ジェンダーっていうのは学校制度が作るわけじゃなくてね、友達関係、人間関係、子供たちの相互行為の中でジェンダーって作られますから、『それが構築的に作られるんだよ』っていう話をやろうかなと*」

第６項　非当事者が抱いている恐れについて　―「何を恐れているのかさっぱり分からない」―

Ｌさんは、セクシュアル・マイノリティの非当事者が当事者に対して抱いている恐れについて、「ハッピーな人が増えるだけなのに、何を恐れているのかさっぱり分からない」と語られた。その部分の語りは、以下の通りである。

「*いつも言われるのが、トランス女性のトイレ問題とか、めっちゃ言うんやけども、ウチら性犯罪するために入ってるんじゃないから、おしっこするために入ってるのに、なんでそれがね犯罪に結びつくのかさっぱり分からん。で、『そんなん、トランスかどうか分からんじゃないか。女装者かもしれん』って言うたら、別に女性だってその気になれば盗撮をして、それをどこかに売るっていうことは可能だから、全ての人間を、もちろん犯罪予備軍として扱わなくちゃいけない時もあるし、もっと言ったら、トランスであるかどうかの証明なんていうのをトランスジェンダーだけが求められることはあり得ない*」

――言われてみれば、確かに。

「*例えば、ID、書類上の性別を求めるならば、それはトランスだけじゃなくって、全ての人間ですよね。身体の性別も、身体の形状を問うならば、それは全ての人間に対して行うとかね。そんな社会が本当にいいんですか？　とは思ってます。私は、そんな社会はイヤやな。少なくとも迷惑をかけないならば、別に大丈夫でしょ。*

だから、それを何が阻んでるねん？　とは思います。何が怖いねん？　と思うんですよ。シスジェンダーの人々がジェンダー・アイデンティティに従った扱いを受けているのと同等に、トランスジェンダーもジェンダー・アイデンティティに従った扱いをしろと言って

いるだけのことで、そのことで一体何をビビっているのかさっぱり分からない。できない根拠は一体何なんだ。さっぱり分からない。

そこで、『性暴力』っていう話を仮に持ち出すならば、これ絶対に持ち出されかねないけども、同性愛者にだってそういう話はあるし、別にそれは同性愛者だけじゃなくて、同性間の性行為っていうのは別に同性愛者じゃなくたってあるし。『じゃあ、それは全ての人間に拡張されるじゃないか』っていう話になるんで。だから、もしも『性暴力』っていう話を、トランスジェンダーを性暴力予備軍と見なすならば、『そんなものすごい少数の人間の話じゃなくって･･･』って話になっちゃうんですよ。『ホントにそれはそれでいいの？』って思う。

同性婚に関して言ったら、ハッピーな人が増えるだけやのになんであかんねん。さっぱり分からへん。例えば、婚姻関係を持って安定した就労が可能になったらば、社会全体としてはそっちのほうが有利に働くはずなのに、なんで、さっぱり分からへん。何を恐れているのかさっぱり分からへん。ホントに分からないんですよ、セクシュアリティをめぐる話でね、いわゆるシスジェンダーの異性愛者の人が何を恐れているのかさっぱり分からない。あなた（シスジェンダーの異性愛者：筆者註）には何の関係もないと思ってるんですよ。だから、実際、ウチの学校で、私のことを女性として認める人もたくさんいるんです。で、その人らは、そのことで私から何かデメリットがあるかというと、たぶんない。単にそんだけ（笑）」

第１１節　Ｍさん

インタビュー日：2018 年 12 月 3 日
インタビュー時間：4 時間 27 分
年齢：60 代

M さんは、出生時の性別は男性であったが、現在は女性として生活されている。職業は、新聞社勤務を経て、お寺の住職である。M さんが住職をされているお寺に伺って、行った。

第１項　Ｍさんの生い立ち

まず、M さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「生まれの時の性別は戸籍上、男やったということですね。自分が人と違うなと気づいたのが小学校低学年の時です。普通、男の子ってサッカーとか野球とかやりますよね。で、そういう仲間には入っていけなかった、なかなかね。で、ままごとだとかそういうほうが好きだけども、女の子は仲間に入れてくれなかった。そういう中で、引きこもり的になっちゃって、本ばっかり読んでるような子だったらしいです。いわゆる物語の世界の中に入

り込んでいっていうような感じの子だったようです。だから、勉強はできたんよね、本を読んでたから。小学校5年の頃に、母親の留守に母親のワンピースを隠れて着て、『女の子になりたかった』っていうのもその頃からあって。で、それを近所のおばさんに見つかって、母に告げ口されて、後で叱られた。で、その時に今度は母が父にやっぱりそういうことを言うたらしい。そうすると、今度は父親からこっぴどく。父親は大正生まれの人だったので、いわゆる昔かたぎの人だったので、『男の子は男の子らしく』というあれでしたので殴る蹴るの暴力を受けて、今でいうDVですね。で、『もう親には言えないな』と、その時子供心に思って。そこからはずっと、そんなことがあったんで、家にいるのが辛くなったんですね。学校の図書館で本読んだりしてて、勉強が遅くなったとかいうフリをして、できるだけ家には遅く帰るようにしてた。そんな感じでしたね。

で、中学校でいわゆる進学校と言われるところへ入りまして、中学、高校と＊＊市内の進学校に行きました。で、そこから電車通学が始まって、やっぱり学校での生活は同じで、男の子の仲間にも女の子にも入れないっていうふうな感じで、勉強ばっかりしてるような子やったんですね。それで、家にも帰りたくないので、いわゆる不良っていうのかな、喫茶店で夜遅くまで居てたりというふうな感じが多かったですね。で、そんな中で、ある時、女性週刊誌にカルーセル麻紀さんのことが出てて、『あっ、こんなことができるんだ！』っていうことで、モロッコで性転換手術を受けたっていう記事が女性週刊誌に出てて。『あっ、こういうふうになりたい！』って思ったんですね。で、学校では男の子は丸坊主で学生服っていうのが嫌で嫌で仕方なかったんですけども、当時はまだ性同一性障害なんていう言葉すら無い時代でしょ。で、結局、悶々としていた中で、その週刊誌の記事だったので、それはまあひとつの光に見えましたね。でも、なかなかそれはできないですよね、家でもできないし。また、『その手のお店』っていうのがなかなかなかった時代ですし。これ、いつやったかな･･･。ああそう、中学校の時に、スーパーでスカートを買ってきてそれを隠れて履いていたみたいな時期です。中学生時代ぐらいからね。で、そんな感じで中学、高校と過ごして。で、いわゆる小学校の時と違って、男と女と別々の授業になってくるじゃないですか。保健体育だとか技術家庭だとか。で、嫌々男のグループに入れられてるんですけども、それがイヤだったけどもどうしようもなかった。学生服がイヤで、女子の制服をホントは着たかったんだけど、それもできない。でも、将来は『カルーセル麻紀みたいになるんだ！』っていうふうな感じで、見てました。それは、いわゆる青春時代、恋愛っていうんですかね、いわゆる思春期っていうのはなかった。まだ同性愛みたいなことも知らないし。で、だからって、女の子が好きになるっていうようなことはなかったし。だけど、男の子を愛するっていうようなこともなかったんですよ。だから、同性愛とはまた違うのね。性同一性障害なんだけど、そういうことが今になったら分かるけど、子供の頃はそういうのが分からなかったのでね。そうやって過ごしていた。そして、もうとにかく親元から離れたくて離れたくて仕方がなかった。親元を離れたい、ひとりで生活がしたい

ということで、とにかく＊＊へ出ました。で、＊＊大学に入学して、アパート生活が始まったわけです。

で、スーパーで女性の下着を買ったりっていうふうなことで。だけど、学校でまだカミングアウトするなんて勇気はなかったし、またそういう時代じゃなかったので、家で女装してっていうような生活をしてて。で、その格好で買い物に行ったりすると、『お姉ちゃん』とか『奥さん』とかっていうふうに声がかけられるのが嬉しかった。で、そのうちにいわゆる女装クラブっていわれるようなところとか、ゲイバー･･･、ゲイバーって言っても、今のゲイバーとは違うんよ。男の人が女の格好をして接客するお店、店員さんが女装してというお店を、昔はゲイバーって言ってたの。今、ゲイバーって言ったら、同性愛の男の人が集まるお店のこと言うんで、ちょっと定義が違うんだけどもね。当時は女装した店員さんが居てるお店。で、そういうところに行くと、『仲間がいる』っていう感じじゃないですか。で、親しくなったお店ではアルバイトさせてもらったりしながら、だんだんそこにハマっていったのね、仲間がいて。だけど、勉強のほうでは、こんなこと言うたら＊＊大学さんに悪いんやけども、ちょっと飽き足らなかった。で、＊＊を再受験して入り直した形になるんですよね」

――その間は予備校に通ったりとか？

「うん。親に隠れて予備校通ってました。＊＊大学には、もう半年ぐらいで行かなくなって、予備校通いを始めました。だから、 親は＊＊大学に行っているものだとばっかり思ってる。そんな感じで、＊＊に合格して親にも言ったりしたけども。まあね。とにかく親とはほとんど没交渉なので。とりあえず＊＊大学の分を含めて4年分は学費出してくれたけど、私、だから、一浪一留なんよ。＊＊に5年行ってたからね。そんで、結局4年で仕送り止められたんでね。あとは、そういうお店でのバイトとか、そんなんで（経済的に自活して：筆者註）やってました。でも、もう、この世界･･･。だから、それがよかったらそれを商売にしていたと思う。だけど、『なんか違うな』っていう･･･。というところで、『この世界にあまり長くいてもいけないな』というようなことで、＊＊新聞に男として就職したわけですよ」

第２項　就職　―「望まない性別」で出勤する苦しみ―

Mさんは、大学卒業後、新聞社に就職した。しかし、Mさんにとっては「男性の格好」で出勤することは苦痛であった。それに関する語りは、以下の通りである。

「その頃まだ、今でこそね、性同一性障害を表にしてっていうようなことができるようになってきた時代ですけども、その頃はもうとてもとてもそういうことすら考えられなかった時代なので。当時の人は、皆そうやと思いますよ。で、結局、女性として生きていこう

としたら、そういう世界しかなかった。いわゆる水商売。そういうところしか勤め先がなかったね。まともな会社は取り上げないわね、そういうところへ就職できないのよね。そういう例なんてなかったし、まだまだ。世間が全然。だから、『ニューハーフ』とか言って取り上げ始めていたけども、ベティのママだとかね。けっこうあの頃の、今で言ったらIKKOだとかマツコだとかってああいうふうになってくるんだろうけど、あの頃それを売りにしていた芸能人はカルーセル麻紀さん以外にも出始めていましたよね。けど、もういわゆるそういう世界で生きていくしかない」

――夜の水商売の世界しかない。

「はい。しかないっていう時代だった。で、もちろん、かと言って、男としてっていうあれじゃないんで、『マスコミだったらちょっとはマシかいね？』と思って、新聞社に就職することになったということですね。ところが、入ってみたら新聞社なんて、男社会ですよ。全然開けてない。公務員とか銀行員とか、そういう『お堅い仕事』に就くつもり全くなかったし、就けないと思っていた。だって、そういうところで女装して出勤するなんて、考えられへんやん。だけど、新聞社も一緒でした、結局はね。で、二重生活が始まるわけですよ。昼間は男の格好して仕事をして、夜はその手のお店に遊びに行くっていう。休みの日にわざわざ＊＊まで遊びに来たりしてました。

その後、＊＊に転勤になるんですよ。で、＊＊に転勤になったら、そういう行きつけのお店ができてくるよね。で、たまには＊＊まで遊びに行ったりっていうようなことをしてて。そして、＊＊に家を購入しました。一生独身でいるっていうことが前提ですから、結婚するなんて考えてもいなかったから。というようなことで、一生独身の住処をというようなことで、家を購入したわけです。だから、会社には全然隠してたし。それから、家族とは没交渉です、ほとんど。

そして、＊＊への転勤が予想通りあって、＊＊部の配属になった。＊＊部ってお固いとこやから、スーツにネクタイというのが強制されるわけよ。それまで、＊＊回りとかしてた時は、割とどんな恰好でも良かったので。私、とにかく、ネクタイが嫌いでね。ネクタイって、男の象徴みたいな感じじゃないですか。ということがあって、いわゆる中性的な恰好をしてたのね、ずっと。 T シャツにジーパンとか。実は女物を着ていたんだけども、パッと見は男に見えるような感じっていうような、そんな感じね。男性でも女性でもあるような恰好。そんな恰好で会社通ってました。＊＊回りの時はそれで済んでたんやけども、今度はそうはいかんので。それでもう、非常に苦痛だったですね、その頃がね。男を演じるのが。だけど、まだまだそれが理解される社会じゃないので、男を演じ続けなければいけなかった。まだそんな時代でしたよね。まだLGBTなんて言葉、なかったよ。

だから、私らの世代の人ってほとんどそうよ。私ら、友達何人かいてるけど、自分の性を偽って、MTFの人たちね、会社では男を演じ続けて、それで仕事をしてる。そして、そ

の手のお店、女装バーとかそういうようなところで自分を解放するっていうような、ほとんどの方がそうだったと思う」

第３項　仏教との出会い　―男女の区別のない白装束にやすらぎを覚える―

M さんは、会社の慰安旅行で仏教と出会い、男女の区別のない白装束にやすらぎを覚えるようになり、そこに居場所を見出していった。それに関する語りは、以下の通りである。

「で、そんな中で、仏縁を頂いたんですよ。＊＊で労働組合の執行委員やってたんです。今やったら批判されるんやろうけど、当時はまだ春闘の打ち上げと称して、慰安旅行行ってたの。その時に、＊＊県の＊＊に慰安旅行に行ったんですよ。西国三十三か所。全然そういうことを知らずに観光旅行で、＊＊とか見に行ったらそのお寺があって。それで、西国三十三ヶ所巡礼っていうのがあるのを知ったんですよ。それまで知らんかった。それで、スタンプラリーのつもりでお寺参りを始めた。お寺巡りをね。

で、当時、＊＊部から＊＊部に移っていたので、そしたら内勤じゃないですか。ということは、もうネクタイせんでもいいのよね。というのがラクだったですね。で、当時はまだ活版印刷の時代なんで、インクまみれになるんよ。なので、きれいな服では仕事できないの。汚れていいような恰好での仕事だったので、まさにＴシャツにジーパンというスタイルが当たり前の部署やったのね。今はコンピュータの画面で編集するけども、当時はまだそんな時代だったんです。で、夜勤職場なんですよ。夕方、記者から原稿が上がってきて、最終的に工場へ渡す。だから、仕事終わりが午前２時。私らの仕事はだいたい午前２時には終わってたんやけども。そんな職場なんですよ。なので、泊まり明け勤務っていう勤務形態だったので、けっこう昼間時間空いてるんよ。ふとお寺回りするには好都合なのよ。というふうな職場になっていたので、なんと西国三十三箇所を３か月で回っちゃった」

――じゃ、3 日にひとつくらい行った計算ですね。

「それができたのよ。そういう職場なので、あっという間に回っちゃったのね。で、まあスタンプラリーです、言うてみたら。で、それが面白かったので、お寺回りにハマっていって。じゃ、他にないかなって探してたら、今度は四国八十八ヶ所があるっていうのを知ったわけですよ。そしたら、今度そっち行ってみようっていうようなことで、四国八十八か所を回り始めた。で、まだ明石大橋が架かっていなかったので、四国は遠かったのね。なので、八十八ヶ所回るのに、足かけ２年かかりました。けど、２年で回っちゃったけどね。そんなことから、だんだんとお寺巡りが面白くなってきた。それで、そこから後は、今度はいろんなね、似たような礼所を探してね、近畿三十六不動だとか。そういう礼所がいくつかあるんですよ。そういうところを次々回り始めて。まあ、いわゆる巡礼オタクみたいになってきたのね。

それで、1995年1月17日に阪神淡路大震災。家が全壊しました」

――ご購入された家というのは、戸建ての家だったんですか？

「*戸建ての家です。それが全壊。で、たまたま･･･。たまに、母の家、実家の方へ行ったりしてたんですよ。それで、ちょっと母に頼まれ物の買い物をして、実家に泊まっていて、命だけ助かった*」

――お母様の実家？

「*うん。＊＊にあった。そこに居てて、命は助かったという状況だったんです。震災後3ヶ月くらいに、瓦礫の下から物を取り出す作業してたんですよ。そしたら、その瓦礫の下から四国八十八ヶ所とか西国三十三ヶ所の御朱印帳が出てきたのね。で、それがもうボロボロになって出てきて、その時にガーンと雷に打たれたようなショックを受けたんです。『あ、これが身代わりになって命を助けてくださったんだ』っていうことで、『お礼参りに行かないと！』っていうことで。で、まず四国へお礼参りに行って、その後西国のお礼参りをしたんですけども、そこからハマっていたのね。っていうのは、お遍路さんの装束、白装束は、男も女もないんですよ。一種、コスプレですわ。四国を『死の国』と書いてね、いったんあの世へ行って、それからまた現実の世界へ戻ってくる。だから、お遍路さんの白装束っていうのは、いわゆる、死んだ時にお棺に入れる装束なんですよ*」

――ご遺体に着せるものと同じもの？

「*同じものなんです。だから、一種のコスプレなんですよ。で、それには男物も女物もないわけ。で、その、性別を気にする必要のない場所が四国だったわけ。それがもう、非常に心のやすらぎになってね。ある時に、お遍路宿っていう民宿みたいな宿があるんですよ。で、お遍路する時にそういうところに泊まるのね。で、そういうところって、部屋で食べるんじゃなくて、食堂行って食べるので、お遍路さんが食事の時、集まるわけよ。それで、そんな時にある人から『お姉ちゃん、学生？』って聞かれたんよね。そんなねぇ、ええ年したの捕まえて『学生？』なんて言うのもあれやけど、年寄りから見たら若く見えたんやろね。で、『お姉ちゃん』と言われたのがすごく嬉しかったわけ。リップクリームとか塗ってたぐらいの薄化粧だったけども、もうそういうのが当たり前になってたんで、私自身が。会社にも隠れて薄化粧して行ってたぐらいですからね。だんだん『アイツ変やで』って陰では言われてただろうけどね。それが、『女に見えた』っていうのが嬉しくて、っていうのもあって、だんだんそっちの世界にはまっていったわけ*」

第４項　大学院進学と退職　―自ら活路を見出す―

その後、M さんはお遍路の仲間から誘いを受け、仏教を深く研究するために大学院へ進学することになった。そして、居心地の悪くなった会社を退職するに至った。いわば、人生のターニングポイントであり、M さんが自ら活路を見出した時期である。この時期に関する語りは、以下の通りである。

「だけど、会社ではだんだん『やっぱりアイツ変やで』っていうことになってきて、いわゆるいじめみたいな感じで、今で言うたらパワハラとかっていう、だんだん居づらくなってきたんよね。そういう時に、お遍路のガイド役、先達っていう制度があるんだけれども、先達には４回回ったらなれるんですよ。そうすると今度、そうやって回っていると今度またそういう先達仲間っていうのかな、お遍路仲間が出来てくるんですよ。

で、ある先達さんから『今度、＊＊大学の大学院の社会人コースを一緒に受けてみないか？』って誘われたんですね。普通、修士課程はフルタイムの通学で２年間で終了するじゃないですか。それを、週にいっぺんだけ学校へ行って、その代わり８年までかけられるっていうコースなんですね。で、それだったら会社勤めながらでも行けるかっていう感じで誘われるがまま受験して、それで、合格しますわな。社会人（入試：筆者註）って、難しい試験ないんですよ。小論文と面接だけやから。それで、もう書くほうはプロやから。小論文なんかおちゃのこさいさいやし。で、合格して、週一回、＊＊から＊＊に通うようになったわけ」

――ちょっと遠いですね。

「うん。片道３時間、往復６時間かかりました。だから、始発電車で行って、ギリギリ１時間目の授業に間に合って。で、授業終わって帰ってきたら、もうほとんど終電車。そんな通学をしてました。だけど、週１回＊＊に行くのが楽しくて仕方なかったのね。やっぱり、何もかも忘れて、会社でのしがらみも何も忘れて、勉強できるわけでしょ。それで、しかも、性別を気にしなくて済む。学生やからどんな格好して行ってもええわね。当然、私服でね。スカートこそ履かなかったけども、それでも、もうほとんど女物の恰好で行ってました。

で、そうこうしているうちに、やっぱり会社での軋轢がね、１年目の時の上司は理解があったんで同じ曜日に休みを取ることを配慮してくれたんですよ。ところが、上司が変わって２年目になって、『そんなもん（同じ曜日に休みを取ること：筆者註）できひん』って言われて、学校通えなくなったんですよね。だいたいあの頃は４勤１休だったんで、４日行って１日休みで、土日は関係ないですからね、ローテーションの職場なので。なので、そんなような勤務形態だったので、たまたまその曜日が（通学日に：筆者註）当たる時は、（大学院に：筆者註）行けましたけど、もうほとんど通えない状態になってきて。しかも、

会社の中でパワハラがあって。で、ちょうどその時に希望退職制度をやってましてね。で、割増退職金をもらって、返済に充てればローンが払える計算ができた。退職金で。割増退職金でね。そしたら『もう会社辞めたれ』ということになって。で、会社を辞めたのが＊＊年。

それで、結局、学生になっちゃったわけですよ。専業の学生に。そしたら、もう隠す必要ないよね。で、しかも、社会に性同一性障害っていう言葉が知られるようになってきて、国内で合法的に性別適合手術が受けられるようになって。確か、埼玉医大が最初でした」

第５項　性別移行、「性的マイノリティのための駆け込み寺」建立

M さんは退職後、専業の大学院学生となり、仏教の研究に専念された。そして、ほぼ同時期に性別適合手術を受け、女性になった。その後、大学院へ女子トイレの使用を願い出るのみならず、僧籍簿の性別変更についても理解者の協力を得て乗り越えた。その後、僧侶の資格を取得したが、「尼僧は敬遠される」という目に遭ってしまった。これは、トランスジェンダー差別というよりも、女性差別と言えるだろう。そのような経験の後、M さんは「性的マイノリティのための駆け込み寺」として自らお寺を建立された。その時期に関する語りは、以下の通りである。

「それまでは、外国でやるかヤミでやるしかなかった。で、外的環境が整って、戸籍が変えられるように法律改正がされた、特例法ができてね。というようなことで、もう隠すことないし。

ということで、＊＊年から＊＊大学病院へ通い始めました。で、まずは、本当にそうかどうか（性同一性障害かどうか：筆者註）っていうテストから始まるのね。それから、ホルモン投与して頂けるまで１年かかるわけよ、いろんなテストされて。で、セカンドオピニオンで別の病院も受診しないかんって、何か色々あって。そういう手続きやなんやかんやで、結局『OK、ゴーサイン』 が出るのが、１年くらいかかるよね。大学の倫理委員会にかけて。そして、ホルモン投与が始まって。だから、１年後ぐらいですわ。＊＊年頃ですわ。で、＊＊年に手術を受けたんですね。だから、それくらいかかるんよ。

で、その１年後くらいに『OK』が出た時に、もう診断書を発行してくれるので、その診断書を持って大学当局に、初めてカミングアウトした。『こういうことで、男から女になるための治療を受けてます。なので、女子トイレを使わせて下さい』ということですね。で、もう誰にも隠す必要がないので、女装で通学してましたし。

男のお坊さんは完全に剃髪しなきゃいけないけども、女性は有髪が認められるんですよ。そういうこともあって、とにかく私も女性なんで、『そう認めて下さい』って、まだ戸籍は変わってない時ですけどね、『女性に移行中なので』ということで、大学当局にいろんな配慮を求める意味で。

最初は戸惑ったみたいですよ。他の大学の事例とか色々調べたら、もうすでに他の大学ではそういうのが認められてる例っていうのがあるから、という。もちろん＊＊大学では初めてのケースですから、よその大学の事例を調べたみたいです。それで、色々あったんやろうけども、とにかく許可して頂きました。で、もう、そっから女性としての生活がやっと始まって。だから、もう＊＊超えてましたよ。

ということで、＊＊年に手術受けて、家庭裁判所に申し出て。もう大学の診断書をつけて申し出たら、すぐ許可が下りる、戸籍の変更の許可が下りるように、もう（日本社会が：筆者註）なってましたからね。初めの頃は皆さん苦労したみたいやけども、もう道筋はできてたので、特例法ができてるので。

それで、今度は『戸籍が変更できました』というのを本山に持って行って、僧籍簿の性別変更を申し立てたわけです。これはもう初めてのケースです。そりゃ、本山、戸惑ったと思います。だって、僧籍簿の性別変更なんか前例がないから」

――僧籍簿？

「*お坊さんの戸籍みたいなもんですわ、言うてみたら。各本山が持ってるわけよ。で、そこには、やっぱり男の僧侶であるか尼僧であるかっていうことも記載されてるわけですよ。で、それの性別変更っていうのは、もう初めてのケースだったんですよね。で、それを申し立てて、たまたまその時の一番偉いさんが、「分かった、わしに任せろ」ということで、そのトップの決断で、住所変更の届けをするときの用紙があるんですよ。そういう記載事項変更届っていう書類があるわけですよ。で、記載事項変更届の欄に「旧男、新女。事由：性別」という、まさに「旧住所、新住所」というふうな、本来そう書く欄に性別を書いて、その届でいけるようにしてくれた」*

――ああ～、すごい話。

「*すごい。もうトップの判断でね。まあまあ、そういうことですわ。記載事項変更するんだから、別に規則そのものを変えなくても、住所や苗字が変わったのと同じ届け用紙でできるようにしてくれたんですよ。これがありがたかった。うん。*

で、私が門戸を開いたから、後に続く人が出てきてます。なので、今、＊＊宗はこの事に関しては、『開けてる』というふうに見られてます。私が扉を開けちゃったので（笑）。その時のトップが偉かったということなんです。まあ、そういうことで、結局、今に至るわけです。

で、僧侶になったら、お寺を持って住職になってやっと一人前なんですね。それまではあくまでもどこかのお寺に勤めている修行僧になるわけですね。住職になれる資格を頂いたのが＊＊年やから、西暦で言うたら＊＊年かな、に住職になる資格を得た。で、それ以

来『お寺持ちたい』とずっと思い続けてきたんだけども、なかなかご縁がなかった。地方の過疎地には空き寺がいっぱいあります。で、なんで空いているか、なんで無人になっているかっていうと、そこじゃ食べていけないから行く人いないわけじゃないですか。なのに、『若い男のお坊さんが来て欲しい』と、こうくるわけですよね。若い男のお坊さんが、そんな食べていかれないところ行かないです。『年寄りの尼さんなんか、来て要らん』とこうくるわけです。『ましてや性転換した人なんて』って、そういうことになるわね。つまり、尼僧であるだけで嫌われるんです。尼さん、女であるというだけで嫌われるんです。で、それも、若い人やったらまた別やろうけどね。年寄りが隠居するようなお寺･･･。だって、そんな田舎の寺がそういう人しか行けへんやない。なんやけどそれを嫌うっていうのは、そりゃそうですよね。せっかく人（新しい住職さん：筆者註）来たと思っても、また数年で亡くなって、またおらんようになるっていう不安ももちろんあるやろうからね。『若い人に来て欲しい』っていうのは、そりゃあるやろうけども。そういうのでご縁が頂けずに、空いている寺何遍か訪ねて行きました。けど、全然ご縁が頂けずに。

で、私も僧侶になった当初から、自分が若いころ苦しんでいた、誰にも相談できずに親にすら相談できない、ましてや先生や友達なんかにも相談できへんという、そういう苦しみずっと抱えてきたわけじゃないですか。だから、そういう人たちの相談をしてあげられるような僧侶になりたい、そういう人たちが相談に来れるようなお寺を作りたいっていう気持ちはずっと持っていたんですね。だけど、お寺すら持てないからそれどころじゃない。

もう空き寺に入れないのであれば新しく作るしかないっていうことで、思い切って新しいお寺を作ろうということで動き始めたんですよ。そして、住職になりました」

――なるほど。それで、現在に至ると。

「そんなことで、ここまでこれた。で、性的マイノリティの方々が相談に来れる場所ということで（このお寺を建てた：筆者註）。ただ、まだ宣伝不足でなかなか来てくれない（笑）。どないして宣伝したらええんかね。ネットでホームページ作ってたりしても、なかなかね。だからまあ、自分がやっぱり若い頃苦しんだことを、僧侶っていうのは人様のためにやらせていただくのが仕事ですから、気軽に相談に来て頂けるっていう場所にしていくと。

今後メインにしていきたいのが、基本的に私たちは生殖機能を取り去っているから子供は産まれません。で、同性愛の人も基本的には子供できない。なので、死んだあとお祀りする子孫がいないケースがほとんどです。そういう人たちが安心して旅立てるための永代供養をしますよって言うのがひとつ。それから、戒名っていうのは、男と女で違うんですね。普通のお寺に行くと、戸籍上の性別で戒名をつけられちゃう。死んでまで家族の意向で、望まない性での戒名をつけられる。まあ、そりゃ、死ぬまで隠し続けて生きてきたら、当然そうなりますよね。なので、そうではなくて、生前に自分の望む性での戒名をつけてあげましょうと。生前予約でね」

――あ、生前につけられる？

「*いや、戒名というのは、『仏様の弟子になった』ということで生きてるうちにつけるのが本来の戒名ですよ。みんな『死んだらつけるもん』と思っているかもしれないけど、違う。仏弟子になった証としてお師匠さんからつけてもらうのが戒名です。だから、私の名前もお師匠さんから頂いた戒名です*」

――へぇ～、てっきり死んだらつくものが戒名なのかと。

「*そうじゃないんです。お坊さんはみんなお師匠さんから戒名もらって、それを使っています。で、一般の方でも仏弟子になって頂ければ、戒名を授けます。実際、そうやって授けているお寺いっぱいあります。なんやけども、ウチの場合は自分の望む性での戒名をつけてあげましょうと。だから、悩み相談、永代供養、戒名、それからもうひとつが同性カップルの結婚式。仏教でも仏前結婚式ってあるんですよね。同性カップルの方に仏さんの前で愛の誓いをして頂くという式を挙げるようにしたいなとは思ってます。もちろん、同性カップルだけじゃなくて一般の方も引き受けますよ*」

――今、仰ったことが今後の展望ですね。

「*ですね*」

第１２節　Ｎさん

インタビュー日：2018 年 12 月 4 日
インタビュー時間：1 時間 36 分
年齢：50 代

N さんは、出生時の性別は女性であったが、現在は男性として生活されている。職業は舞台照明、カメラマンなどを経て、現在はテレビ番組制作に携わっている。インタビューは、N さんの勤務先のカフェに伺い、行った。

第１項　Ｎさんの生い立ち

まず、N さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*元々、生まれた時は女性でした。今は、男性として生活してますけれども。子供の頃か*

ら違和感はありましたね。特に幼稚園のプールはすごいイヤでした。プールで、最後みんな裸になって泳ぐんですよ。『じゃ、みんな裸になって～』みたいな。『まず男の子、女の子』みたいな感じだったかな。もうとにかくプールで裸になったりするのがすごい嫌で。ちょっとよく分かんなかったけど、その時は。女の子であるっていうのは、なんか嫌な感じはしました。で、意識したのは、七五三の時に着物着せられて、それは本当に嫌だったんですね。『ああ、これで女の子になんなきゃいけないんだ』と思ったのが強烈な違和感で、大泣きしたことを覚えています。なんで泣いてるのかも分かってなかったですし。僕もなんでか分かんないけど、とにかく泣けたっていうのは覚えています。で、年子の弟がいるんですけど、弟はもちろん長男として育てられて。僕は長女なので、『アンタ、女の子やんか』みたいなことを言われながら育てられたのがものすごい嫌悪感で。

僕、生理になるのがすごい遅かった。中 2 の 3 月だったのかな。なので、たぶん学年で一番遅くて。身体が小ちゃかったんですよ。なので、自分は生理にならないと思ってました。胸も膨らまないと思ってたんですけど。それ以降、ものすごい急成長したので。なんか嫌だなっていうか、すごいショックでしたね。

田舎の中学校だったので、進学校に行くにはどうしても下宿するしかないんですね。下宿して＊＊の女子高に進学をすることになって。これは女子高への違和感じゃなくて、女子高って性別がないので、正直言って、女子高には何の違和感もないです。あと、みんな同じ制服を着るので何の違和感もないです。ただ、家庭科の授業だけはものすごい嫌でしたね。『女性は子供を持ってね･･･』とか、『お母さんになったら･･･』とか、そういう授業だけは吐き気がするほど嫌でした。女子校への違和感というよりも、田舎者のコンプレックスはあったし、方言もあったので、そっちのほうが大変だったかな。

大学はほぼ男ばっかりの学校に行ったんですけど、それはそれでやりづらいですよね。商学部だったんですけど、男子 600 近く、女子 16 人みたいな世界だったので（笑）。それはそれで、女子は女子で固められるっていうのが超違和感。でも、男子に入れるわけじゃないみたいなところはすごいイヤだった。たぶん大学生の時が、今思うと一番つまんない時だったかな。『何なんだろう、この違和感は』みたいな、『え～！』みたいなことがいろいろあったり。

まあ、それは弟がいることですごい思ってたけど、弟とは喧嘩ばかりしてたし、子供の時、殴り合いの喧嘩してましたね。たぶん僕が弟にイライラしてたんだと思います。『お前は男として育てられていいよね』みたいな。でも、弟は弟で『姉ちゃんはいいよね』と思ってたみたいで。

なかなか＊＊に出してくれてなかったっていうのがあって。本当は＊＊の大学に行きたかったけど、母親がずっと『アンタ、女の子やん』みたいな感じで浪人もさせてくれなかったし、＊＊から出してくれなかった」

第２項　就職　―「性同一性障害」のニュースに触れても「このままクローゼッ

トで生きていくか」―

N さんは、大学卒業後、就職した。その頃、「性同一性障害」がニュースで報道され、N さんは「やっと自分が何者か分かった」と語られた。しかし、その時は性別適合手術を受ける決断には至らなかった。その部分の語りは、以下の通りである。

「*就職する時は、男女雇用機会均等法はできたとはいえ、マスコミ系に行きたかったんですが、まあなかなかその道は厳しく。で、OL として、スカート履いて、パンプス履いて、ストッキング履いて、制服着て、化粧して、みたいなのはとてもじゃないけどできないので。もちろん、制作の仕事に就きたいというのもあったので、卒業する間際ぐらいから舞台照明の仕事始めたんですけど。まあその会社がけっこう危うい会社で、今で言うとブラックですよね。5 月ぐらいにはもう給料の遅延が始まって、6 月頃にはもう潰れちゃった。僕、一人暮らしだったんで、生活できなくなるとどうしようもないんで、すぐ、求人雑誌探してたら＊＊写真館っていう＊＊では一番の写真館なんですけど、そこの求人があって。すぐに面接行ったら、社長が『すぐにでもおいで』みたいなこと言ってくれたんで、6 月からそこの写真館で働き始めたんですね*」

――早速、転職されて。

「*はい、すぐ転職しました。で、そこで働いてたんですけど、やっぱり＊＊行きたいなあって思って、3 年で辞めて。＊＊に行って、3 年ぐらいまた舞台照明の仕事してたんですけど、腰を悪くしちゃって。照明の仕事って超ハードなんですよ。どうしても辞めざるを得ない、もう本当に立ち上がれないぐらい酷くて。で、もともと働いていた写真館の社長が、『戻ってこい』みたいなことを言われて。で、結局、＊＊に戻りました。またそこの会社でカメラマンとして働き出して、それで、＊＊年までその会社で働いて。*

それで、その途中かな、＊＊歳の時にニュースで『性同一性障害』っていう言葉が出てきたんですよ。1994 年かな。で、その時に『あ、これだ！』ってやっと自分が何者か分かったっていうのが、その年ですね。それまでレズビアンの本とかも見たりはしたんですけど、なんか自分にしっくりこなくて。女の人好きだけど、『そうじゃないんだよな～』ってずっと思ってて。『性同一性障害！　あ、これだ！　これだ！』みたいな。自分の中で、やっと自分が何者か腑に落ちた瞬間っていうのが、その『性同一性障害』っていう言葉だったっていう感じです。で、そのニュースをずっと見てたりしたんですけど、『いや、＊＊にいるしなぁ。もうすぐ＊＊だしな。手術するお金ないしな。ずっとクローゼットで、このまま自由に生きていくか』と思ってましたよ。

その後、会社が、ちょっとなんていうかな、その写真館で働くこと自体は楽しかったんですよ。けっこう自由に幼稚園、小学校、中学校、高校、大学ってそれぞれ担当校に行って、高校は自分の母校だったこともあって、すごい自由に楽しく。子供たちに『お兄さん？

お姉さん？　お兄さん？』とか言われながら(笑)、その会社自体も男女関係なく働けてたんですね。すごい楽だったんですよ。男も女もあんまり関係なく、女だからお茶出ししなきゃいけないとか全くないし、自分の担当の学校の仕事さえやっていれば良かったんですけど、会社として成長していくにつれて、婚礼の仕事が多くなってきたんですよ。そうすると、自分が『この人たち、これ何が楽しいんだろう？』って思うしかなくて。会社としても、年齢が上がっていく人は婚礼とか家族写真とか、写真館業務にシフトしちゃうことがあるんですね。給料も高くなってくるし。そうすると、学校の仕事は若い子の仕事になっちゃうので、婚礼やりたくないなと思った。あと、友達とバリに行ったことがあったんですよ、＊＊年の夏に。で、バリに行って、『このままバリにいようかな』みたいに思ったのがきっかけで、アジア留学したいなと思ったのがきっかけで、いろいろそれで語学留学の雑誌とか見てて。で、マレーシアは学校方式みたいに 1 限から 6 限まであって、コンドミニアムでみんなで寮生活みたいな感じって書いてあったので、それ面白いなと思ってマレーシアに語学留学をして。

で、帰ってきてから、弟が店を立ち上げたとかあって、しばらく弟の店の手伝いをしながら 3 年ぐらいカメラマンをしてたって感じです」

第３項　カミングアウト、ホルモン治療　―LGBT 番組の制作に携わる―

その後、N さんは、テレビ番組制作の仕事に転職した。そこで LGBT をテーマとする番組の制作に携わるようになり、有名な「LGBT の第一人者」たちと知り合うようになった。そして、その人たちから背中を押されるようにカミングアウトし、それがきっかけとなりホルモン治療を開始することになった。その部分の語りは、以下の通りである。

「*で、弟の仕事を手伝ってたんですけど、『＊＊』っていう旅行雑誌があるんですけど、僕は一回写真でお手伝いしたことがあって。その人に『＊＊に出てくれば』って言われて、＊＊へ出た。*

で、＊＊の関連会社で短い派遣バイトをした時に『長期で働かないか？』って、契約社員みたいなことをやっていて、事務系の関連会社ですね。で、その時に『＊＊（LGBT 番組：筆者註)』のスタッフとして関わり出して。それまでずっとクローゼットだったんですけど、『＊＊（LGBT 番組：筆者註)』の人たちと関わり出したことをきっかけに、初めていろんな人にカミングアウトし出したっていうか。そこに来る人って LGBT の第一人者じゃないですか。そういう人たちと知り合って、背中を押される形で、カミングアウトを始めて。カミングアウトを始めてっていうか、そういう人から見れば一目で分かる感じなんで、やっぱりトランスって。もともとどっちか分かんないような感じだったので、『アナタ、トランスですよね？』みたいな感じで、＊＊さんとか＊＊さんとか、控室にいるじゃないですか。で、それのアテンドとかしてて、『この人、当事者ですよ』みたいな感じで（笑)。で、(控室にいる当事者の方から：筆者註)『もう見たら分かるよ』みたいな感じで。それ

で、第一人者と知り合って、みんなから背中を押されるっていうか。特に、＊＊さんとかは、『私は間違ってないし、あなたも間違ってない』みたいな言葉をかけられ」

――へぇ～。それは、控室の中で？

「ああ、それは別で飲みに行った、すごい悩んでた時に。で、番組の出演者だった＊＊先生っていう精神科医の先生がいるんです。で、＊＊先生のところに行って、『先生、どうすればいいですか？』みたいな。で、＊＊先生に『N さん、僕はあなたは治療すべきだと思う』って言われて。で、ホルモン注射から始めて、っていう感じです。

＊＊年の夏ぐらいに＊＊先生のところに行って、注射を打ち始めたのが、秋くらいかな。秋ぐらいから段階を踏んで、ちゃんと段階を踏みました。で、ホル注を始めて。胸を取ったのが＊＊年前の夏だと思います。割とすぐに、僕はもともと子供の頃から男の子だと思われている率のほうが高いので、全然女性と思われたことがないので、けっこうすぐにパス度は上がるっていうか。やっぱり、注射を打つ前までは『男の子だと思ったけど喋ったら女の子なのね』みたいな感じで、声でバレちゃった。声で女子だって分かっちゃうみたいなことが多かったんですけど、今は全くないです。注射打ち始めてから声が低くなったので。けっこう声バレする人は多いって言いますけど、やっぱりそうですね」

――男性ホルモンの注射を打つと、割とすぐ声って変わるんですか？

「声、変わりますね。声帯をちょっと荒らすっていうかつぶすっていうか。高い声が出なくなっちゃうんですね。声もバレなくなったので。まあ、電話に出るとね、やっぱりちょっと声が高くなったりとかしますけど。ちょっと丁寧な話し方になってしまうので、ちょっと女の子っぽくなっちゃうっていうのはあると思います」

――まあ、電話の場合は割と誰でも、

「声高くなりますよね」

――「よろしくお願いしますぅ～」みたいな（笑）。

「ですですです（笑）！　僕はちょっと弱めの注射を打っているんで 3 週間に 1 回ですね、125 グラム 1 回ですけど。この間血液検査をしたら、『男性ホルモン値が低すぎる』って言われて。で、この間からちょっと多めに『250（グラム 1 回：筆者註）に変えてみようか』って言われて、250 に変えた」

――倍になったんですね。で、3 週間ごと？

「*3 週間か 4 週間。『ちょっと間空けてもいいよ』みたいなことを言われて。まあ、生理は止まってる。たぶん完全に止まってます。で、『止まってるから緩くてもいいか』みたいな。こないだ先生にも話したんですけど、『身体、大丈夫ですか？　身体、ダルかったりしませんか』って言われて、『そういえば、ダルいですね』って話をして。『じゃあ、ちょっと強めのやつ（強めのホルモン注射：筆者註）打ってみようか』っていうことで、今ちょっと強めに変えてまだ実験中みたいな*」

――なるほど。ちょっと経過観察的な？

「*経過観察的な。でも、それはちょっと先生によって違う。今は、＊＊の泌尿器科に行ってるので、精神科医でもないし、ジェンダークリニックでもないので。たぶん泌尿器科の先生はホルモン値で見てて。でも、精神科の先生はたぶん違う視点で見ているので、『もう N さん生理ないんだし、緩くていいんじゃない？　もうパスしてるし』って。見方はいろいろだと思います*」

第４項　職場で登録する性別の変更　―理解のある上司に恵まれる―

N さんは、LGBT 番組の制作に携わったことがきっかけで、カミングアウトし、ホルモン治療などを行った。その後、理解のある上司に恵まれ、職場で登録する性別を変更することができた。それに関する語りは、以下の通りである。

「*僕、社員じゃないので、登録はしなきゃいけないんですよ、＊＊に対して。一応きちんと何年に一回かは登録用紙書かなきゃいけないんですね。*

＊年前、その時の上司、＊＊さんっていう方なんですけど。この登録、3 年に 1 回申請しないといけないんですけど、申請用紙が来たんですよ。で、詳しいことを書かなきゃいけなくて、スタッフに『N さん、申請提出して』って言われて。『あ～、そうか。来たか。どうしよう･･･』と思ったんですね。で、ふりがなと女性／男性を書かなきゃいけなくて。で、その時は治療始まってたので、もうさすがに女性って書けないな～と思って、すごい悩んで。でも、そのスタッフの子すごくいい子だったんで、メールで『N さん、早く出して！』って言われながら、『治療始まっているし、女性で出すのはできません。読み仮名も変えたい』と（返信した：筆者註）。で、僕、人事に行けばいいのか、その時の上司＊＊さんっていう上司に相談すればいいのか、『どうすればいいと思う？』ってスタッフに聞いて。で、『そんなの、＊＊さんに言えばいいんだよ』って、その子も超サバサバした子だったんで、たまたまラッキーだったんですけど。で、その時の上司が＊＊さんだったから（この職場に：筆者註）居れたっていうのあるんですけど。＊＊さんに、『これ（申請用紙：筆者註）、

女性で出すのはできません。今ちょうど治療中です』っていう文章も書いて。それで、＊＊さん、すぐに人事に掛け合ってくれて。そしたら、人事も『それは対処しないといけないことだよね』って言ってくれて。ただし、このID 番号っていうのがあるんですけど、ID 番号は継続ではなく、新しいNさんとして（名前の読み仮名だけ変更して：筆者註）、新規として登録することになった。『男性のNさんで、新規登録になります』って言われて」

――じゃあ、新しく雇われた時みたいな手続き？

「*そう。新入社員的っていうか、要するに会社で登録する社会保険とか雇用保険とかじゃないので。要するに自営業みたいなものなんで、会社にとっては関係ないじゃないですか。登録上の問題だけなので。なので、そこはすんなり。で、その時に、上司が＊＊さんで良かった。女性の上司なんですけど、＊＊さんじゃなかったら言えなかったっていうのと、たまたまスタッフさんが超サバサバな人でよく分かってる子だったんで、そこはすごい恵まれたなと思います*」

――割とそういう、周りの環境に恵まれたから、すんなり？

「*すんなり、男性のスタッフとして登録してもらった、っていう感じですかね。運ですね。っていうか、（もし上司が違う人だったら：筆者註）言わなかった。言わずに、女性として『まあ、しょうがないな。やっぱりな』って。ちょうどその＊年前もすごい悩んだんですよ、同じ登録するのに。『ええ、そっか。女性に〇を打たなきゃいけないんだ』って、ちょうどその＊年前は。『イヤだな、でもしょうがないよな』と思って、女性として登録しました、その＊年前はね。で、＊年経って『いくらなんでも、もう無理だ』って思って、たまたまその時の上司が＊＊さんっていう人だったので、男性として登録してもらった。で、それからはもう全然、登録上だけの問題なので。『銀行口座と名前が違うじゃないか！』っていうのも特になく。芸名と振込口座の名前が違うとか、芸能人だっているじゃないですか。よくある話なので。それはもう全然大丈夫*」

第５項　職場でLGBT環境、ジェンダーギャップについて考える　―いろんな人を繋ぐ―

N さんは、職場で登録する性別を変更することができた。その後、職場内でネットワークを築き、非当事者の管理職も巻き込みながら LGBT の職場環境を考える勉強会を続けている。それに関する語りは、以下の通りである。

「*今ちょうど＊＊のLGBT環境について考えてるところなんですけど、何人かの仲間と。まあでも、けっこうマッチョな会社なんですよ、＊＊って*」

――古い会社ですしね。「何人かの仲間」っていうのは、当事者の方ですか？

「*当事者もいるし、アライの人もいるし、#MeToo とかジェンダーギャップについて疑問に思っている職員もいっぱいいて。LGBT 勉強会は何回かやっているんですよ。すごく理解のある部長級以上の人がいて、その人と、僕と、＊＊ちゃんと、＊＊大学の＊＊先生とか。この 4 人が勉強会やっているんですね。で、その勉強会でいろいろ反応してくれた何人かで、『＊＊内でも労働環境進めなきゃね』みたいな話をしてチームを作ったんですけど、まあみんな働いてる時間も場所もバラバラなんで、なかなか前には進まないんですけど*」

――N さんがリーダーとしてそのグループを作った？

「*リーダーっていうより、僕がいろんな人を繋げてる。僕、職員じゃないので、どこまでやっていいのかも微妙なんですが。まあでも、僕が人をつないでいるので、まあ中心メンバーと言えば中心メンバーですね。で、この間＊＊新聞に、＊＊新聞の社内規定として、『性別違和、セクシュアリティで差別しない』っていう文言を出しましたけど、＊＊でもそういうことを出したりとか。あとは、同性カップルについてのこと、『福利厚生をちゃんと平等にしていきましょう』みたいな声明を出すにはどうすればいいかっていう、まずそこから。当事者にアンケートするとか、勉強会を増やすだとか、そういったところをもんでいる（アイデアを検討している：筆者註）最中。あと、『トイレなんとかしろ！』とか。トイレ少ないんですよ。そういう労働環境の面も含め、もうちょっと『みんなと同じにしなきゃ』みたいなところはこれから進めていくところかな*」

――それ、めちゃくちゃホットな話題じゃないですか！　勉強会は何年くらい続きそうなんですか？

「*勉強会はまだまだ続けようと思うけど、なかなかね、1 年に 1 回できるかどうかの話なので。しかも、地方だったりだとか。1 回大きな勉強会やったことありますけど、90 人ぐらいしか集まらなかった。まあやっぱりね。でも、みんな分かっているようで分かってない。しつこく続けなきゃっていうところではあるんですけど。で、どっちかっていうと、＊＊内の当事者で、声を上げている人が超少ないんですね*」

――クローゼットですよね。

「*ほとんどクローゼットです。でも、今の 20 代の子達は、けっこうオープンにしてる子もいるんで。20 代の子のほうが全然開けているし。逆に、『(なかなか理解が進まないのは：*

筆者註）どっちかっていうと管理職だよね』みたいな、頭固いのは」

――40 代以降になると、『なんで今更カミングアウトしないといけないの？』っていうのもあったりとか。

「*そうそうそう。『今更？』っていうのもあったりとか、特に総務・管理系の部門の人だとすごいやりづらいって言いますね。で、こっちも知ってても言えないじゃないですか。＊＊ってものすごいマッチョなんで。特に管理系の人には言いづらい。カミングアウトしづらいし。この間＊＊内で勉強会やった時も、ある 40 代のゲイの人が、『もう本当に N さんだけにそんな当事者のいろんなことをかぶせちゃって悪い。本当は職員の俺らがやんなきゃいけないのに、N さんにやらせてると悪いような気がする』とは言ってた*」

――あ～、すごい切実ですね、そのゲイの人の声。

「*はい。僕はトランスなので、どうしてもカミングアウトせざるを得ないですよね。もう今はカミングアウトしなくてもやっていけますけど。でも、僕の上司の観点から言うと、やっぱり『職場にもいるんだよ』っていうことを知らせないといけない。『みんなが知ってないといけない』というところで、僕がかぶっているところもあるから（笑）。『職場にもちゃんといます。アナタの近くにも本当はちゃんといるんです』っていうところで、それは見せなきゃいけなくて、っていう考えの上司なんで*」

第６項　救急車での搬送時にも性別を説明しなければならないしんどさ

N さんは、交通事故に遭ってしまい救急車で搬送されたことがあった。その際、救急隊員や警察官から判別された性別と戸籍の性別が異なっていたために、自分の性別について説明しなければならない状況となった。それに関する語りは、以下の通りである。

「*＊＊年ぐらい前に＊＊で、自転車乗ってて車にはねられたことがあって。青信号を渡ってたら、気がついたら車のバンパーが当たってたんですね。自転車と車のバンパーに『あ、足が挟まれてる』って思ったら、パーンって跳ね飛ばされて。周りの人が救急車呼んでくれて。意識はあったんですけど。で、（救急車を呼んでくれた人が：筆者註）『被害者の方は男性です』みたいなことを言ってて、『え～っ、ちょっとどうしよう』と思って。救急車が来てから、乗って、いろいろ意識があって、『痛い～、わ～～！』って言ってんだけど、ヤバイヤバイ。なんか、説明しなきゃいけないのは、足の痛さじゃなくて、自分の性別みたいな。面倒くせえなと思って。どうしようどうしようと思ってて。警察と救急車の中で『痛～い』って言いながら、『あの、性別は男性ですけど女性です！』『ハァ？』みたいな(笑)*」

――痛くて、本来それどころじゃないはずなのに。

「*そうそう。なんでこんなことで悩まなきゃいけないんだよ痛いのに、って思いながら。で、ちょっと落ち着いてから、『戸籍は女性です』みたいな話をして、みんな『ああ、そうですか』みたいな。別に内臓とかに支障が（あったわけではなかったので：筆者註)。足が折れただけだったので*」

――折れただけって（苦笑)。

「*だけっていうか、それはそれで済んだみたいな(笑)。入院もなかったんですよ、すぐ帰らされて。で、『次の日にちゃんとした検査を受けて下さい』って行ったら、『足、折れてます』っていう感じだったんで。その当日は、応急処置だけして、『迎えに来てもらって下さい』って言われて、迎えに来てもらった人に担がれて帰った。で、まあちょっと、その時に、意識ないまま開腹手術とかあったらイヤだなとか、それはすごい思いましたね。意識ないまま死んじゃったら女性として扱われるんだよなぁとか。その時、まだ胸があったので。ああ･･･、みたいな感じですよね*」

――もしそうなっていたら非常に不本意な、

「*はい。不本意なことになってたなぁと。まだその時＊＊にいたんですけど、その時にちょうど関わっていた＊＊の人たちが、『N さんさぁ、緊急連絡先を＊＊にしておきなよ。そうしたら、みんな説明してくれるから』って言ってくれたりとかもしましたね(笑)*」

――みんな優しいですね。

「*優しい人がいたんですよ*」

第１３節　０さん

インタビュー日：2018 年 12 月 18 日
インタビュー時間：3 時間 48 分
年齢：40 代

O さんは、出生時の性別は女性であったが、現在は男性として生活されている。職業は、飲食店、不動産業などを経て、当事者支援団体理事長、バー店員である。インタビューは、筆者の所属する大学にて行った。

第１項　０さんの生い立ち

まず、O さんは、幼少期からの生い立ち、ジェンダー自認、周囲との関わりについて、次のように述べている。

「*生まれた時の性別は女性で、恋愛対象は女性です。まず、小さい頃は、覚えてる中で一番古い記憶が、4 歳とか 5 歳の時に親戚の結婚式行くのに着物を着させられたんですけど、ものすごく嫌で。それを親も知ってたので着替えを持ってきてくれてたんですけど、スカートだったんですよ。当時から『スカートはやだ』ってすごい駄々をこねてたのは覚えてるので、自分が履くものではないと思ってたんですけど。まあそういうのもあったり、青い色を好んだり、小学校に上がった時は、赤と黒のランドセルのうち、赤だったので『なんで？』ってすごく言ったし、入学式も、よくみんな白いタイツで、男性は短パン、女性スカートみたいな感じじゃないですか。短パンを親が買ってくれないというか、スカートを勧められたので、すごく嫌がって。結局、パンツスーツを買ってもらって。まだ小学生ぐらいまでは、とにかく好みの服装だったり色があって、自分が男性だと思ってるのに、周りの男の子と一緒だと思ってるのに、なんで親も周りも女性モノを勧めてくるんだろうっていうのしか分からなかったんです。だから、違和感っていうより、分かってなかった感じ。分からないけど、とにかくイヤだった。自分が女性だって、あんまり気づいてなかった感じがあって。*

よく分かってなかったんですけど、さすがにある程度大人になってくるし、中学生になるとさすがに制服も出てくるので、そこで初めて自分がちょっとおかしいなっていう違和感に気づいたんですよ。周りとはちょっと違うのかなとか、そういった予感っていうのは、中高で初めて感じましたね。やっぱり身体も変化してくる時期なので。小学校ぐらいまではもうね、男の子と遊んで男の子だと思ってたとしても、多少胸も出てくる、生理もくるってなるので、やっぱり違和感も出てくるし、向き合わざるを得ない感じになってきましたね。

だから、生理もそれこそね、男子、女子で分けられて、保健の時間とかっていうの、全く話し聞いてなかった。あの、生理の講習みたいなの（笑）」

――あ～！　あった、あった！

「*分けられましたよね*」

――男子は、なぜか、隣のクラスの男子とウチのクラスの男子で、ドッジボール大会させられた（笑）！

「*小学校の時にやりますよね、そういうの*」

――やりましたね。あれ不思議で、みんな思っているけど言えない。なんで男子だけドッジボール？　女子は？　みたいな。あった、あった。

「そうそうそう。あれの時に、だから、もう分けられたことすら気づいてなかったんですよ。だから、『なんでこんな授業を受けなきゃいけないんだろう』みたいな感じで、全く話聞いてなくって。で、中 2 になった時も、生理になったのを教えてくれたのは母親だったんですよ。僕、気づいてなかったんです。気づいてなくって、前の日にたぶん血のついたパンツを洗濯かごに入れたのを親が見て、母親が見て、呼ばれたんですね、次の日。『多分、ちょっと生理が来たからトイレ行ってナプキンしてきなさい』みたいなことを言われて、ハッと思って、生理とか、ナプキンっていう言葉はさすがに中 2 ぐらいだったから、保健体育では聞いてなかったけど、何となく分かってたんですね。ただ、それは自分にくるものではないと思っていたので、『なんでそんなこと言われなきゃいけないんだろう』っていう、一気に頭に血も上るし。なんで？　自分がくるわけないのに。しかも、だから、『恥ずかしいこと』ってなんとなくやっぱり思ったし、それをしかも自分じゃない人に指摘されなきゃいけないんだろうって思って。『行って来い！　行って来い！』ってすごいうるさいから、トイレ行って見たら、確かに本当に生理がきてて。もう『この世の終わり』ぐらいすごいショックで。もう本当にそれが一番、最大のショックでしたよね。胸とかよりもやっぱり、何て言うんでしょうね、女性としての性別を突きつけられたような感じで。その日は赤飯だったし、もう本当に『もう最悪』と思って。弟は『なんで今日、赤飯なの？』みたいな感じで言うし、2 人きょうだいなんですけど。

違和感みたいなのは、ようやく分かってきて、突きつけられて。そこから、もう中高は悩みに悩んで、ちょっとどうしていいか分からなかった時期ですね、本当にね。だからといって、友達にも何か相談できなかったんですよ。何て説明していいか分からなかったんで、言葉がなかったから。たぶん中学生ぐらいだとレズ、ホモ、オカマも知らなかったぐらいなので。自分はちょっと女性として扱われるけど女性じゃなくって、男性だと思ってんだろうとか。中高ぐらいは、男性としてありたくて。

高校でバイトして、一番最初にやったことは髪を切ったんですよ。初めてのバイトのお給料で。それまで肩ぐらいまでの長さの髪だったんですけど、それを親と一緒に美容院行ってたので、美容師さんに『短く切って』って言っても、絶対切ってくれなかったんですね。『親から切るなって言われてるんで、ごめんなさい』みたいな感じで。だから、ずっと髪が長いのも嫌だったので。高校入ってバイトしたら、速攻美容院行って。そのいつも行ってる美容院行ったらバレると思ったから、違う美容院行って、バッサリ髪短く切って。

（お母様は：筆者註）なんとなくは気づいていたのかもしれないですね。なんかすごい男の子っぽい、ボーイッシュな子っぽい感じだから、多分女の子らしく可愛くいさせようって思ってた感はありますね。スカートとかも嫌がったので、なるべく髪型だけでもって

思ったのか分かんないですけど。高校生の時つき合ってた女性を何度か家に呼んだりとかして、それをガラッと（部屋のドアを：筆者註）開けられたことがあって、なんとなくこの 2 人おかしいなって思われてて。たぶん親も、怪しい関係なのかなっていうのは察知したのか。あの、私に言わないで、向こうの親御さんに電話したんですよ、それがすごく腹が立つんですけど。『ウチの子がこうなってるから、そういうことをお宅のお子さんにさせないでくれ』みたいなことを言っちゃって」

――じゃあ、「アンタの娘が悪い」みたいな言い方。

「そうそうそう！　ホントにもうあり得ないと思って、それでブチキレて、すごい親とケンカしたんです。それだけたぶん、私に対して女性としての期待もまあもちろんすごかったんだろうなとは思うんですけど。それをね、『他の人に言うのはちょっと』と思って。そこからもう本当に仲悪くなくなったっていうか、もう僕が勝手にちょっと避けるようになりましたね」

――お父様とはあんまりそういう軋轢みたいなことはない？

「あんまりないですね。高校生の時に着たのが最後の着物だったんですけど。私、成人式の時は着てないので、着物は。高校生の時にいとこの結婚式で着物着たんですけど、それは『もうしょうがない』と思って着た。その集合写真の私の部分だけを拡大して父親が持ってて、引き出しに入れてたのを見た時に、『ハァ～』と思ったんですけど。多分、父親のほうはもう気づきもしなければ、ボーイッシュな女の子と思っていたんだと思うんですよね。ただ、やっぱり女性らしいのはすごく大事に取ってんだと思って。そのへんはね。父親のほうは気づいてなかったですね。父親のほうはもう、けっこう『本人がいいんなら』っていう感じで言ってくれるので。全然普通に世間話的なことは話せたので。

*　そうですね、中高ぐらいが一番、今思えば辛かったかもしれないですね。抑えられるし。やっぱり、今みたいじゃないので、『校則というのには必ず守らなきゃいけない』って思っていたので。制服変えれるなんて思ってないから、着て行きましたし。中学でもそれでも楽で、校則が登下校だけ必ず制服だったんで。登校したらもうジャージに着替えて、帰りはもう全然ジャージで帰っちゃったんですけども、一日中ジャージで過ごしてても良かったんですけど。高校は、もうずっと制服でいなきゃいけない高校で、体育で着替えるぐらいだったんですけど。体育で着替えるのも、更衣室がやっぱり分かれているじゃないですか。自分の姿を見られるのはすごく嫌だったので、着替える技はとりあえず早くなるんですよ、私たちって（笑）。その頃はやっぱり、女性と付き合ったこともあるし、性に対して、それこそ、恋愛に対してはすごく興味を持ち始めた頃だったので。自分のはすごく嫌だけど、相手の女性に対して性的な部分、胸だったりとかそういうところにすごく興味があっ*

たので、更衣室行ったら、まあ自分は早く着替えて、人のはすごい見てたんですですよね（笑）。そのへんぐらいしか特典はなかったですけど（笑）、今思えば。修学旅行なんかもすごくイヤで 2 泊 3 日だったからお風呂に入らなかったんですよ。それこそ『生理だ』って言って、先生の部屋のシャワー室を使わせてもらって」

（中略）

「中高は生理を理由にプールは休んでました。水着着たくなかったので。ほとんど出てなかったですね。ただ、その点考えると、小学校まではけっこうプール好きだったんですね。泳ぐの早かった、小学校までは。だから、その時までは、違和感に気づいてなかったんでしょうね。水着を着てても、別に男性と思って泳いでたんだと思うんですよ。だから、見られてイヤだとか、自分の体が恥ずかしいっていうのは気づいてないから、多分プール好きだったと思うんですよね」

第２項　性別移行のための情報収集、ホルモン治療、性別適合手術

O さんは、同じジェンダーをもつ人たちと出会うために飲食店へ出かけ、そこで働くことになった。そして、そこで性別移行するための情報を収集し、ホルモン治療などを行った。その部分の語りは、以下の通りである。

「今までにいくつの職場を経験してきたか･･･、今が 6 個目ですね。最初が工場系だった気がするんですけど、その後は、飲食、不動産、飲食、不動産って感じです。

私、高校卒業してすぐ工場系に勤めて、ラインの流れ作業みたいなことをやってたんですけど。まあ、＊＊だったんで大きかったんで、完全に男性と女性の制服が違ったんですね。女性はピンク、男性は青だったんですけど。それがちょっと耐えきれず、まず一度目のそこは辞めました。

で、どちらでもいい、男性、女性どちらでもいいような制服って考えた時に、イタリアンレストランが近くにあったんでそこで働くことにして、その時まではまだ＊＊にいたんですが。たまたまニュースを見て、胸を取る手術をニュースでやってたんですね。今思えば全然違うんですけど、その当時、それこそトランスジェンダーって言葉はあったのかな、性同一性障害っていう言葉はまだなかったんですね。なので、そういった治療ももちろん確立されていないし、胸を取るというのは当時まだヤミの病院でこっそりやるっていうような、『保証のない手術だけどやりますか？』っていう感じの、当時は感じだったんです。

そのニュースを見て＊＊に出てきたんですよ、私。胸が取れるんだと思って。ただ胸を取る手術のニュースを見て。＊＊だから情報がないんだと思って、＊＊に出ればそういった胸を取れる手術の情報が分かるかもしれないと思って出てきたんですね。で、性同一性障害っていう言葉がまだなかったので、セクシュアリティの言葉は、レズとホモとオカマ

しか知らなかったんです。ふふふ（笑）。なんとなく分かりますか？　それしか知らなくって。ただ、私はレズではないと思ってたんですよ。もう中高ぐらいですごく悩んだんですけど、一番悩んだのは高校生だったんですけど。やっぱり、どうしても思春期で身体が女性に変化していくし、胸も出てくるし、生理も来るので、どうしても現実と向き合わなければいけないわけで。でも、それに悩んでたので。もう、高校時代は『40 歳ぐらいになったら死のう』と思ってたんですね。このまま女性の身体で歳をとっていくことに対して、ものすごく恐怖だったので。でも、高校の時はたまたまラッキーなことに女性と付き合えたんですよ。だから、すぐ死のうとは思わなかったんですね。その子とまだ遊びたかったんで。その時は思いとどまってて」

――じゃあ、当時は「今のうちは楽しめるだけ楽しんでおこう」みたいな？

「そうそうそう（笑）。すぐの自傷自殺はなかったんですけど。で、まあそれで、『胸が取れる手術』と思って＊＊に出てきて、まず行った先が＊＊のレズバーに行ったんですよ。胸を取る手術の情報を得るために出てきたので。ただ、表向きそれこそ、親がなかなか出してくれなかったので、＊＊会社に就職してましたけど。＊＊の＊＊会社に就職はしつつ、＊＊に行ってちょっと情報を得ようと思ってたんですけど。初めて行った＊＊のレズバーで、当時有名でしたよね（笑）？　もうそこしか知らなかったんで、たぶんそれも雑誌か何かで見ていて、インターネットもなかったんで。で、行ったらそこのママさんに、『私はこういうセクシュアルでこういう感じて』っていう話をして、『胸を取る手術のために＊＊に出てきたんだ』くらいのことを言ったと思うんですね。そしたら、そのママさんがいい人で、＊＊にオナベのお店があるんですけど、けっこう大きい、で、『アナタはたぶん、そっちに行った方がいい』って言われたんですよ。いい人！　だから、すごくその人に助けられたんですよ。『アナタはレズではないから』って。高校生ぐらいの時に女性とお付き合いはしてたけど、周りからもやっぱり『レズだ！　レズだ！』って騒がれましたけど、さっき言ったみたいに、レズとホモとオカマかしか知らないし。オナベってことも知らんかったんですね。本当に情報がなくて。だから、周りからは『レズだ！　レズだ！』って言われてたけど、自分はレズの定義は知っていたので、『女性として女性を好きじゃないんだけどな』と思ってたので。『男性としてこの子を好きなんだけどな』と思ったので。レズ、ホモ、オカマの定義に当てはまらない自分は、たぶん変態っていうカテゴリで、とりあえず自分を納得させてた部分があったんですけど。それで、そのママさんが本当にいい人で、『オナベのお店が、＊＊に大きいのがあるから、そこに行った方がいいよ』って言われて、もう、すぐ次の日行ったんですね、そこのオナベの店に。そしたら、本当に日本一大きいとこだったんで、もうドア開けたらネクタイスーツでかっこいい、いわゆる男装のような方々が、もうすごい 10 人以上働いてて、ああかっこいいなと思って。そんで、その人たちがみんな女性なんだと思ったら、ああ、自分と同じような人がこんなにいるんだと思って、

初めてその時知って、だいぶ、精神的に楽になったのを覚えてますね。やっぱり、同じような人がいるっていうのを見たことがなかったので、＊＊では。だからねぇ、変態でちょっとごまかしてましたけど、同じような人がいるんだっていうのは初めて分かって、『もうここで働くしかない』と思って、速攻で不動産会社を辞めて、次の飲食店っていうのはそこなんですけどね。

ははは（笑）。＊＊のオナベクラブだったんですよ。ホストクラブが経営しているオナベクラブだったんで、本当に煌びやかな感じのオナベクラブでけっこう10年ぐらい働いたんですけど。もう、入ってすぐに、先輩たちに当初の目的の胸を取る手術の情報をすごい聞いて、すぐに内容は分かったんですけど、『とりあえずお金を貯めないと』と思ったのもあったんですけど。

それより先に、さすが＊＊だなと思ったんですけど、そこで初めてホルモン治療っていうのもしたんですね。ただ、ホルモン治療もその当時はヤミでした（笑）。内緒で打ってくれる感じ。ホルモン治療も胸の手術も『内緒でやってあげるよ』っていう病院があって。保険適用外なので、あるところでは法外な値段取ってましたけど、それでもやりたかったんですよね。それで、ホルモンを打つことによって、私たちの場合一番のメリットは生理が止まる。打って2、3ヶ月すれば生理が止まるんですね。もう、何がイヤだって、胸が出てきたのもイヤだったんですけど、生理がとりあえずイヤで。あれで、もう毎月毎月女性っていうことを思い知らされるので。もうそれがすごいイヤだったんで、もうそれが止まるんだったらと思って。当時そんなに研究もされてないような治療なので、『何があっても責任持ちませんよ』っていうような同意書にサインをさせられて（笑）。『もう知らないよ』っていう感じで打ってたんですけど、それでも、『それ打てば2、3ヶ月で生理が止まるんだ』と思ったら、もう全然やったんですね。それくらい、『死ぬか、生理か』だったら、もう死ぬほうを選ぶくらいイヤだったんですよ。『生理を続けるか、注射を打って死ぬか』って言われたら･･･（笑）。

胸も一緒くらいなんです。胸の時も、もちろん手術だから同意書書かせられましたけど、『胸がある人生を生きるか、この手術で死ぬかもしれないけどどうしますか』ぐらいの選択肢だったけど、『全然これ、死んでもいい』と思ったんですよ。『この胸がなくなるんだったら』ぐらいの勢いだったんです。まだちゃんとした治療じゃないので、そういった何って言うんだろうな、恐喝じゃないけど恐喝まがいの二択みたいな感じですけど、それくらいイヤだったんですよね。だからまあ、（オナベクラブに：筆者註）入ってすぐ1、2ヶ月で（先輩から：筆者註）ホルモン教えてもらって、打ち始めて、その1年後ぐらいには、お金貯めて胸の手術もしまして。その胸の手術も、先輩たちがやってたのを見て、当時ヤミの病院が＊＊と＊＊に有名なところがあって」

――有名な（笑）？

「そう。有名なヤミの病院なんですよ。当事者しか回ってない情報だと思うんですけど。だから、当時は、インターネットよりもそういう飲み屋さんのほうが情報が早かったんですよね」

――そうですね。そういう時代でした。

「そうですよね。ご存知だと思うんですけど。だからもう、ちょうどラッキーだったと思うんですけど。経験してる方もいるので、話も聞けるし、実際の術後も見れるので、それはすごいラッキーだったと思うんですけど。ただ、さすがにヤミだなと思ったんですけど、その何年後かには 2 人ぐらい亡くなってますからね、そこで。クリニック系で手術をされる方は気をつけた方がいいのは、先生の腕が良くても麻酔が怖くて。ちゃんとした麻酔科の先生が打たないと、量を間違えるともう起きないんですよ。それで＊＊の先生は 2 件ぐらい亡くなっちゃってる事故起こしてるし。何年か前＊＊であった、胸を取る手術を始めた病院があったんですけど、すごい格安で。そこもクリニックで、麻酔科医を呼ばないで、先生が自分で勝手に麻酔の量を調節していたので、半身不随になっちゃったんですよ。だからね、怖いので、今は治療として確立されているので、『そういった大学病院とか、麻酔科の先生と手術をする先生と、チームでやってくれる病院じゃないと、危ないですよ』って、今はアドバイスできるんですけど。でも、当時は『亡くなっても』ぐらいの勢いだったんで。ヤミだし。

そこからは、あと 10 年ぐらいはそこのオナベクラブに勤めて、治療の方もホルモンはしてましたけど、子宮卵巣を取って、戸籍が変えられるっていう状況を知るまで、そこで働いてたんですよ。

ようやく日本でも確立されてきて、性同一性障害っていう名前をつけて、それに対する治療を行って、それを行った人には戸籍を変えるという流れができた。それでようやくタイに行って手術を受けた。日本ではなくて。＊＊年にタイに行って。ここからようやく、いわゆるジェンダークリニック、精神科に通ったのが、その手術後なんですよ。今だったら先にジェンダークリニックに行って診断されて、『じゃ、ホルモン治療するか』とか『手術をするか』といった流れだったと思いますけど。それこそ、先に、ホルモンとか手術はやっちゃっていたし。まだちょっとグレーの時期だったので、＊＊年頃って。まだタイも今みたいに厳しくなかった。今だったら、ちゃんとした性同一性障害の診断書を持ってかなきゃいけないんですけど。向こう（タイ：筆者註）もまだそんなに制度も整ってなくって。『診断書が欲しい』とも言われなかったし。だから、そのあたりのグレーな時期に、ホルモンの意見書というか手術の推薦状みたいなものを持ってっただけで、手術をしてくれたんですね。で、それでやって帰ってきたのが、＊＊年だったんですけど。

その後は、さすがに日本の法律なのでガイドラインに乗らないと性別は変えれなかったので、そこでようやく精神科に行って、『戸籍を変えたいんです』っていう話をしたら、（日

本の医者は：筆者註）『もういろいろ全部終わっちゃってるから、もうしょうがないよね』って言って、性別変更の書類っていうのが10枚ぐらいあるんですけど、全部精神科の先生が書いてくれるんですけど、何回か通ってカウンセリングを受けながら、本当は何ヶ月かかけて書くものなんですけど、もういろいろ終わっちゃっていたので、2、3回行っただけで、全部書いてもらっちゃって。それで、2人の医師の診断書と家裁への申立書の書類を家裁に提出して、後は裁判官に会って簡易裁判のような感じの審問を受けて、そこで戸籍の性別が変わったのが同年の9月だったんです」

第３項　「当事者を騙す当事者」たち　―「情報のなさ」につけこまれる―

O さんは、情報を収集して、タイにて性別適合手術を受け、戸籍の性別変更手続も行った。しかし、その過程において、「情報のなさ」につけこみ、高額な情報料を取っていた「仲介者」に遭遇し、驚くべき実態を目の当たりにした。その部分の語りは、以下の通りである。

「やり方が分からず、流れというか。精神科に行って、その後、家庭裁判所に行って必要書類を揃えるってのも全然分かんなかったんですよ。タイのアテンドしてくれる会社を探すのも、自分でパソコン持ってなかったので、漫画喫茶で色々調べたりとかして、それで頼んで行った覚えがあって」

――タイに行った前？

「ごめんなさい、話が前後して。そうです、タイに行く前だから、＊＊年ですね。オナベクラブに勤めてた先輩が（タイで手術を：筆者註）やって帰ってきて、その情報をくれたんですよ。で、『戸籍が変えれるんだよ』っていうのを知ったから、僕もすぐ行こうと思って、それで調べ始めたんですけど。ただ、調べる言葉もまだ分からないから。『性別適合手術』って言葉も最近。当時、『性転換』とかで調べてたし。どうやってタイとのコネクションを取ればいいのか分からなかったんですけど、その先輩も聞いても教えてくれなかったんですね、そのルートを」

――なぜですか？（苦笑）

「って思うじゃないですか。帰ってきて、問いただしたらようやく教えてくれたのが、当時タイとのサポートをしてくれるところが本当に数カ所しかなくて。で、個人でやってる方もいたりとかして、あんまり情報って出回ってなかったんですよ。だからこそ、個人でやってる方は特に、情報をすごく上乗せしたんです。貨幣価値が違うので。本当は＊＊万ぐらいでできるのに＊＊万って言われてたんです」

――うわぁ～！

「*そう。だから、その先輩が言わなかったのは、その紹介してくれる人から口止めをされていたんです。私には、もし紹介するんだったら、もっと吹っかけられていたかもしれないっていうような時代だったので、全員に口止めをして。情報がない時代だからそれを信じるしかないし、初めてのことだから『そうだ』っていう値段を言われたらこっちも（手術を：筆者註）やりたい気持ちだから、まあつけ込みますよね。ただ、こっちも周りが教えてくれないし、金額を提示されたら飲むしかないので。もう本当に当時荒稼ぎしてた人たちの話も聞くし*」

――それ、タイ人ですか？

「*いやいや、日本人です。しかも、日本人の、私が行ったところは会社だったからそこまでバカ高くはなかったんですけど、個人でやってる人たちがすごく酷くて。個人でやってる人たちは本当に酷い情報料の上乗せをしてた噂しか聞かないので。しかも、私のところは当事者じゃなかったんです。普通の（セクシュアル・マイノリティ当事者ではない：筆者註）男性がやってる会社だったんですけど、その上乗せする人達って当事者の人たちなんですよ。タチが悪いことに。で、自分たちが（手術を：筆者註）やって、お金がかかって、すごい思いして手術をしてるから、その手術の回収費と『こんだけ取れる、こんだけかかるんだから』って思っちゃってる人たちが多かったんですね。今もあるんですけど、どんどんどんどん自分たちが手術をした後にけっこうお金がかかるから、『自分もやろう』って思っている人たち、年々います、個人でやる人。ただ、今はもうこれだけ情報が出回るので、『あそこはダメ』ってなると行かないので、なくなるところがほとんどですけど。*

その先輩は『『（人によって：筆者註）値段を変えたいから言わないで』って言われていたから、僕に（情報を：筆者註）あげなかったんだ』って後から言われたんです。だから、『この人（日本人の仲介者：筆者註）から紹介されていれば、僕（オナベクラブの先輩：筆者註）と値段が違ったかもね』って言って。だから、そういうルートとどんだけ親密になるかによって、値段の上下が当時はあったみたいで。そういうのを知らずに、ネットでたまたま見つけた会社経由で行ったから、私は吹っかけられずに済んだんですけど。個人でやってる人たちがすごかったんですよ」

第４項　当事者支援団体の設立へ

O さんは、トランスジェンダー当事者が情報のなさにつけこみ、他の当事者に対して暴利を貪っている実態を目の当たりにした。そして、その腹立たしい経験がきっかけとなり、当事者支援団体を設立するに至る。以下は、前項の続きの語りである。

「*それがあって、酷いなと思って帰ってきた後に、（情報料を：筆者註）乗せているのも知ったし。行く前は知らないんですよ、何の情報もなかったから。行ってきたらいろんなものが見えてきて、その先輩からもそういう口止めされてただの、当事者でも（性別適合手術を：筆者註）やった先輩たちがひどい暴利を貪ってるだの。そういった、まだインターネットがそこまで普及していないからこそできるようなグレーなことを当事者たちがやっているのがすごく頭にきたんですね、私は*」

――そりゃそうですよね。身内をダシに金を儲けているっていうことだから。

「*そうそうそう。僕だってけっこう必死な思いでタイに行って手術して帰ってきたので、確かに安い金額ではなかったです。それを、『自分たちも大変な思いして分かってるんでしょ』と思うんですけど、さらに追い打ちをかけるようにやっていたので。積み立てさせている人もいたんですよ*」

――人の弱みにつけこんでますよね、思いっきり。

「*そう。酷いなと思って、その実態が酷すぎて、私はNPOを立ち上げたんですよ。なんか、当事者が当事者をやってるのがすごく腹が立って*」

（中略）

「*NPOの立ち上げは＊＊年で、あまりにも手術に対する情報とかルートが確立していない。そういった思いがあって、ボランティアで始めたのがきっかけですね。*

当事者で、手術のサポートをする会社とか個人がどんどん増えてる時期だったんですね。そして、そのどれもが、そのちょっと前のものすごい金額を上乗せするまではいってないけど、そこからはちょっと下がったんですけど、さすがに。もうインターネットとかで（情報が：筆者註）出回り始めたので、多分バレると思って、ちょっと下げてはきたんですけど、全体的な値段は。

で、その頃は、私もパソコンを持ち始めたのでいろんなサポート会社を（インターネットで調査した：筆者註）。タイのサポート会社もあれば、日本のサポート会社もあって、みんな本当にバラバラだし、どこも本当のこと言ってないなって思って。それで、NPOで手術代をバンって（ウェブサイトに：筆者註）出したんですよ。例えば、『なんとかの手術＝＊＊万』とか、『なんとかの術式だったら＊＊万』とか。で、下のほうに『他のサポート会社の手術代のパック料金と、この手術料金と比較してみてくださいね』って書いて。そうしたらいくら上乗せしてるか計算できるでしょと思って。それで、あまりにも酷い上

乗せのところには引っかからないで欲しいなという思いでやってるので。ある程度は、その会社がサービスに見合えば別にいいと思うんですけど。本当にね、酷く乗せてるところとかは、こちらから取り締まることもできないし。もう本人が気づいてもらうしかないので。最初はそれから立ち上げたんですけどね」

第５項　模索する非当事者　―「マニュアルは要りません」―

O さんは NPO 団体設立後、非当事者から相談を受ける機会が増えた。そこでは、「マニュアル作ってくれ」という非当事者に対し、O さんはそれを最適な解決策とは考えない様子が語られた。その部分の語りは、以下の通りである。

「働きやすい環境について、たまに（研修などの機会で、非当事者に：筆者註）話したりするんですけど、私たち（トランスジェンダー：筆者註）の場合だと、やっぱりトイレと更衣室と、あと、性別変更しなければ通称名とか、制服とか、そのへんがだいたい問題になってくる。問題っていうか本人たちが気にするところなので、そのへんを企業側が配慮してもらえれば当事者たちは働きやすいと思える環境になると思うんです。ただ、その配慮も、すごくオブラートに包まれるとこっちもちょっと･･･、特別扱いがちょっと･･･。特別扱いされたほうが逆に周りからの視線が冷たくなるんじゃないかなと思っちゃうんですよね。上司は良かれと配慮して特別扱いしちゃうんですけど、周りは同等で見てくれなくなっちゃうから、すごく周りと差をつけた配慮のしかたはよろしくないんじゃないかなと思うんですよね」

――確かに。そうすると、結果的に居心地が悪くなっちゃうから。

「うん。悪くなっちゃうから。私も企業の中で言うのは、最終的には『何も配慮しなくていいです』って言っちゃうんですね。本人が本当に苦痛だったら、誰かしらに訴えるから。それを聞く側の人たち、企業とか部署とか、がある程度心構えしておいてもらって、できる範囲の配慮を、その時その時でしてあげればいいんじゃないかなと思うので。最初から、『じゃあ、性同一性障害だったら、トイレと更衣室とナントカを配慮して･･･』とかっていうふうに、マニュアルみたいものを決めちゃうと、中にはそれを配慮しなくていい人もいるんですよ。当事者でもその配慮を希望する人と希望しない人って分かれるので。通称名を『別に今のままでもいい』『周りにバレたくないから』っていう人もいるんですよ。全員が全員その配慮を求めているわけでもなかったりするし、配慮も人それぞれで『ここまで』っていう区切りが違ったりするので。だから、私たちの NPO でよく『マニュアル作ってくれ』って言われるんですけど、マニュアルは作れなくて。そうやっちゃうとその考えで凝り固まっちゃうし、性同一性障害の人もみんな違うじゃないですか。同じようにゲイの方だって、みんながみんな同じじゃないと思うし。だから、『マニュアルは絶対作らな

い』と思っていて。だから、『喋りやすい環境だけは絶対作って下さい』って言うんですけど。その人（企業の中で働く当事者：筆者註）に（どんな配慮が必要なのかを：筆者註）喋ってもらって、その人が働きやすい環境を、個々に対応して頂かないとたぶん難しいかな。マニュアルに当てはめるとたぶん、また精神的に大変っていうかイヤな部分が出てくるのかなっていう気はします」

――周りの非当事者の人からしても、『マニュアル通りに行動したからいいでしょ。ここまでやったから、私はやるべきことをやりました』的な。

「*そうですね。そうなるともっと、こちらの意図してるところではないし。だから、『もう何も配慮しなくて大丈夫ですよ』って言っちゃうんですよね。それが一番いいかなと思うし*」

第６項　タイと日本の比較　―当事者の社会的包摂ために―

O さんは、自らのタイでの経験を通して、タイではセクシュアル・マイノリティ当事者がありのままで受け入れられているのに対し、日本では当事者は社会制度に適合しないとありのままでは受け入れられないという違いについて語られた。社会制度がなくても当事者の社会的包摂は可能なのではないかという主旨の語りである。その部分の語りは、以下の通りである。

「*ちょっと話ずれますけど、（筆者が：筆者註）タイに行かれた時にどう感じたかちょっと分からないですけど、タイっていう国がなんかすごいなと思うのは、全くそのへん歩いてる人達で、何だろう･･･、差別というか、違った目で見ないですね*」

――そうですね。男同士で肩組みながら歩いてるとか。あとは、トランスジェンダーっていうか女装した人も割といますし。

「*そういう方が全然平気で、化粧品屋で働いてたりするじゃないですか。だから、そのへんがもう、社会的に受け入れる文化があるから。だからなのか、日本みたいに、日本は先に、性同一性障害の人の戸籍（の性別：筆者註）を変える法律を作りましたけど、タイはいまだに戸籍を変える法律はないんですね。あんだけ性転換の医療技術が発達してても、戸籍を変える法律はなくて。だから、なんでだろうなと思ってすごい考えていたんですけど、別に働けるし、社会的にもそういった人たちを受け入れてくれるから、わざわざ（名前や性別を社会制度的に：筆者註）変える必要がないんだろうなと思ったんですね。日本は逆に、『性同一性障害です』っていう診断書とか、『戸籍変わりました』といった書類*

がなければ、社会的に認められないから先にこういうのを作ったのかなと思っていたんですけど」

――それはありそうですね。日本人は「お墨つきをもらう」とか、「役所から証明書を出してもらう」とか、けっこう好きなんでしょうね。

「*うん。だから、そういった診断書、証明書を先に法律で作ったのかな。そういうのもなければ、タイみたいな国だったら、たぶんこういった労働環境とか、LGBT の就職問題とかも、別に問題にならなかったと思うんですよ。普通に就職できちゃうわけだから。だから、そういうふうになればいいのになぁってちょっと思うんですけど。まあ、それがイコール配慮とかそういう問題じゃない。（配慮：筆者註）しなくてもいいというか。みんな、個々の人間性というか性格を重要視してるだけで、性別は関係ないような感じだし。タイだと性別以外にも、人種的なものも混ざってるみたいで。だから寛容なのかと思って。性別どころじゃないというか、文化の違いも昔から多様性として受け入れているから、『性別なんか』ぐらいの感覚なのかもしれないですけど*」

第４章　　考察

本章では、前章でまとめた 13 人のインタビュー調査を横断的に分析し、セクシュアル・マイノリティ当事者に「生きづらさ」をもたらしている原因や社会構造について考察する。第 1 節と第 2 節では社会生活や社会制度に起因する「生きづらさ」について、第 3 節と第 4 節では人々の意識からもたらされる「生きづらさ」について考察する。なお、本章での語りの引用は、前章での語りを要約して用いる。

第１節　　就職活動と職場環境に関する世代間の語りの違い　―「性同一性障害」概念の有無―

インタビュー調査では、就職活動の場面と就職後の職場環境で困難に「直面した」当事者と「直面しなかった」当事者がいた。そして、筆者は、その違いは「性同一性障害」という概念が社会一般に知られた存在であったかどうかという時代背景によってもたらされたことを発見した。つまり、就職活動や職場経験を「性同一性障害」概念の出現より前に行ったか後に行ったかという違いによって、異なる事象が発生した。インタビュー調査において分析できたこととして、就職活動を「性同一性障害」概念の出現より前に行った当事者からは「困難には直面しなかった」という主旨の語りが、就職活動を「性同一性障害」概念の出現より後に行った当事者からは「困難に直面した」という主旨の語りが聞かれた。就職活動に関する語りについては、第 1 項にて詳細に考察する。そして、就職後の職場環境については、「性同一性障害」概念の出現より前に就業した当事者からは「困難に直面した」という主旨の語りが、「性同一性障害」概念の出現より後に就業した当事者からは「職場にも当事者がいたので助かった。当事者性を生かして活躍の場が与えられた」という主旨の語りが聞かれた。職場環境に関する語りについては、第 2 項にて詳細に考察する。

日本において「性同一性障害」概念が社会一般に知られるに至った時代背景は以下の通りである。第 1 章でも述べたが、Gender Identity Disorder (GID)の和訳である「性同一性障害」という医学概念が日本において知られるようになったのは、1990 年代半ばとされる。きっかけは、1992 年に戸籍上は「女性」だが「男性」への移行を希望する患者が埼玉医科大学医療センターを受診したことであった。1997 年には日本精神神経学会によって「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」が策定され、1998 年に「日本初の公式な性別適合手術」が行われた [GID（性同一性障害）学会, 2018, ページ: 42-43]。当時の新聞記事には、同大の倫理委員会によって「性同一性障害」と認められた患者へどのような経緯で「性別適合手術」が行われ、医療的に制度化されていったのかについて、次のように書かれている [朝日新聞, 1998]。

「医学的な配慮と倫理にそって一歩一歩踏み固めた結論だ。倫理委としての結論には自信を持っている」――。十二日、性同一性障害の患者に対する性転換手術の実施を承認

した埼玉医科大学倫理委員会委員長の山内俊雄教授は、会議後の記者会見で語った。同大学の医療チーム「ジェンダークリニック委員会」（委員長・安倍達教授）が出した手術申請が条件付きながら認められたことで、国内で初めて大学の倫理委が承認した医療行為としての性転換手術が、実施へ向けて動き出した。
山内委員長は会見で「基本的には倫理委の答申や学会の指針に沿ってよく検討され、各段階を踏んだ上で申請が出された」と評価した。その上で、患者を精神的に支える態勢の充実など、手術後の管理や支援をより徹底させる条件をつけた上で、倫理委のメンバーが全員一致で手術の実施を承認したことを明らかにした。
一方、戸籍の問題について山内委員長は「これは社会秩序の問題ともからみ、そう簡単には解決しない。しかし、それらの問題がすべてクリアされるまでことを進めないというのもどうか。こうした事例が積み重なれば、法のあり方も問われ直すだろう。前向きな一石を投じたと考えている」と説明した。
このような法的な整備は、性同一性障害に悩む人にとって、真の人格を取り戻すための大切な問題。医学がここまで来た以上、日本でも憲法第一三条に規定された幸福追求権に基づいて、法整備を進めていく必要が出てくるだろう。

1990 年代の時点では、日本で「性別適合手術」を実施する医療的な制度は確立されたものの、戸籍の性別変更など法的な制度については「事例が積み重なれば、法のあり方も問われ直すだろう」として制度の変更には至らなかった。

2001 年 5 月 24 日、トランスジェンダー当事者の虎井ら 6 名によって、家庭裁判所へ戸籍の性別訂正を求める一斉申し立てが行われた。しかし、それに対しては却下が相次ぎ、判決文中に「法律の制定が必要」といった趣旨のことが書かれ、マスコミ報道がなされたことで、法律制定を求める世論形成が高まることとなった。

同年 10 月 11 日から翌 2002 年 3 月 28 日にかけて、TBS で「3 年 B 組金八先生第 6 シリーズ」が放送され、性同一性障害の主人公が描かれた [TBS, 2020]。この番組放送も、日本において「性同一性障害」という概念が社会一般に知られるようになるために多大な影響を与えたものと思われる。

2003 年 4 月には性同一性障害であることを公表した上川あやが世田谷区議会議員選挙に立候補し、当選した。このことは広く報道され、政治的にもインパクトのあるニュースとなった。以後、多くの国会議員が性同一性障害の問題に関心を持ち、6 月 11 日には法律案が提示された。その法律案の要件が厳しいと当事者から反対が出たものの、野党もおおむね賛成する中で、7 月 10 日には「性同一性障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律（通称：性同一性障害特例法）」が成立した（2004 年 7 月 16 日施行）。法案提出後まもなく成立に至ったことから、「スピード可決」と評価あるいは揶揄された。当時の社会状況について、政治学の研究者である竹田香織は次のように述べている [竹田, 2009, ページ: 98]。

当事者や社会学者において、特例法に対し、無条件で評価するというものは、管見のかぎりではほとんどない。その問題点を指摘する声はやはり多いのである。

司法も行政も対応できない状況の打開は立法によるしかないが、世論の関心、議員立法の機運が高まっていた 2003 年の第 156 回国会の機を逃せば「この先当分のあいだ絶望的になる」（上川）。そうした、当事者全員を相変わらず社会制度の埒外に留まらせ、依然として誰一人救われない事態を回避するためには、批判点のある要件の削除を求めるよりも、法案を通すことを優先させる方が「現実的かつ唯一の選択肢」であり、「苦渋の決断」であったと考えられた。

この記述からも、当時の当事者たちは性同一性障害特例法の成立を無条件に喜んでいたわけではないことが理解できる。しかしながら、従来の「性別には男か女しかなく、かつそれは出生時の外性器の形状によって決まる」という単純で固定的な性別概念に対して、「途中で変化することもある」ということを、法的に正式に制度化されたことの意義は大きい。[GID（性同一性障害）学会, 2018, ページ: 216-218] [GID（性同一性障害）学会, 2018, ページ: 231-233]。

第１項　就職活動に関する語り

本項では、E さん（30 代）、L さん（50 代）、M さん（60 代）による就職活動に関する語りの違いに着目して考える。

E さん（30 代）：

「*最初の 40 社ぐらいは、トランスっていうことを書いて、履歴書に男性って書いて応募したんですよ。そうしたら、全部にべもなくダメだったんです。そもそも面接まで行かないし、面接をしてくれたところは、履歴書の受け取りと面接試験が同時だっただけ。その時も、男性の履歴書出して事情を聞いてもらうと、当然にべもなく全部切られて、2 次面接以降に進んだことが一回もなかった。それで、まず露骨にこの情報が足を引っ張っているということに気がついたので、残りの半分ぐらいを女性で出したんですよ。そうしたら、けっこう通るんですよね。履歴書を出したところでも、『一次面接に行って下さい』と言われるし、一次面接に行ったところでは『二次面接に行って下さい』と言われるし、露骨に通るようになって。それで、はっきりと私の目には、『ああ、これは就職上の差別というものが存在するのだ』ということが、もう露骨に分かりましたね。（中略）*

私が履歴書に性別を男性と書いて、GID であるということをカミングアウトした上で応募したのはリーマンショックの前だったんですよ。リーマンショック前で 1 社も通らない、一次も通らないっていう状況だった。で、途中から、私が性別を隠して（就活を：筆者註）始めたのは、リーマンショック後だったんですよ。つまり、その時に企業はどんどん門を

閉めていってた。企業も採用人数をどんどん絞っていった。なんだけど、その後に始めたことなのに、就活をすると通るんですね、もう本当に露骨に。（中略）

リーマンショック後に内定取り消しがいっぱい出て、悲鳴が上がったような感じの世界観の中で、ちょうど私は就活をやったんですよ。まず、男性としてやったら、リーマンショック前だったのに 1 個も通らない。で、リーマンショック後に『もうこれはリーマンショックも起きたし、そんなこと受け入れてくれるところとか言ってる場合じゃないんじゃないか』っていうのもあって、とりあえず女性として応募したら、まだ門を開けていたところはまあまあ通るようになったんですね。一次から二次に行ける。場合によっては二次から三次に行ける。内定はなかなか出なかったけど、とりあえず通るようになった。今まではにべもなく完全に断られて、全部ぶった切られていたのに。それで、露骨な就職差別を感じつつもとりあえず、最終的には 2、3 件内定を取った。それで、そのうちの 1 社に後から打ち明けたんですよね。で、打ち明けたら『内定取り消し』ということで、結局、就職できなかったんですよ。（中略）

就職活動の面接って、だいたい複数人でやるわけですよね。3、4 人とかで。最初、履歴書を相手に出して、自分が何を抱えているのかということを自分で話さなくてはならない。それって、周りの人も聞くわけで、アウティングも強要されちゃっている感じですよね、形としては。それが、もうつらくてつらくて。履歴書に毎度毎度『男』と書いて、自分の状態とか病状を説明するわけですよね。それって、自己アピールする場を、既にそこで削られているんですよね。『自分にはこのようなハンディがあります』ということをまず書かねばならない。そもそも自然に『GID はいっぱいいるよ、当然だよね』っていう話になっていたら、そんなこと書かないじゃないですか。

仮に、ハンディがあってもしっかりその人の能力で見ようって（企業側が：筆者註）思っても、ハンディがあるということを書かねばならないということは、その分文字数が削られてしまうわけなんですよね。それって、既にそこですごい格差がある。『じゃあ、何も書かずに行ったらどうなの？』とか『じゃあ、こういうふうにしたらいいんだよ』というモデルを提示できる人はどこにも存在しない。少なくとも、今でもまだ存在しないはずですね。性同一性障害の人、性別違和の人が就活の履歴書を書く時にどうしたらいいのかの作法なんて、どこにも載っていないですから。相手はたぶん性同一性障害というのはハンディと捉えて、しかもそれに対してなにかの保護（策：筆者註）を打ったところで、なんの得もないハンディとしか捉えていなくて、普通に私は切られたんだと思うんですけど。

面接で、自己アピールを一番できる場で、自分のハンディについて話さなくてはならない。何十人も面接官のいる場で、自分の貴重な 3、4 分ぐらいをそこに取られるわけです。仮にきちんとした採点の基準が企業側にあったとして、『こういうことができたら 1 点』みたいに加点式に採点したとしても、自分のハンディをまず相手に説明するということが入るので、明らかに点数的には低いところからのスタートになっていますよね」

L さん（50 代）：
――就活の際に直面した困難というのは、何かありますか？

「*それは、単純に学力。だって、採用試験に通るかどうかの問題だから。私が就職する時点では全くトランスジェンダーとは関係ない*」

――じゃあ、L さんのジェンダー、セクシュアリティで何か引っかかってということはない？

「*ない。その頃は自分のことを男だと信じてましたから、全然ないです。私らぐらいの年代って、そんなもんでっせ。だって、自分自身が性的マイノリティと思ってないじゃないですか*」

M さん（60 代）：
「*その頃まだ、今でこそね、性同一性障害を表にしてっていうようなことができるようになってきた時代ですけども、その頃はもうとてもとてもそういうことすら考えられなかった時代なので。当時の人は、皆そうやと思いますよ。で、結局、女性として生きていこうとしたら、そういう世界しかなかった。いわゆる水商売。そういうところしか勤め先がなかったね。まともな会社は取り上げないわね、そういうところへ就職できないのよね。そういう例なんてなかったし、まだまだ。世間が全然*」

――夜の水商売の世界しかない。

「*はい。しかないっていう時代だった*」

E さん（30 代）と、L さん（50 代）・M さん（60 代）の語りには、顕著な違いが発見できた。L さんと M さんは近い世代であり、「就職活動では性同一性障害ということは問題にならなかった、できなかった」という主旨では共通している。

E さん（30 代）が就職活動した時には、既に「性同一性障害」という言葉は社会的に認知されていた。E さんにとって、自己が「性同一性障害」であることは、就業に際して相手方に知らせる必要のある事項であった。しかし、「自分はそれに該当する者です」と説明すると面接官によっては「抵抗感」を感じてマイナス評価を下したり、他の志願者が自己アピールをしている間に当事者は「性同一性障害」の説明に時間を取られたりしてしまう。就職活動する当事者にとってはジレンマなのではないか。「ひとりあたり同一の面接時間の中でカミングアウトしていると自己アピールする時間を減らしてしまう」ということは、当事者にとっては構造的に不利である。それは、カミングアウトしやすくなった昨今だか

らこそ、新たに発生した問題と言えるのではないか。つまり、時代的にカミングアウトしやすくなったとはいえ、それを聞く全ての人々が肯定的に受け止めるとは限らない。また、自己アピールするための発言時間が短縮されてしまうと、面接試験において公平な評価基準があったとしても、加点のチャンスを逃してしまうのだ。

皮肉なことに、筆者が第 1 章において連合の資料を引用した箇所で述べた「役職が上がるほどトランスジェンダーが抱える課題を認識しているが、トランスジェンダーに対して抵抗を感じる人の割合も高い」という分析とも合致してしまう。通常、2 次面接や 3 次面接に進むと管理職が面接官を務める場合が多い。管理職の「抵抗感」によってトランスジェンダーの就活生が不利な状況に置かれているならば、それはトランスジェンダー当事者にとっては「生きづらい社会構造」であり、社会全体で啓発活動などによって改善を図るべき課題ではないだろうか。

L さん（50 代）が就職活動した時には、自分がトランスジェンダーであることにも気がついていなかった。そのため、就職活動で相手方に説明しようもない事柄であり、L さんにとって就職活動の障壁になったわけではなかった。その後、L さんは教職員劇の「ホモネタ」の台本を書く過程において「*自分がトランスジェンダーだと分かった*」と語った。

M さん（60 代）の語りから見えてくることは、「性同一性障害」が可視化される以前の時代の「生きづらさ」である。当時は「性同一性障害」概念が存在していなかったため、当事者が面接の場で「私は性同一性障害者です」と発言することはそもそもあり得なかった。実際には性別違和を抱えた人や性別移行を望む人は存在したが、そのような人々はいわゆる「夜の世界」で働くしか選択肢がなかった。一般的な企業にそのような人々が就職することは想定されていなかった。そのため、自己がそのような存在であることを明らかにすることは無理であり、「クローゼットな存在」として生きていかざるを得なかった。このような社会状況であったことは、当事者本人にとっても社会にとっても大きな損失となってしまったと考えられる。

第２項　職場環境に関する語り

本項では、C さん（30 代）、E さん（30 代）、J さん（60 代）、M さん（60 代）、N さん（50 代）による職場環境に関する語りの違いに着目して考える。

C さん（30 代）：

「*今の職場の上司がものすごい理解があるというか、たぶん私よりは LGBT に詳しい方なので、今、普通に X ジェンダーとして働けています。*

パートさんの一部にはカミングアウトしてるんで、一回ホルモンバランスが崩れて、だいぶ女のほうに傾いたことがあったんですけど、生理が戻ってきたり。で、その時にどっちに思われてるのかなと思って聞いたら、『みんなアナタのことはホモだと思っているから、大丈夫だよ！』って、すごい勢いで慰められたことがあって。まあ、ホモっていう言い方

はしないけど、職場のゲイの先輩がいるんで、『アナタのことはみんな、誰々さんの系統だと思っているから！』って言われて」

E さん（30 代）：
「私、今の会社で、LGBT のアウティングに対する対策であるとか、面接の時のルールとか、そういったことを決めるワーキンググループに入って、サブリーダーを務めているんですね。（中略）
『E さんという当事者がガイドライン班に入ってバリバリ働いているらしい』という話が社長の耳にも入り、『せっかく当事者が来たんだから LGBT の働き方を煮詰めてくれ』と、社長からガイドライン班に依頼があったんです。で、私は LGBT の働き方を、自分ひとりでやるのは良くないと思ったので、私を含めて 3 人の当事者がいたことは知っていたんで、私から当事者仲間に声をかけて『集まるようにしたい』と言って。それで新たに始まったのが、『LGBT 対策をやるガイドライン班』ということで、昨年 1 年活動し、今年から私がサブリーダーになったという経緯で、働き方を整えているところなんですね。
あともうひとつ、社長から『アウティング防止のガイドラインを作ってくれ』っていう要望があったんですね。私もそれには大いに賛成していて。そうなると、LGBT 当事者ではない、受けに来た人にも情報がいく。その人たちに対する啓蒙にもなる。『LGBT という人たちがいる、アウティングというのはこういう行為である、アウティングはしてはならない』ということが伝わるように作成しました」

J さん（60 代）：
「付き合いの長い人は知ってるけど、今更、話題にはできない。怒らせると怖いから。それも、会社のスキルと一緒でしょ？　損になることをせえへんでしょ？
だから、ほぼ同じくらいの年代の人は、昔の私を知ってる。けれど、今新しく行ってる会社で、他の人はたぶん知らない。たぶん知ってる人も言わない。問題があったのは、カミングアウト直後。やっぱりこう、話題にするんですよね。で、同じ業界で同じ仕事しながらっていうと、ネタにされるのはしゃあないんやけど。それにも耐えて（笑）。
本当に近くで仕事してる人は、割と気を遣ってくれる。ちょっと離れたところの人が、一番良くないかな。野次馬的に見て、自分と仕事が関係ない人って、そんなことを言う人が何人かいた。でも、そんなに多数派じゃない」

M さん（60 代）：
「だけど、会社ではだんだん『やっぱりアイツ変やで』っていうことになってきて、いわゆるいじめみたいな感じで、今で言うたらパワハラとかっていう、だんだん居づらくなってきたんよね」

N さん（50 代）：
「*＊＊年前、その時の上司、＊＊さんっていう方なんですけど。この登録、3 年に 1 回申請しないといけないんですけど、申請用紙が来たんですよ。で、詳しいことを書かなきゃいけなくて、『あ～、そうか。来たか。どうしよう･･･』と思ったんですね。その時は治療始まってたので、もうさすがに女性って書けないな～と思って、すごい悩んで。その時の上司が＊＊さんだったから（この職場に：筆者註）居れたっていうのあるんですけど。＊＊さんに、『これ（申請用紙：筆者註）、女性で出すのはできません。今ちょうど治療中です』っていう文章も書いて。それで、＊＊さん、すぐに人事に掛け合ってくれて。そしたら、人事も『それは対処しないといけないことだよね』って言ってくれて。『男性の N さんで、新規登録になります』って言われて*」

このように、C さん（30 代）、E さん（30 代）、J さん（60 代）、M さん（60 代）、N さん（50 代）の語りを比較すると、「性同一性障害」という概念が社会一般に知られた存在であったかどうかという時代背景が、違いが生じた一因であることが発見された。

C さん（30 代）と E さん（30 代）は、当事者であることが職場で肯定的に認識され、受容されている。N さん（50 代）も、職場で登録する性別を変更する際、既に「性同一性障害」という概念が知られていた時代背景に加え、上司が理解のある方だったことによって大いに助けられたと語った。

J さん（60 代）が性別移行した時期は、「性同一性障害」という概念が知られる以前であった。J さんは「*今更、話題にはできない。怒らせると怖いから*」と語られたが、「戦略的カミングアウト」によって少しずつ理解者を増やしながら自身が望む性別移行を達成した。M さん（60 代）は、会社に薄化粧で出勤していた当時、差別的な発言を受け、だんだん居場所を失ってしまった。もしその当時「性同一性障害」という概念が社会一般に知られた存在であれば、同僚の反応も違っていた可能性があると思われる。

「性同一性障害」という概念の有無が周囲の人々の対応に影響を与えたと思われることについては、第 1 章で引用した東の言説にも当てはまる［東, 2018, ページ: 22］[29]。

現在でも、「性同一性障害」の診断書がなければ「合理的配慮」の対象にならないという学校や職場は多いのではないでしょうか。

ある概念が社会で一般的に知られるようになったので、職場でもそれにふさわしい配慮がなされるようになったということは容易に理解できることである。例えば、バリアフリーの概念は、社会的に知られるようになり、その後、公共施設や企業などのインフラ整備の際に生かされるようになった。

[29] 第 1 章 24 ページ

第３項　「在職トランス」について　ー訴訟事例との比較ー

本項では、J さんと L さんによって語られたいわゆる「在職トランス」について、訴訟事例との比較もしながら、どのようにすれば在職のまま円滑に性別移行していけるのかについて考察する。

J さん

「*戦略的にトランスしました。何も考えずにやってたんじゃなくて、外堀から埋めていくとかさ、賛同者を増やしてから最後に（会社の中枢に：筆者註）上げるとかさ、ということをやりました*」

L さん

「*女性の教職員にだけ『女性トイレとロッカールームを使いたい』って申し出をした時に、養護教員が私のことをサポートしてくれていたので、その人が音頭を取って『じゃあ、みんな集めるわ』『ありがとう』言うて。で、その時だけはちゃんと話ししました*」

ここで、「経済産業省性同一性障害者職場処遇事件」の事例について考えてみたい。（2019 年時点において：筆者註）40 代の経済産業省職員であり性同一性障害者である X さんが、職場に「私は性同一性障害です」という説明をした上で、プライベートな生活で徐々に男性から女性へ移行した。そして、職場との協議を経て、2010 年から女性としての勤務を開始した。しかし、何年も経って女性として職場生活を送ることに馴染んでいるのに、職場は X さんに女性用トイレの使用を認めないことは違法だとして訴訟を行っている「在職トランス」の事例である。事案の概要は以下の通りである[30] [LGBT 法連合会, 2019, ページ: 98-99]。

X は 40 代の経済産業省（以下「経産省」という）職員である。X は戸籍上の性別は男性であるが、性自認は女性であり、男性として入省後の 1998 年頃、性同一性障害との診断を受けた。その後、X は職場では男性としての勤務を続けながら、女性ホルモンの投与や女性の容姿に近づけるための手術を重ね、プライベートな生活では女性として過ごす

[30] この事案について、弁護士の永野靖は「*何といっても肝心なのは、（中略）性自認というのは個人の人格の核をなす重要な問題なのだということが一つと、もう一つはほかの同僚の女性が違和感を持ったとしても、理解をうながすことで解消されることであり、そもそも女性用のトイレは個室なのでいっしょになるのは共用スペースだけなのです*」と見解を示し、「*仮に女性用トイレを X と一緒に使うことについて同僚の女性職員が違和感を表明したとしても、まずは当該女性職員に対して性同一性障害とは何か、自認する性別で生きたいという要求の切実さ等について説明し、理解を求めることによって違和感が解消する可能性も十分にある。しかし、本件において経産省は違和感を表明したという女性職員に対して何らかの働きかけを行った形跡がない*」と、経済産業省の対応を批判している［LGBT 法連合会，2019，ページ：85，100-101］。

ようになり、女性として社会生活を送る経験を慎重に積み重ねた後、2009 年 7 月頃に経産省に対して女性として勤務したいと申し入れた。

X と経産省は約 1 年間話し合いを重ねた後、経産省側の要請によって所属部署の職員に対する説明会が行われ、X は 2010 年 7 月頃から女性としての勤務を開始した。経産省は、女性の身なりで勤務することや女性用休憩室、更衣室の使用、乳がんの予防検診の受診等を許可したが、女性用トイレについては当面の間、X が勤務するフロアから 2 階以上離れたフロアのトイレを使用するよう条件を付した（当時は障害者用トイレが工事中であった）。経産省は、他の女性職員複数名から X と同じ女性用トイレを使用することについて「違和感がある」という意見があったと主張している。

その後の X と経産省との協議の過程で、経産省は、X が性別適合手術を受けて戸籍上の性別変更手続をしないのであれば、今後の異動先において X が性同一性障害を有し戸籍上の性別が男性であることの説明会を開いて同僚の理解を得ること、説明会を行わないのであれば、女性用トイレの使用は認めず障害者用トイレを使用することという異動に際しての条件を示した。X は、このような異動条件を撤回するよう経産省と話し合いを続けたが、異動条件の撤回はなされなかった。そのため、X は現在も同じ部署で勤務し、2 階以上離れたフロアの女性用トイレを使用している。また、経産省が上記処遇をあらためず、また、上記協議の過程における経産省管理職の「なかなか手術を受けないんだったら、もう男に戻ってはどうか」等といった発言によって、X は精神的に追い詰められて抑うつ状態となり、2013 年 2 月から約 1 年 2 カ月の間、休職を余儀なくされた。

このような処遇を改善するよう、X は 2013 年 12 月に人事院に対して行政措置要求（職場の処遇改善を申し入れる制度：筆者註）を行ったが、同院の判定は X の要求を退ける内容であったため、X はこの判定の取り消しを求めて 2015 年 11 月 13 日に行政措置要求判定取消請求訴訟を提起するとともに、上記処遇や経産省管理職の発言が安全配慮義務違反や人格権違反に該当するとして国家賠償請求訴訟を提起した。

なお、X は健康上の理由から性別適合手術を受けられず、戸籍上の性別変更手続ができないまま現在に至っている。

J さんと L さんは、ともに職務を十分に果たし同僚の理解や協力を得て、在職のまま性別移行することに成功した。しかし、最後まで残る問題は、周囲の非当事者の「違和感」だと思われる。当事者が適切に説明を行っても、周囲の非当事者が「受け入れることに違和感がある」と表明した場合には、どのようにするべきなのであろうか。当事者側の努力によっては、相手の気持ちを変えることは難しい。これは、なかなか解決しづらい課題であると思われる。

第２節　　社会生活や社会制度に起因する「生きづらさ」

前節では就職活動や職場環境における「生きづらさ」について考察した。本節では、そ

れ以外の社会生活や社会制度における「生きづらさ」について考察する。

第１項　学校生活に関する語り

インタビュー調査では、学校生活の中で「生きづらさ」やジェンダーギャップを経験したという語りが数多く聞かれた。

A さん

「*小学校高学年の頃に、あの頃は赤というのはまだ女の子の色だったんですね。ウチの小学校は、男の子は青い体操服でした。でも、たまたま近所のお姉さんがもう中学校にも行ったということで赤い体操服を下さったんです。それは、とても嬉しくて。青いのは着たくなかったので、赤い服を自分が着るチャンスが回ってきて、体操の時間に着替えたら、みんなから『何だそれ？　女のじゃねーか』と言われたんです。先生も『何だ、それは！それは女の子のじゃないか』って言われてしまった。それで、『あ、これはしてはいけないことだったんだ』ということにやっと思い至ったんですが、それがすごくショックで*」

B さん

「*私は＊＊神学校を受験した。面接試験をした教師が、私に『あなた、＊＊神学校のほうが向いているんじゃないですか？』って言ったの。私がセクシュアル・マイノリティとして、女子寮に入りたいとか、お風呂にしてもトイレにしても女性として扱ってもらわなきゃ困るとか、そういう要求を出したことに対してね、『面倒臭いな。またこんなややこしい奴が来た』と思ったんだと思う*」

G さん

「*プールの授業とかも普通にやってたんですけど、段々イヤになっちゃって。で、見学とか。胸もちょっと出てきたりとかしちゃったんで。『なんだよ、オマエ、オカマだから海パンになれないのか？』みたいな感じで言われたり。腹が立つから、先生の制止を振り切って、『オレ、プールの授業出るから！』『ダメだ。オマエは出るな！』みたいな感じで言われたり。*

受け入れてくれる高校がなかった。進学の時期になったら、成績とか内申どうのこうのじゃなくて、公立高校は『前例がない』、私立高校でも『そういう子を扱ったことがないんで、何か起こった場合に責任が持てない』とことごとく断られて、行く高校がなかったんです。中学３年の担任が『普通の子と同じ、男子と同じ生活ができない。だから、そこのところを考慮して、よろしくお願いします』というのを全部内申書に書いてくれたんです。でも、高校のほうとしては、『そんなのが来られても施設的にどう使わせていいのかも分からないし、どう扱っていいのかも分からない。だったら来させないほうがいい。扱

いが困るから、ちょっと遠慮願います』みたいな感じ。公立高校も私立高校も全て断られた」

J さん

「*自分の所属するジェンダーの中で見られる自分の価値観を高めたいっていう意識はあった気がする。高学年では『家庭科では負けたくない』とかね。せやけど、家庭科の先生は絶対に『5』をくれない。そこは、えこひいきする。ジェンダーギャップっていうのか、先生としては、やっぱり家庭科っていうのは女子の科目やから、女子にやっぱり点をつけてあげたい。それで、いくら頑張っても『5』はくれなかった。『しゃあないなぁ』と思いつつ*」

K さん

「*女子高に行ったんですけど、もう地獄ですね、女の子しかいないんで。中学よりも高校なんかは、女性は化粧の話とかね、そういうことが中心になってきますんで。あと、女子高なんで、包み隠さず･･･。もう悪魔の城ですよ（笑)。女の子ばかりの中で 1 人男だっていう（笑)。恐怖ですね、はっきり言うたらね。ちょっと変な噂が立つと魔女狩りに遭うレベルですから（笑)。エグいですね*」

N さん

「*幼稚園のプールはすごいイヤでした。最後みんな裸になって泳ぐんですよ。『じゃ、みんな裸になって～。まず男の子、女の子』みたいな感じだったかな。もうとにかくプールで裸になったりするのがすごい嫌で。ちょっとよく分かんなかったけど、その時は。女の子であるっていうのは、なんか嫌な感じはしました。*

女子高には何の違和感もないです。ただ、家庭科の授業だけはものすごい嫌でしたね。『女性は子供を持ってね･･･』とか、『お母さんになったら･･･』とか、そういう授業だけは吐き気がするほどイヤでした」

O さん

「*男子、女子で分けられて、保健の時間とかっていうの、全く話し聞いてなかった。生理の講習みたいなの（笑)。あれの時に、だから、もう分けられたことすら気づいてなかったんですよ。だから、『なんでこんな授業を受けなきゃいけないんだろう』みたいな感じで、全く話聞いてなくって。*

中高は生理を理由にプールは休んでました。水着着たくなかったので。ほとんど出てなかったですね。ただ、その点考えると、小学校まではけっこうプール好きだったんですね。泳ぐの早かった。だから、その時までは、違和感に気づいてなかったんでしょうね。水着を着てても、男性と思って泳いでたんだと思うんですよ。だから、見られてイヤだとか、

自分の体が恥ずかしいっていうのは気づいてないから、多分プール好きだったと思うんですよね」

従来、学校は科目ごとの授業を通じて児童、生徒、学生を教育する中で、「性別二元論」に基づく「性別規範」「性別役割分担」を教える役割も果たしてきた。学校は「性別二元論」という「正しいこと」を教えるという前提に立っているが、その「正しさ」の枠に収まらないセクシュアル・マイノリティ当事者にとっては学校の中には居場所がなくなったり息苦しさを感じてしまったりすることも多い。

性別役割が如実に表れる科目として「家庭科」が挙げられる。家庭科という科目は、「女性としての役割」が詰め込まれたものである。家庭科について、J さんからは「*家庭科では負けたくない*」という語りが聞かれた。しかし、N さんからは「*家庭科の授業だけはものすごい嫌でしたね。吐き気がするほどイヤでした*」という語りが聞かれた。家庭科を学ぶことは、女性ジェンダーを獲得したい当事者にとっては「憧れを体現できる」ものであり、女性ジェンダーから離れたい当事者にとっては「嫌悪感、拒絶感を感じる」ものとなる。つまり、目指すべきジェンダーの向きによって、家庭科を好きになるか嫌いになるかが分かれるものと考えられる。ちなみに、インタビュー調査では「技術科」に関する語りは一切出なかった。

「戸籍上の性別」によって男女別に分けられることから生じる「生きづらさ」についても語られた。A さんの「*体操服が男の子は青、女の子は赤と決められていた*」という語りや、O さんの「*生理の授業で、男子、女子に分けられたことすら気づいていなかった。（望まない性別の：筆者註）水着を着たくなかったので、プールの授業は休んでいた*」という語りは、学校という制度の中で「戸籍上の性別」に基づく「性別規範」にふさわしく立ち振る舞ったり必要な知識を身につけさせたりする「教育」が行われているということを示している。自分が望まない性別の制服、体操服、水着を着なければならないことは「性別二元論」の押しつけであり、性別違和感を覚える当事者にとっては苦しみである。つまり、学校はひとりひとりの学生にふさわしい教育を提供できておらず、教育としては逆効果をもたらしている。当事者の立場からすると、学校の授業によって「自分の望む性別」とは異なるものを「正しいこと」「規範」として押しつけられ、圧迫される。そのような圧力が学校にはある。そして、自分たちは「正常から逸脱している」者であることを認識させられるので、そのことが結果的に当事者にとっては苦しい「生きづらさ」になってしまうものと考えられる。

B さんの「*別の神学校のほうが向いているんじゃないですか？*」と言われた語りや、G さんの「*受け入れてくれる高校がなかった*」という語りは、学校側が「性別二元論」で括ることができないセクシュアル・マイノリティの入学希望者を排除した事例である。学校は「性別二元論」や「性別規範」に基づく場所であり、その規範から逸脱した当事者には居場所を提供できないということになってしまう。社会の中に一定数のセクシュアル・マイ

ノリティ当事者がいる以上、現在「性別二元論」に基づいて制度化されている学校教育というシステムについて、社会全体で問い直すべきなのではないだろうか。

しかし、近年、公立中学校での制服を性別に関係なく自由に選択できる自治体が出てきている。千葉県柏市［朝日新聞デジタル, 2018］、東京都中野区［朝日新聞デジタル, 2019］、沖縄県糸満市［琉球新報, 2020］での事例がある。

特に、琉球新報の記事では、女子の制服に違和感を覚える小学生からの相談をきっかけに、中学校のほうが性別に関係なく制服選択制を導入した経緯が書かれている。記事によると、当時、糸満南小学校 6 年生だった新垣祥子さんは「中学校に上がったら女子の制服はスカート」であることの悩みを抱えるようになった。新垣さんは小学校の担任教諭に悩みを打ち明けた。糸満南小と糸満中の教職員は新垣さんと両親と一緒に話し合いを重ね、制服選択制を導入することを決めた。新垣さんは「（選択制が決まった時は）とびきりうれしかった」と述べた。その後、2020 年 5 月 22 日、新垣さんは糸満中学校の入学式でも「めっちゃうれしい。学校へ行くのが待ち遠しかった」と述べた。この記事からも、性別によらず制服を選択できることは、性別違和を抱える当事者の「生きづらさ」を大幅に緩和できるものと考えられる。

また、戸籍上は男性だが自分の性別を女性だと認識しているトランスジェンダーについて、女子大での受け入れ検討が各地で広がっている［日本経済新聞　電子版, 2018］。記事によると、お茶の水女子大の室伏きみ子学長は記者会見で、性別には社会的、医学的に多様性があることが分かっており、トランスジェンダーの受け入れは「多様性を包摂する社会の対応として当然」と説明し、出願資格を「女子」から「戸籍、または性自認が女子の場合」に改めるとした。

このように、近年ではセクシュアル・マイノリティ当事者の学校への受け入れについては、柔軟に制度を変更する動きが見られる。今後、この動きが加速すれば、学校の制度面から生じる当事者の「生きづらさ」は軽減されていくものと期待される。

第２項　医療制度の利用に関する語り

インタビュー調査では、「医療機関にかかることに障壁がある」という語りが数多く聞かれた。

A さん

「ホルモン治療を始めた後、＊＊年くらいなのかな、健康診断証明書を取ってこなくてはいけなくなったんですね。その時はもう胸が膨らんできていてどうしようかなと思ったんですけど、病院に行って検査の前に、『すいません、女性ホルモンの投与をしているので、胸とか出ているんですけど、そのことはちょっと書かないでもらえるようなことはできますか？』ってお願いをしたら、『なにバカなことを言ってるんだ！　なにバカなことをしてんだ！』みたいな対応をされて、ホル注をしていることを否定されてしまった。『うわぁ～、

きついなぁ～』と思って。

私たちは（トランスジェンダー当事者は：筆者註）新しい病院に行くのは勇気がいるので、ホルモン注射しているということが『バカなこと』だという認識が割と年配の男のお医者さんには多くて。露骨にバカにされるような態度というのはよくありますね。

風邪で、あんまり内科には行かないようにしているんですけれども、どうしようもなくて行ったら、昔は『胸出して』みたいなことを言われましたが、『なんでボクは、おっぱいが出ているのかな？』みたいなことを言われて。『何、その言い方』と思って。そういうのは病院では割とたくさんあるので、病院はちょっと行きたくないなというのはあります」

B さん

「*私は＊＊市役所で最初に（国民健康保険証の：筆者註）性別の裏書きを要求した人なんですよ。国民健康保険を発行する窓口の人に『こんな経験は初めてです』って言われたの。でも、『そういうことがあるんですね。分かりました。今回、裏書きするようにします』って、裏書きしてくれたんです。それで、私が第 1 号だった。*

その後、その不快感というものが他のところでもあることが分かって。診察券の性別はだいたい M か F でしょ。ところが、私が行ってた＊＊大学付属病院は『男』『女』って漢字で表記する、珍しいタイプの診察券（笑）。私は事務の人に『私はトランスジェンダーだ』と言って、『この診察券に書かれている『男』とか『女』とかっていうのをなんとかして欲しい。そもそも、なんで診察券に『男』とか『女』が必要なんだ。必要ないでしょ。だって、磁気ネットに情報が入っているんだから。だからね、特段、名前だけでいいでしょ』と。それで、『拾った人が分からないから』みたいな言い訳を言うから、『そんなの、拾った人があなたのところに届ければ、すぐに分かる情報でしょう。そんな言い訳じみたことをして私をごまかすようなことをしないで』って言って。それで、3 ヶ月後にまた行って『あの話はどうなりましたか？』『いや、実はそんなことはしていないんだ。お金がかかるし、どうのこうの』って、いろんな言い訳をしてるわけ。私はひとつひとつ論破して、『おかしいでしょ、あなたの言っていることは。そんなことは磁気ネットでピッとやればすぐ出てくることなのに。『名前を入れるな』っていうのは困るかもしれないけど、生年月日とか性別は、なんでここに必要があるんだ。あなたたちの説明は、なんの説明にもなっていない』『他の人まで全部それをやるようになったら、膨大な変更費用が発生する』とか。

私は＊＊に引っ越してきた時、住民票を登録して、『実は、私は性同一性障害だ。保険証の性別欄はなんとか裏書きしてくれないか』ということを＊＊市役所でも言ったんですよ。そしたら、なんと、＊＊には既にそういうシステムが存在しています。『いや、大丈夫です。ウチではそういうふうにしています。そういうシステムは既にあります』って」

E さん

「*ある産婦人科さんに『こういう事情なんですけど、ホルモン剤を出して頂けないか』っ*

て相談に行ったんですよね。その頃は移行の過渡期だったんですけど、『じゃあ、ウチの病院で出しましょう』と。全く普通の産婦人科だったんですけど、そこを選んだ理由が、産婦人科と内科もやっていたところだったんですね。男性も内科の患者として来る。だから、私が昔の姿でも普通に入れる」

N さん

「自転車乗ってて車にはねられたことがあって。周りの人が救急車呼んでくれて『被害者の方は男性です』って言ってて、『え～っ、ちょっとどうしよう』と思って。救急車が来てから説明しなきゃいけないのは、足の痛さじゃなくて自分の性別みたいな。面倒くせえなと思って。ちょっと落ち着いてから、『戸籍は女性です』って話をして」

性別移行を希望するセクシュアル・マイノリティ当事者にとって、「性別適合手術」は獲得したい目標であり、日本でその手術を受けるためには医師からの「性同一性障害」という診断が必要である。その意味において、当事者にとって医療機関は「頼みの綱」である。欧米においては Gender Identity Disorder (GID)という疾患名は当事者から不人気だったとされる [針間, 2019, ページ: 98]。しかし、日本のセクシュアル・マイノリティ当事者を対象とした本研究のインタビュー調査では、その和訳である「性同一性障害」という用語を否定的なニュアンスで使ったり、使用を避けたりしたインタビュー調査協力者はいなかった。例えば、「性同一性障害というカテゴリーに入らなければならないことは苦痛だ」とか「障害という枠に当てはめられることは苦痛だ」のように語ったインタビュー調査協力者はいなかった。それは、第 1 章でも述べた通り、現在の日本において学校や職場で「合理的配慮」を求めるためにも、「性同一性障害」の診断書は有利に作用することも一因であると考えられる。

しかし、同時に、当事者にとって医療機関は「行きたくない場所」でもある。A さんが風邪をひいて内科を受診した際の語りをはじめ、当事者が医療機関で不快な経験をした語りも多く聞かれた。N さんの救急車搬送に関する語りでも、本来訴えたい「足の痛み」ではなく、「自分の性別」を説明することに苦労を強いられた。それは、ジェンダー科、泌尿器科、産婦人科などの一部を除き、一般的な医療機関は「性別二元論」を前提として制度化されているためだと考えられる。セクシュアル・マイノリティ当事者の存在が考慮に入れられていないため、このような不便や不快な現象が生じるものと考えられる。

第３項　公的な身分証明に関する語り　―公的制度の運用柔軟化と社会の意識改革の必要性―

インタビュー調査では、「公的な書類に記載されている性別によって生きづらさが生じた」という語りが数多く聞かれた。それに関連して、「戸籍をはじめとする社会制度上の性別変更やトイレなどのインフラ整備よりも、社会全体の人々が多様性を受け入れるように意識

改革に取り組むほうが大切」という語りも聞かれた。

E さん
「*私はゲームセンターにパートに行ったんです。ゲーセンは身辺のことに関してそんなにちゃんとしていないというのは知っていたので。身分証明も口座があれば良かったんですよね。これも厄介なことなんですけど、性別欄が入ってない身分証明書は当時、免許証しかなかったんですよ*」

H さん
「*『トランスすることが普通にあり得ることなんだ』っていう意識、コンセンサスができていれば、だいぶ違うと思います。あり得ないと思っているから、みんな戸惑うわけじゃないですか。だから、職場の意識ですよね。特に中高年のおじさん達の意識でしょうね。意識改革っていうのは大きいと思いますね。意識が変われば、ハードウェア的に整備すべきことっていうのは、たぶんケースバイケースで、具体的にやっていけばいいことになっていくと思います*」

L さん
「*戸籍制度を叩き潰すまでは、私は性別変更しない。だって、戸籍制度で苦しんでいる人が何万と、外国人であるとか、部落であるとか、たくさんいるわけですよね。私にとって部落は身近な存在で、『ごめん、自分だけそっち行くわ』って言えませんやん*」

O さん
「*タイっていう国がすごいなと思うのは、差別というか、違った目で見ないですね。そういう方（トランスジェンダー当事者、女装者：筆者註）が全然平気で、化粧品屋で働いてたりするじゃないですか。社会的に受け入れる文化があるから。日本は性同一性障害の人の戸籍（の性別：筆者註）を変える法律を作りましたけど、タイはあんだけ性転換の医療技術が発達してても、戸籍を変える法律はなくて。別に働けるし、社会的にもそういった人たちを受け入れてくれるから、わざわざ（名前や性別を社会制度的に：筆者註）変える必要がないんだろうなと思ったんですね。日本は逆に、『性同一性障害です』っていう診断書とか、『戸籍、変わりました』といった書類がなければ、社会的に認められないから先にこういうのを作ったのかなと思っていた。タイだったら、LGBT の就職問題とかも、別に問題にならなかったと思うんですよ。普通に就職できちゃうわけだから*」

E さんの語りは、公的書類に「戸籍上の性別」が記載されていることが「外見上の性別」と異なるトランスジェンダー当事者にとっては不都合であり、「生きづらさ」をもたらしていることを示す事例である。正社員として就業する際には、一般的には会社から住民票

などの提出を求められる。しかし、それは当事者にとっては苦痛である。例えば、戸籍上の性別が男性の人が「女性」として就職活動して入社する場合、住民票を提出すると「戸籍上の性別と外見の性別が違う」という問題が生じる。就職活動の段階でカミングアウトするかどうかについては、個々の会社によって受け止め方が異なると考えられ、時代背景によっても異なるだろう。第 3 章で E さんが語ったように「*自己アピールする場を削られる*」という問題も生じる。この問題を避けるために、当事者は「正社員としての就職を避けてパートやアルバイトの職に就く」という選択をする場合がある。第 1 章で引用した虎井の経験も、同様のことを伝えている［虎井, 2003, ページ: 70-71］[31]。

> 大学卒業後の男としての仕事（住民票を出さねばならなかったのでアルバイトしか出来ませんでした）先でも無論、心と身体の生活上の性別通りに、男子更衣室と男子トイレに入っていました。（中略）その会社では何度も正社員になるように誘われましたが、書類上の性別の問題があるために断り続けていました。（中略）しかし過去においても明らかであったように、全ての不都合が書類上の性別から生じているのです。就職・結婚・転居・通院・海外渡航・投票・通帳や年金手帳や図書館カードやレンタルビデオ会員証作成に至るまで、一事が万事不都合だらけなのです。不都合で済めばまだマシですが、生命を危険にさらすことにもなるのです。

「書類上の性別」に関して、現在の日本では「性同一性障害の診断書」は、医師という権威から付与される「お墨付き」の役割を果たしている。これについて、第 1 章でも引用したが、東は医師の診断が当事者の社会生活に与える影響について、次のように説明している［東, 2018, ページ: 22］[32]。

> 現在でも、「性同一性障害」の診断書がなければ「合理的配慮」の対象にならないという学校や職場は多いのではないでしょうか。

当事者は「性同一性障害の診断書」があれば、非当事者に対して合理的に説明することができる。逆に、診断書がなければ、「自分は性同一性障害の者です」と説明をしても説得力がない。つまり、本人が発する言葉よりも、書類のほうが信用される。そして、第 1 章で鶴田の論考を見た通り、その診断書の有無によって「正当な当事者」という基準が発生し、当事者同士に分断を招いた。当事者にとっては、診断書を取得できれば「生きやすく」なるが、取得できなければ「生きづらい」ままである。

---

[31] 第 1 章 10 ページ
[32] 第 1 章 24 ページ

2004 年の性同一性障害特例法施行後、性同一性障害を抱える者のうち、要件[33]を満たした者に限って、戸籍の続柄（法的性別）の変更を裁判所が認めることができるようになった [石田, 2019, ページ: 120][34]。当事者にとって、戸籍の性別変更は社会に埋没して生きるためには有効な手続きである。逆に考えると、当事者が社会の中で「本来あるべき自分の性」を実現して生きていくためには、現状では戸籍の続柄（法的性別）の変更をする以外に方法はない。しかしながら、性同一性障害特例法が定める要件は厳しく、裁判所が戸籍の続柄（法的性別）の変更を認めるまでには、依然として高いハードルとなっている。

L さんは「*戸籍制度を廃止する*べき」という意見をもつ。この「戸籍制度の性別」について、米沢は次のように述べている [米沢, 2003, ページ: 192-193]。

> 本来、制度的性別は社会的な、すなわちジェンダー以外の何物でもなく、これを「生誕時の潜在的生殖能力」で決めなければならない必要性などない。
> トランスジェンダーの制度的性別は、それを決めねばならないのであれば、ジェンダーをもって決められるべきである。そしてこのことと根本的に衝突する戸籍制度は、それ自体が解体されなければならない。そしてそれは、同性婚や重婚が認められないことに異議を唱える同性愛者や宗教家たち、婚外子差別や外国人差別に苦しむ人たちと共通の目的意識と課題をもって取り組むことで、大きな声とすることが可能なのである。

戸籍制度は、「家族」という日本的文化に親和性をもつシステムとして、長きにわたり存在してきた。その制度を廃止することは、現在の国家システムの根幹にもかかわることであり、実現は困難であると思われる。しかし、制度的性別の変更を希望するセクシュアル・マイノリティ当事者の出現は、近年になってからのことである。公的文書から性別記載をやめる、または裏書きにする取り組みは当事者の「生きづらさ」を解消するために有意義であり、既に一部の当事者によってその取り組みは行われている。公的文書から性別記載をやめる取り組みは、ジェンダー差別に苦しむ女性や「男性性」の強要に「生きづらさ」を覚える男性にとっても、共通の政治的獲得目標となる。つまり、それを成し遂げることによって、トランスジェンダー以外の人々の「生きづらさ」を解消することにもつながるものと考えられる。

一方、ジェンダー、セクシュアリティの研究者であるゲイル・サラモンは、米沢の意見には反対の立場、すなわち「公的な証明書の性別は変更するべきではない」という立場に立つ [サラモン, 2019, ページ: 303-305]。

---

[33] 性同一性障害特例法第三条に定められている 5 つの要件は、1「二十歳以上であること」、2「現に婚姻をしていないこと」、3「現に未成年の子がいないこと」、4「生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること」、5「その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること」である。

[34] 石田仁は社会学、ジェンダーの研究者。

精神医学者のアーサー・ツィトリン博士は、出生証明書が修正されるべきであるようなどんな事情も存在しない、と述べた。「彼らは生まれたときの性別を変更すべきではない。それは事実にもとづいた記録(a factual record)だ。もし彼らがやむにやまれぬ理由からジェンダーを変えたいのなら、アステリスクを添える（＝注を付す）べきだろう」。私はこの声明を読み解くことにとりかかりたいのだが、この声明はトランスセクシュアリティの官僚政治的な管理を支配している論理をきわめて圧縮した形で明示している。ツィトリンが「彼らは生まれたときの性別を変更するべきではない」と述べるとき、彼が言わんとしているのは、トランスの人々と彼らの支持者が生まれたときに割り当てられた性別に関する文書に介入したり、修正したりすることは許されるべきではない、ということである。

ここに、「制度的性別はジェンダー以外の何物でもない」とする意見と、「出生証明書の性別は事実にもとづいた記録(a factual record)であり、変更すべきではない」とする意見が対立する。これに解決策を見出すことは容易ではないが、社会制度や公的書類は何を目的とするものであり、どんな情報を管理する必要があるのかという議論が必要になってくるものと考えられる。

E さんと L さんは、「戸籍制度の存在や公的な書類に記載される性別が当事者を苦しめている」という制度がもたらす「生きづらさ」について語った。これに対して、H さんと O さんは、「制度の有無に関わらず、当事者を社会的に受け入れる文化、意識改革」について語った。つまり、多様なジェンダー、セクシュアリティをもつ人々を柔軟に受け入れる社会的な意識があれば、わざわざ性同一性障害の診断書を取得したり、戸籍の続柄（法的性別）の変更手続きをしたりしなくても、当事者の「生きづらさ」は解消されていくのではないか、という指摘である。

H さんのアプローチ方法は、「制度を整備して、当事者の『生きやすさ』を実現する」順序とは逆の方法である。つまり、「意識改革をして、ハードウェアを整備する」という順序である。確かに、「性別移行することは普通にあり得ること。『テレビの中の世界』のようなどこか遠くで起きることではなく、自分の身の回りでも起こり得るようなありふれたこと」という意識が一般化すれば、当事者の「生きづらさ」は軽減されるだろう。社会の多くの人々がそのような意識を持つようになれば、トイレや更衣室などのハードウェアについて対処することも難しいことではなくなるはずだ。

O さんは、自らのタイでの経験から、どのような社会であればセクシュアル・マイノリティ当事者にとっても生きやすい社会になるかについて語った。タイには性別を変更するための社会制度はない。しかし、トランスジェンダー当事者が実際に平気で働いている。社会の人々が「異質なもの」という眼差しを向けることはなく、当事者も社会的に受け入れられており日常生活で困ることはない。現に受け入れられているから社会制度の変更は不要であり、公的に性別や名前を変更する必要もない。つまり、タイでは「柔軟な社会」

が実現されている。逆に、日本では、「性同一性障害の診断書」の取得や戸籍の続柄（法的性別）の変更といった手順を踏んでから、社会的に認められるという順序である。なので、手順を踏んでいない当事者にとっては、そもそも手順の存在が圧力となり、就職活動など様々な社会生活の場面で「生きづらさ」が生じてしまう。

現在、性別違和を抱える日本の当事者にとって、「性同一性障害の診断書」の取得や戸籍の続柄（法的性別）の変更といった手順の存在が「超えるべきハードル」のように重くのしかかっているのではないだろうか。そのハードルがあることによって当事者はむしろ「生きづらく」なっており、当事者同士の分断まで招いてしまっているのではないだろうか。医療制度や社会制度は必要なものだが、現在の制度を柔軟に運用し、必ずしも医学的、法的な基準や要件を満たさなくても、当事者が社会生活において「自分らしい姿」のまま包摂され、しなやかに生きられるようになることが望ましいのではないだろうか。それが、「ひとりひとりを尊重する柔軟で豊かな社会」を実現するために重要なことであると考えられる。

第３節　ジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」　―社会にはびこるジェンダーの階層性―

前節では社会制度に起因する「生きづらさ」について考察した。本節では、インタビュー調査で語られたジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」、どちらかというと社会のジェンダーに対する意識や規範がセクシュアル・マイノリティ当事者に「生きづらさ」をもたらしていると考えられる語りをまとめる。そして、非当事者による「『性別二元論』と『多様性』ではどちらのほうが望ましいのか、迷いがある」という事例を紹介し、「性別二元論」について考察する。

第１項　ジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」に関する語り　―性別規範、性別役割分担、女性差別―

インタビュー調査では、ジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」に関する語りが数多く聞かれた。それらは、性別規範、性別役割分担、女性差別などが複合的に絡み合うものと考えられる。

A さん

「*家族旅行をしている時に、保育園の保護者の人と遭っちゃったんです。で、髪が長くて、変わった園長先生だと言われていましたけれども、スカートを履いているのはさすがに･･･。それがあって、結局、『そういう状態の人は子供たちの教育には良い影響を与えないでしょう』『相応しくない』『良くない』という判断で、退職勧奨されるんですね*」

E さん

「*私が性別を転換してはっきり分かったことは、社会から私への扱いっていうのはすごく悪くなりました。女性と見られるようになってから、見下されているというのははっきり分かるようになってきました。*

ただ、私個人の話をすると、女が一等低く見られて、差別を受けて、実際にはすごいバカにされている世界の中で生きていても、私は性同一性障害の問題を抱えていたので、女のほうが生きやすいんですよね。でも、それは世間を渡って生きやすいのとは全然別の話なんです。私が、問題なく男の仮面をガシャッとかぶれるのであったら、それで男社会の中を渡っていくほうが絶対ラク。

私が女になって感じたことは、もうとにかくどんどん不自由さが迫ってくる。『化粧はしろ』『若くいろ』『夜道は歩くな』『露出するな』って言ってくる。私が昔の姿だったら、都心の繁華街を酔っ払った状態でフラフラ歩いていても、誰も文句を言わない。今は、それはしてはならないことという圧力がかかってくる。無防備である、自分に自覚がない、よろしくない、みたいな。夜道が歩けなくなった。でも、実際にはそれはおかしいんですよね。誰も彼もが夜道は歩けるべきだし。で、女性が夜道を歩いて被害に遭った時に、男性が夜道を歩くことに制限をかけるという方向には絶対に行かないんですよね」

H さん

「*教会の中でカミングアウトした。そうすると、『いや、我々は男性の牧師を招聘したんだ』みたいなこと言う人もいた。牧師に女性も男性もないんだけど。教会の人たちも二分することなって、分かってくれようとする人たちもいたんだけども。*

それで、＊＊年にその教会を辞めることになるんです。その教会では、カミングアウトしてトランスしていく中で、居づらくなっていくんですよね。具体的にというよりは、真綿で首を絞めるように不適格者みたいな感じを、空気を作られていくっていうか」

I さん

「*『女性ならでは』っていうのを私が言わないことで、周りはやっぱり女性だからっていうのを売りにしたい部分もあったと思うんですけど、政党にいると他の議員が応援に来て、『この人はこういう人で素晴らしいのでぜひ投票してください』って、みんなプロだからそういうこと言うんです。そういう時にやっぱり、『女性ならではの視点で、女性議員なので、女性を増やしましょう』みたいなことは言われたんですけど、それに対してちょっとモヤッとしている部分もありました。わざわざ『勝手に女性だとか決めつけないでくださいよ』とか言わないですけども、そんなに女性、女性って、女性がどうしたんだよって、思ってた部分はありました*」

K さん

「*『あの仕事やりたいな』と思っても、女はこれしかできないって、しっかり分けられてい*

る時代だった。あとは、お酌せなあかんとかね、飲みに行ったら。まず、偉いさんから、女の子はお酌して回らなきゃあかん。

『女のくせに事件』ですよ、ホントに。市場に仕入れに行っても、『ああ、もう触んな！女は体温が高いから』って。

兄弟子からの意味分からんいじめとか。明らかに女では持てないだろうなっていうようなソースの鍋を置いとかれるんですよ。それをどけないといけない。『こぼすやろうな』みたいな感じで見てるんですね。で、私けっこう負けず嫌いで力持ちなんで、絶対こぼさないんですけど。

『女だからできない』『女だからさしてもらえない』『女がする仕事じゃない』みたいな感じがどこに行っても強かった。ケータリングもしてる会社だったんで、よそに行くんですけど、お客さんも『えっ！　女の人なんや』みたいなね」

M さん

「*地方には空き寺がいっぱいあります。なんで空いているかっていうと、そこじゃ食べていけないから行く人いないわけじゃないですか。なのに、『若い男のお坊さんが来て欲しい。年寄りの尼さんなんか、来て要らん』と。『ましてや性転換した人なんて』って、そういうことになるわね。つまり、尼僧であるだけで嫌われるんです」*

ここに挙げたジェンダーギャップに関する語りは、いずれも「女性ジェンダー」としての「生きづらさ」ばかりである。女性から男性へ移行した方（K さん）は移行前の「生きづらさ」について、男性から女性へ移行された方（A さん、E さん、H さん、M さん）は移行後の「生きづらさ」について、性別移行しない方（I さん）も「女性性」を押しつけられる「生きづらさ」について語られた。

A さん、H さん、M さんの語りは、いずれも保育園園長、牧師、僧侶としての職務遂行には関係なく、「女性」であることで敬遠されたという語りである。K さんの語りも、職場の中で「女性には不向きな仕事」として阻害されるという「生きづらさ」であり、トランスジェンダーであることに起因する「生きづらさ」ではないものと考えられる。E さんと I さんの語りでは、職場や社会生活において「女性の役割」を期待されたり「女性性」を押しつけられたりすることに起因する「生きづらさ」であると考えられる。

このような「生きづらさ」は、セクシュアル・マイノリティ当事者だけが感じることではないだろう。ジェンダーギャップは社会全体に「見えない壁」のごとく存在しているが、セクシュアル・マイノリティ当事者にとっては社会そのものが「不便な仕組み」であるために敏感に気がつきやすいということなのではないかと考えられる。

第２項　「性別二元論」か「多様性」か　―非当事者も感じている「迷い」―

「性別二元論」と「多様性」ではどちらのほうが望ましいのであろうか。ジェンダーに

関するこのテーマについては、セクシュアル・マイノリティ当事者以外にも迷いがあるようである。

オリンピック選手（男子陸上競技）として活躍した為末大さんは、以下のように述べている[35]。

> ブレンダと呼ばれた少年の事例からは如何に性が人生において重要かが示されている。以前専門の方に話を聞いた時、性はアイデンティティと深く関わることなので見た目などには関係なく、本人が自認している女性か男性に振り分けることが大事だと教わった。一方で性に拘らないという考えもある。
>
> 最終的に必ず男性か女性に振り分ける方がいいのか、それとも性などには拘らない方がいいのか、または第三、第四の性があるのか。友人と話した感覚で言えば、性は重要なものなので必ず性別はあった方がいいと思う一方、男性と女性という枠組み自体がある種の長年のバイアスだという可能性もある。
>
> 私たちは何かの性別に振り分けられなければ耐えられないのか。それとも性別を超えて、私は私という状態でもいられるのか。性的マイノリティではない立場としては、性別なんでどうでもいいよねという立場がいいのか、それとも必ず相手の自認する性を正確に理解しておく方がいいのか。
>
> 突き詰めていくと、自分を説明する際の分類分けは必要かどうか、またどの程度の粒度にすべきかという問いも浮かび上がる。ということを昨日は語り、とても考えさせられました。

このことから、当事者以外の人々も、どちらが望ましいのか分からない状態であることが分かる。

また、サラモンは以下のように女性学に対して挑発的な言説を投げかけている［サラモン, 2019, ページ: 152]。

> 私が示したいのは、女性学が再び活気のある学問分野として台頭するためには、女性学は現在現れているジェンダーにもっと応答しなければならないということである。男女の二元論を超えたジェンダーは虚構でも未来形でもなく、目下、身体化され、生きられているのであって、女性学という分野はまだこれについて説明していないのである。女

---

[35] 為末大（2020 年 2 月 8 日）note「性について考えたこと」https://note.com/daitamesue/n/ndd5d1f482b6a 参照日：2020 年 3 月 30 日

性学がトランススタディーズとの真剣な交際を結ばない限りは、生きられたものとしてのジェンダーの現在の状態に十分にアクセスすることは望めないし、その可能な未来を思い描くことも叶わないだろう。これと等しく事実なのは、トランススタディーズはフェミニズムを必要としていることである。

以上ふたつの言説から、セクシュアル・マイノリティ非当事者も「性別二元論」と「多様性」について迷いがあることと、ジェンダーに関してますます活発な議論が待ち望まれていることが分かる。セクシュアル・マイノリティ当事者が抱えている具体的な「生きづらさ」の事例も含めて、活発な議論によってジェンダーのありかたを根本的に問い直す必要があるのではないだろうか。

第４節　マジョリティ問題　―マジョリティの認識不足がマイノリティに「生きづらさ」をもたらす―

前節では、ジェンダーギャップに起因する「生きづらさ」、すなわち「男性ジェンダー」と「女性ジェンダー」の狭間から生じる社会的な「生きづらさ」と「性別二元論」について考察した。本節では、男女という二元論的な性別にかかわらずシスジェンダーかつヘテロセクシュアルであるマジョリティとセクシュアル・マイノリティ当事者の間にはどのような認識の齟齬があり、それはマジョリティにとっては無自覚、無関心なものであり、それによってセクシュアル・マイノリティ当事者にはどのような「生きづらさ」がもたらされているのかについて考察する。まず、インタビュー調査の中から、マジョリティにとってはさほど不都合もない社会の仕組みがセクシュアル・マイノリティ当事者にとっては「生きづらさ」となっており、それを説明しても受け入れられなかったという語りをまとめ、考察する。次に、マジョリティの無関心がいかにマイノリティの「生きづらさ」の原因となっているかについて、言説を用いて考察する。

第１項　マジョリティの認識不足や配慮のなさが「生きづらさ」だったという語り

インタビュー調査では、「当事者が置かれた状況や困りごとを説明しても、非当事者には理解されなかった」という語りが数多く聞かれた。社会制度がそもそもセクシュアル・マイノリティ当事者の存在を前提として構築されておらず、当事者が不便や不都合を指摘しても対応されなかったという内容である。

B さん（第 2 節第 2 項の引用を要約の上、再掲）
「*私は事務の人に『私はトランスジェンダーだ』と言って、『この診察券に書かれている『男』とか『女』とかっていうのをなんとかして欲しい』。（中略）『お金がかかるし、どうのこうの』って、いろんな言い訳をしてるわけ*」

E さん

「*社長から『アウティング防止のガイドラインを作ってくれ』っていう要望があった。そのために制度として、『LGBT という存在がいる。LGBT の扱いはこうする。アウティングは禁止である』と書いた。そうすると、入ってきた人全員に、『アウティングとはこういう行為である。禁止されている』という説明が、面接時にされる。そうなると、LGBT 当事者ではない、受けに来た人にも情報がいく。その人たちに対する啓蒙にもなる*」

G さん（第 2 節第 1 項の引用を要約の上、再掲）

「*受け入れてくれる高校がなかった。成績とか内申じゃなくて、『前例がない』とか『そういう子を扱ったことがないんで、何か起こった場合に責任が持てない』とことごとく断られて。高校としては、『そんなのが来られても施設的にどう使わせていいのかも分からないし、どう扱っていいのかも分からない。だったら来させないほうがいい。扱いが困るから、ちょっと遠慮願います』みたいな感じ。公立高校も私立高校も全て断られた*」

K さん

「*今から作る絵本に、男も女も両方つけたらいいと思うんですよ。バスの運転席から顔を出してるのは女性にしたりとか。職業のイメージっていうのが、刷り込みだと思うんですよね。やっぱり、そこから変えないと。私たちも差別されたくないのに、私たちですら職業のイメージはそうなんですよね。『すし職人は？』『男』。そういう感じ。イメージなんですよね、やっぱりね。だから、決して、男じゃないとできない、女じゃないとできないっていうわけじゃない仕事の方が多いと思うんですよ。ホント特殊なところはあると思いますけど、職業のほとんどはもう男女どちらでもできると思うんで。絵本の段階からですよね。*

それが、トランスジェンダーが抱える就職とか職業、働きにくい環境のことに結びついていくのもあると思います。性自認で男性やと思って男性のほうで入社しても、『この仕事は男性がするもんやから』って言われちゃったらね、不安を勝手に覚えられるというね」

L さん

「*いつも言われるのが、トランス女性のトイレ問題とか、めっちゃ言うんやけども、ウチら性犯罪するために入ってるんじゃないから、おしっこするために入ってるのに、なんでそれがね犯罪に結びつくのかさっぱり分からん。*

シスジェンダーの人々がジェンダー・アイデンティティに従った扱いを受けているのと同等に、トランスジェンダーもジェンダー・アイデンティティに従った扱いをしろと言っているだけのことで、そのことで一体何をビビっているのかさっぱり分からない。できない根拠は一体何なんだ。さっぱり分からない。

同性婚に関して言ったら、ハッピーな人が増えるだけやのになんであかんねん。さっぱり分からへん。婚姻関係を持って安定した就労が可能になったらば、社会全体としてはそっちのほうが有利に働くはずなのに、何を恐れているのかさっぱり分からへん。ホントに分からないんですよ、セクシュアリティをめぐる話でね、いわゆるシスジェンダーの異性愛者の人が何を恐れているのかさっぱり分からない」

B さんと G さんの語りは、社会制度や性別二元論にも関わる事柄である。病院や学校といったシステムは「男と女しかいない」という前提で成り立っている。そして、当事者からの申し出によってそのシステムを変更するためには「費用がかかる」「前例がない」として、協力が得られない。その非協力的な対応によって、当事者には不都合が継続してしまったり居場所が得られなかったりする。L さんからは、セクシュアル・マイノリティ非当事者（すなわちマジョリティ）の人たちが、当事者を社会的に受け入れることに対する「恐怖」について語られた。当事者側は「マジョリティと同等の扱いをして欲しい。生きていくための社会制度や権利が欲しい。そのほうが社会全体にとっても有利に働くから」と求めているが、マジョリティ側の「恐怖」によってそれが叶わない。

ならば、「性別二元論」を崩し、マジョリティの「恐怖」をなくすことができれば、当事者の「生きづらさ」を解消できるのではないだろうか。そのためには、何をするべきなのだろうか。

まず、E さんの語りに着目する。E さんの「ガイドライン作成」という社内での取り組みは、非当事者に対する啓発として非常に有効であると考えられる。社内にいる当事者が「LGBT とはどのような存在なのか。アウティングとはどのような行為なのか」をガイドラインとしてまとめ、社内で共有することによって、非当事者にも理解の輪が広がっていくことが期待される。

次に、K さんの語りに着目する。幼少期からの認識を変える取り組みも「性別二元論」を崩すためには極めて有効であると考えられる。「*すし職人といえば男性*」のように、幼少期の絵本によって獲得した知識は「刷り込み」として固定化され、後からその認識を変えることはなかなか難しい。もし絵本の中に「男性と女性のすし職人」が描かれていたら、その絵本を読んで育った人は「女性のすし職人」を見ても驚くことはないだろう。そのようにして、職業と性別を結びつけている固定観念を薄めていくことは「性別二元論」を崩していくために有効である。そして、その結果「性別二元論」にとらわれずにセクシュアル・マイノリティを含む多様な人々が多様な職業に就いていても「違和感」や「恐怖」を感じることもなくなっていくだろう。そのような取り組みによって、非当事者の認識も変化していくことが期待される。

第２項　事情のある人を「迷惑」として排除する職場こそ問題　―個人の事情を「一度きりはなす」―

セクシュアル・マイノリティ当事者の「生きづらい社会構造」を解決するためには、何ができるのだろうか。ジェンダーやセクシュアリティに関する事情以外にも、例えば「持病があるため、毎月一度は通院しなければならない。そのために出社できない時があるが、配慮をお願いできないだろうか」「家族に障がいがあるため、遠方への転勤は引き受けられない」といった、個人的ないし家庭的な事情を企業へ伝えたい就職希望者もいるものと思われる。しかし、そのような事情を面接で話すことは、おそらく加点にはつながらないだろう。これに関して、社会学の研究者である好井裕明は次のように述べている［好井, 2010, ページ: 214］。

> そもそも「身体の事情」や「家族の事情」は職場にとっての「迷惑」なのだろうか。それを「迷惑」として排除し続けてきた職場のありようこそが問題とされるべきではないのか。

つまり、「職場にとって『迷惑な人』はなるべく採用しないでおこう」とする姿勢こそが、職場へマイノリティの包摂が進まない原因ではないだろうか。「迷惑ではない」就活生の場合は、自身が抱えている事情を話す必要がなく、面接時間の枠内で精一杯自己アピールをすることができるのである。

また、白波瀬は、女性の就労問題に関して次のように述べている［白波瀬, 2010, ページ: 149］。

> ここで提案したいのは、女性の労働を考える際に、家庭、子どもとの関係を一度きりはなして考えてみたらどうかということです。男性も女性も、働く機会、働く選択が平等に提供され、働く上に困難が伴えばそのリスクを社会で支えていく。これが女性就労参加を社会で支援する体制の基礎となるのです。

ここで白波瀬は女性の就労について提案しているが、この提案は女性のみならず、好井が述べた「身体の事情」や「家族の事情」を抱えた全ての人々に適用することができるものと考えられる。「『迷惑』な人は職場には要らない」という排他的な思考を改め、「困難に直面した場合には、そのリスクを社会全体で引き受ける」という社会構造ができれば、もっと多くの多様な人々が就労することができるのではないだろうか。

また、筆者は白波瀬の「一度きりはなす」という言葉に着目した。就職に際して、ジェンダーやセクシュアリティについて事情を抱えた人々だけではなく「身体の事情」や「家族の事情」を抱えた全ての人々から、企業へ事情を説明し理解と配慮を求めたい場合があるだろう。そのような事情を説明するために、面接とは「一度きりはなして」話し合いの

場を別に設けるべきなのではないだろうか。そうすれば、面接での「加点のチャンス」の平等は達成される。面接において個人のもつ資質や事情を「一度きりはなして」考えることができるようになると、多くの人々にとって「生きやすさ」を獲得できるのではないだろうか。

第３項　マジョリティの「無関心」という問題　―最後の課題―

また、マジョリティがマイノリティの抱える問題に無自覚、無関心でいることも問題である。

筆者は、第 1 章において三成らの論考を基に、「社会的マイノリティをめぐる人権の課題は、マイノリティの側に問題があるわけではなく、むしろ社会的なマジョリティの意識やそれを支える制度の方に問題がある場合がほとんどであると述べた。

これに関連して、好井は「(マタニティ・ハラスメントは）*確信犯的に、または意識せずにハラスメントを犯してしまう男性の問題なのではないか*」と述べている［好井, 2010, ページ: 18]。ここで問題とされるべきなのは、加害者とされる男性の悪意または無自覚である。被害を受けた女性同士で解決策を考えたところで、社会的な問題解決には至らないのではないだろうか。

三成らの論考と好井の論考が共通するのは、マジョリティの自覚のなさこそが問題であり、そこに切り込んでいかなければ問題は解決しないということである。また、好井は（レズビアン差別について：筆者註）「*問題が個人的に解決され続けるかぎり、レズビアンの困難はいつまでも社会で共同されない、という悪循環を招いてしまう*」とも述べている［好井, 2010, ページ: 61]。

ここから導き出せることは、マジョリティの人々に「無自覚」を自覚させた上で「生きづらさ」を抱えているマイノリティの人々が抱えた問題の解決を共に考えていかなければ、いつまで経っても「マイノリティの生きづらさ」という社会が構造的に抱えている問題を断ち切ることはできないということである。つまり、マタニティ・ハラスメントの問題と同様に、マイノリティの「生きづらさ」をマイノリティ同士でいくら考えても、社会的な問題解決には至らないのだ。社会制度の構築は、社会的な立場の弱い人々や多様なマイノリティもいることを十分に配慮した上でなされなければならない。マジョリティの人々に、「社会の中で不便や生きづらさを抱えているマイノリティの人々がいる」ということに関心を持つように促すことが重要な課題であると考えられる。

第５章　　結論

本章では、本研究によって得られた結論、研究の限界、今後の課題についてまとめる。

第１節　　結論

本研究では、まず、日本のトランスジェンダー当事者が労働環境において抱える問題、すなわち「働きづらさ」に関心を寄せた。そして、「働きづらさ」は「生きづらさ」の一部であることから、より広く深く問題を調査するために、トランスジェンダーに限らずにセクシュアル・マイノリティ当事者の「生きづらさ」について、13 名の当事者にインタビュー調査を行った。

その結果、本研究によって新たに発見できた知見として、以下の 3 項をまとめる。

第１項　一部のセクシュアル・マイノリティ非当事者は、当事者受け入れのために模索している

この結論は、次の語りを根拠として導き出した。一部の学校や企業では、セクシュアル・マイノリティ当事者の生徒や従業員を受け入れるために、教師や管理職が積極的に模索しているということが発見できた。

ある教育委員会では、セクシュアル・マイノリティ当事者の児童・生徒・学生に対処するためのマニュアルを作成している。しかし、現場の教師たちは「マニュアル通りにすればいいのか。どのように対処するかはひとりひとり異なるのではないか」と考えておられるそうだ。つまり、「整備されたマニュアル」と「その通りにはいかないのではないかと考える現場の教師たち」という対立図式が明らかとなった。

K さん

「*トランスジェンダーが就職を希望したことによって、『これは考えなあかんな』っていう会社がけっこうあって。ウチは、ノンケのお客さんの中でも、会社を持ってはる人とか会社の偉いさんの人とかもいますんで、そういう質問受けるんです。社会的にちゃんと考えようと思って下さる方はすごく増えてきてて、『会社としても対応しましょう。こういう環境にしましょう』っていうのは、けっこう相談されることは多い。でも、トランスジェンダーの中にも『将来的には性別移行していこう』と思ってる人もいるけど、『今はこの状態で触らんといてくれ』っていうのもいるでしょうし、状況によっても変わるんで、雛型が作れない。男、女でパッと分けといたらいいっていう問題じゃないから。そこで企業はけっこう考えてますよね。*

最近は、地元の学校の先生が来たりとかね。『生徒にそういうのがいて、どう対応したらいいのか。教育委員会のほうでは一応（LGBT 生徒に対応するためのマニュアルやガイドラインが：筆者註）決まっててあるんだけど、私（相談に来た地元の学校の先生：筆者註）

はその子の性格にもよると思うし、その子が本当はどうしたいのかを聞くべきだと思うんやけど、教育委員会では『こう』って決まっちゃっててね』って。『どこまでやれるのか、どこまでやったらいいのか』っていうので、小学校の先生、中学校の先生、高校の部活の顧問の先生が来はったことあります。

（学校や企業に LGBT の生徒や就職希望者について：筆者註）早くいろんなことが分かってもらえて楽になれば、受け入れ側も勉強していくことになるんで。『入社してから性別移行していくかもしれん。今は、見た目女性だけどネクタイ締めていきます。男性社員として入社したい。で、途中でホルモン投与したり手術をしたりしていく可能性がある』とはっきり言って、就活している人もけっこういる。その代わり、『休暇をうまく駆使して手術に当ててくれ。こっちから特別休暇を与えることはできへんから』って（会社から言われる：筆者註）」

第２項　必要な配慮は当事者によって異なる　―「マニュアル」よりも「決めつけ」をせずに柔軟な対応を―

この結論は、前項での語りおよび次の語りを根拠として導き出した。「LGBT 対応マニュアル」があっても必要な配慮はひとりひとり異なり、柔軟な対応が求められることが発見できた。マニュアルは非当事者への啓発のためにある程度有意義であると思われるが、それを守っていれば全ての問題が解決するわけではない。最終的には、セクシュアル・マイノリティ当事者が、非当事者と全く変わらずにいきいきと学校で学び、職場で働くことができるような社会の仕組みを作ることが求められる。

前項での語りおよび次の語りで、「マニュアル」について語られている。セクシュアル・マイノリティ当事者への対応にあたっての「マニュアル」は、どのような役割を果たしているのであろうか。マニュアルは、ある事象を規定して行動基準を提示するものである。例えば、「セクシュアル・マイノリティとはこのような人々である。必要な配慮としてはこのようなことが挙げられる」というように、ある程度一般化して規定する。マニュアルによって、非当事者の人々へある程度一般的な知識や行動基準を提示することができる。しかし、ある事象を一般化すると、ほぼ必ず例外が発生する。この例外が「さらなるマイノリティ」を生み出し、ますます周縁化されてしまう懸念がある。そもそもジェンダー、セクシュアリティの多様性とはグラデーションのように境界線のないものであり、一般化して規定しづらいものではないだろうか。

もし「セクシュアル・マイノリティには配慮が必要」という文言でマニュアル化するならば、自分の周囲の人々について「この人はセクシュアル・マイノリティである」と認識することが必要となる。だが、そのような認識をもつことが適切であるのだろうか。また、セクシュアル・マイノリティ非当事者には配慮しなくてもいいのか、カミングアウトしていない当事者を当事者と決めつけていいのか、そのような人々へも配慮が必要なのか、という反論も想定されるだろう。そもそも「配慮するべきカテゴリーに入る人／入らない人」

と分けて考えることが不適切と考えられる。

職場での行動基準をマニュアル化してしまうと、自己正当化の方便として利用されたり思考停止してしまったりするという弊害も考えられる。一般的には真面目な従業員ほど、職場から配布されたマニュアルはしっかりと読むだろう。しかし、マニュアルをしっかりと読んだ従業員が「私はマニュアルにきちんと目を通し、職場ではその通りに行動した。だから、私の行動には問題ない」と考えてしまう場合が想定される。実は、このような意識は危険である。なぜならば、マニュアルに忠実な従業員は職場で「何か問題はないか」という意識が働かなくなり、問題に気づかなくなってしまうからである。そうすると、マニュアル化された以外の状況には対処できなくなる。真面目な従業員ほど陥りやすい罠なのかもしれない。

セクシュアル・マイノリティ当事者の立場から考えると、マニュアルによって「当事者にはこのような配慮が必要だ」と規定されても、そもそも人によって必要な配慮は異なる。マニュアルによって規定された配慮を「余計なお世話」のように当事者が否定的に捉える場合も考えられる。

筆者はマニュアルが不要だと考えているわけではない。マニュアルは、非当事者の人々へ一般的な知識を分かりやすく伝えるという大切な役割を果たしている。しかし、ある事象を一般化するとほぼ必ず例外が発生する。そして、そこには目が行き届かなくなってしまいがちだ。そうすると、「誰も取り残されることのない社会」という社会的包摂が実現できなくなってしまうのだ。それを避けるためには、マニュアルの配布と同時に「社会環境の変化によって、このマニュアルに書かれていることが実際の状況とは合致しなくなる可能性があります。マニュアルに書かれていることを実行していれば良いということではなく、ひとりひとりがより良い環境、豊かな社会を実現するためにはどうするべきなのかについて考えて下さい」というようなメッセージを伝え、ひとりでも多くの人々が主体的に考えることを促進することが望ましいと考える。

O さん

「*職場でのトランスジェンダーへの配慮も、特別扱いされたほうが逆に周りからの視線が冷たくなるんじゃないかなと思うんです。上司は良かれと配慮して特別扱いしちゃうんですけど、周りとすごく差をつけた配慮のしかたはよろしくないんじゃないかなと思うんです。私も企業の中で（研修、講演などで：筆者註）『何も配慮しなくていいです』って言っちゃうんです。本人が本当に苦痛だったら、誰かしらに訴えるから、聞く側の人たちがある程度心構えしておいてもらって。最初から『性同一性障害だったら、トイレと更衣室を配慮して･･･』ってマニュアルを決めちゃうと、中にはそれを配慮しなくていい人もいるんですよ。全員が全員その配慮を求めているわけでもなく、配慮も人それぞれで区切りが違ったりする。だから、私たちの NPO でよく『マニュアル作ってくれ』って言われるんですけど、マニュアルは作れなくて。そうやっちゃうとその考えで凝り固まっちゃうし、性*

同一性障害の人もみんな違うじゃないですか。だから、『マニュアルは作らない。喋りやすい環境だけは作って下さい』って言うんです。マニュアルに当てはめるとたぶん、また精神的に大変っていうかイヤな部分が出てくるのかなっていう気はします」

第３項　セクシュアル・マイノリティ当事者の「生きづらさ」を解決するために最も求められることは、社会の意識改革である

この結論は、次の語りを根拠として導き出した。セクシュアル・マイノリティ当事者に対する社会からの眼差し、つまり「意識改革」こそが最も重要な基礎となるということが発見できた。その基礎がしっかりしていれば、トイレなどの設備の使用についても解決が容易になり、ひとりひとりのセクシュアル・マイノリティ当事者が「生きづらさ」を感じることなく、社会の中で自分らしく生きていけるようになるものと考えられる。

H さん

「*職場の意識改革は大きいと思いますね。特に中高年のおじさん達の意識でしょうね。トランスすることが社会の中で広く『あり得ることなんだ』っていう認識が広がるっていうかな。ハードウェアな部分はあとからついてくると思います。例えば、トイレにしても、意識が変わればハードウェア的に整備すべきことはケースバイケースで具体的にやっていけばいいので、工夫できると思います*」

筆者は、セクシュアル・マイノリティ当事者の「生きづらさ」を解決するためには、制度的な改革と意識的な改革があると考えた。例えば、国民健康保険証の性別を裏書きできるようになったことなどは制度的な改革である。現在の日本では、戸籍の性別変更の手続きもできるようになり、制度的な改革はある程度進んできているものと考えられる。しかし、人々の意識的な改革については、まだそれほど進んでいないのではないだろうか。先程の H さんの語り以外にも、次の語りも聞かれた。

O さん

「*タイっていう国がすごいなと思うのは、差別というか、違った目で見ないですね。そういう方（トランスジェンダー当事者、女装者：筆者註）が全然平気で、化粧品屋で働いてたりするじゃないですか。社会的に受け入れる文化があるから。日本は逆に、『性同一性障害です』っていう診断書とか、『戸籍、変わりました』といった書類がなければ、社会的に認められないから先にこういうのを作ったのかなと思っていた。タイだったら、LGBT の就職問題とかも、別に問題にならなかったと思うんですよ。普通に就職できちゃうわけだから*」

次節では、「社会制度によっては解決しない生きづらさ」について、考察を深めたい。

第２節　　「生きづらさ」の本質とは何か　―まなざされる苦しみ―

前節では、本研究によって新たに発見した知見をまとめた。それを踏まえて本節では、「生きづらさ」の本質とは何かについてまとめたい。

本研究では、13 人のセクシュアル・マイノリティ当事者によって、様々な「生きづらさ」の経験が語られた。それらは、自分の望む衣服を着させてもらえなかった経験、学校時代のいじめや嘲笑の経験、入学や就職の段階で差別された経験、職場で周囲の人々から当事者のジェンダーに関して侮蔑的な発言や態度をとられた経験、当事者が性別違和感に苦しみながらも誰にも打ち明けられないという心の葛藤、当事者が周囲の人々との関わりを避けるために自室にひきこもったり図書室や喫茶店に通ったりした経験など、多岐に渡るものであった。

筆者は、インタビュー調査で語られた「生きづらさ」は、「外的な生きづらさ」と「内的な生きづらさ」に分けることができると考えた。

「外的な生きづらさ」とは、自己と自己の外部との間に軋轢が生じることによる「生きづらさ」である。次の語りは「外的な生きづらさ」に該当するものと考えられる。

A さん

「*小学校高学年の頃に、あの頃は赤というのはまだ女の子の色だったんですね。ウチの小学校は、男の子は青い体操服でした。でも、たまたま近所のお姉さんがもう中学校にも行ったということで赤い体操服を下さったんです。それは、とても嬉しくて。青いのは着たくなかったので、赤い服を自分が着るチャンスが回ってきて、体操の時間に着替えたら、みんなから『何だそれ？　女のじゃねーか』と言われたんです。先生も『何だ、それは！それは女の子のじゃないか』って言われてしまった。それで、『あ、これはしてはいけないことだったんだ』ということにやっと思い至ったんですが、それがすごくショックで*」

E さん

「*性同一性障害の人、性別違和の人が就活の履歴書を書く時にどうしたらいいのかの作法なんて、どこにも載っていないですから。ある時、履歴書にはただ『男』とだけ書いて他のところは全部自己アピールで埋めて、性同一性障害の説明抜きで行ったこともあったんですけど、面接で普通に『これはどういう意味なんですか？　間違いじゃないんですか？』って聞かれて。『いえ、実は』というふうにその場で自分の言葉で話すという戦略を採ったこともあった。*

選挙の時にも起きます。投票しに行くと、投票所の人が『本人確認お願いします』『＊＊に住んでいる E です』って言って、ピピピッとデータを出すと、『えっ？！』とぎょっとして、『すいません。ちょっと確認してきます』と言って、待たされる」

K さん
「*ケータリングの仕事なんかもしてる会社だったんで、よそに行くんですけど、『えっ！女の人なんや』みたいな。お客さんもね*」

一方、「内的な生きづらさ」とは、自己の内部に抱えた葛藤のことである。次の語りは「内的な生きづらさ」に該当するものと考えられる。

B さん
「*私はずっとこれ（性別違和感：筆者註）を死ぬまで背負っていくしかない、自分の分裂した状況をね、身体と心が一致しない問題を墓場まで持っていくしかない*」

G さん
「*昔だから言葉がないから、今でこそゲイとかそういう言葉がありますけど。それこそ、テレビをつければ保毛尾田保毛男（ほもおだほもお）が出てるみたいな感じなんで、『もしかして自分はホモじゃん』とか思って。これは一生、墓場までしょっていかなきゃいけないと思って*」

H さん
「*トランスジェンダーっていうことに関しては、その頃に初めて夢で、違和感らしきものの記憶として夢を見るんですね。夢の中でヒラヒラの可愛らしいドレスを着て走り回っている。でも、それが夢でしかない。だから、その頃既にそれは許されないことなんだって自覚をしてたんだろうと思います、今思えば*」

では、「外的な生きづらさ」と「内的な生きづらさ」に共通することは何か。それは、一言で言えば「齟齬」であると考えられる。

社会学者の見田宗介は、1960 年代に未成年による殺人事件を起こした N･N の生活史記録を読み解きながら、他者から自己へさしむけられる視線と反応行為によって自己の過去、現在、未来が決定されてしまう「生きづらさ」について、次のように述べている［見田, 2014, ページ: 38-39］。

「戸籍」が N･N を絶望に追いやったのではない。「戸籍」をもって差別する社会の構造が N･N を絶望に追いやったのだ。この言い方には飛躍があるという向きもあろう。「出生」をもって N･N をひやかしたのはたまたまそこにいた同僚たちであり、さらにいうならば N･N 自身の過剰な「思いこみ」であって、社会構造の一般的な問題ではない、と。だがこの反論は皮相である。もしわれわれの社会の中に、戸籍による差別の構造が全く存在しないのならば、いったいどうして、このたんなる紙片の文字が、この同僚たちの

あいだで、「からかい」のたねになったり、「過剰な」情緒的反応のたねになったりしうるであろうか。

N･N の同僚たちはあることについて何気なく「からかい」のように言ったが、おそらく忘れてしまったのであろう。しかし、そのような言葉が N･N を絶望でたたきのめしてしまった。N･N は、最初の数回は定職に就いたものの、その後は戸籍謄本を必要としない職業に自己を限定して渡り歩いたのだという。見田は、このような蒸発と変身への衝動を「まなざしの地獄からの脱出の願望」と呼んでいる［見田, 2014, ページ: 43]。

やはり、ここでも「戸籍を見られても何も恥ずかしくない」マジョリティと「戸籍を見られたくない事情のある」マイノリティという対立軸が浮かび上がる。「何気なく『からかい』のように言った」のは、無自覚な「マジョリティ問題」である。そして、「戸籍を見られたくない事情のある」N･N には、その事情に関してなんら落ち度はない。

戸籍をはじめとする社会制度は、必然的にある一定の人々を「生きづらく」してしまっている。なぜならば、社会制度は個人的な「見られたくない事情」を書類によって可視化したり、何らかの基準によって「適合する人／しない人」という分類を行ったりしているからである。

「生きづらさ」の本質とは何であろうか。他者から見た自己に「何らかの齟齬がある」ものとして視線を送られたり反応行為をされたりすることが、そのような行為を受ける当事者にとっては最も苦しい「生きづらさ」なのではないだろうか。「異質なもの」というまなざしが、それを向けられる当事者たちを「生きづらく」追い込んでしまうのだ。つまり、「生きづらさ」の本質とは、他者からまなざされる「外的な生きづらさ」と、それによって自分の心の中で葛藤せざるを得なくなる「内的な生きづらさ」の関係性であると言えるだろう。

前節において、ある事象を一般化すると、ほぼ必ず例外が発生する。この例外が「さらなるマイノリティ」となり、ますます周縁化されてしまう懸念があるということを述べた。そして、それを繰り返している限り、「誰も取り残されることのない社会」は実現できなくなってしまう。

我々は、「現在でも、社会制度の枠外に取り残されて『生きづらさ』を抱えている人々がいるのではないか、社会制度の有無に関わらず、そのような人々を包摂するためには何ができるのだろうか」ということを今後も考え続けていくことが求められているのではないだろうか。なぜならば、社会は変化し続けるものだからである。マニュアル的に行動するのではなく、他者の「生きづらさ」に対する想像力と社会的に包摂する柔軟さが求められている。

第３節　　本研究の限界

本研究では、スノーボール・サンプリングにより紹介されたセクシュアル・マイノリテ

ィ当事者へ研究概要を説明し、同意して頂いた方々へインタビュー調査を行った。筆者はクリスチャンであり、筆者からセクシュアル・マイノリティ当事者の紹介を依頼したのはキリスト教牧師である。そのため、13 人のインタビュー調査協力者の中にもクリスチャンや宗教関係者が多く含まれている。また、インタビュー調査協力者全員が有職者である。それらの点において、日本のセクシュアル・マイノリティ当事者が置かれた社会的な状況を客観的に反映したものとは言い難く、サンプルには偏りがあると思われる。しかし、インタビュー調査で当事者が語った経験は、紛れもなく社会の中で発生した事実の「氷山の一角」である。そして、本研究はその「氷山の一角」から、セクシュアル・マイノリティ当事者に「生きづらさ」をもたらしている社会の構造的な問題を読み解くことに取り組んだ。

本研究への調査依頼は、数名のセクシュアル・マイノリティ当事者によって「お断り」された。理由はそれぞれ異なるが、「*就職の折の辛い思い出を話すのは、ちょっと精神的に辛い*」という理由で「お断り」された方がおられた。就職活動において辛い経験をした当事者の語りのほうが調査するべき課題を含んでいる可能性があるだろう。しかし、調査依頼を「お断り」された場合、インタビューすることはできない。その「お断り」された方が、心情を書いたメールを下さった。筆者の図々しい願い出により、メールの一部を符号化した上で、論文に掲載することをお許し頂いた。以下はそのメールである。

勤務していた会社がリーマンショックの煽りで解散しました。あの頃は、自分も GID 治療の真っ最中で、まさに青天の霹靂でした。ショックと精神的ダメージは口では言い表せません。当時は今と違い不景気でしたし、また現在ほど、LGBT、TG 系、GID 系への社会の認識も今より低く、大学に入る前の約２年弱くらいの時期は、GID―MTF であることを隠すにも隠せず、就活し、＊＊の職員には、「不景気」「50 歳過ぎ」「GID 当事者」で、三重苦の就職困難者と言われ、その差別的発言に頭に来て、＊＊で職員相手に怒ってクレームを付けた事もありました。

でも、実際の差別は、再就職の、まさにその場でした。＊＊では無く、＊＊、＊＊や＊＊などの民間職業紹介業者や、新聞広告、ネット採用広告等々、あらゆる媒体を利用して、履歴書、職務経歴等の書類送付までこぎ着けた会社が約８０社です。そのうち、実際に面接まで行ったのが、３社、一次面接通過が１社のみ、その１社も二次面接までは届かず、結局、全部ダメでした。会社という会社に相手にされず、そのなかの３社には、面接してくれただけでも感謝なのですが、あとの約７７社は、書類で不採用の通知が来るだけましで、中には、書類を送付しても無しのつぶてで、返事がないのは書類審査で落ちたと言うことで、その非礼に世を恨んだこともありました。

８０社の応募が少ない多いとはあると思いますが、＊＊のカウンセラーは、下手な鉄砲数打ちゃ当たるは、しない方がいい、ある程度就職繋がる会社を探して、選んで応募した方が良いと言う、アドバイスでした。

このメールからは、就職を斡旋する立場の職員からも配慮に欠けた発言をされ、ひどく傷ついた状況が読み取れる。

当事者が抱えている問題は、当事者が最も熟知している。そして、当事者の語りは、社会で起きた事実の「氷山の一角」である。白波瀬は次のように述べている［白波瀬, 2010, ページ: 17]。

> 自分が感じたことがすぐさま社会とはいえませんが、自分が感じることは社会の一部を実体験していることでもあるので、社会全体の把握につながる普遍的な意味を持ちうるのです。

第４節　今後の課題

本研究によって解決することができなかった課題と、今後の研究に期待される課題は以下の 2 点である。

①学校や職場において、セクシュアル・マイノリティ当事者がカミングアウトした上で必要な配慮などについて適切に説明しても、当事者の周囲にいる非当事者が「受け入れることに違和感、抵抗感がある」と表明した場合、どのように対処すべきなのか。

②2018 年 6 月 18 日、世界保健機関（WHO）より「国際疾病分類」最新版（ICD-11）が発表された。今回の改訂で、性同一性障害が「精神疾患」から外れ、「性の健康に関する状態」という分類の中の Gender Incongruence という項目になった。ICD-11 は 2022 年 1 月 1 日より効力を発する予定である。これによって、国際的には性同一性障害という概念が消失することになった。現在、Gender Incongruence には「性別不合」との仮訳がつけられているが、3 年ほどかけて正式な和訳が検討されることになっている［OUT JAPAN Co., Ltd., 2018]。

　現在、日本で戸籍の性別変更をするためには、精神科医より性同一性障害との診断を受け、性別適合手術を受けることが必要とされている。しかし、今回の変更によって、日本の性別移行を希望する当事者、社会制度、「性同一性障害特例法」などにはどのような影響が及ぼされるのだろうか。

引用文献

GID（性同一性障害）学会. (2018 年 12 月 25 日). ICD11 における『gender incongruence』への変更の背景と影響. (中塚幹也, 編) GID（性同一性障害）学会雑誌, 11, 227.

GID（性同一性障害）学会. (2018 年 12 月 25 日). 性別を越える、性別を超える。二元論からの飛翔。 (針間克己, 編) GID（性同一性障害）学会雑誌, 11, 216-218.

GID（性同一性障害）学会. (2018 年 12 月 25 日). 特例法施行後の受療行動について. (織田裕行, 山田妃沙子, 木下利彦, 共同編集) GID（性同一性障害）学会雑誌, 11, 231-233.

GID（性同一性障害）学会. (2018 年 12 月 25 日). 日本初の公式な性別適合手術（1998 年）. (原科孝雄, 編) GID（性同一性障害）学会雑誌, 11, 42-43.

HUMAN RIGHTS WATCH. (2019 年 6 月 17 日). (KnightKyle, 土井香苗, 共同編集者) 参照日: 2020 年 6 月 5 日, 参照先: https://www.hrw.org/ja/news/2019/06/17/331198

Label X. (2019). X ジェンダーって何？　日本における多様な性のあり方. 緑風出版.

LGBT 法連合会. (2019). 日本と世界の LGBT の現状と課題　ーーSOGI と人権を考える.

MetcalfHirary, RolfeHeather. (2011). Barriers to employers in developing lesbian, gay, bisexual and transgender-friendly workplaces. London: National Institute of Economic and Social Research.

OECD. (2019 年 3 月 27 日). 参照日: 2020 年 4 月 9 日, 参照先: Society at a Glance 2019 OECD SOCIAL INDICATORS: A SPOTLIGHT ON LGBT PEOPLE : https://www.oecd-ilibrary.org/docserver/soc_glance-2019-en.pdf?expires=1586756506&id=id&accname=guest&checksum=58DA4C0BC6EB4ACF870B77ED22FD5BBC

OECD. (2019 年 3 月 27 日). 参照日: 2020 年 4 月 9 日, 参照先: Society at a Glance 2019 OECD Social Indicators, Chapter 1 The LGBT challenge: How to better include sexual and gender minorities?: https://www.oecd-ilibrary.org/docserver/soc_glance-2019-en.pdf?expires=1592010182&id=id&accname=guest&checksum=3589A40F087E65D79BEA6AA0331CF97B

OECD. (2019 年 3 月 27 日). 参照日: 2020 年 4 月 13 日, 参照先: 図表で見る社会 2019 OECD 社会指標 日本語要約 : https://www.oecd-ilibrary.org/docserver/5788373c-ja.pdf?expires=1592010946&id=id&accname=guest&checksum=363EC7D6D222634D797EB8BA22DFA508

OUT JAPAN Co., Ltd. (2018 年 6 月 21 日). WHO の「国際疾病分類」が改訂され、性同一性障害が「精神疾患」から外れることになりました. (OUT JAPAN Co., Ltd.) 参照日 : 2020 年 3 月 10 日 , 参照先 :

https://www.outjapan.co.jp/lgbtcolumn_news/news/2018/6/8.html
Pew Research Center. (2013 年 6 月 13 日). A survey of LGBT Americans: attitudes, experiences and values in changing times. 参照日: 2020 年 6 月 4 日, 参照先: https://www.pewsocialtrends.org/2013/06/13/a-survey-of-lgbt-americans/
TBS. (2020 年 5 月 26 日).「3 年 B 組金八先生　第 6 シリーズ (2001 年 10 月 11 日～2002 年 3 月 28 日／全 23 回)」. 参照日: 2020 年 3 月 2 日, 参照先: https://www.tbs.co.jp/kinpachi/history/index-j.html#his6
The Human Rights Campaign Foundation. (2014). CORPORATE EQUALITY INDEX 2015: Rating American Workplaces on Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender Equality. 参照日: 2020 年 4 月 5 日, 参照先: https://assets2.hrc.org/files/documents/CEI-2015-rev.pdf
WHO. (2018 年 6 月 18 日). WHO. (WHO) 参照日: 2020 年 3 月 10 日, 参照先: ICD-11, International Classification of Diseases 11th Revision, The global standard for diagnostic health information: https://icd.who.int/en
Wikipedia. (日付不明). 精神障害の診断と統計マニュアル. 参照日: 2020 年 3 月 9 日, 参照先: https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E9%9A%9C%E5%AE%B3%E3%81%AE%E8%A8%BA%E6%96%AD%E3%81%A8%E7%B5%B1%E8%A8%88%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%83%AB
サラモンゲイル. (2019). 身体を引き受ける　ートランスジェンダーと物質性のレトリック. (藤高　和輝, 訳) 以文社.
フリックウヴェ. (2018). 新板　質的研究入門　＜人間の科学＞のための方法論. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 訳) 春秋社.
見田宗介. (2014). まなざしの地獄. 河出書房新社.
虎井まさ衛. (2003). 男の戸籍をください. 毎日新聞社.
厚生労働省. (2018 年 6 月 18 日). 厚生労働省. 参照日: 2020 年 3 月 10 日, 参照先: 国際疾病分類の第 11 回改訂版（ICD-11）が公表されました　～世界保健機関（WHO）による約 30 年ぶりの改訂～: https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000211217.html
好井裕明. (2010). セクシュアリティの多様性と排除　差別と排除の［いま］⑥. 明石書店.
佐々木掌子. (2017). トランスジェンダーの心理学. 晃洋書房.
桜井厚. (2016). ライフストーリー論. 弘文堂.
三橋順子. (日付不明). 三橋順子 homepage. 参照日: 2020 年 3 月 11 日, 参照先: http://www4.wisnet.ne.jp/~junko/index2.html
三成美保. (2019). LGBTI の雇用と労働　当事者の困難とその解決方法を考える. (三成美保, 編) 晃洋書房.
松本学, 石井政之, 藤井輝明. (2001). 知っていますか？　ユニークフェイス　一問一答.

解放出版社.
針間克己. (2019). 性別違和・性別不合へ　性同一性障害から何が変わったか. 緑風出版.
石井由香理. (2018). トランスジェンダーと現代社会　――多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界. 明石書店.
石田仁. (2019). はじめて学ぶ LGBT　基礎からトレンドまで. ナツメ社.
竹田香織. (2009). 性同一性障害特例法をめぐる現代的状況　ー政治学の視点からー. 東北大学グローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」GEMC journal 編集委員会.
朝日新聞. (1998 年 5 月 13 日). 「前向きな一石投じた」埼玉医大倫理委、性転換手術を承認／埼玉. 朝日新聞記事検索サービス　聞蔵Ⅱビジュアル. 参照日: 2020 年 6 月 7 日, 参照先: https://gateway.itc.u-tokyo.ac.jp/library2/main/,DanaInfo=database.asahi.com+top.php
朝日新聞デジタル. (2018 年 2 月 19 日). 制服、性別関係なく選べます　千葉・柏の市立中学校. (上嶋紀雄, 編) 参照日: 2020 年 3 月 5 日, 参照先: https://www.asahi.com/articles/ASL2F4GBKL2FUDCB013.html
朝日新聞デジタル. (2019 年 2 月 2 日). 東京）中野区、性別問わず選べる制服　世田谷も来春から. (青木美希、山田知英、宮坂麻子, 編) 参照日: 2020 年 3 月 5 日, 参照先: https://www.asahi.com/articles/ASM1044F6M10UTIL01H.html
鶴田幸恵. (2009). 性同一性障害のエスノグラフィ　ー性現象の社会学ー. ハーベスト社.
東優子. (2018). トランスジェンダーと職場環境ハンドブック　～誰もが働きやすい職場づくり～. 日本能率協会マネジメントセンター.
独立行政法人　労働政策研究・研修機構. (2016 年 5 月 31 日). 諸外国の LGBT の就労をめぐる状況. 参照日: 2020 年 4 月 4 日, 参照先: https://www.jil.go.jp/foreign/report/2016/pdf/0531.pdf
日本経済新聞. (2019 年 6 月 24 日). 日本経済新聞. 参照日: 2020 年 3 月 9 日, 参照先: 保険適用 1 年で 4 件だけ　性別適合手術、学会まとめ: https://www.nikkei.com/article/DGXMZO46478950U9A620C1CR0000/
日本経済新聞　電子版. (2018 年 7 月 10 日). 「心は女性」女子大で受け入れ検討広がる. 参照日: 2020 年 5 月 28 日, 参照先: https://www.nikkei.com/article/DGXMZO32825890Q8A710C1CR8000/
日本労働組合総連合会（連合）. (2016 年 8 月 25 日). LGBT に関する職場の意識調査　～日本初となる非当事者を中心に実施した LGBT 関連の職場意識調査～. 参照日: 2020 年 3 月 1 日, 参照先: https://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/20160825.pdf
白波瀬佐和子. (2010). 生き方の不平等. 岩波書店.

武内今日子. (2018). カテゴリーが担う性別違和経験の理解可能性　ー「X ジェンダー」をめぐる語りからー. 東京大学大学院 人文社会系研究科 社会学専門分野 修士学位論文.

米沢泉美. (2003). トランスジェンダリズム宣言　ー性別の自己決定権と多様な性の肯定ー. 社会批評社.

矢吹康夫. (2017). 私がアルビノについて調べ考えて書いた本ーー当事者から始める社会学. 生活書院.

琉球新報. (2020 年 5 月 23 日). ズボン姿　晴れやか入学　制服選択制、糸満中で導入　新垣祥子さん　めっちゃうれしい. 参照先：https://ryukyushimpo.jp/news/entry-1126651.html#prettyPhoto

謝辞

本稿を執筆するにあたり、多くの方々のお世話になりました。

私のインタビュー調査にご協力頂きました皆様に心から御礼を申し上げます。皆様がご経験された「生きづらさ」や「働きづらさ」について、とりわけジェンダーやセクシュアリティに関わる事柄という非常にセンシティブな問いかけに対して、精一杯真摯に語って下さったことに心を打たれました。

指導教官の福永真弓先生、副指導教官の清水亮先生には大変お世話になりました。なかなか先へ進めない私に対して、言葉を変えて何度も粘り強くご指導下さいました。先生方のご指導がなければ、修士論文を仕上げることはできませんでした。ここまでご指導頂きましたことを、厚く御礼申し上げます。

東京大学柏キャンパス環境棟の院生室でともに過ごさせて頂いた、福永研究室と清水研究室の学生の皆様へ。皆様とともに学生生活を送らせて頂けたことは、私にとってはかけがえのない経験となりました。私は多くの学生さんに研究の取り組みについて質問していました。それに対して、多忙にも関わらず親身にさまざまなアドバイスを頂きました。どれだけ助けられたか分からないほどだと思っています。本当にありがとうございました。時々、突発的に学生同士で飲み会をやったのは、とても楽しい思い出です。

最後に、いつも私の心身の健康を気にかけてくれている私の家族に感謝します。ここまで取り組むことができたのは、家族の支えがあったからです。本当にいつもありがとう。心から感謝しています。

2020 年 7 月吉日　川股信慈